
神の子

櫻塚森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の子

【Nコード】

N0024V

【作者名】

櫻塚森

【あらすじ】

ずっと前にサイトでアップしていた話です。

原点的な話と断言していいでしょう。ファンタジーです。運命を背負って進んでいく少年少女たちの成長の物語なはず。

序章

神の子よ

神に愛されし獣の子らよ

深き心の闇間から 巨大な悪が

私を侵食しようとしている

神の子よ

神に愛されし獣の子らよ

今 この時を私は待っていたのだ

人にとって神という存在が生活にとって大切な存在であつた頃、人々が神を敬うように、神々も人々を見守っていた。

人の国に乱世の予感が起こると神々は、自らの分身を地上に落とし、人の中に宿すという行いを繰り返していた。

神の分身、神獣を宿す者は、強さと美しさ、そして聡明さを持ち合わせ、人々はその人を『神の子』と呼び、敬ってきた。

しかし、数百年の歴史が流れ、今の王族の世となつてから、人々の暮らしは安定し、大地を守り、導いてきた『神の子』は、新たな解釈で上流階級の者達に浸透していく事になった。

『神の子』とは、神が自らの身体を切り離し生まれたと言われる8つの神獣：龍、朱雀、玄武、白虎、麒麟、白澤、夜叉、迦陵頻迦、それぞれを人の身体に宿し、生まれた子供のことである。

今となつては、古から王族が保管している古文書に書かれている本来の彼らの役目を理解する者は少なくなり、その神にも似た力は、周りを囲む全てのモノを守り、富と名誉を与え続ける存在であると理解されるようになった。

『神の子』は、その神獣にそつた独特の容姿と胸に印を与えられ生まれるため、上流階級の者達は、『神の子』の噂を聞きつけると奪い合い、捕えると封印のされた部屋で一生をその中で過ごさせるようになった。

自らの分身をそのように扱われた神々は次第に、人と人とは起こす災いに『神の子』を誕生させることはなくなり、少しずつ『神の子』の記憶は人々の中から消えていくこととなった。

現在この珠国を治める遠雷王は、思慮深く、思いやりのある王であると民からの信頼が篤い人と知られている。

人々は、最低限でも安定した暮らしを送る幸せを、管理している王の力量として尊敬し、隣国との小さないざこざはっても、戦争を起こすことのない世界を歓迎していた。

しかし、どんなに安寧な世の中であってもそれを壊そうとする者は存在し、遠雷王の治世が15年続いた年に王政に暗い影が差した。

その者の名は芳崖。

珠国の軍事参謀を務める男であつた。

「王は手ぬるい。何故軍事費を削減しようなどとお考えになる。隣の剛国や、箕油国とて、まだまだ油断などできないと言つのに……。」
芳崖は彼なりに国を思っていたが、遠雷王に対する憎しみを抱いていた。

その理由を知る者はほとんどいない。

（なんとしても遠雷王から……。）

考え込んでいる芳崖の耳元に囁く声があつた。

『乱世をお望みかい？』

低い女の声だつた。

芳崖は腰にさしてあつた剣を抜き、身構えた。

「何者だ！！」

耳元で笑う女の声がふと消えて、目の前に暗黒の渦を巻く空間がぼ

つかりと開いた。

芳崖の背筋がスツと冷たくなるほどの恐怖が目の前に迫っていた。

「出て来い！」

『…ほんに軍事参謀様は、この国の将来を憂いておられる…。』

黒い空間から女が現れた。

黒ずくめの服にはフードがあり、赤い唇だけが妙に艶かしいものだった。

芳崖は、剣を握る手に力を込めた。

「何者だ！」

『私の名は、欄梓…龍神に仕える巫女…。』

「龍神だと！では、なぜそのような禍々しい気を纏っておるのだ！」

『それは、この国の将来を示しているからにございます。』

芳崖は言葉を無くす。

「こ、この国の将来だと…？」

『このままの軍事縮小は…この国が他国に攻め入れられ、人々は圧制に苦しめられる未来を示しているのです…。』

「剛国や、箕油国が攻めて来るのか…！」

芳崖は何時しか剣を降ろし、女の言葉に聞き入っていた。

『それよりももっと恐ろしいことが…。そう…あなたの希望の星に災いが…。』

芳崖は言葉を無くす。

そして強く件を握り締めた。

「何故、私の望みを知っている。お前は何者だ！」

女の口角が上がった。

『私は、芳崖様に使え、あなた様の願いを叶える力を…ある方からあなた様へ送るために存在するもの。』

「…ある方だと…？」

『あの方は、芳崖様の真の願いを知っております。そして、その願いを叶えるためには遠雷王…いえ、この王政が邪魔であると言つことも…。』

「確かに、遠雷王の存在は私にとって邪魔なもの。しかし……私の願いを叶える為とは言え、この国の民を路頭に迷わせることはできない……。私は王位に立つつもりはないのだから。」

女はすうつと手をフードにかけて顔を見せた。

芳崖はその女の顔に言葉を無くす。

（なんと美しい……。）

白い肌に赤い唇。

女は芳崖に近寄るとその首に手をかけて顔を近づけてきた。

『さあ、思い出さない……芳崖様の世界には何が足りないのか……あなた様の真の希望が何であるのか……何が欲しいのか……。』

芳崖は女の視線から目を逸らせなくなっていた。

『あの方は芳崖様の願いの全てを叶える力を持っています……さあ……身を委ねて、その心をあの方の為に捧げなさい……。』

数秒後、芳崖の目の輝きに闇が差し込んだ。

「芳崖様！どうなされました！！」

芳崖が床に落した剣は大きな音を立て、駆けつけた家の者は、躊躇なく扉を開けた。

そこには、横たわる黒い服の女と、剣に血を滴らせ立っている芳崖の姿だった。

「そ、その女は……。」

「この女は、化け物よ……我を取り入れんとした。国王に進言せねばなるまい……。国中に魑魅魍魎共が溢れようとしていると……。」

芳崖は、言い放つと衣を翻し、部屋を出て行った。

「馬の用意を！国王に謁見する……！」

以後、国中の村や町は、その関所に魔除けの札を置き、化け物の侵入を阻止する作業に取り掛かった。

つづく

龍神を祭る村

甲村。

国の西にある山の麓に位置するこの村は、林業が盛んで、坂田という豪族が国からの命を受けて村人を支配していた。

甲村は昔から、龍神への信仰の篤い村で、村の西にある龍神の祠は人々の憩いの場所にもなっており、化け物の出現も少ない平和な村であった。

その憩いの場所を代々管理し、宮司を行っているのが坂田家で、彼らは、この村が日々の暮らしに苦しむ事がなく、皆が息災で生きていけるのは、龍により守られているからだと言語していた。

国を治める王ですら、龍神崇拜をしている国である。

小さい規模とはいえ、龍神を祭つてある祠には助成金がでているのだが、坂田家の現当主は、その助成金のほとんどを懐に収め、村人の寄付で祠の管理を行っていた。

坂田の主・郷雲は、自分の愛妾のもとに生まれた男の子にある特徴を見つけた。

黒い髪に金色の右瞳と青色の左瞳。胸元にある龍の文字。

すべてが、幼い頃から父親に聞かされていた龍神の“神の子”の特徴であった。

その子が生まれてから坂田の村は、涸れた井戸が再び水をたたえ始め、彫り尽くしたとされた金山から再び金が取れるようになった。

郷雲は、その子こそ、神の子に他ならないと、『龍綺』という名を付けて、可愛がった。

そのため正妻よりも龍綺を生んだ愛妾は、郷雲からさらなる寵愛を受けるようになった。

「閉じ込められた鳥のようだ。」

龍綺がそう感じるようになったのは、13歳の頃からだった。物静かでいつも泣いているような母は、彼を抱きしめては、すまない、と言いつづけた。

13歳になるまで龍綺には自由があった。

母を正妻やその他の妾から守るため剣術を学びたいと願ひ出れば父・郷雲はそれを叶えてくれた。

剣術の指導をしてくれたのは、村一番の剣士との呼び声も高い加奈陀という男だった。

彼は元々王宮に仕える剣士だったが、甲村の龍神信仰に惹かれ、十数年前にこの村にやってきた。

凛々しい姿や、豪快な笑ひ方、考え方全てが龍綺には新鮮で、学びとなっていた。

時々村を離れて出かけるが数日もすれば戻ってくる彼は、龍綺に人生において旅を続けることの大切さを何回も話してくれた。

ところが、13歳になったとき、その加奈陀が己の力を試すため旅に出ると告げてきた。

もう帰らないというのだ。

元々この村に流れ着いたような男である。

人々は惜しみながらも彼を見送ることを了承した。

龍綺は、師なる人がまだ幼い自分のもとを去っていくことに驚きを隠せなかったが、それ以上に母が衝撃を受けていることを知った。

「何が悲しいのですか？」

尋ねる息子に母は、悲しい笑顔を見せて彼を抱きしめてきた。

昔から母は、自分の気持ちをあまり話すことのない大人しい人であった。

父からの寵愛を一番に受けていると屋敷の者は皆言うが、父は、都から取り寄せた珍しい調度品などを母に送ることはあっても、滅多に自分達の住む棟にはやってこない人だった。

幼いながら、龍綺は、母の悲しみは、父の態度にあるのではないかと考えていた。

加奈陀の旅の準備と呼応するように屋敷の一角で改築工事が始まった。

その工事に關して龍綺は、父から何も教えてもらえず、屋敷の中で疎外感を感じるようになった。

ある夕飯、父が珍しく龍綺親子のところに来た。

驚いたのは、最近の彼は新しく入った若い妾に夢中ですっかり彼らの元を尋ねては来なかったからだ。

龍綺は、いつも父に言うようにお願いがあるのですがと切り出した。「なんだ？」

「もうすぐ、加奈陀師匠が旅に出られます。それに私も同行したいのですが……。」

父は、いきなり立ち上がった。

「な、なんだと……！」

箸を床に叩きつける。

龍綺はこんなに怒りの表情をみせる父を見たことがなかった。

そして、彼は、向かいに座っていた母の襟首を掴みあげた。

「龍綺に何を吹き込んだ……！お前は……！」

掴んでいた襟首を投げ捨てるように放す。

母は、冷たい床に手を付いて倒れた。

「母上……！」

駆け寄る龍綺を父が担ぎ上げた。

「父上……！」

戸惑う龍綺に構わず、父は彼を運んでいく。

「父上！母上が！待ってください！」

「少し黙ってろ……！」

有無を言わせぬ父は、龍綺を改築をおえたばかりの一室に投げ入れた。

「お前はココで暮すのだ！！そうだ…一生！！逃したりはしない！龍の子は俺の…坂田の豪族のものだ！！」

龍綺は体勢を整え、父の方へ駆け出したが、何か見えない壁に阻まれ元いた部屋の中央に弾き飛ばされた。

「ふん！あの忌々しい女め！今までの恩を忘れおつて！いいか！龍綺…お前は一生ココで暮らし、甲村に、この坂田に永久の繁栄を齎すのだ！！」

龍綺は何が何やら分からなかったが、母の身が心配でならなかった。

その後、加奈陀が1人で旅立ったことを知った。

尋ねてきた父が見下した目で自分に告げた言葉で、この人は、もう父親ではないのだなと悟った。

母は、父からかなりの暴力を受けていたが、結界に閉じ込められた龍綺の世話係りとして姿を見せるようになった。

「母上…どうして…」

母の美しかった顔は右頬が腫れ上がり、隠れて見えないが、動くたびに苦痛な表情を見せていた。

尋ねる自分に母は何も答えなかった。
見せるのは変らない悲しそうな笑顔。

「龍の子って何なんだ…」

小さい頃自分のことをそう呼ぶ周囲の者が嫌いだった。

思い返せば、腫れ物に触るように自分を扱っていた父、親戚。

母は自分を見る度に泣き出しそうな顔を見せていたため、加奈陀だけが彼に対して普通に接してくれていた。

加奈陀が村を出ると知った時に告げた自分の言葉に父は激怒し、自分を閉じ込め、母に手を上げた。

周囲の目に父は、自分を可愛がり、何でも与えてくれる優しい父親に映っていた。

龍綺は周りの人達に「優しいお父上ですね。」「こんな高価なものを戴くなんて、本当に愛されておられるんですね。」と言われ続けた。

“そうか、自分は父に愛されているんだ。”

龍綺は、これが、決して自分を抱きしめない父の愛情表現なんだと思うことにしていた。

時々掛けられる言葉の端に感じる違和感は、自分の後ろにある何かを強く感じさせるものだった。

元々、活発で常に剣術や体術に精を出していた彼は、部屋に閉じ込められた生活へのストレスを感じていた。

何かをしていないと気が狂いそうになっていたため、部屋の中で、天井の梁を利用してぶら下がったり、飛び跳ねたりして、精力的に身体を動かしていた。

時には、玉のような汗をかきながら、母を出迎えた彼に、彼女は、心配そうな顔を見せることもあった。

つづく

母の願いと龍の子

軟禁生活が始まって数ヶ月が経ったところ、母がいつものように食事を持ってやって来た。

いつもと変わらないのに龍綺の心はざわついていた。

（なんだろう、嫌な予感がする。）

ある夕食の日以来、龍綺は、母の声を聞いたことがなかった。

頬が腫れている時もあつたが母は悲しく微笑むだけで言葉を返してはくれなかった。

母は、自分のせいで父に殴られたようなものだ。

彼はそう感じ、彼女に口をきいてもらえなくても仕方がないと思っていた。

お膳の入るスペースだけ結界が解かれていく。

龍綺は、夕飯の膳を受け取ると母には背を向けて一人食事を始めた。殴られ腫れた母の顔を見てられなかったのだ。

「？」

御飯茶碗の中、小指大ほどの筒が5つ入っていた。

それぞれの筒には数字が書かれており、中には小さく丸められた文が入っていた。

その筒は伝書鳩に使用するもので、龍綺は母を振り向いた。

すると母は、いつもの笑顔を見せて頷くと龍綺から膳を受け取り、部屋を下がっていった。

筒の中から丁寧に取り出し、1つ目と2つ目の文章をつなげた。

「私は今、願掛けのため声を発することができません。あなたに声を掛け全てを話したいと願いながら、この願掛けのために声を出す事ができない母を許してほしい。これから、話す事は真実に他なりません。」

今を遡る事14年前、私は1人の剣士に出会い恋をしました。その方の優しさ、逞しさに私は惹かれ将来を誓い合っていました。森の

奥にある龍神の祠：そこで愛を誓い合った結果、私は自分の身体にあなたを宿した事を知りました。

龍神の子として生まれるあなたという存在を感じたのです。私は、昔から巫女の素質のある女だったため、古からの言い伝え、神の子を宿した夫婦は永遠に幸せを約束される、また、永遠の繁栄を約束されるということを知っていました。

それは、私達夫婦にとっても、この村にとっても、とても喜ばしい事で、何回も郷雲との婚礼話を持ってきた父と母への説得材料になるとあなたのことを打ち明けました。愛しいあの人があなただけで安心して私を娶る事ができるようにしたかった。だから、あなたを宿した事は、両親を説得した後打ち明けるつもりでした。

でも、彼は、村の支配者でもある坂田家の命で、化け物退治に行ってしまったのです。あなたのことを知らないまま……。その間に領主・坂田郷雲が私を無理矢理、愛妾の1人にしてしまいました。

あなたの祖父母も助けてはくれませんでした。

生まれてくる子が『神の子』でないのなら、自由にしてやろう。郷雲はそういいました。ならば、どうかあなたが龍の子であると感じた私の思いが外れていますようにと祈ってみましたが、あなたは、古文書に書かれてあった龍の子の特徴を見事に備え、胸元には『龍』の文字がありました。

私は、龍神の社の前で誓い合った私達を引き離す事は神に背く事だと反抗しましたが……。あの時は、お腹のお前のコトを盾に取られ……。私は、帰ってきたあの人に何の言い訳も出来ないままあなたを守っていく事しかできませんでした。」

3つ目の筒を開けながら龍綺は、父が本当の父親でないことを確信している自分に気付いた。

龍綺の中でそれは漠然と思っていたことであつたため、驚きはなかった。

そして、自分が龍の子であることを知った。

村の、そして坂田家の繁栄の為に自分は閉じ込められているのだという事を悟った。

「お前が、剣を習いたいと言って来た時は嬉しかった…お前が間違はなく父であるあの方の子供である事を証明するきっかけであったから。…それをあの男、郷雲は…寄りにもよってお前の剣術の師として加奈陀さまを…あの方を連れて来たときには、強い憤りを感じました。あの男が加奈陀さまに剣の指南を命じたのは、ただ単に私の裏切りや、自分の立場という物を見せ付けるためだけにしたコトだと悟りました。」

そう、あなたの本当の父上は加奈陀さまなのです。」

4つ目の筒の内容は龍綺を愕然とした。

自分を腫れ物のように扱う父親。出て行くと言った自分に対する豹変振り。

龍綺は、5つ目の筒を開けた。

「これ以上龍神さまの力を宿すあなたをこの屋敷、この土地に留める事はできません。龍の子、つまり神の子は、1つのところに留まってはいけないのです。愛しいあの方を裏切ってしまった私には、あなただけが生きがいだった。」

生きていてくれさえすれば、母は、何もいらなかった。でもあなたが強力な結界に閉じ込められた今となつては、全てがあの方の男の、坂田一族の思い通りになることが許せない。

私の子は返つてこなくても、神の子は神に返さねばなりません。あなたの力の解放…それは私があなたにできる最期の親としての務め…今宵、母はあなたを解放するでしょう。あなたに声を掛けなかったのは、そのための願掛けです。」

5つの小さな文を握り締める。

「母上！」

龍綺は結界に触れ、外に出ようとしたが弾かれた。

（このままでは母上が…。）

龍綺は自分の中に龍神の力があることなど感じたこともなかった。ただ、幸せに、いつも悲しそうな微笑しか見せない母が幸せと感じてくれればよかったのに。

ふと面を上げるとそこには大きな刀を抱えた母が立っていた。着衣や髪は乱れ、息を切らしている。

「母上！！」

結界に伸ばした手が弾かれた。

「龍綺：どうか幸せに…あの方に私の思いを伝えて…」
久しぶりに聞く母の声であった。

母は、剣を目の前に出し、刃先を自分の方に向けた。

俄かにざわつき始めた邸内に母は、大きな声で叫んだ。

「龍神よ！あなたの子を返します！！我が願い！受け取ってください！！」

ふと母と目が合った。

彼女はいつものものではない、清々しい微笑を浮かべ、刃先を自分の首に勢い良く押し付けた。

「母上！！」

結界を破ることができるのは、閉じ込められた者が愛する人の命だけ。

母によって破られた結界は光り輝き、その光が龍綺を包んだ。

「何事だ！！」

やって来た郷雲の驚愕の顔。

「ど、どこへ行くのだ！！龍の子よ！！龍綺！！行かないでくれ！！」

郷雲の声で龍綺は気づいた。身体が重力を失いふわりと浮かんでいたのだ。

彼を包んでいた光の一部が天井を吹き飛ばす。

甲村の住人は、夜空に領主の屋敷の上に輝く龍の姿を見ていた。

それは、金色に輝く龍の姿であった。

「母上…。」

すでに事切れた母の魂は光によって天へと召された。それを悟った龍綺は天を見上げる。

父だった男がしきりに龍綺に何かを言っているが彼の耳には届いていなかった。

（俺は、俺の道に行く…誰にも邪魔はさせない…。）
彼は光に包まれたまま天高く舞い上がっていった。

故郷から飛び立った龍神の子は、ある泉の中で目を覚ました。

（水の中なのに息ができる…。）
母の最期を思い出し涙ぐむ。

（俺が、龍の子でなければ…。）
自分の出生を呪っていることが一層自分を情けない存在にさせていた。

考え込んでいる龍綺にささやきかける声があった。

『お前にはすることがあるのだよ…。』

母の為に、母の笑顔を見るために生きてきた。

広い世界に憧れた結果が母の死であった。

しかし、その母も今は存在せず生きる目的を失った。

（俺は何をすればいい…？何故、母の命を犠牲にして生きている？
神の子とは、何のために生まれる？）

龍綺の問いに声は答えた。

『お前は、それを今から探すのだよ…神の子、龍の子として何故生きるのか。何をしなければならないのか…。お前が旅立つと言うのなら我は力をかそう…。しかし、お前が旅立たず、この地で眠りにつくと言うのなら…。』

龍綺がふつと笑った。

「眠りたいと言ったらどうするんだよ…。」

『お前の母が命を懸けて守った、命を終わらせる…。そして、母の死は無駄になり、お前は再び母を泣かせることになるのだろ…。』
声は龍綺が旅を選択することを分かっているようだった。

「…とりあえず、俺は何をすればいい…。」

『簡単な旅の準備を揃えてやろ…そして、自分の目で、耳で、感覚でこの世界がどの方向に向かっているのかを見てくるのだ…お前の旅は長く辛いものになるだろう…しかし、我は常にお前の中に存在し、お前は真の仲間を得る…。』

声は聞こえなくなった。

龍綺は再び睡魔に襲われるように瞼を閉じた。

再び目を覚ました龍綺は、陸地に1人ポツンと立っていた。

動きやすい服装に、背に背負った軽量の荷物。

そして、剣。

剣には、龍の紋章がされており、彼の右目には眼帯がされていた。

（金の目は目立つもんな…。）

ため息を1つ。彼はとりあえずの一步を踏み出した。

つづく

すべての知を得る者

甲村から西南に入った所に流通が盛んな彩町がある。

少し内陸にはいった土地であつたが、大きな河川が、交通の手段となつていた。

数年前までは、大きな河を流通の手段と考えてもいなかった彩町は貧しかった。

コレと言つた産業もなく、農業をするにしても、塩分の強すぎる河から水を引くことができず、なんとかせねば、国に対して納税もできないほどの貧しい町だつた。

そんな町の町長のところに14年前男の子が生まれた。

落雷の激しい夜に生まれた彼には雷紋という名前が付けられた。

彼は、白い髪に白い瞳を持ち生まれた。

父や母はこの子は目が見えないのではないかと心配したが、それは杞憂に終わった。

努力家で、皆に慕われる父親と優しい母親に囲まれて育つた彼は、1歳にして人の言葉を理解し、3歳の頃には、難しい経済や政治の本を読み始めていた。

しかし、雷紋は、その天才的な姿を彼は両親以外に見せることはなく、祖父母の前でさえ、普通の赤子として暮す両親には戸惑いを与える少し変つた子供だつた。

自分の息子に人らしからぬ光を感じた両親は、雷紋の言葉を神の言葉とし、時に話し合いながら、暮していた。

「髪を染める？」

突然、息子が言つた。

白い髪に白い瞳。

これでは、両親はともかく、周囲の者は自分を腫れ物のように扱うだろう。

ならば、少しでも普通の人の容姿に近付ける必要がある、そう言ったのだ。

両親は、彼の言うがまま彼の毛を黒く染め上げ、人々には弱視であると告げさせた。

両親は、雷紋が喋り始めた時からこの子が本来の姿をさらしているのは自分達だけで、それには何か訳があるからではないかと感じていた。

今から思えばそれは普通の人間としては驚く行為で、祖父母の前でも、雷紋の天才ぶりや、実は、視力がよいことなどは秘密ということにしていた。

妻は、雷紋が2歳を過ぎた頃より、彼の胸元に、印鑑で押されたような『澤』という文字が浮かび上がってきたことを発見した。

その時によやく、父と母は、雷紋が常軌を逸した成長の理由がココにあるのではないかと書物を調べ上げ、古から伝わる神の子ではないかと思い始めた。

しかし、都に保管されているという古文書の内容を一介の町長が閲覧など出来ず、はつきりとした確証など持っていなかった。

そのような経緯があつたが、我が子を怖がつたり、妙に敬つたりすることもなく2人は普通の子供にせつするように雷紋を育てることを決心した。

『澤』という文字を持つ神の子がいると町の神官に聞いたりもしたが、かの神は道祖神として奉られているということしか分からなかった。

そんなある夕食の席で、父親は母の胸に抱かれる息子に尋ねた。
今は親子水入らずであり、彼も言葉を発してくれるだろうと考えたからだ。

「その胸の文字は、何を示しているのかね…。」

息子はニヤツと笑うと胸に手を当てた。

「ようやく、聞く気になったようじゃのう…。我の名は、白澤。神のお告げによりこの雷紋の中に住んでおる。雷紋自身はまだ、話すことも本を読むこともままならぬ赤子なれども、いずれ、天の為に働かねばならぬ身よ。欲深い者達に攫われてもいかんのでな、お前達以外の前では、本来の赤子であることにしたのじゃよ。」

饒舌な口調で話す、2歳の息子に両親は言葉を失いかけた。

「は、白澤さま…な、何故我が子に…。」

「こやつにはな、わしが入らんでもいずれ、天才と呼ばれるまでの聡明な男になる未来が待つておった。じゃが、その頭脳は神が、わしが入るために用意した器なんじゃ。初めから決められてたのじゃよ。いずれ、雷紋の自我がはつきりすればわしは、こやつの中で、こやつが必要とする時以外は眠りに入る。しかし、それまでの間、この聡明な白澤さまのいる町がこんなに寂れていては、こやつ将来にも関わるのでな。ちよいと気になって出て来てしもうたんじゃ。しばらくしたら、知恵でもを授けようと思つてのう。」

「知恵でございますか？」

「そう、この町が納税に苦しまず、民が飢える事のない平和な町なる知恵をな。」

白澤は、雷紋の父親に、河の水で塩を作る技術を教え、今まででは考えられなかった荒波にも耐えられる船の技術を書面にしるし、貿易の為の船を作り上げた。

彩町を流れる河川は、彩町の土壌によるものか、その辺りだけ塩分の強い性質となっていた。

白澤により伝えられた塩の製法は考えていたよりも上等の塩を作り上げ、それは、都に献上され高値で取引されるようになった。

そして塩分を取り除いた水と土で開墾し、農作物も育つようになった。

彩町は、白澤から得られた知恵で貿易の盛んな町へと変貌して行っ

たのだった。

「父上、母上、俺は旅に出ようと思います。」

14歳になった雷紋が両親にそう継げたのは春先のことだった。

10歳を越える頃には白澤は彼の中で眠る時間が長くなってきたらしく、町長である父の質問には雷紋が答えるようになっていた。

「そうか、その時が来たのか…。」

雷紋がいずれ旅に出ることは分かっていた。

読書ばかりしていた雷紋にとって、本の中の世界だけでは物足りなくなってしまうのだ。

「実際に目で見て、手で触れてこの国というモノを知りたいと思っております。」

息子の逞しい成長に目を細める両親。

彩町の民は、雷紋の中に住む神獣のコトは知らないが、彼が恐ろしく聡明であることは理解しており、一部のモノの中には彼は、目も見えていないし、化け物の出る町の外に彼が旅に出ることに反対する者もいた。

しかし、両親はその者達を説得させ、旅立ちの応援をしてくれたのだ。

「万が一、何か困る事があれば、イズチを呼び寄せてください。きっと私の元に文を届けてくれるでしょう。」

イズチとは、白澤と雷紋の聡明さに惹かれ、一番弟子を名乗っているイタチで、独自の空間移動の術を持っていた。

両親は旅の間、彼が不自由をしないように十分な金貨を持たせようとしたが、雷紋は僅かな金貨しか持って行こうとはしなかった。

「山には、山賊が出るといいますし、昨今は、町近くに化け物が出没していると聞きます。もし、殺されでもしたら、お金がもつたいいいですし、化け物は倒されると欲の象徴、金貨になってしまうと聞いてます。だから、大丈夫ですよ。」

雷紋は、生まれたときに白澤が神から貰ったという“雷の力”を持っていた。
その上に弓矢の腕も確かなため、何も心配はいらないと両親を説得した。

かくして、彼は、まだ見ぬ世界に旅立ったのだった。

つづく

旧知

「さて、何処に行くのかのう？」

頭の中で声がした。白澤である。

彼は、雷紋の両親に言葉をかけることはなくなったが、雷紋にはしつこいくらい声をかけていた。

「うるさいな！人が見たら、独り言の多い変人だと思われる。黙っててくれ。」

白澤は実にお喋りな神獣で、喋りだすと止まらない困った性格をしていた。

「一人旅じゃろ？話し相手になってやろうぞ？」

ため息を吐いた雷紋に白澤は嬉しそうに声を出す。

物心付いた時には、白澤は自分の中にいて、常に話しかけてきた。

忙しい両親が家に不在でも全く淋しいと感じる隙もないほどに、白澤は雷紋に色々な事を教えてくれた。

雷の力の使い方、弓の引き方をはじめ、あらゆる知識をその口調で喋り聞かせた。

いつしか、一方的に喋る白澤と時々返事をする雷紋の姿は、「独り言の多い子供」というレッテルを雷紋に貼る結果となっていた。

白澤は、今までの長き世の中で多くの子供の中に宿ったが、コレほどまでに頭のよい、順応力の高い子供は経験したことがなかった。

いちいち帰ってくる反応、勉学の吸収力、それがとても嬉しく、ついついお喋りになってしまふのだ。

思春期を迎えた今となっては無視されることも多くなり、それがまた楽しくて仕方がなかった。

「とりあえず、都を目指す。お前の言うとおりなら、何か変化が起きているはずだ。」

旅を決意した一週間前、白澤は、神の啓示を聞いたと雷紋に言うて来た。

「情報の中心である都で何かが起こっている。それは、この国のみならず、全世界を飲み込む一大事へと繋がる。」

頭の中で聞こえる白澤の声。

「だったら、神その人がその一大事とやらを解決すればいいだろう？俺を巻き込まないで欲しいよ。」

そう愚痴る雷紋に白澤は軽く笑って答えた。

「まあまあ、そう言うな。神は、万能に見えて、案外不自由な存在で、う、自らこの世に干渉は出来ぬのじゃよ。それ故、自由に動ける足として、我らをこの世に放たれたのじゃ。」

「神の子の中には、俺のように自由に生きてきた者は少ないと聞いているぞ？」

神の子は、おおむね生まれた屋敷に閉じ込められるのが宿命。

雷紋のように口の達者な神獣と理解のある両親の元に生まれた子でなければ、自由は許されない。

「権力者は、永久の繁栄を望むからのう。」

「白澤ほど、口達者な獣じゃないと相手を言いくるめるのも難しいよな。」

「言いくるめるとは、言葉が悪いのう。良くも悪くもお前の両親は、神の御心をよく理解した良き人であるということよ。人間は知らないじゃ、神の子を自由にさせることが、その家の繁栄に繋がるといふことを。」

雷紋は大きな伸びをした。

「だったら、俺は囚われているだろう他の神の子を助けに行く。」

「ほう？」

「その方が、最終的にはいいんだろ？」

白澤の笑い声。

「では、この山を越えるとよいぞ。神の子の気配がする。」

2人旅は始まった。

「はて、どうしたもんかのう...。」

雷紋は、道に迷っていた。

「なんで、白澤が付いてるのに迷子になるんだよ…旅のコトなら任せとけて言つてたよね。」

恨めしい声で言う雷紋。

「化け物のせいで地形が変わっておるのじゃよ。」

ゆっくりと地図を広げて、検討したくても先ほどから5分おきに化け物が襲ってくるのだ。

「とにかく、祠か魔除けの札のある村か、町に入らないと…。切がない。」

と、そこに大きな悲鳴が聞こえてきた。

「人ではないぞ…化け物がやられたのだ。」

白澤が教えてくれた。

雷紋はゆっくりと気配を消すようにその声の方に忍び寄ってみた。

（あれは？）

自分と同じ年くらいの少年が、身の丈ほどある剣を振りながら、向かってくる化け物を切っていた。

ほとんどが一振りで倒していることも凄いが、雷紋は、化け物の爪が彼の顔を掠り、付けていた黒い眼帯が弾けとんだところを見て驚いた。

「（金色の目…。）あれは、神の子じゃぞ。おそらく黄龍…。」

雷紋は白澤の言葉を聞きながら彼の戦いに見とれていた。

「危ない!!」

上空から彼の不意について攻撃をしてきた化け物に雷紋は弓を放った。

「残り、5匹！手伝うよ!!」

少年は茂みから出て来た雷紋の白い姿にちょっと驚いたが、すぐに背中合わせになると再び剣を構えた。

「上のを頼む!!」

「了解!!」

2人が力を合わせると敵はあっという間に倒され、大地には多くの

金貨が残された。

「君、強いね!!」

額の汗を拭いながら、雷紋は手を差し伸べる。

少年は戸惑いながらその手を取って握手をした。

戸惑っている彼を見て雷紋は苦笑した。

「ごめん、怖い？俺の目。」

彼はそう言くと、長くした前髪を降ろして見えなくした。

少年はゆっくりと飛ばされた眼帯を拾ってため息を吐いた。

「金の目を隠してるんだね。容姿が違うとほんと苦労する…。」

いつになくお喋りな雷紋は緊張していた。

それは彼から感じる気配が紛れもない神の子であることを教えてくれているから。

自分の目のコトを言われた少年は顔を強張らせた。

ソレを察した雷紋ができるだけ人懐っこい笑顔を見せた。

「えーと、警戒しないでよ、俺もちっと普通と違うんだ。それにコレ。」

雷紋は胸元を開けて、自分の『澤』という文字を見せた。

「それ…。」

少年は自分の胸元を肌蹴て自分の『龍』という文字を見せた。

「やっぱり、龍の…。」

少年は頷いた。

「俺は、龍綺。甲村から逃げてきたんだ。」

苦々しい表情。辛いことがあったのだろう。

雷紋は呼吸を落ち着かせると自己紹介をした。

「俺は、雷紋。白澤っていう神獣を宿してるんだ。」

「白澤？…お前は神の子のことに詳しいのか？俺は、あまり知らないんだ…。」

龍綺は、初めて会った同じ神の子の雷紋に安心したのか自分が暮してきた甲村のことや母のことを話した。

「そう、母君のことは残念だったね…。でも、龍綺、君は母君のた

めにも生きていかなきゃね。」

「俺は何をすべきなのかな…。神の子として生まれた以上、何かをしなければ、死んでいった母上に対して申し訳ない。」

雷紋は、真剣な眼差しで将来のコトを考えている龍綺の顔をじっと見ながら言った。

「俺と一緒に来る？」

「えっ？」

雷紋は、自分の言葉を彼に正面から向けてみる事にした。

「俺は、君みたいに、過酷な過去がある訳じゃないから、君の気持ちの全部は分らない。けど、同じ神の子として、いや、人として自分の利益の為に人の運命を閉じ込めようとする人は嫌いだ。この国には、君と俺以外の神の子があと、6人存在する。その中にはきつと龍綺みたいに監禁されている神の子もいると思うんだ。俺は…彼らを助けたい。で、一緒にこの国で起こっている一大事とやらに立ち向かっていきたいと考えているんだけど？」

正直な雷紋の言葉に龍綺も自分の気持ちを打ち明けた。

「俺は、とりあえず旅を続けて父を…父に母上の思いを伝えたい。それさえ、できれば後は雷紋と一緒に仲間を探す。……いやなんだ、俺みたいに閉じ込められる人や、それを破るために命をかける人をこれ以上見るのは…。」

青と金の瞳が真っ直ぐ前を見つめていた。

その後2人は、山を降り、麓の宿屋に泊る事にした。

2人連れの子供に宿屋の主人は、彼らを家出か何かと勘違いしたようだったが、雷紋の父、つまり彩町の町長の書いた証書により、彼らが大切な使いで旅をしていると分かり宿泊を許可してくれた。

「雷紋って…賢いっていうか手回しいいな…。俺、野宿だと思ってた。」

雷紋は、ははと軽く笑った。

「あ…。龍綺、俺の神獣が君と話したいんだって。」

「へっ？」

雷紋の頭上からもわつとした半透明の獣が出てきた。

龍綺は見たことのないその姿に一步下がる。

犬っぽい顔と、鹿と馬の合体したような身体には、いくつもの目のようなものが付いていて、その身体は銀と白に輝いていた。

「ほう、これが龍の子か。」

ジロジロと眺めてくる白澤に龍綺は更に硬直してしまっていた。

目の前の神獣は、ふと龍綺の頭上を見上げた。

「久しいのう、黄龍…なんと、青龍もおるのか…。」

龍綺は自分の頭の上から半透明の小さな龍が姿を見せたことに驚いた。

「神の言葉は聞いておったようじゃのう…。」

白澤の言葉に龍綺の頭上にいる黄金の龍が声を出した。

「この者の母が願かけを始めた日より、神の声は我の耳に届いておった。」

それは、彼が泉の中で聞いた声だった。

「我の望みは、あの檻から出ること…龍綺の母の願いは、この者の自由であった。しかし、あの男は人として最もしてはならぬ封印を施した。やがて、その罪は自らに返るであろう。それでも、母の望みは強かった。」

「はて、黄龍、青龍。そなた達は、色を揃えるかのう。」

雷紋が困った顔の龍綺に言葉を付け足した。

「龍は、この世に8体存在するんだ。それらは、色に例えられ、黄金、青、紫、赤、緑、黒、白そして、銀色。その8体が揃う事で黄龍は本来の力を発揮できるってことになっているんだって。」

「わしが言おうとした言葉を取りおって…。つまり、そなたは、すでに2色の龍を宿しておるから、後は、6色を揃えればよい。」

「ろ、6色って、どうやって集めるんだ？」

「各地に散らばる龍神の祠に行くとよい。場所は、我らが導いて進ぜよう。」

龍と白澤は、暫く話をしたあと『疲れた』といって、姿を消した。

「けっこう勝手なんだな…神獣というのは。言いたいことだけ言って消えた。」

「うん。大体は、でもさ、許してやってよ。…基本的に夜に弱いらしいんだ。でも、夜とか闇に強いのもいて…たしか、夜叉という神獣と、君の色で言えば、黒龍もそうだよ。えっと…あー…白虎もだったかな？」

龍綺は、少し呆れた顔をしたあとふっと笑った。

「雷紋は、白澤を宿すだけあって、物知りだな。」

「まあね、知識の共有ってやつかな。最初はあまりに膨大で…狂うかと思ったけど…君だって、色々共有しているなって思うようになるよ。たとえば、君の戦いだって、基礎はその父君からだろうけど、青龍は、戦いの龍だからね。もっと、君は、強くなるよ。魂の共有者は、似るんだ。…もっとさ、話したいけど…もう、眠たくって…これからのこともあるし、寝よう？」

龍綺は時々子供っぽくなる雷紋に苦笑しながら、返事をし、部屋の灯りを消した。

天井を見つめながら彼は考えていた。

これから、彼らがしなくてはならないことについて。

- 1、神のお告げに従い、この国の異変を探り、対処する事。
 - 2、まだ見ぬ仲間の救出と合流。
 - 3、6色の龍の眠る祠の搜索と力の合流。
 - 4、龍綺の父・加奈陀を探し出し、母の思いを伝える。
- 1人だけなら叶わなかった夢も信じられる仲間と一緒になら超えていける。

龍綺は、その金と青の瞳に瞼を重ねた。

つづく

色街の虎

花街。

そこは、女が春を売る街。男に一時の夢を与えてくれる街。煌びやかな衣装と化粧に身を包み、男達を快樂へと誘う街。

ここは、昔から国の立ち入りをよしとしない街。

住んでいる8割が女ということもあって、仕切るのも、トラブルから女達を守るのも主として、女である。

そのためかこの街の女達は心も身体も強く、ほとんどの者が、身を守るために剣や武道を身に付け、歴史を作ってきた。

花街の長は、国の派遣してきた役人達を恐れず、働く者達が一番暮らしやすい環境を提供することを心がけ、女達の不利益になることは決してしようとしない。だから、役人とのトラブルが耐えない時がある。

女が中心で動く街だからこそ、治安を守るために警備隊なるものも独自に作り上げていた。

腕力で女達を従わせようとする役人や、狼藉を働く男達から、働く遊女や芸者達を守るためだ。

しかし、警備隊が手を焼く者も現れることがあり、そのような狼藉者の為に商売が出来ない時もあった。

そんな彼女達の救世主がある日、突然に現れた。

颯爽と現れ、消えていくその救世主を人々は『白虎の闘士』と呼んでいた。

何故白虎なのかと言うと、花街の女達が信仰する神獣が『白虎』であり、颯爽とした『白虎の闘士』の戦い方は、白虎の操る神風のようだったからだ。

その『白虎の闘士』は、花街の希望となった。

「ただいま…。繻子蘭…。」

男は、床の間の掛け軸を上げて入って来た。香ってくるのは白粉の匂い。

出迎えた女は豪華絢爛の衣装を身に纏い、振り向いた。

女の名は、繻子蘭。花街一の花魁である。

「おかえりなさいませ…。旦那様。」

男は、彼女の身体を抱き寄せて熱い口付けを交わした。

「少し遅いので心配致しました…。」

男の名は、凱漸。

長身で美しい男が、繻子蘭のところに訪れるのは、春先の今の時期だけである。

彼は、元々はこの花街を訪れた旅人であつた。

ただの旅人のような姿をしても男には気品があり、繻子蘭には彼が身分の高い男であることは分かつていた。

それとなく尋ねた彼女に彼は、旅と言っても、父親や兄から頼まれた各地の視察であることを告げた。

その旅にも飽きてきた頃、兼ねてから、都で噂になっていた花街に立ち寄つてみることにした。

女達が優雅に舞う姿を見て、一時の旅の疲れを取るつもりで訪れたこの街で、凱漸は、生まれて初めての『花魁道中』を見た。

そして、その中心で歩き人々の喝采を浴びていた繻子蘭に一目惚れをしたのだ。

彼は、元々財産のある身であつたため、彼女を手に入れるためにアレコレと贈り物を贈つたり、故郷に帰ることも視察中の身である事も忘れて彼女の所に通い詰めたのである。

そして、一ヶ月以上経つた頃、彼は彼女の心をようやく手に入れたのだ。

花街の華やかな世界の裏には、色々なトラブルがある。

凱漸は、彼女と付き合うようになってから彼女達の助けがしたいと考えていた。

無理難題を言ってくる客や、税金を国の定める基準以上に徴収しようとする役人。

なにより、繻子蘭を狙っている高官達から、彼女を守りたかった。そう決意した彼は、花街で働く少ない、かつ信頼のできる男達と『白虎の闘士』として、彼女達を影から支えていこうとした。

春先しか訪れる事のできない自分の代わりに、腕に覚えのある、花街の女を妻に持つ男達が交互に『闘士』をする。そうして、花街の秩序は守られていった。

2人は、花街の西にある屋敷に住むようになっていた。

この屋敷は繻子蘭に貢いだ男達が落としていった金で建てられた豪華なもので、この街の長である繻子蘭の母と、鼻^{ひきこみ}眞^みにしている引込^{かむろ}禿^{かむろ}が暮している。

繻子蘭が将来を共にするに相応しい相手を見つけたことを知った母は、彼女の引退を決めたが、引退を悔やむ多くの声や、あまりの人氣に『花魁道中』だけは彼女に頼んでいた。

屋敷に帰ってきた凱漸を出迎えた彼女が花魁の姿をしていたのは、『おねり』のためで、彼の帰りを待っていた彼女は、仕事を終えて帰ってきた凱漸とゆったりとした時間を露天風呂で過ごすことにした。

「繻子蘭…君に言わねばならないことがある。」

湯に浸かり彼女の身体を横に、彼は酒を一口飲んだ。

「何ですか？」

「この春が終われば、暫くここには来られない。」

彼女の酌をしていた手が止まった。

「父と兄の仕事を手伝わねばならない。短くとも…3年は…来られ

ない。」

彼女はため息をついてから、につこりと笑った。

「私は、花街の花魁です。旦那様の留守を守れぬとお思いで？」

凱漸は彼女を強く抱きしめた。

「必ず、帰ってくる。その時には、お前だけの凱漸となつて来よう……。」

花魁の姿を解き、自分にしか見せない姿となつている彼女の背中に口を付ける。

凱漸が故郷で何をしているのか、繻子蘭はあえて聞かなかった。

しかし、その名に聞き覚えがないとは言えないほど彼の身分の高さを分かつていた。

一時の戯れでもよいのだと割り切つて毎年春先のこの時期を共に過ごしていた。

（たとえ、あなたが二度と戻らなくても……私はあなただけを思つて生きていきましょう。）

心の中で繻子蘭は呟いていた。

春が終わり、凱漸は花街を去つて行つた。

相変わらず起こるトラブルに『白虎の闘士』は現れ、トラブルを跳ね返していたが、そこに愛しい男の姿は見る事が出来なかった。

凱漸が花街を去つたあと、繻子蘭は、母になった。

子供を宿している事に気付いたのは凱漸が去つてからのことで、彼女は、それもまた仕方ないことなのだと考えた。

繻子蘭には、帰つてこない人の子供を生み育てることへの迷いはなかった。

花魁を完全に引退し、母の後を継ぎこの花街を守つていくためには、自分の心を支えてくれる存在が必要だったからだ。

あの人はもう、帰つてこないという考えを持っていても、大きくなるお腹を摩りながらきつと生まれてくるのは、あの人に似た男の子

で、彼は、きつと喜んで優しい笑顔を見せてくれることだろう。
などと思つては、頭の中で打ち消した。

「慈しむ音色……あの人は、私の琴の音をこう言ってくれた。」

彼女の考えに母も、花街の女達もあえて何も言わず、これから生まれてくる子供を大切に育てていこうと考えていた。

生まれたのは、男の子だった。

生まれた彼の姿は、生んだ繻子蘭をも驚かせた。

それは、髪の毛が銀色で、瞳が淡い青と緑の混じった色だったからだ。

少しばかり、髪の色や瞳の色が違うからと言って、花街の人達は彼を異端視しなかった。

それには、『白虎』という存在が大きく関わっていたからだ。

その関わりが人々の戸惑いと驚きの心を落ち着かせた。

銀の毛に碧い色の瞳。

この色合いが、彼女達が信仰する『白虎』の姿と重なっていた。

そこやかしこで描かれている白虎は、全てこの色合いで、その姿を想像しない者など花街には存在しなかったからだ。

しかも、生まれた赤子の胸元には、『虎』の文字。

「きつと、この子は、神様が使わした子供なんだよ。」

長を引退した母に言われ、繻子蘭は、彼が生まれてきたことに感謝した。

王族に古くから伝わる古文書の内容などを花街の女達が知っているわけもなく、慈音と名付けられた少年は、女達に愛され、遅しく育つていった。

つづく

白虎の闘士

あれから14年。

慈音は、虎の仮面を被り、『白虎の闘士』として、花街を守っていた。

少年と言っても、すすく伸びた身長は、女達の背を越し、力は神の子に相応しく、豪快で、風を使うという特技を要していた。

「こういう格好もそろそろ見納めね…。」

今日は、母の後輩である花魁、木蓮のため、彼は重い鬘と裾を引く赤い襦袢を身に纏っていた。

肌に塗られた白粉と母のさしてくれた紅が、彼を男であることを忘れさせるほどに美しく変身させている。

「そうだね、そろそろ骨ばってきたから…丸みのある姐さんたちのようにはいかないね。」

遊女に姿を変えた慈音にため息が聞こえてきた。

「夕顔姐さん…。」

「慈音も、そろそろ限界だねえ？…すっかり男の方が強くなっちゃった。お前が女なら、一気に太夫なのにあ…。」

「ははは。この格好はあくまでも姐さん達を守るためなんだから…。次の手からは、これ以外にしないとね…。」

胸に柔らかい綿を詰めていく。

最近、隣村の豪族頭が、花街に来るようになった。

堅物で、花街を毛嫌いしていた男が、木蓮太夫に一目惚れをしたというのだ。

お金もあり、上客だが、なんといっても独占欲が強すぎて、他の客を脅したり、隙あらば、太夫を連れ去ろうという狼藉を働くのだ。

繻子蘭が一線を退いて以降、木蓮太夫は花街の看板である。

おいそれと見受けしてもらっては困るし、何より、客という立場以

外でその男と付き合うことを彼女が了承していないのだ。

「美津濃屋の木の葉が言つてたけどね、あっちの方も下手らしくてさ、乱暴なんだって…。しかも、短くて、早い。イトコなしてしろもんらしいさね…太夫を呼べる財産があることは褒めてやってまさ、私でも願ひ下げだね…。」

夕顔はきっぱり言う。

花街の店には、ランクがある。

どんな男でも大丈夫である店とそうでない店があるのだ。

繻子蘭の経営する店は、最高級を自負しており、女を指名出来ても女には拒否権がある。

したくない男とは酒の席にも出ないし、もちろん、肌を重ねたりはしない。

それでもと望む場合は、相場の10倍を払わなくてはならない。

あまりの金額にその豪族頭は、木蓮太夫と酒の席だけの契約をした。話をして、食事をして、酌をして、別れる。

それだけの行為の約束を初日に男は破ろうとした。

その時は、店に待機していた、警備の女達に締め上げられ、罰金まで払わされたというのに懲りないのだ。

「そのおっさん、今日は確実に来るんだよね。」

慈音は、恐ろしく身軽な少年で、愛らしく、花街の女達みなが、自分の息子や弟のように接していた。

「たぶん、憂さ晴らしだと思うよ。」

「憂さ？」

夕顔と、その横で双子の朝顔がくつと笑った。

「義賊だよ、東の山に住む鬼姫が、あいつの財産を奪って、町にばらまいたんだそうだ。」

鬼姫。

それは、東の山に住むという鬼を自在に操ると言われている化け物で、その化け物は、民を苦しめる役人や、税の徴収に厳しい豪族を

襲い、貧しい人たちに施しをしているというのだ。

「花街の『白虎の闘士』ってところだね。化け物でもありがたい話さ。あの豪族の頭が暫く花街に来れなかったのは、財産を盗まれたからなんだって。さすがに女遊びにそれ以上の金を使うわけにもいかないからね。」

「太夫に会えない。でも、同じ街で同じ空気を吸いたい！！ってところだろうけど、あいつは油断を突いてくる酷い男だからね…慈音、あんたが、いくら男でも相手は、あんたよりガタイのいい男なんだから、油断は禁物だよ？」

「分かってるよ、朝顔姐さん。俺は、おっさんの身体にこの薬をぶち込めばいいんだろ？」

「そうそう、ケツの穴にでもさ！」

慈音は苦笑する。

「幾ら俺でも、それはイヤだなあ…そんな趣味ないし…」

「そうよ、朝顔ったら、慈音の筆降ろしは、あたしがするんだから！！！」

突然の発言に室内はしんと静まり返った。

「な、何言ってるの！！あたしがするの！！」

怒りの抗議をしたのは、夕顔。

2人は、取っ組み合いの喧嘩をし始めた。

「ね、姐さん達、止めようよ、備品壊したら…」

「ねえ、慈音、夕顔なんかより、私の方がいいわよ？たくさん、教えてあげる！！」

「何言ってるの！私の方が、いいもの持ってるし、技術だって！」

その部屋に木蓮太夫が入って来た。

「太夫…。」

「騒がしいわよ…もうすぐ開店で忙しい時に騒いでいないで、きちんとなさい。」

この木蓮という太夫は、ほんわか癒し系の繻子蘭とは違う、キリッとした花魁である。

「ごめんなさい…太夫。」

2人はしゅんと頭を垂れていた。そこにやんわりとした木蓮の声が振ってきた。

「それに、慈音の筆降ろしは、私がするって約束なのよ？」

「た、太夫！！」

慈音は苦笑をしている。

「慈音、お前、モテモテね…。」

繻子蘭は、照れもせず、遊女達の話の聞いている息子に呆れた。

「なんか、ねえ…姐さん達の気持ちは嬉しいんだけどさ…。」

「…駄目よ！！」

慈音は、言葉を無くす。

襖を開けて、どっと倒れこむ遊女達。

「…。」

「さ、慈音。仕事に行きましょう。」

母は、複雑な気持ちで慈音の背中を押した。

「姐さん達、ありがとう！でも、喧嘩しないでね…。大切な身体に傷とか付いたらいけないよ？」

慈音の気遣いに女達は顔を赤らめた。

将来、彼はきつと誰もが欲しくなる男に成長するだろう。

母は、ふと凱斬のことを思った。

花魁の木蓮は、5つの時に2つ隣の村から両親に連れられてやってきた。

貧しい村では、自分の娘を花街に売りにくることも多く、彼女もその1人だった。

峰莉という両親のつけた名前は、花街の人間になったときに捨て、長の審査を受けて、花街の女となった。

木蓮は生まれがなんであれ、上品で、人目を引く美しい少女だった。当時長であった、繻子蘭の母は、彼女を引込禿として、花街の自分の屋敷に招き入れた。

身請けした金は、両親の家を十分に潤した。

屋敷に入った木蓮は、花魁である繻子蘭の美しさに惹かれ、彼女のようになりたいと考えた。

凱漸との恋模様も彼女の憧れを掻き立てた。

「お前にも、お前だけを愛してくれる旦那様が現れるわよ。」

繻子蘭の言葉を信じて生きてきた。

愛する男が出来た時、花街を離れ、家庭に入る芸者や遊女も少なくない。

そんな女達も多く見送った木蓮は、この仕事が嫌いではなかったが、早く自分の旦那様が現れたらいいなと考えていた。

彼女が、6つの時、繻子蘭が慈音を産んだ。

こんなに綺麗な髪と瞳をした赤ん坊は見たことがないと彼女は毎日のように座敷の仕手の手伝いが終わると繻子蘭のもとを尋ねた。

花魁になることを約束されていた木蓮は毎日のように厳しい修行をこなし、14歳の年になった冬には、長の薦める客と夜を過ごした。初めて男に抱かれた時は心まで壊れてしまったと思った。

親の為とはいえ、自分が何故こんなことをしなければならないのかと泣いた。

「逃げてもいいんだよ？」

長は、優しく言ってくれた。

芸者や、裏方の女として花街に残る道もある。そう教えてくれた。

しかし、それは、繻子蘭や慈音との別れを意味する。

花魁はこの街では別格なのだ。

自分を支えてくれるのが慈音の笑顔なんだと木蓮は思った。

彼の成長を見守る事ができるなら、花魁になることに抵抗はない。

彼女はそう考えて今もこの世界に生きていた。

「木蓮は、お前のことが大切に仕方ないからねえ。」

繻子蘭の言葉に慈音は苦笑する。

「知ってる。太夫は、格別俺に優しいから…。でも…。」

年頃になった慈音には、木蓮も、夕顔も大好きな家族の一員で恋愛対象にはならない。

「分かってるわよ、あなたはいつかこの街を離れるんでしょう?」

それは、小さい頃から母と祖母にだけ告げていた事。

自分の内なる力が、この街には「慈音のすること」が、やがてなくなることを告げているということ。

「木蓮の思いは…慈音には重いわね。」

母のため息。

「早く、太夫に旦那が見つかるといいんだけど…寄ってくるのはどういうわけか…」

ため息を吐く2人。

「慈音も早く、好きな子を作らないと…あの子もあんたを諦められないわよ。」

この言葉にも苦笑してしまう。

ずっとこの花街で暮してきて、家族同然に過ごしてきた彼女達の中に特別な感情を抱いてしまう相手はいなかった。

「街を出てからじゃないと無理だよ…」

彼は苦笑するしかなかった。

慈音は、遊女の1人として座敷に上がっていた。

木蓮にしつこく付きまとう豪族の三浦という男は、ちびちびと酒を飲み、愚痴を零している。

「くそう!鬼姫め!必ず捕えて殺してやる…」

「まあ、物騒な話ですこと…」

「物騒じゃねえ!あの小娘…綺麗な顔しやがって…俺の金をばら撒きやがって…」

慈音は酌をしながら、小さな薬を食べ物の中に入れて、彼の口に運んだ。

「おつ、旨いな……んっ？お前は新顔か？」

男の太い腕が慈音の方に回される。

「はい……」

「ほう…変った瞳の色をしておるなあ…。色も白い…。よし、喰つてやろう…」

男の顔が慈音の首筋に這う。

「ま、まあ…お料理が冷めてしまいますわ…お楽しみは…また後で…」

男の顔を押し返す。男の手が慈音の手を掴み自分自身に導く。

「なにを…ここはそういう…み…店だ…だろっ…んっ？」

男のは見る見るうちに小さくなっていった。

「おっ…な…なんだ…おい、口でしてくれ。」

「旦那様？今日はもう駄目みたいですよ…ほら…」

男のモノが色を黒く変えている。

「ひっ！」

「御病氣持ちの方は遠慮させてもらいます。」

慈音はすつと立ち上がり部屋を出て行った。

「慈音？」

心配して様子を見に来た母の前を通り過ぎる。

彼は洗面台へ駆け込んだ。

徐に手を洗い出す。

「めっちゃ、さむいぼっ…！」

鳥肌の立ったところを母に見せる。

「何が悲しくて、男のさわらなあかんねん！」

母が笑っている。

「で、どうなったの？旨く飲ませた？」

慈音は振り返る。

「ばっちし、っていうかめっちゃ効果早いから、助かった。」

ふうつと大きな息を吐いた。

慈音が飲ませたのは、素行の悪い客に遊女が飲ませる勃たせなくす

る薬である。

効果は一週間。

しかも、その間、男のは、病気になったように黒く変色するのだ。この薬は花街お抱えの薬師が作り上げた傑作である。

薬の効果に男は自信をなくし、花街には来なくなるのだ。

木蓮をとりあえず、三浦から守る。

そのためには花街に来る理由をなくす。

ただ、酒をのんで、芸者達と遊ぶだけならいいが、三浦の望む“来る理由”がなくなる。

慈音は母に化粧を落とすために自宅に戻ると声を掛けるとその場を後にした。

時間はまだ早い。客も疎らで花街の活気はこれからというところ。

薄暗い夕闇の中、慈音は、花街の壁を飛び去っていく影を見た。

「なんだろう…。」

後を追いたい衝動ではあったが動きづらい自分の姿を思い、留めた。

つづく

鬼神の子

「迎えに来るから待っているのだよ。」

そう言つて去つて行つた両親の背中を少女はじつと見つめていた。周囲には、歪な岩と腐乱した死体。

そんなものしかなかった。

鼻を突く腐敗臭に時々吐きそうになりながらも少女はその場から離れようとはしなかった。

雨風をさける岩の下。

おそらく彼女以外にもここで両親の迎えを待っていた子供が居たのだろう。

自分と同じ大きさのしやれこうべが転がっていた。

（ぎゅるるる…。）

先ほどから鳴り続ける空腹を知らせる腹にそつと手を沿わす。

満足な食事をしたのは何時の頃だっただろう。

自分という存在が家族にとって疎ましいものであることは、幼心に分かつていた。

他の兄弟達との会話量、食事量、そして労働の内容と量。

ボロを身に纏い、薄汚れた手を擦り合わせて土間で寝たこともあった。

生まれて初めて聞いた言葉が、『恐ろしい』という親が自分に向けた言葉だった。

「独り言をいうのは、およし！」

そういつて、殴られたこともあった。

自分では独り言だとは思っていなかったことが、周りにはそう見えていたのである。

家族の中で1人だと気付いた日から、彼女は自分の中に4つの命が

あることに気付いた。

4つの命は、それぞれに名前を持ち、彼女を励まし、勇気付け、決して自ら命を絶つことがないように声を掛けてくれていた。

4つの命は、少女にとって安らぎの存在となった。

しかし、彼らとの会話は、周囲の者を怖がらせ、彼女を更に孤独にした。

「お前が、独り言を言つたび、お父が白い目で見られる！二度と言うんじゃないよ！」

母から叱られた4歳の春。

少女は、4つの命に言葉をかけなくなった。

同じ年の夏。

村は大干ばつに見舞われた。

農作物が減つたのに、税の徴収はかわらない。

両親は、少女を花街にでも売ろうかと考えた。

しかし、彼女は、見た目が他の少女とは違っていたために、その選択肢は花街に断られるだろうと両親は考えた。

青みがかった黒髪に、赤い目。

両親にどれ1つとして似ていなかった彼女は、家族の飢えを防ぐため、『捨て山』と名付けられた小高い丘に捨てられることになった。

少女は、自分が家族に捨てられたことを理解していた。

自分を捨てても家の貧しさは変わらないが、自分が居ない方が、あの家族は上手くいくだろうという事も。

けれど、彼女はまだ4つだった。

無表情で、口数が少なく、醜いと言われつづけた自分。

孤独と言つたものを理解しながらも、受け入れる事ができなかった。

こうやって待っている間にも両親は思いなおして自分を迎えに来てくれるはずだと一縷の望みを持っていた。

けれど、振り出した雨が、少女の希望を崩し、一人ぼっちだという現実に涙した。

膝を抱え、大岩の下で丸くなっている彼女に声を掛ける者がいた。少女は顔を上げ声の主を探すが見つからない。

「姫…。」

その声は、自分の中から自分に語りかけているものだった。

それは、いつの日か自分を支えてくれた声だった。

「姫…我らの名を…今こそ我らの名を…。」

「どうか、我らの名を…。」

自分に語りかける優しい声。

その声を見無視したのは自分なのに彼らはまた声を掛けてくれたのだ。少女は嬉しさで溢れた涙を拭った。

彼らの名を知りながら、今まで口にすることは出来なかった。

口にすることで孤独からは解放されるが、家族の元には永遠に帰れないと感じていたから。

「我らの姫さま…。」

「白妙さま…。」

自分の名前を聞いたのも久しぶりだった。

親は、彼女を名前で呼んだことはない。

白い布を意味するこの名前も家を訪れた法師に授けられたもので、両親はそれすらも気に入らなかったのだ。

「か、家族になつてくれるのか？」

少女は小さな声で4つの命に尋ねた。

「白妙さまが望むなら…。」

少女の頬にまた輝く雫が伝った。

いつからか腹の底から声を出す事もなかった白妙は声を限りに叫んだ。

その声に呼応するように大地が揺れ、白妙の胸元が光を放った。

彼女の胸元には、『又』という文字とそれを取り囲む四つの石があった。

両親は、その文字も、石も気味悪いと刃物で抉り取ろうとしたこともあったが、何かの力に邪魔されてできなかった。

白妙が叫んだあと、胸元から4つの石は消え、彼女の前に跪く、4つの大きな鬼がいた。

最初にその者達をみた時の白妙は恐怖で足が震えていた。

とんでもない事をしたと思った。

けれど、彼らは、白妙の生きた魂を狙ってやってきた化け物から彼女を守り、再び目の前で跪いたのだった。

「白妙さま…私が前鬼にございます。」

一番右に位置した細身の青い鬼が言った。

2本の角は、左右で長さが違い、眼光は鋭いものであったが、口調はとても優しくかった。

「俺は後鬼です。姫様!」

一番小さな赤い鬼が言った。

彼は小さな3つの角を額に生やしていた。

「姫さま…私が馬頭鬼。姫さまとこうしてお会いできて嬉しゅうございます。」

頭部が馬の姿をした鬼が言った。

「俺とて、姫さまにお会いできたのは嬉しいぞ!…お、俺は牛頭鬼です!」

一番大きくて恰幅のいい鬼は、頭部が牛の姿であった。

「お前達は何?」

震える声で尋ねる少女に前鬼が言った。

「この姿では恐ろしゅうございましょう…。皆、変化をしてはどうか…。」

4つの命は光に包まれ、恐ろしい姿から人間の姿へと変化した。

白妙はその様に口を開け、ぽかんと見つめていた。

「これで、怖くはないですか?白妙さま。」

すつとした美青年に変わったのは前鬼という鬼だった。

白妙は皆の心遣いが嬉しいと思った。

「俺達は、白妙さまを、お守りするために使わされた者たちなんですよ?」

少年の姿をした鬼が言った。

彼の額には角があつた3つの場所に痣が出来ている。

鬼達は、白妙に色んな話をして聞かせた。

白妙は、金剛夜叉明王という神の魂の一部を共有する『神の子』であること。

夜叉明王は、あまりに眩しい姿の為、人間界にはその姿を晒す事ができない。

そのため、白妙が『神の子』として、来るべき日に戦えるように自分達『鬼』を使わしたこと。

4匹の鬼は、それぞれが明王の人柄、考え方に惹かれ、明王の望まれることをする誓いを立てていること。

この世界は、今危機に面していて、方々に神の子が生まれていること。

いずれは、その『神の子』たちと共に、危機から人々を守らねばならないこと。

幼い白妙に全てを話しても理解は難しいため、鬼達は、一緒に暮していく上で、彼女の教育係りとしても必要な存在となっていた。

「人の世で、神である白妙さまができること、したいと思ったことをお手伝いするのが我らの役目なんです。」

「一緒にいてくれるのか?」

白妙は、馬頭鬼の着ている袖を引っ張った。

見上げる瞳が彼女の懸命な思いを彼らに訴えているようであった。

「当たり前です。姫さまがいなければ、我らが生きている意味がありません。」

「そうだよ、俺達は、家族になつたんでしょ?」

ポロポロと流れる涙に大きな男達がオロオロしていた。

「さ、さしずめ、前鬼がお母さん、牛頭鬼がお父さん、俺が兄貴！馬頭鬼は…おじさん？」

「何イ！後鬼！！貴様！！」

皆がははと声を出して笑うので、白妙も笑った。

生まれて始めての笑顔を見ることが出来た鬼達はそれだけで心が満たされていった。

白妙達は、山の中、鬼達の作る結界の中で生活をした。

時には山を降り、人に紛れて暮すこともあった。

そんな暮しの中で白妙は、自分が育ってきた環境がとても酷いものだったのだと理解した。

女の姿に変化した前鬼と夫役を演じる牛頭鬼、そして、2人の兄に囲まれて白妙はいろんなことを学んで行った。

「なぜ、あの人達は泣いている？」

8つの時、役人と農夫の光景を見た白妙が言った。

農夫は不作だった田畑から全ての物を徴収されては生きてはいけな
いと泣いていた。

傍らには幼い子供がいた。

「税の取立てでしょう…。姫？どういされました？」

「子供が飢えるのは見たくない。自分を思い出す。」

飢えは、心まで荒んだものにしてしまう。

自分はあと一歩、鬼達の存在に気付かなければどうなっていたら
うと考えてしまう。

「この村の者達は、先ほどの役人と、地主である豪族二つに税を納
めるようですね。」

「普通、役人は、直接農夫から取り立てはしないんじゃない？地
主が表に立つと思うけどさ。」

白妙はこの村の仕組みが知りたくて仕方がなかった。

う
う
う
く

鬼姫の思い

「後鬼……」

じつと見つめてくる姫に後鬼がため息を吐く。

「しゃーなーな。俺がちよつと行つて見てくるよ。」

後鬼は姿を消した。

姿を消したまま役人の後を追うと、彼は地主のところによつて来た。

(?)

役人は、甲を脱ぎ、出迎えた白髪 of 男跪いた。

「おう、戻ったか！」

「御館さま、たしかにあの男は作物を隠しておりました。」

男は、役人が取り立ててきた米俵を抱きかかえた。

「国に収める米以上に徴収せねば、我らが飢えてしまつわ。これを蔵に運んでおけ。」

後鬼は蔵についていく。そこには天井高く積み上げられた米俵が……。

(どれだけ喰うつもりなんだ?)

後鬼は屋敷の離れから異質な気を察知した。

(これは……)

後鬼は、先ほどの地主を探した。

「どうだ、鬼姫さまのご機嫌を損ねたりしてないだろうな……！」

(鬼姫?)

長い渡り廊下を音を立てて歩く地主にへこへこと頭を下げている男が必死についていく。

「は、はあ、鬼姫さまに置かれましては……米が足らぬと……。」

「どれだけ喰えば……。」

「しかし、これを……。」

男は赤い布に包まれたものを地主に渡した。

ずしりと重いものなのか、彼の表情が慌てている。

地主は、その布を取り、ため息を吐いた。

「なんと見事な……。」

それは、金塊だった。大きさは掌ほどにもなる。

「金を生む鬼姫……米以外のものも喰うが……これを出してくれるなら……。」

ヤラシイ笑いがその口から漏れた。

「しかし、御館さま……鬼姫が……子供の肉も食べたいと……。」
ピタツと動きが止まった。

「なんと……子供が？さすればもつと美しく大きな金を出してくれるのか！？」

男の目がギラギラと光っている。

その目で男は離れの戸を開けた。

「鬼姫さま……！」

後鬼は気配を消してその中を覗き込んだ。

（なんだあれ？）

後鬼の目には、形のないぶよぶよした物体があるとしか見えなかった。

それは、常に動き、目の前に出された米と、生きた鶏を丸呑みしている。

身体の中で、血しぶきを上げて鶏は壊されていく。

（うげえ……）

地主には、その物体が美しい女に見えているらしく、先ほどからおだてる言葉を並べている。

「鬼姫様は、子供の肉が食べたいとお聞きしましたが……。」

「そうじゃ、わらわは、子供の……子供の肉が食べたいのじゃ……。」

……お前は、金塊がいいのじゃろ？」

互いに高笑いを浮かべていた。

「——と、言っわけだったんだけど……。」

「鬼姫とは…。」

山の庵の中で鬼達は、呆れた声を出した。

「その子供に私かなろう。」

白妙の申し出に一同が啞然とする。

「な、なりません！！そのような危険なことは！」

前鬼が反対をする。

「守ってくれるのだろう？」

白妙はしらつと言った。

鬼達は、彼女には逆らえないのだ。

「子供が飢えるのも、餌にされるのも嫌いだ。何が出来るかは分からないが、捨ててはおけない…。」

鬼達は、ため息を吐きながら笑っていた。

「それでこそ、慈悲深い明王様の御子でございますね。」

「呆れたか？」

「いえ、感心しておるのですよ…。」

白妙は、以前着ていたようなボロ口を纏った。

そして、村の中を彷徨う。

「これ、その娘よ…。」

声をかけてきたのは、地主の家の者だった。

白妙は、屋敷に連れて行かれて、縄で自由を奪われた。

「少々汚いが、子供は子供！お前にはすまぬと思うが、これもこの家の為。」

白妙は担がれて離れへと連れて行かれた。

その離れで白妙は後鬼の言っていたそのものを目にした。
(なるほど、太った水あめのお化けだな。)

白妙は、その化け物と2人きりになった。

「震えることも忘れたか…。」

化け物が言った。

「お前は我の腹の中で溶かしてやろう。」

白妙はすくつと立ち上がった。

縄は解かれており、化け物は焦った声を出した。

「な、お、お前は……。なぜ、この結界の中で動けるのだ！」

白妙は、胸に手を置く。

「お前が鬼姫とは、笑わせる。本当の鬼姫の力を思い知るがよい。」
大きな爆発が起こった。地主の屋敷が粉々になるほどの爆発であった。

呆然とする地主を屋敷の外へ連れて行く大きな手。

「地主様、一体何が……」

群がる村人。そこへ馬に乗った役人がやって来た。

「豪族・範素だな。税の課税徴収の件で取り調べる事がある。直ちに来られよ。」

「な、……何と？」

「お上の方に、垂れ込みがあつたのだ。そなたは、化け物と手を組み、民を苦しめ、人の命さえ、己の為に化け物に捧げているとな……」

地主はガクガクと震える足で立ち上がることができなかった。

村人は呆然とその光景を見つめている。

「米だ！米だぞ……！」

誰かが叫んだ。壊れた塀の向こうに顕になった蔵。

その蔵の壁も壊され中に貯蔵されていた膨大な米俵が顔を覗かせていた。

「地主は、化け物に米を捧げていた。そのためには、お前達に更なる課税と称し、米を確保しなければならなかった。詳しくは、あの男が知っている。」

年端も行かぬ少女が戸惑っている村人に説いた。

彼女が指差した方に、屋敷の者が大男に囚われてうな垂れていた。

「この米は、そなた達のモノ。と、言うわけだ。あの地主は裁かれ、この地に新たな指導者が来るまで、皆で話し合いをするがよい。」

「あ、あなた様の名は……」

幼いが威厳に満ちた眼差しの少女に1人の母親が尋ねた。腕の中には赤子を抱えている。

「私は、鬼…。人とは交えぬ運命の者…その子が幸せに育つ事を祈る。」

去っていく少女の後を4人の男が付いていった。

白妙は、自らの居場所を探すように各地を回った。

訪れた村や、町で苦しむ人を見る度に僅かながらも力を貸した。

人々の間に、『鬼姫』という義賊の存在が一筋の光のように浸透していった。

つづく

慈音と木蓮（前書き）

R15だと思います。もったきわどい表現でしたが、大分削りました。

慈音と木蓮

「鬼姫？」

ある宿場街で旅の疲れを癒していた龍綺と雷紋は、宿屋の主人から鬼姫と名乗る義賊の存在を耳にした。

「そうなんすよ…。鬼姫いう、それは可愛らしい子供と、4人の用心棒がねえ、悪徳な豪族や、役人、果ては化け物まで退治してくれるんですよ。」

宿屋の主人の言葉は物語を語るように真実味がなく、2人は何処まで信じたらいいか分からなかった。

「どう思う？」

疲れを取る目的の温泉に身を委ねながら龍綺が尋ねた。

「神の子の中に『夜叉』というのがあるんだけどね…。」

頭に手ぬぐいを置いて雷紋が言った。

「彼は、少し俺達とは違うんです。」

「何が？」

「俺達は、身体の中に神獣を宿している。で、俺達は神獣の力を借りて、化け物を倒す知恵や技術を身に付けるだろ？君なら、その剣術とか。…夜叉っていうのは、少し違ってて、たしかに獣なんだけど、鬼のことなんだ。」

「鬼？鬼って、化け物だろう？」

頷く雷紋は言葉を続けた。

「光が存在するように闇は必ず存在するだろ？鬼はその闇の中で生まれた獣なんだけど、その中には、神も存在していて、鬼は、その神には逆らう事ができないんだ。…神の名は、金剛夜叉明王と言ってる。『夜叉』って言葉はココからきてて、『夜叉』を宿す者は、神と同じく、鬼を操る力を持っているんだ。その力は、限りなく俺達の力に近いんだけど、闇に近くて…。でも、光の存在で…。」

「ややこしいな…。神の子には違いないんだろ？」

「まあな…でも扱いが一番難しい神の子だって白澤が言ってる。」
「でも、その鬼姫とやらに会ってみたいと真偽は分からないんだろ？」

龍綺達は、早く神の子を集めたかった。

最近、都で不穏な動きがあると聞いたからだ。

国の中心が揺らぐとすぐ周辺は影響を受ける。

荒んだ人の心は、化け物の温床となってしまう。

「明日、もっと情報を集めてみよう。」

「この山奥にある怪しげな祠も気になるしね…。」

宿場街の数キロ先にある村の間に人々が信仰している白虎の祠があるのだが、最近誰かがその祠を荒し、化け物の出現が多くなったというのだ。

その村は豪族三浦の納める村で、鬼姫が出たとの噂もあるらしい。

「それとさあ…花街っていうのも見て見たいね。」

「…雷紋と俺が行ったら、追い出されるな…。」

「ま、ね。お子様だから。」

年頃の彼らが花街のことを気にならないといえは嘘になる。

けれど、自分達にはまだ早いとも分かっているのだ。

宿場街と花街、そして、豪族三浦の村は丁度王都から西に存在する三角形の頂点に位置する。

それぞれ交流は盛んであるが、三浦の村が最近、鬼姫のような義賊が出たり、結界の1つであった祠が壊されてから、化け物が闊歩したりと荒れていて、逃げ出す村人も後を絶たないということだった。宿場街も、隣の花街もその影響からの回避にやっきになっていた。

「白虎の祠が？」

花街の長、繻子蘭の家に齎された情報にざわめきが起こった。

その情報を齎したのは、簪や小物の行商人である。

「へえ。それはもう、破壊されてましてね…結界の1つが壊れたとかで、化け物が三浦の村を襲ったとも聞いております。あの村もも

う終わりですかねえ…鬼姫にやられて、役人に目を付けられましたしね、頭の三浦は、ずっと引きこもりだそうで…。」

「祠の建て直しは？」

「今、宿場街の遣いの者が、白虎院の宮司に頼みに行ったようですね。」

繻子蘭は屋敷の奥に意識を持っていく。

息子の慈音がある日急に倒れた。

その日と祠が壊された日が重なるのだ。

あれほどまでに、白虎を連想させる容姿を持っている息子が何の前触れもなく胸を押さえて倒れたのだ。

本人は、数分にして意識を取り戻し、ケロツとしていたが…。

繻子蘭の命令で彼はまだ寝室から出してもらえずにいた。

「大丈夫だつて言つたのに…。」

「駄目よ、最近『闘士』の方で忙しかつたのもあると思うの…母さんはね、心配なのよ。お前に何かあったら…あの人に申し訳が立たないんだから。」

あの人とは、未だに現れない父・凱漸のことなんだろう。慈音はため息を吐いた。

「母さんは、何時まで父さんを待つのか？」

それは1度聞いてみたかつた言葉だつた。

「ずっと…そう…ずっと待つつもりよ。たとえ、帰ってこれなくても…。」

笑う母の笑顔が少し悲しく見えた。

「父さんが何してる人とか知らないの？」

母は、部屋の隅にある箆笥から何通かの文を出してきた。

「…これは…。」

「わかつた？」

封筒には、誰もが知っている印が押されていた。それは、王族の証。お父様は、この国の血族の1人だつたの。聞かなかつた私に心苦

しくなつて文をよこしたのね。帰れない理由も書いてあるわ。」

国を治める若き王、それは凱漸の兄・遠雷である。

その兄を助けるために働いているのだ。

花街を訪れたのは視察の中のほんの戯れだった。

「でも、父さんは必ず帰ってくるって書いてあるよ。」

母は、また悲しく笑った。

「今、国は揉めてるでしょう？軍事費を減らすのか、増やすのかで……そんな時に王の側近であるあの人が離れられる訳がないでしょう？」

「俺、父さんに会つてくる。」
すくつと立ち上がる。

「な、何言つてんの！！あの人は……慈音のことは知らないのよ……。」
「えっ？」

母は、俯いた。

「あの人の重荷になりたくなかったの……。」

「俺は、重荷？」

母は慈音を抱きしめた。

「あの人にとつてはね……私にとつては、大切な宝物よ……。」

いつか何かをするためにこの街を離れる時、慈音は都に行き、父に会つてみようと考えた。

母がここまで惚れこんだ男というのを見てみたくなつたのだ。

「ありがとう、母さん。……俺……汗かいたから風呂行ってくる。」

慈音は複雑な表情で見送る母に背を向けた。

湯船に浸かり、父親のことを考える。

（白虎、俺は父さんに会いたいよ……。）

内なる自分に問いかける。

周囲の者は、自分の見かけだけで白虎の子と見ているが、彼は随分小さい頃から、その内側に宿る白虎の存在に気付いていた。

何かに悩んだり、意見を聞きたい時はいつも彼に問いかけていた。

（お前の望むことならば、我は何も言わない。しかし、今、都は不穏な気配に包まれている。お前1人では、無理だ。）

（不穏な気配って…？それは、父さんが危ないってことにも繋がる？）

（分からない…ただ、いつまでもこの街に居ては、何も始まらない。）

考え込む慈音の頬に触れる手があった。

「うわっ！」

湯船の水面が大きく波立った。

「太夫！」

驚きで立ち上がってしまった慈音は、慌てて前を隠し、湯船に身を沈めた。

「な、なんで入って来てんの？使用中だって札かけてただろ？」

花魁である木蓮は繻子蘭の家に住むことを許された数少ない者の1人だ。

「慈音、都に行くの？」

心を読まれたのかと慈音はビクツとした。

「ど、どうして…。」

「凱漸さまのところに行くつもりなんでしょう？」

伸びてきた手が慈音の身体を包む。

柔らかな自分とは違う肌が彼に押し付けられた。

「た、太夫…、や、止めてよ…。」

潤んだ瞳が慈音を見つめてきた。

「太夫…。」

柔らかい胸が押し付けられ、彼女の顔が慈音の顔に近付いてきた。

「うっ！」

慈音は目を見開いた。

「た、太夫…。」

彼女の手が戸惑う彼の体を的確に触れていく。

「都に行く前に、慈音を男にしてあげる…それが私の餞別よ…。」

自ら男を抱きたいと木蓮が思ったのは初めてだった。

木蓮は自分の行いに翻弄される慈音の姿が愛しくて堪らなかった。湯船から上がり、木の板間の上で彼の身体を感じるように触っている。

14歳でも男は男。熟練の腕を持つ太夫に触られて感じないわけはなかった。

「た、太夫…変だよ…こ、こんなっ！」

「慈音…本当に好き…愛してるわ…。」

彼の唇に唇を重ねてくる木蓮。

「や、ヤダよ！太夫！」

木蓮の動きを止めようとする彼の腕を取る。

慈音の目がカツと見開き、精一杯の力が彼女を押しつけた。

「きゃっ！」

慈音は、木蓮に隠すように果てた。

激しく息をしながら、床に横たわる慈音に木蓮は身体を重ねてきた。ビクつく慈音を背中から包み込む。

「太夫…。」

「慈音…可愛い人…。」

逃げようとする慈音の身体を木蓮はがっちり包み込んでいた。

「放さないんだから…。」感じてくれたのね…慈音…。」

「あっ…。」

慈音は恥ずかしさと少しの恐怖に身体を硬くした。

「太夫と何かあったの？」

その後の夕食の後、繻子蘭が部屋を訪ねてきた。

「な、何でもない…ことは…ない…。」

かあつと顔を赤くしている息子に母は、ピンときてため息を吐いた。

「ふっつ…木蓮に襲われたのね？」

はつと顔を上げる。

「童貞の慈音に、木蓮は敵わないわよねえ……。」

さすが色街の母。

母は大きいため息を漏らした。

「どうしよう……俺、花街の人とはしないって誓ってたのに……。」

「してしまったことは仕方ないでしょう？ 結局のところ、翻弄されて、拒めなかったお前も悪い！……でも、慈音は、木蓮の旦那になるつもりはないんでしょう？」

慈音は大きく頷く。

木蓮の本気を知ってしまった以上、彼女が慈音に求めていることも明らかだ。

母は、また、ため息を吐いた。

「違うんだ……あんなことしてしまってなんだけど……やっぱり太夫は家族なんだよ。」

「……とにかく、太夫には私からも説明するけれど、お前も逃げてちや駄目よ！！あの子には悪いけど……慈音の心がない限り、私は2人の交際には反対しますから。」

母と子は、2人揃ってため息を吐いた。

慈音は、その後、母から言われていたにも関わらず、意識的に木蓮を避けてしまうようになっていた。

2人きりになると済崩し的に肌を重ねてしまいそうで怖かったからだ。

色街で生まれ育っていながら、慈音は一途な母を見てきたこともあり、好きな人じゃないと契ってはいけないという考えを持っていた。

（……見回りにでも行こう。）

花街を出て、慈音は最近壊れかけている結界の修復と見回りのため社へと向かった。

つづく

白と黒、出会う

「姫さま、どうですか…。」

白妙は、三浦の村の近くにまた現れていた。

彼女を肩に担いでいるのは牛頭鬼。他のモノは彼女の胸で石となり眠っている。

鬼が人型を取ると力を失ってしまう。

しかし、人型でないと道を歩くことも出来ない。

本日彼女を守るのは、牛頭鬼の番だった。

彼は、4匹の中で一番の力持ちで、大男である。

2メートル以上ある身長と筋骨隆々の逞しい身体で白妙など簡単に持ち上げてしまう。

そして、彼は、白妙を肩に乗せて歩くのが好きだった。

それは、他の鬼達には出来ないことだったから。

14歳になった白妙は、目を見張るほどの美しい少女になっていた。腰まで伸びた青みがかった黒髪はたおやかに風に靡き、憂いに満ちた赤い瞳は、世の中を見据えているようで実に頼もしかった。

「白虎の祠を壊したモノがあのか村にいる。それは確かだと思うが、」
後鬼が潜入した結果、屋敷には囚われた娘が数人、恐怖に怯えて牢に入れられていた。

その牢は、身を潜めていた後鬼には開けることが出来ず、すごすごと帰ってきたのだ。

奇襲をかけてもいいが、その娘を人質に取られては手が出せない。

「祠の中にあつた力の源を壊そうとするほどの化け物だ。お前達を働かすわけにはいかないし、私も剣を抜かねばならないかもしれない。」

祠の中で眠っていた力の一割は壊され、結界を強めるためにと新たに追加された力は元の主に帰っていった。

屋敷の中の化け物は、奪った9割の力を自分のモノに変換融合させ

て、結界を張った。

それは、対鬼用のもので、後鬼は潜入後、疲れ果て、望んでもないのに石になってしまった。

鬼達が力を使えないとき、白妙は金剛杵という武器を印から出し戦う。

白妙を守る鬼としては、彼女自身には戦って欲しくないと考えていた。

あくまでも彼女の手足として戦いたいのだ。

しかし、聖なる力を変換して作られた結界には鬼達の力は半減してしまう。

「姫…。」

「化け物共が…。」

白妙の気配を察して数匹の化け物が彼女達を取り囲んでいた。

「姫さま、ココは俺に任せてください…。」

牛頭鬼が嬉しそうに言った。

「では、任す。私は、他の社や祠を見て回ることになろう。」

白妙は、印に手を翳すとその場から姿を消した。

花街に一番近いところにある社。

この辺りでは、本宮の次に大きい規模の社は、白虎に相応しい穏やかな風の拭く心地よい聖域だった。

花街の中で、木蓮を避けていた慈音は、この社に来ることが一番多かった。

（情けないぞ、慈音。）

内なる白虎が言う。

彼は幼い頃から何かと慈音にアドバイスをくれたり、体術や剣術などを教えてくれていた。

「そう思うなら、あの時助けてくれてもよかったんじゃない？」

（お前の心が本心で嫌がってなかったので助けなかった。）

慈音はカツと赤くなった。

「ヤなヤツ。」

頬を撫でる風が自分を慰めてくれているようだった。

（慈音、何かくるぞ。）

緊張した低い声が慈音を現実に戻した。

確かに何かが近付いてくる気配に慈音は身構えた。

するとほんの目の前1メートルほどのところに突然1人の少女が現れた。

慈音は言葉を無くしてただ立っていた。

天に舞い上がった長い髪の毛は静かに下に流れ、伏せていた赤い瞳がゆっくりを開いて、慈音を見つめた。

少女は驚いた顔を一瞬見せた。

「人がいるとはな…。」

時刻は、丑三つ時。

聖域とはいえ、こんな時間に訪れる者は居ない。

慈音は、少女の声に我に返った。

禍々しいものは感じないが、こんな時間に突然現れた人を怪しまないわけにはいかなかった。

「君は、誰？」

月明かりに照らされた碧い瞳が尋ねた。

「お前こそ、何者だ。」

赤い瞳が自分を見据えていた。

「へっ？俺…俺は慈音。（って、何答えてるんだよ。）」

不思議と逆らえない彼女の瞳の力に慈音は少し平常心を失いかけていた。

「そうか、慈音。よい名だな。私は白妙だ。現れ方はちと怪しいが、悪いモノではないぞ。」

自分を見つめてくる真っ直ぐな視線に慈音は、たまらず視線を外した。

「こ、こんな時刻に女の子がウロウロしてちゃ駄目だよ。（くそっ

！落ち着け心臓。」

正直に思っていることを口に出した。

「そうだな…でも、仕方ないのだ。今日はココで寝ようと思ったのだから。」

慈音はハッとしてまた視線を合わせた。

「ココって…社で？駄目だよ…ココは宿泊所じゃないし、風邪を引くよ。」

「（寝るといっても鬼達の結界の中で、快適なのだが…。）そうか？」

「そうだよ！いくら聖域だからって、女の子が駄目だよ！…よかつたら、うちに来る？部屋なら余ってるし。そうだ、その方がいい！」
慈音は思わず彼女の手を取り、パツと放した。

「ご、ごめん。（思った以上に柔らかいから…。）」

慈音が照れたので、白妙もつられて照れてしまった。

「い、いや…問題ないぞ…。」

沈黙が流れていたが慈音がそれを破った。

「えーと、じゃあ、白妙…行こうか。案内するよ。」

人から笑顔を向けられたのは久しぶりのことだった。

胸で眠る鬼達も、こんなに彼女の感情が揺れているのに何も言うてこない。

白妙は戸惑ってしまった。

「あ、手を繋ぐのイヤだった？」

差し出された手を白妙がいつまでもそのままにしているので慈音は少なからずのショックを受けて尋ねてみた。

「い、イヤそうではないんだ…。ただ、人と手を繋ぐのは初めてだと思ったから…。」

自分を捨てた両親には、腕を掴まれたことはあっても、手を繋いだことはなかった。

自分と手を繋いでくれたのは、鬼達だけだった。

「そうなの？じゃあ、俺が初めての人なんだね！」

言ってしまった後で、慈音は真っ赤になっ
て俯いてしまった。

（初めての人って、な、何言っ
てんだ、俺…。）

ついこの間、初めてを経験して
しまったためか、妙に緊張したま
ま慈音は白妙と手を繋ぎ、花街へ
と帰っていった。

つづく

眠れぬ夜

驚いたのは、母・繻子蘭だけではなかった。

丑三つ時とはいえ、花街では多くの人がまだ働いている時間帯だ。花街のすぐ近くにある白虎の社から帰ってきた慈音が見知らぬ女の子の手を引いて帰ってきている事実。

顔見知りの女達にからかわれながら、屋敷にたどり着いた慈音は、きよとんとしている白妙に言い訳をした。

「ご、ごめんね、皆、いい人なんだけど、俺が同じ年頃の女の子と歩いてるのが珍しいだけなんだよ。」

「なるほど。そういえば、私も同じ年頃の子供と歩くのは初めてだ。」

「そ、そうなの？…あ、あそこだよ、家。」

2人は玄関の扉を開いた。

慈音の帰りが遅いと心配していた母がまだ起きていて、その傍らに木蓮が驚いた表情で立っていたことにびっくりした慈音だった。

「ただいま…。」

「…おかえり…って、その子は？」

繋いでいた手を放す。

「私は、白妙だ。白虎の社で慈音に拾われたんだ。」

「ひ、拾ったんじゃないかって！その…社で野宿するとかいうから、連れて来たんだ。」

繻子蘭の嬉しそうな顔。

花街の女にも、宿場街の女にも興味を示さず、その手のことにはほとんど興手だった息子が、経験した途端、女の子を連れて帰るなんて！母の表情に慈音は焦った。

「ち、違うから！母さんの想像とかとは…！」

木蓮の視線が痛かったが、慈音は彼女の方を見ようとはしなかった。

「あら、お風呂は終わったの？」

「か、母さん！な、なんで！ココ俺の部屋だよ！！」

並べられた布団に慈音は真っ赤になってしまっていた。

とうの白妙は風呂から上がると用意された寝着に着替えて、布団にちょこんと座っている。

木蓮の質問攻めから解放されて、風呂で一息ついて、やっと帰ってきた部屋で母と白妙が話をしていたのだ。

「あら、他の部屋は埋まってるもの。ココしかないんだけど？」

「太夫や、禿の部屋があるだろ！！」

「何言ってるの、禿ちゃんたちの部屋は狭いし、太夫の部屋なんかにこの子通したら、苛められちゃうわよ。お前だってかなり追及されたんでしょ？」

ぐうの音も出ないとはこのことだった。

母は、ふふふつと笑って部屋を出て行った。

木蓮は嫉妬の塊になっていた。

14歳の自分に20歳の花魁がここまで本気になっていることが信じられなかったし、正直怖かった。

そんな興奮した彼女の元から逃げ出して、祖母の家の風呂を借りて帰ってきたのだ。

「ご、ごめん。なんか部屋余ってるって言ったのに。」

「問題ないぞ？さ、もう横になろう。」

「えっ、あ、はい。」

部屋の灯りを消して目が慣れてくると慈音は直ぐ側にある白妙の寝顔に胸が高鳴った。

（駄目だ！緊張してきた。）

彼女に背を向けて慈音は寝ようと心掛けた。

「姫さま……。」

誰かが喋っている声に慈音はうつすらと目を覚ました。

「御無事でよかったです。」

「お前もご苦労だった。もう、眠るがよいぞ。ココは安全のようだ。」

白妙の声。

慈音は、部屋の中にあつた異質な気配がすつと消えたのを感じた。

「君は、何者？」

慈音は起き上がった。

肌蹴た彼女の胸元にハツとして視線を逸らしたが、見覚えのある雰
囲気にもた視線を胸元に戻した。

「その、印は？」

思わず触りそうになったのをグツと堪えた。

白妙の方も、慈音の胸元に自分と同じような文字を見つけた。

「『虎』とは…お前は白虎の神の子か…。」

『神の子』という彼女の言葉。

それは、物心付いた時から聞かされてきた内なる心の声が教えてく
れた自分の正体だった。

「き、君も神の子なの？」

白妙は大きく頷き、見せたことのないような笑顔を慈音に向けた。

「私は、金剛夜叉明王の神の子だ。『夜叉』の子だ。」

白妙は慈音に抱きついてきた。

「えっ…！」

「嬉しいのだ！こんなにも身近に仲間が…鬼達とは違う、神の子と
しての仲間がいたことが！」

木蓮とは違い、まだ丸みは帯びていないが、柔らかな胸の感触が慈
音の胸に押し付けられている。

「だ、駄目だよ！」

彼は白妙を突き放した。

「えっ？」

きよんとする白妙に、真っ赤になっていることが暗闇でも分かる
慈音。

「どうしたのだ？何か気に障ることをしたのか？」

「ち、違う！！そ、その…俺、最近、その……。」

「どうしたのだ？具合が悪いのか？」

覗き込む白妙の顔。

「うつ…。」

慈音は身体を折り曲げ、布団に頭をつけた。

「大丈夫か？母上を呼んでこようか？」

「ち、違うんだ…俺、最近、発情期に入っただけみたいで…。」

「は？」

「抱きつかれたり、触られたりすると…なんか反応しちゃって…」
ごめん、ちよつと厠に行ってくる。気にせず寝てて！」

意味の分からない白妙は呆然としていた。

「前鬼…どうということだ？」

内なる鬼に尋ねる。

（…えーと…。後鬼？）

（えっ？俺に回すなよ、えーとだな…人間の男って言うのはそういうもんなんだ！なつ、馬！）

（馬言うな！姫さまも、もう少し大人になられたら、お分かりになります故、牛頭鬼？）

（お、おう…男には色々あるということだ。姫は気にしなくていいぞ。それに、彼は白虎の御子、発情期があってもおかしくはあるまい。）

余計に分からなくなった白妙であった。

（何やってんだ、俺…。）

厠で用を済まし、洗面台でため息を吐いた。

（全くだ…好きなら奪えばよいだろう。）

内なる心は正直だった。

（す、好きって…ば、バカなことを言うなよ…。）

（バカは慈音の方だ。）

深いため息が自然に出た。

（俺って、節操ないのかな）

（…俺の宿る男は皆そうだ。気にするな？）

（…お前のせい？）

白虎は昔から自分を宿した神の子がどれほど女を魅了し、幸せにしてきたかを自慢げに語った。

（俺は、一途な方がいい…。）

（獣にとって、子孫を残すことこそ第一のものだ！）

（手当たり次第に発情したら許さないからな！…白妙に嫌われる…。）

白虎は意地悪く笑った。

（では、これから、我はあの娘にのみ発情することでしょう！）
慈音はまた、ため息を吐いた。

「ぎゃーっ！」

突然、表から闇を切り裂くような悲鳴が聞こえた。
聞いたことのある声。

（慈音！）

「分かってる！」

慈音が外に出るとそこには、裸足の白妙が立っていた。
腕に傷を負っている。

「白妙！」

「済まぬ…油断した。」

「何があった？」

「木蓮とかいう女子が攫われた。あれは三浦という豪族だった男だ。」

地面に落ちている簪は普段木蓮が使用しているものだった。

「太夫…。」

「鬼避けの呪を掛けて、私の鬼を封じた。…は、刃先に…。」

白妙の身体が大きく揺れた。慈音は倒れそうな彼女の身体を支えた。

「白妙!!」

彼女は脂汗を掻いていた。

（毒を盛られたな…。）

「毒!??どうすればいいんだ!!」

（兎に角部屋の中へ…。娘の傷口を荒い流すんだ。）

「分かった。」

慈音は苦痛な表情の彼女を1人にしてしまった自分を呪っていた。

（俺が一人にしたから…。）

（お前が悔やんでも仕方のないことだ。大丈夫だ、死にはしない。

彼女は神の子だからな。）

「当たり前だ、死なせないし、太夫も助ける!」

明け方まで、慈音は白妙の毒消しに力を使った。

彼女から脂汗が引き、繻子蘭が彼女の寝着を着替えさせてくれた。

決意を秘めた表情をしている息子に母は何も尋ねることが出来なかった。

（1人で行くとするな。…お前はまだ未熟だ。）

（でも、太夫が…。）

（今敵の下に向かつて、犬死をするだけだ。お前に今できるのは、眠って力の消耗を取り戻すことだ。）

「ま、待ってくれ…俺は…。」

内なる心は、慈音を強制的に眠らせた。

（大丈夫だ…この街に、2人の神の子が向かってきている。）

それは、白虎が感じた龍綺と雷紋の気配であった。

（お前の旅立ちの第一歩が始まるのだ慈音。）

寄り添うように眠る2人の神の子は、大きな戦いの前に静かな寝息を立てていた。

つづく

合流

「ホントに沢山あるね。」

この辺り一体の地図を広げて雷紋が言った。

「それだけ、白虎に対する信仰が篤いつてことだろ？次どこだよ…。」

宿場街を朝早く出た二人は、壊されたと噂で聞いた祠を尋ねた。

無惨に壊された祠の中を見て、黄龍は、ココには何も無いと言った。この辺りの土地の人は、熱心に白虎にお参りをしているようで、壊された祠にも、華やお供えの食べ物が祀られてあった。

動けなくなった年寄りや、身体の不自由な人でも信仰ができるようにと各要素に大小さまざまな祠があり、この辺りの人たちが、一番大きいと言っていた社は、花街のすぐ隣にあった。

「次は、祠じゃなくて社だね。コレはちょっと大きいみたい。」

2人は、社に向かって歩き始めた。

この辺りの自然はとても豊かで深緑浴をしながら歩いて行く山道に2人の機嫌はよかったのだが、

「出たよ…。」

度々現れる化け物にその気分は削がれるのだ。

龍綺と雷紋はため息を吐きながら、お互いに背中合わせの姿勢を取った。

「重い…。」

白妙は自分を抱きしめるように眠っている慈音の重さを感じて目を覚ました。

羽交い絞めではないが、彼の腕がしっかりと自分の身体を引き寄せていて、少し体重の掛かってくる姿勢になっている。

目の前にある彼の顔。

寝息が自分の頬に掛かっていることは、くすぐったかったが、嫌な

感じはしなかった。

人と肌を重ねて眠るなんてことは親にもしてもらった記憶がない。鬼達は、抱きしめてくれるが、白妙が眠る時には石に戻っていた。彼女はきゅっと慈音の袖を掴んで彼の表情を覗き込んだ。

（睫の長い…女のような顔だな…。）

そう思った瞬間ぎゅうつと慈音が自分を抱きしめてきた。

（く、苦しい！）

白妙はその力にジタバタと暴れた。

すると抱きしめていた本人の意識が戻ってきた。

「……目覚めたか？」

目の前に白妙の顔。抱きしめている身体。

慈音はさあっと顔を青ざめ、突き飛ばすように白妙から身体を放した。

「うわっ。」

「わっ！…ご、ごめん…なんか、…俺…変なことしなかった？」

起き上がり正座して彼女を見ている。顔は青から赤に変わっている。

白妙も起き上がり正座する。

「変なこととは、なんだ？」

真っ直ぐに見つめてくる白妙に慈音は視線を逸らした。

「な、何もしてないならいいんだ…。」

「そうか、では、太夫を助けに行くか？」

今、初めて太夫のことを思い出している自分に慈音は啞然とした。

「なんだ？」

「い、いや…そうか、太夫は攫われて…。うん、行こう！…でも鬼の力を封じられてるんだろ？白妙は来ないほうが…。」

彼女がまた傷付くんじやないかと慈音は不安になった。

しかし、彼女はニツと口角を一瞬上げると言った。

「問題ないぞ。鬼の力が使えなくとも、明王の力は使える。あやつらは、悔しがるだろうがな。」

「明王の力？」

「そうだ。私の本来の力というものだ。普段は、鬼共が、先を争って、はりきっているから使わせても貰えない。」

立ち上がる白妙に合わせて、慈音も立ち上がるが、少しふら付いた。「では、まず社に行こうか。」

「へ？」

「お前は、力を使って私から毒を消してくれたのだろう？社で力を養うんだ。ほら、少し足元が危ない。」

白妙に手を借りてないと真っ直ぐ立つことが出来ない自分が情けなかった。

「情けなく思うことはないぞ、白虎の力のお陰で、鬼共の回復も早い。あやつらの分までお前は力をくれたんだ。少々無茶だが感謝しないといけないな。さ、ここに触れる。」

白妙は躊躇なく自分の胸元の印のところに彼の手を添えた。

「えっ、ちよつと。」

「社に飛ぶ。」

彼女がギュッと手を握ってきた。

と、同時に自分の身体がぐにゃつと曲げられる感覚に襲われた。

「目を開ける？」

自分と同じくらいの身長彼女の身体にしがみ付いていた。

「ご、ごめん…えっ？」

「…お前は謝ってばかりだな。」

見渡すと青々と茂る木の下。整えられた砂利の地面。ここは慈音にとって見慣れた場所。

「社に飛んできたんだ。お前は本堂に入り、白虎の力の充電を。」
本堂の人通りの少ない場所に降り立った2人。

といっても最近では化物の出現でお参りする民も減っていた。

慈音は白妙に言われるまま本堂に向かった。

2人が、社で力の充電をしているその頃、白虎の社を目指していた龍綺と雷紋は、度重なる化け物の襲撃に疲れを見せていた。

「い、いくらなんでも多過ぎない？」

弓を引く指から血を流している雷紋の愚痴を、同じく握力との勝負に挑んでいた龍綺が剣を振り下ろし聞いていた。

「社に何かあるのか？邪魔をされているようだ。」

敵は強いわけではなかった。雑魚ばかりだ。

しかし、森の木々の間を埋めるように、ぐるりと取り囲むように化け物がやってきていた。

2人ですでに百単位の雑魚を倒しているはずだが、一向に敵の数が減らないのだ。

「くそっ！」

完全に取り囲まれた2人。雷紋は掴んでいた弓を落としそうになった。

「雷紋！」

「だ、大丈夫だ！」

2人にジリジリと歩み寄る異形のモノたち。

と、そこに一陣の風が吹きぬけ、敵の一部を吹き飛ばした。

「！」

風上の方を見ると、そこには、銀髪の少年と、黒くて長い髪を揺らした少女が立っていた。

「前鬼、後鬼、馬頭鬼、牛頭鬼、蹴散らせ！」

少女の通る声が周辺に響いた。

その声に反応するように少女の胸元が光り、4つの塊が飛び出してきた。

龍綺達を襲っている化け物よりも、大きく強いその姿は『鬼』そのものだった。

「大丈夫？なんか変な気配を感じたから。」

人懐っこい笑顔で少年は雷紋に背を向けて立つ。

「…君達は？」

「一気に行く。もう少し、持ちこたえろ！」

少女は龍綺を庇うように立っていた。鬼達から逃げてきた敵が少年少女を襲ってくる。

「金剛杵、降臨！」

少女の手元が光り輝き、一本の剣が握られた。

一方、慈音の広げた手には、何も握られてないが、渦巻いた風が纏わり付いている。

「行けえっ！」

何かを投げる動作と共に、風が敵の方に向かって投げられ、身体を切り裂いていく。

「凄い…。」

身体の動かし方を知っているという慈音の戦い方は風のように颯爽としていて、素早い。

目で追えないほどのスピードを出している時もある。

一方の少女は、戦い方を知っているという風で、流れるように剣を使う。

幼い頃から鬼達に鍛え上げた剣の腕前は、龍綺を凌駕するほどだ。鬼達は、化け物を引き裂きながらも、白妙のフォローも忘れていない。

龍綺と雷紋も2人の活躍に刺激されたかのように再び、剣を弓を構え、敵を倒していった。

つづく

社にて

どれくらい戦っただろうか。

4人は大きなため息を吐いた。

「助かったよ、ありがとう。」

傷付いた手を差し伸べてくる雷紋に、慈音はにっこりと笑いかけた。
「その手を握り返すのは、痛そうだから、とりあえず社に行って、傷を癒そう?」

龍綺は、4匹の鬼達が1人の少女の前に膝を付き、言葉を待っている様を眺めていた。

「御苦労だった…。しばらく眠るがよい。」

少女の言葉に従うように彼らはまた光となって、彼女の胸元に消えていった。

4人は無言のまま白虎の社の境内に足を踏み入れた。

「あつ…。」

踏み入れた途端、身体を痛めつけていた傷が和らいでいくのを2人は感じた。

「きちんと手入れがされ、人々の信仰の篤い社というものは、その領域に入っただけで、神の子の傷を癒すものなんじゃよ。」

白澤の声がした。その口調はどこか淋しげに聞こえた。

白澤をはじめ、迦陵頻迦、麒麟を信仰する宗教はこの国には存在しない。

それゆえに感じる淋しさなのだろうか…。雷紋は言葉を発することが出来なかった。

黙っている雷紋の代わりに龍綺が自己紹介を始めた。

「俺は、龍綺…甲村と言うところから来た。…お前達も、神の子なんだろ?」

慈音の胸元の印を確認する。龍綺は自分の印を彼らに見せた。

「龍の文字…。そっか、そうだよな…。俺は、慈音。白虎の神の子だ

よ。こっちは……。」

白妙に視線を送る。彼女は天に向かって顔を上げ、深呼吸をしていた。

「白妙……『夜叉』の神の子だよ。」

慈音の言葉に、龍綺は驚きの声、雷紋は「やっぱり。」と言った。

「なんで、やっぱり？」

「龍綺も、あの鬼達を見ただろう？鬼を操ることが出来るのは、『夜叉』の神の子だけだって言っただじゃないか。」

2人の会話に白妙がふっと笑った。

「別に操っているわけではないぞ。」

静かな声だった。

その美しい顔に2人が見とれていることに慈音は気付き、心がチクツと痛んだ。

「あ、あのさ、太夫を助けに行かなきゃ！」

話題を変えようとする。

突然のことに龍綺も、雷紋もキョトンとしてしまったが、白妙が、今まで起こった事の成り行きを話して聞かせた。

「では、その三浦とか言う豪族は……。」

「すでに敵の手に落ちている。少し時も経ってしまったから……太夫の命の保障もできない。あの屋敷の周辺には、私の鬼達を封じる結界が張り巡らされていて、残念なことに私の鬼達はあてにならない。」

「白妙の説明を聞いていた雷紋が、

「じゃあ、4人で攻めようか。さっきの戦い方から言って、そんなに悪くないと思うよ。」

と言い出した。

「協力してくれるのか？」

慈音の言葉に、雷紋はにっこり笑った。

「ただし、」

「ただし？」

「このことが解決したら、俺達と一緒に他の神の子を探す旅に同行すること。」

沈黙。

「えっ…旅？」

「そう、旅。俺達の旅の目標は、君達のような神の子を探し出し、来るべき時のために備えること。だから、一緒に来てほしいんだけど。」

慈音は白妙を見た。彼女はふっと笑った。

「コレは神の啓示かもしれない…。よかろう…この件が片付いたら、私はそなた達と共に旅に出る。」

慈音はふと母の顔を思い浮かべていた。

いつか花街を出るという覚悟はしていた。しかし、旅の目的は、父親に会うことだ。

少し戸惑っている慈音の表情を読み取った雷紋は、白妙の髪を一房手に取った。

「白妙みたいな綺麗な子と旅が出来て俺ってば嬉しいよ？」

その髪に口付ける。と、その瞬間、慈音が白妙の腕を掴み、自分の方に引っ張り、抱きしめていた。

「俺も行く！」

腕の中に、白妙がいることに気付いた慈音はハッと我に返り、彼女を放した。

「ご、ごめん…。」

龍綺はそつと雷紋に耳打ちする。

「なあ…慈音って…。」

「白妙のコト好きなんだろうね…。これって彼の弱点でもあり、強みだね。」

分かって挑発した雷紋に龍綺は少々呆れてしまった。

「これ、三浦の屋敷の見取り図。」

境内の片隅で、慈音が懷から出した紙を広げた。

「…なんで、こんなものを？」

「あいつ、色々とうちの姐さん達にちょっかい出してきてたから、いつか懲らしめてやろうと思ってて、何回か忍び込んだことがあるんだ。」

少し照れ居るような顔に白妙がフツと笑った。

「お前は時々大胆になるな。」

「えっ！（…俺、やっぱり白妙に何か不埒なことしたんじゃないあ…。）

考え込む慈音。

「慈音？」

龍綺に声を掛けられ我に返る。

「あ、ごめん…。三浦の部屋はココ。」

「女達を閉じ込めているのは、…後鬼の話では、おそらくこの蔵であろっ…。これだけ広い屋敷だ、隠し部屋とかあるかもしれない。」
慈音は記憶をたどった。

「あ、たぶん、三浦の部屋の床の間の…掛け軸の裏に何かあると思う。部屋に入ったはずのヤツが消えてて、掛け軸が歪んでた時があったから…。」

救出後の逃亡ルートを雷紋が提案する。

「じゃあ、龍綺が、敵の誘導。白妙が、女性達の救出で、俺が援護。慈音は木蓮太夫の救出。それで行こうかと思うんだけど？」

慈音は、木蓮の名前を聞いて少しぎくりとした。

その瞬間を雷紋は見逃していなかった。

慈音は、その案に煮え切らない返事をする。

その態度を見て雷紋は案についての説明をした。

「君達の話だと三浦は太夫にかなりの御執心だから、ヤツと一緒に確立が高い。となれば、お前なら太夫の顔を知っているだろ？女性達の説得には、やっぱり女の子の方が良いと思うし。…お前、太夫となんかあんの？」

慈音は力ツと顔を赤くした。

「私と交代するか？」

白妙が心配して声を掛けてくれた。

しかし、あの白妙を連れて帰ったときの木蓮の様子を思い出すと、白妙の指示には従ってくれない可能性が高い。

「イヤ、その役は俺がする。」

決心しなければならなかったと思った。

自分の中に芽生えてしまった白妙への思いを今更消して木蓮に答えることは出来ない。

「慈音には、後1つ…できることならして欲しいことがある。」

「何？」

「白虎への祈りの力を変換して作られた結界を壊して欲しい。あれがなくなれば、鬼達は自由に戦える。」

結界の破壊。したことの無いことに内なる心に尋ねる。

（どうにかなる？）

（敵の本体を倒さねば、あの結界は消えない。）

黙っている慈音の言葉を待つ。

「三浦か、ヤツを操っているモノを倒さないと結界は消えないかも

…ごめん…なんか役立たずで…。」

「イヤ、たぶんそうだろうとは思っていた。ただ、私が危なくなったらあいつ等は私の意志など無視して出てくるのでな…。」

「大丈夫、白妙は俺と白澤が守るから、慈音は安心して、太夫を助けてよ。」

にこにこ笑顔を見せる雷紋に龍綺が耳打ちをする。

「あんまり苛めるなよ…。」

完全に面白がっている雷紋を他所に残りの3人はため息を吐いた。

つづく

木蓮の闇（前書き）

R15 および、少々残虐的な表現があります。

木蓮の闇

どれくらい眠っていただろう。

冷たい床の感触に肌が震えた。

あの夜。

慈音が部屋から出たのを確認して白妙を外に呼び出した。

6つも年下の彼女に何をするつもりなのかと自分に問うてみたが、苦しいほどに木蓮は慈音のことが好きという答えしか出てこなかった。

彼女を見る慈音の視線を感じるまでは安心していられた。

慈音は、誰にも靡かないと高を括っていた。

それまでの慈音は、花街と言う特殊な環境で育つていながら、実に純粹に育った。

男女の営みがどういったものであるのかなどは、理解しているに違いないが、彼の周りの遊女や芸者達が、彼に色仕掛けをしても、子供っぽい返事をするだけですからりと誘惑を交わしてきたからだ。

弟のような存在だと思って接してきた彼に初めて助けられた日のコトを思い出す。

花魁として出た4回目の席で、三浦に襲われた。

重たい衣装や簪が自分の身体をここまで不自由にするのかと恐怖でいっぱいだった。

着物の隙を狙って侵入してくる三浦の手や舌に酷い嫌悪感を覚えた。客にこれほどまでの嫌悪感を抱いたのは初めてだった。

自分の上げた悲鳴に一番にかけつけてくれたのが、白虎の仮面をつけた慈音だった。

彼は、なだれ込んできた警備の女性達に指示を与えると木蓮の震えが止まるまで抱きしめてくれていた。

決して広くはないその胸に抱かれながら自分の心がどれだけ安らいだかしない。

思えば、自分を守るために抱きしめてくれる男はいなかった。父や兄ですら花街に売られる自分を守ろうとはしてくれなかった。あの時から、木蓮の彼を見る目は「弟として」ではなくなっていた。彼が笑いかける女には、それがたとえ母の繻子蘭であれ嫉妬した。華奢な身体が日々逞しくなっていくのを見てきた。

彼の声や心遣いが自分だけに向けられたらどれだけ幸せだろうと考えた。

彼が仲間の女達の誘惑から逃げるたび、自分のことを待っているのだと考えた。

時々照れたように自分に向ける視線がそう物語っているとしか思わなかった。

この世界に入って多くの男達を相手にして、同い年の娘よりは濃い人生を歩んできた。

仕事だからと割り切って、男に抱かれることにも慣れた。

虚ろな瞳をしながら働いている自分に優しく気遣って声を掛けてくれたのも慈音だけだった。

この子しか、私を理解してくれる人はいない。そう思い込んでいた。

自分以外の遊女や芸者にも優しく声を掛ける彼を見る度に独占欲が彼女の心を支配していった。

自分だけしか知らない彼が欲しい。

幼い、純情な彼を女の自分で汚したかった。

眩しい彼が大人になる前に全てを奪いたかった。

客の男に抱かれながら慈音を思い浮かべ、彼の身体を想像した。

「たまには姐さんの背中も流してよ。」

ある日、欲望にかられ慈音に言ってみた。

彼が疲れた母の背中をよく流していたことを知っていた。

一つ屋根の下に暮す、姉のような自分に他意があることなんて慈音は微塵も感じていないと分かっていた。

「いいよ、背中流してあげるよ、木蓮姐さん。」

14歳を前にした慈音の着物の下に隠れたものを見たかった。

自分だけが彼の全てを知っておきたかった。

そんな自分の心の中にある欲望をまだ慈音は気付いてもいない。

彼に風呂場で背中を流させた。

小さい頃の話をして、できるだけ姉であることを主張させた。

自分の欲望を悟られないようにするためだ。

周到的な会話の中で、ふざけて湯の掛け合いをして、彼をずぶ濡れにした。

「姐さん、酷いよ…。」

自分の裸を見ても顔色を変えない彼に内心怒りにも似た感情を持っていた。

「あら、お風呂に入るのに着物を着ている慈音が悪いんじゃない。脱ぎなさいよ！」

そう言つて、彼の身包みを剥いだ。

ひよろひよろと身長だけ伸びていた慈音の身体は、筋肉が付きかけている成長期の真ん中であつたが、彼のモノはすっかり大人のモノと言つてよかつた。

「み、見るなよ。」

照れて隠す慈音に言つた。

「慈音に好きな子が出来なかつたら、慈音の童貞は私が貰うわよ。」

慈音は手ぬぐいで前を隠しながら、湯船に浸かった。

「絶対、見つけるから。その約束は無効になるよ！」

憎らしいほど可愛らしい笑顔で自分に言つてのけた慈音を独り占めしたいと思つた。

あの日、繻子蘭と慈音の会話を聞いてしまった。

慈音はきつと都に父親の凱漸を探しに行つてしまふ。

母のことを本当に大事にしている子だ、1度こうと決めたことには忠実な子だ。

都に行けば、きっと華やかな街並みや女の子に目移りして花街には帰ってこないと思った。

あれほどまでに強い絆で結ばれていた繻子蘭と凱漸でさえ別れてしまったのだ。

私の慈音が離れて行く？

木蓮の心には焦りしかなかった。

「忘れられたくない！」

彼の身体に自分を刻み付けて離れられないようにしてしまおう、そう考えて慈音が風呂に入っているところを狙った。

慈音の初めてを自分が奪った。

自分の手や舌に翻弄されて、可愛らしい声を上げる様を見て二度と放すものかと誓った。

何度も彼のを自分の中に埋めて、締め付けた。

逃げ出すように身体を捻る彼の身体を捕まえた。

彼が自分の身体を傷つけるような乱暴なことをするはずはないことは分かっていた。

自分は大事な姉で、身体を商売にしている太夫だから。

初めて味わう快感に我を失い、自分を求めて欲しかった。

しかし、慈音は決して自分から木蓮を求めようとはしなかった。

「な、なんでよ……！」

激しい感情で、彼の口を貪り、締め付けたが、慈音は決してその手を木蓮の身体に沿わずことはしなかった。

「ご……ごめん……でも……太夫は……」

顔を自分の腕で隠し、慈音は泣いていた。

「駄目よ……許さない……私以外の女を好きになることも……抱くことも……手を繋ぐことも……私に触れることを恐れるなら触れなければいい……」

狂っていた。

何が彼女を狂わせたのか。

手ぬぐいで彼の手を縛り上げ、体中に自分の印を付け、時に噛み付いた。

気が付くと慈音を傷つけていた。

6つも年下の14歳の彼をこれでもかと痛めつけていた。

その日から、慈音は徹底的に自分を避けるようになった。

それだけのことをしたのだ。

仕方の無いことだと割り切る一方で、自分と視線が合うたびに恥ずかしそうに逸らす彼を見て、嬉しくなった。

偶然を装い、2人きりになった時は、彼を脅した。

抵抗して花街一の花魁に傷を付ければ、母・繻子蘭の信用が落ちると脅し、彼を縛り上げて無理矢理に繋がった。

決して、その手で愛撫をされることはなかったが、自分の中で何度も果てる慈音を見て、彼の中で自分は消えてないことを確信した。

（あの子の中で私は消えない傷となった。）

そう考えていた矢先、慈音が女の子を連れて帰ってきた。

手を繋ぎ、照れた顔で。

まだ幼さは残るが美しい少女だった。

どう見ても慈音から手を繋いだように見えた。

例えないような嫉妬心が炎のように燃え上がっているのを感じた。

最後に繋がった日以来、繻子蘭も自分から慈音を遠ざけようとしていたみたいだった。

「木蓮？慈音の心があなたにないのに、あの子をあなたに任せる訳にはいかないわ。」

繻子蘭に自分の気持ちを告白し、慈音と将来の約束を交わしたいと申し出た。

その答えだった。

「何故？どうして邪魔するの？慈音と私はもう離れられないの…あの子には私しかないの、私にはあの子しかないの…。」

子供が出来ていれば繻子蘭も誰も文句は言わないだろうと何度も彼

のを自分の中に放たせたが、出来なかった。

繻子蘭の言葉を聞いて木蓮は子供ができていないことを益々悔やんだ。

「木蓮、落ち着きなさい。あの子は、そんなこと思ってもいないわ。分かっているんでしょう？今日のあの子の顔を見て、あなたを見る目と比べてごらんさい。白妙ちゃんに向ける目は恋をしている目よ？あの子にとって、あなたは良き姉であって、恋人じゃない。」

「慈音のことは私が一番分かてる！愛してるのよ！！」

木蓮は、繻子蘭を無視して慈音の姿を探した。

慈音は、台所で水を飲んでいた。

突然現れた木蓮に驚いてその場から逃げようとする。

自分の横をすり抜けようとする彼の腕を木蓮は捕まえた。

「許さないって言ったわよね。」

「太夫…。放して…。」

「他の女と手を繋ぐなんて許さないって言ったわよね！！」

長く伸ばした彼女の爪が慈音の腕に食い込んだ。

「痛っ…お、俺は太夫の想いには答えられない。」

その腕を振りほどくと直ぐさま木蓮は抱きついてきた。

「太夫！」

木蓮は激しい口付けを慈音に落とした。

「逃がさないって言ったわ…。」

その眼光に慈音は背筋を寒くした。

「な、なんで…なんでそんなに俺に拘るんだよ…太夫なら、相手は幾らでもいるだろ！」

彼女の身体を突き放す。木蓮はその勢いで床に倒れた。

「あんた以上に欲しい男がいないからよ！！私以上にあんたを愛してる女はいないからよ！許さないから！あの女を選んだら、…あんな小娘、殺してやるんだ！」

心に芽生えた独占欲は、簡単に彼女を闇へと引き込んだ。

つづく

奪還作戦

白妙を呼び出した木蓮は、改めて少女の顔を見た。

幼さの残る顔はやがて輝くばかりの娘へと進化していくことだろう。月明かりに照らされた少女の赤い目は邪な自分の思いを見破っているように思えた。

「ば、馬鹿にしてんでしょ！」

口から出た言葉。相手の少女はキョトンとしている。

「何故、私がお前を馬鹿にする必要がある。」

その様が腹立たしくて木蓮は彼女の襟首を掴んだ。

「慈音に連れて来られたからって、自分のものだなんて思わないで

！！慈音は、慈音は私のもの…消えてよ…。邪魔しないで…。」

ギツと睨む木蓮。

「あの者は、お前のモノではない。神のモノだ…。」

そう言い放った白妙を突き飛ばす。

白妙は木蓮のことなど気にも止めていないようで、上空を見上げていた。

「逃げろ！！」

彼女の声に木蓮は身体を強張らせた。ふいに物凄い力で身体が空中に舞い上がった。

空を翔るような悲鳴が出た。咄嗟に地上にいる白妙に手を伸ばすが、彼女は自分を捕まえているモノに傷を負わされていた。

後方から自分の悲鳴を聞きつけてやって来た慈音の姿を見つけた。

「慈音？…私はココよ！」

叫び声は風にかき消された。

彼は遠ざかっていく自分には目もくれず、膝をついている白妙に駆け寄っていた。

（慈音…。）

ふと自分を捕まえているモノの顔を見て木蓮は気を失った。

血走った目に牙と角を生やした豪族・三浦の変わり果てた姿がそこにあった。

「ここは…。」

暗闇に目が慣れてきた頃、木蓮は自分を見つめる瞳に気付いた。

「ひっ！」

青紫の炎が辺りを少しだけ明るくした。

目を凝らして見つめる先には美しい女がいた。

「可哀想な子…。」

白い肌に似つかわしくないほど赤い唇が印象的だった。

不思議とそこだけがはっきり見えている。木蓮は懷刀を握り締めた。その女の横には三浦の姿があった。

虚ろな瞳、よく見ると腕が可笑しな方向に曲がっている。

声にならない悲鳴を上げた。

「安心おし、この男はお前に被害を加えないよ…。」

女は失笑しながら言った。

「あ、あんた…誰？ココはどこ…？」

震える手が懷刀を振るわせる。目の前の女はフツと笑った。

「可哀想に…お前の愛しの慈音は、あの娘にたぶらかされているんだよ？」

慈音の名を耳にして震えが止まる。

「あの白妙という小娘は、鬼の娘…人ではない生き物…このままだと、お前の愛しの慈音は、喰われちゃうよ？」

白妙の赤い目を思い出す。あれは、人のモノではない。

「慈音を喰われてもいいのかい？」

女は気が付くと木蓮のすぐ隣に立っていた。

「い、イヤよ…慈音は私のもの！今だって、これからだって…！」

「そう、あの子はお前のモノ…誰も奪ってはならない…イイコだねえ…お前のそのドロドロとした感情は、あの方もきつと気に入るだろう…。」

「えっ？」

「さあ、木蓮…お前は何を望む？あの娘を殺す力が欲しいんじゃないのかい？」

さっきまで見えていなかった女の目が光り、木蓮はその眼光に動けなくなった。

「ほ…欲しい…。」

女の静かな笑い声が狭い空間に響いた。

「では、その身体と魂…我に捧げよ…。」

木蓮の意識はまた薄れていった。

「なんかやな予感がする。」

そう漏らしたのは雷紋だった。

下弦の月が辺りをやんわりと照らしている夜。

4人はそれぞれの持ち場に居た。

白妙と一緒に行動していた雷紋の言葉に、白妙も同感だと言った。

一定の距離に居る神の子は、神獣同士を通じて喋らなくても会話が出来る。

「太夫に何かあったのかもしれない…。」

龍綺の言葉が皆に伝わる。

『急ごう…』

龍綺がまず、塀を乗り越えて騒ぎを起こした。

屋敷の影という影から化け物が這い出してきた。

「青龍、暴れるぞ…！」

戦いが始まった。

雷紋と白妙はそれを合図に、邸内にある蔵を目指した。

雷紋が見張りの化け物を弓で倒すと、白妙は剣を出して、蔵の鍵を壊した。

蔵の中には攫われた女達が恐怖の目で雷紋と白妙を見ていた。

『龍綺！黄龍を…！』

龍綺に送った言葉。屋敷の東の方から金色の光が飛んできて、輪を作った。

「この中に飛び込むんだ。」

白妙が促す。輪の中には、白虎の社が見えていた。

「大丈夫。あそこはお前達の信じる聖域だ。」

見慣れた社に女達は涙を流しながら輪を潜った。

「…太夫。」

白妙が目の前に立っている女を見て声を出した。

「えっ？この人が木蓮太夫……？」

そこに立っているのは禍々しい気を纏った木蓮だった。

三浦の部屋に入り、掛け軸を上げるとそこには扉があった。自分の記憶が正しかったことにホッとして、まずは、その扉を壊した。

地下に続く階段らしきモノから冷たい風が吹いてきた。

鼻を付く悪臭を混ぜて。

「くさっ！」

そう思って鼻を塞いだ瞬間、慈音の身体は後方へ吹き飛ばされた。

「うわっ！！」

襖を破り、2部屋分後ろに飛ばされた。

慈音は気を失っているヒマはなかった。

自分を吹き飛ばした大きな物体がまた自分を襲ってきたのだ。

「な、なんだ！」

目を凝らして見つめた先には、異形のモノに変化した三浦の姿があった。

「お、お前…三浦？」

「駄目だ！この人は正気じゃない！！」

太夫に向かって雷紋が矢を放つ。

木蓮は鋭く上がった爪を武器に2人というか白妙に襲い掛かって

いた。

白妙は、泣きながら攻撃を仕掛けてくる彼女に刃を向けられず、ただ避けていた。

「しかし…。」

空中を舞って彼女の攻撃を避けながら、襲ってくる化け物を倒していた。

雷紋は、彼女を襲う化け物を中心に矢を放つ。

「白妙！！俺がやる！！君は下がれ！！」

雷紋の矢が木蓮の肩に刺さった。

彼女から上がった悲鳴は、女の声ではなく、夜空を裂く様な化け物の声だった。

「雷紋！後ろ！！」

彼の後ろに化け物が3体迫っていた。

龍綺は自分を襲う化け物が少なくなってきたことに気付いた。

（蔵の方か…。）

彼は屋敷の対角線の方へ飛んだ。

白龍を身に宿せば、空を飛べると聞いた。

しかし、今の彼には、平屋建ての屋敷の屋根を飛び越えるほどの跳躍力しかなかった。

（死ぬなよ…。）

慈音は、屋敷が壊れることなど気にも留めていない三浦が完全にはなくなっていることを確信した。

「太夫は！太夫をどうし…わっ！」

ヤツの破壊力を交わしながら質問をしてもたところで三浦が答えるわけではなかった。

彼の遣う風の力ではまだ彼の身体を持ち上げるほどの威力がない。

（どうすれば…。）

ふと内なる白虎が脳裏に囁いた。

（思い出せ…。お前の獲物だ…。）

頭に浮かぶ二つの月刃。

（方天戟…、白虎戟。）

呟くと慈音の手に身長ほどの矛が現れた。

三日月型の2枚の刃が背中合わせにしたように一本の長い刃先に引
つ付いていた。

（お前の獲物だ…。）

「そっというのは、早く言えっつーの！」

慈音は戟を振り下ろした。

風だけでは切り裂けなかった三浦の身体が血飛沫を上げる。

（よし、これで戦える！）

白妙は苦戦していた。

助けなければいけない対象が、自分に攻撃を仕掛けて来ているの
だ。

（どうする？どうやれば切り離せる？）

内なる鬼達が彼女の危機を察して出てこようとしている。

それを押さえながら、木蓮の鋭い爪の攻撃を避ける。

援護のはずの雷紋も、雑魚というには強い敵3匹を相手に、白妙に
この3体を近づけない様にするだけで手が一杯だった。

屋根を飛び越えようとした龍綺は、屋根から戦いを静観している黒

い服を着た人物を見た。

「何者だ！！」

龍綺の声に反応したのは赤い唇の女だった。
怪しさに剣を女に振り下ろす。

女は、その剣を自らの剣で塞いだ。

「おや、お前は龍の子だね…。」

剣がぶつかり、火花が散る。

「お前は…。」

「私は、操る者…。お前達のことを見殺しにするために生まれた者。」

「何を！！」

互角の剣の腕。

8度目に剣をぶつけた時に、屋敷の何かが弾けた。

「ちっ！」

女は舌打ちをした。

つづく

母、縋子蘭

「白妙！」

蔵の方にかけてくる銀髪の少年は、白妙に向かって攻撃を仕掛けている太夫を見て啞然とした。

纏う雰囲気も、目の光も自分の知っている太夫ではなかった。

「三浦は？」

雷紋に攻撃をする化け物の一体を戟で切り倒した。

「倒した！ちよつと苦戦したけど…。太夫！やめる！！」

慈音の声に反応する太夫の動きが止まった。

慈音は、思うように攻撃が出来ず、身体にいくつかの傷を負った白妙の前に立った。

「大丈夫？」

「ああ…。すまない。」

「鬼達、出せるんじゃない？」

確かに、出ようとする鬼に寄ってくる不穏な気配がない。

白妙はまさに鬼を出そうとした時、黒い影が木蓮を後ろから包んだ。

「太夫！！」

慈音は、その影が木蓮の目を隠し、身体を抱き寄せたのを見た。

木蓮から流れ出た涙は真つ赤な血の色に変わった。

スタツと龍綺がすぐ近くに降り立った。

「こいつか大元だ！」

その影が、ニヤツと笑った。

「可愛らしい坊や達…。この勝利はお前達に譲ってやろう。」

天高く木蓮を抱いたまま上空へ。

「太夫を何処にやる気だ！」

雷紋の放った矢を避けもせず、太夫の身体で受ける。

「！！」

「慈…慈音…助けて…。」

消え入りそうな太夫の声がした。
龍綺が雷紋に攻撃をやめさせる。

「木蓮姐さん！！」

慈音の声は彼女には届いていない。

黒い女は木蓮の身体から雷紋の矢を抜いた。
吹き出た血が地上めがけて落ちてきた。

「はははは！！」

高笑いが響く。

「太夫をどうするつもりだ！！」

女は高笑いを止めて慈音に鋭い爪を向けた。

「この娘が狂った原因はお前だよ、白虎の子。」

皆の視線を受ける。

「な…。」

「お前はこの子を選ばなかった…。人間と言うのが、これほどまでに愚かで脆い生き物とは、まさに御しやすい…。この娘…貰っていい…。」

「バカなことを！前鬼！後鬼！」

白妙の呼びかけに飛び出した鬼が女の方へと向かうが、女は瞬時に場所を変えてしまった。

「鬼姫、夜叉の子よ…この女のお前に対する憎しみも利用するぞ！

…では、また会おうぞ。」

女は姿を消し、辺りを包んでいた不穏な空気は消えた。

2匹の鬼は白妙の身体に戻り、後味の悪い空気だけが残った。

「俺のせいだ…太夫を追い詰めてしまったから…。」

花街に戻った慈音は、母・繻子蘭に木蓮のこと、龍綺たちのこと、旅のことを話した。

息子の話を聞いた彼女は、息子を抱きしめ、次に白妙、龍綺、雷紋を抱きしめた。

「大変だったわね…。あなた達が、とんでもない宿命を背負ってい

るのは分かったわ。」

慈音と白妙の間に座り、二人の肩を抱きしめる。

「あの子は元々思い込みの激しい子だったけど…私は、妹のように、娘のように接してきたから、あの子の考えなら変えられると高を括ったたのよ。木蓮の孤独を私も同じ立場の人間だから分かっているつもりだったのね。」

雷紋が口を挟んだ。

「太夫は、慈音のことを本気で？」

慈音が俯いてしまったので、聞いてはいけないことだったかなと彼は反省した。

「あの子の慈音への思いは、歪んだものだった。それは、たしかよ。相手をどんなに愛していても、その思いを押し付けてはいけない。何をしても許されるって訳ではないわ。あの子はそれを分かっていた。独占欲と言うには簡単には片付けられないものだったわ。」

龍綺は、ぼつりぼつりと自分に起こったこと、母の死を告げた。

「俺は、母上に犠牲になってもらいなくなかった。」

目の前で自ら命を絶った母の姿が頭に浮かんだ。

「人の思いを、1度決まってしまうた心を説得させるのは難しい。その時のお母さんの心はあなたが自由になれるなら命なんて惜しくなかったのよ。それは、私が慈音に抱いている気持ちと一緒に。母親ってね、自分の身体を痛めて生まれた子供は自分の命以上に大切なよ。」

この言葉に白妙が繻子蘭の手を振り払った。

「私は、気味が悪いと…父、母に捨てられた！愛してもらった記憶なんてない。」

慈音も周りの者も、激しく感情を顕にする白妙を見たのは初めてだった。

皆の戸惑った表情にハツとなり白妙は腰を降ろした。

「白妙ちゃんが、御両親に愛されなかったのは、きっと…それ以上

にあなたを愛してくれる人がきつと現れるからよ。こんなに可愛らしいんですもの。」

「可愛い？」

初めて言われた言葉だった。

「そうね、私は、白妙ちゃんのお母さんに今からなつてあげる。あなたのお母さんが、あなたを愛せなかったのなら、2人目の母としてあなたを愛するわ。」

ぎゅっと抱きしめてくる繻子蘭に、白妙は言葉を無くしている。

「私では嫌かしら？」

白妙はプルプルと頭を振る。そして、ゆっくりと繻子蘭の身体を抱きしめ返した。

「まあ、慈音は、白妙ちゃんとキョーダイになつたら困るだろうけど！」

「か、母さん！！」

真つ赤な顔をしている慈音を見て、龍綺と雷紋は噴出し、白妙はキョトンとしていた。

「ふふつ、とにかく、木蓮のことでお前が責任を感じることはないからね。」

母の手が慈音の頬に触れた。

「あの子の心の問題なの。…でも、できることなら救ってあげて？それは、あの子の姉としてのお願ひよ。」

皆に視線を送り、頭を下げる繻子蘭に困惑する神の子達であった。

翌日、4人は新たな旅に出ることにした。

白虎の祠や社の結界を直し、街の結界も4人で四方を固め作り直した。

「凄いことができるのね…。」

感心する繻子蘭に、雷紋が苦笑した。

「中の人に従っているだけで、どういった仕組みになっているのかは分かってないんですよ。」

少し悔しそうな顔で言った。

「あなたも、龍綺くんも、うちの馬鹿と白妙をよろしくね。」

「馬鹿つて……。」

皆は笑顔で旅立った。

何時までも手を振ってくる繻子蘭や、夕顔、朝顔が眩しく見えた。

「お前は、いい人に育てられたんだな。」

龍綺の言葉が嬉しかった。

仲間のコト、龍綺と慈音の父のコト、龍綺の残された力のコト、そしてあの女と木蓮のコト。

4人には色々と考えなくてはいけないことがあった。

「とりあえず、俺の親父のコトはいいや。」

突然、龍綺が言った。

「えっ？でもさ、お母さんの思いを伝えるんだろ？」

同じく父親に会いに行くことを目標の一つにあげている慈音がびつくりして言った。

「んー、なんかすること沢山ありすぎるからさ、しなきゃいけないことを優先しようと思って。あつ、お前は気にするなよ？だってさ……。」

慈音に氣遣って龍綺が言葉を付け足そうとした時に、

「慈音の父親は都に行けば嫌でも会えるんだからさ、旅の目的に入れなくてイイよ。」

と、雷紋が笑顔で言う。

「でも……。」

「現在の急務は、仲間をそろえることだ。慈音もそのことに気を集中すればよい。……今、鬼達を方々に走らせている。そのうち何か情報を齎してくれるだろう。」

頼もしい白妙の言葉。龍綺と雷紋は頼もしい人を仲間にしたもんだと感心してしまった。

そうして、4人の旅は始まった。

大きな敵の正体も掴めぬまま、神の子達は前に進むしかなかった。

「その者は…。」

木蓮はある男の前に座らされた。

言うことの聞かぬ体、声すら出せない。

「御館さま…例の作戦には、この女こそ相応しいかと…。」

隣に居る女が深く頭を下げていた。

「花街の花魁か…よかろう…女…お前の身体、役にたってもらうぞ…。」

近付いてきた男に深い口付けをされる。

「やあ…。」

しびれるような感覚が木蓮を襲う。

「ふん、まだ意識があるのか…。人間の意識の残った身体を抱くのは久しい…可愛がつてやろう…何、すぐ意識を失うだろう…目覚めればお前は…欄梓…暫くこの者と奥に行く。身代わりをしている。」

男の言葉に女は縋りつくような声を出した。

「お、御館さま！…人間の女子など！」

男の手が黒尽くめの女の首を捉える。ありえない距離を手が伸びたのを木蓮は見た。

「お前は、私の言う通りにしておればよいのだ…。」

食い込む指に女の赤い唇から苦しそうな声が漏れた。

木蓮は慈音よりも遅い男の胸に抱かれながら、暗闇の空間へと連れて行かれたのだった。

（慈音！助けて…！）

虚しい彼女の心の叫びが彼に届くことはついになかった。

つづく

兄妹

少年は叫んでいた。

口から血を流し、色が変わり、腫れ上がった臉を彼は気にせずただ一点を見て。

少し明るい茶髪と茶色い瞳というこの地域独特の容姿をした少年は力の限り叫んだ。

「なんで?! なんでや!」

大きな男に縋りついて泣いた。

その男の腕には泣きじゃくる小さな女の子。

「なんで連れて行くんや!! 返せ!!」

足にしがみつく彼を男は振り落とした。

「悪う思ふなや? ただの人間であるお前には、用はないねん。」

尻餅をついた彼に男は言い捨てた。

「兄さん!!!!!!」

連れて行かれる妹の声に少年の失いかけた意識が戻った。

フラフラと立ち上がる彼は、視界もぼやけていたが必死に妹をその目で追おうとしていた。

その彼に男の仲間がそつと言った。

「何も、会えへん訳やないで…。飛蝶街や、今日のところは、あきらめ。お前の命も危ない。ええか、ガキ。会えへん訳やないんやからな。」

少し違和感のある発音がそつと離れて行く。

泣きながら去っていく妹を彼は薄れ行く視界に留めることが出来なかった。

飛蝶街。

それは、この国一番の賭博場がある街である。

少年の住む村からは2つ隣のこの辺りでは一番大きな街であった。

花街のような女達は少ないが、アクロバティックなショーなどが夜毎行われる賑やかな街であつた。

彼の妹はその街の男に奪われていった。

自分の半身。

双子の彼女は自分と違って優しく、大人しい性格で、親の居ない自分のために路上で歌を歌い、小銭を稼いでくれた。

彼女の歌声は、人々の心を癒し、時には涙を誘う素晴らしいものであつた。

兄である彼も妹の歌で元気になれたし、小さいながらも大人たちの畑仕事を手伝つたりして小銭を稼いでいた。

「お兄ちゃん、明日も頑張ろうね！」

彼女の笑顔があれば、自分を捨てた母親や、死んでいった父親が居なくても幸せだなと思つた。

懸命に生きる兄妹の姿は周りの大人たちにも影響を及ぼし、2人の暮しを快く援助してくれていた。

少年の名を紅蓮と言つた。

金細工職人をしていた父親が燃える炎のように強い男の子になることを連想して名を付けてくれた。

少女の名は、月風。

生まれた日に出ていた月がとても穏やかで美しかったところから名付けられた。

活発で、いつも動き回っているような少年に村の人は、

「紅蓮は、いつか飛んでいきそうだな！」

と彼の身の軽い様を見て言つた。

兄とは、面影も性格も違う月風は、優しく、淡い桃色の変つた色の髪と、胸元に刻まれた『迦』という文字が幼い頃はイジメの対象であつたが、兄の紅蓮がいつも彼女を庇っていた。

「坊主達が、月ちゃんを苛めるのはな、月ちゃんが余りにも可愛いからや、」

紅蓮の行き過ぎた仕返しに大人達は、彼を何度もたしなめたものだった。

父親は寡黙な職人で、母親は気位の高い、派手好きな女だったという。

都に強い憧れを抱いていた母親は、そろそろ結婚という時期に、この村を出ることを決意していた。

しかし、王宮の遣いの者が父親にお抱えの金細工師になるようにと言いつ渡しにきたときは、「苦勞なく都に行ける方法を見つけた。」と考えた。

その為ならば、彼が親しくしていた女を遠ざけ、誘惑し、権力者であつた両親の力を借り、煮え切らない父親を必死に説得した。

やがて、押しかけた状態で一緒に住むようになった2人の間には、双子の子供が出来た。

女は、子供達に最高の教育を受けさせたいと度々村を訪れる都への勧誘に応じるようにと懇願した。

しかし、父親は、都ではいい作品を作れないと、きつぱり都行きを断ってしまった。

母が出て行った理由を知りたかつた2人に、近所の大人達は、包み隠さず話をしてくれた。

母を捜し求めたりしないようにとの願いを込めて。

「おやじさんが、この村を離れられへんかつたんは、火の神さんのおわす山があるからや。」

2人の暮す村の南に位置する火山は、その日も噴煙を上げている。頑として、都行きを断る父親を母は、罵りながら出て行ったという。紅蓮たちが4歳の頃だった。

元々母親らしいことは何ひとつしなかつた女だった。

炊事も洗濯も人を雇い、父の稼いだ金を湯水のように使う女だった。両親である村の長老が窘めても、彼女の浪費癖は治らなかつた。

彼女、美麗は、その名のとおり、自他共に認める美人で、周りにチヤホヤされて育ったのが悪かったのか、さすがの両親も、勝手に出て行った彼女をいつまでも待たせるのも悪いと考え、彼と美麗との離縁を受理した。

周囲の者は、これでやっと彼が子供たちと静かに暮せると考えていた。

しかし、紅蓮と月風が9つだったある日、父親は突然他界した。

化け物から紅蓮と月風を守って死んでいった。

その日は、父親の誕生日で、2人は父親の為に、精一杯の食事を作り、近くの街に細工を売りに行った父の帰りを待っていた。

「父さん、遅いね。」

辺りは暗くなり、村の結界の外に出てはいけない時間になっていた。夕闇と共に現れる異形のモノ。旅人や、商人は、魔除けの札を身に付けて夜道を歩く。

もちろん、父親も木で出来た『朱雀の札』を持って出かけていた。

村人も、決して村の塀の外には出てはいけないと、父の帰りを待つ2人を見かける度に口を酸っぱくして言っていた。

しかし、村の出入り口で、灯りを手にした父親の姿を見かけると2人はたまらず村の外に出てしまった。

出て、1メートルもしてない距離で、紅蓮は背中に強い痛みと熱さを感じた。

手を繋いでいた妹の叫び声と父が自分を呼ぶ声が聞こえた。

紅蓮は、羽の生えた化け物に背中を爪で裂かれたのだった。

月風の悲鳴に村人が駆けつけた。

父親は自分の札を子供達に投げる。光を放つ札は紅蓮の背中に落ち、次の攻撃を仕掛けようとした敵を光が阻んだ。

化け物は、紅蓮と月風を襲うことが出来なかった。

村人は、光に弾かれて、空中を高く舞った化け物の隙を縫い、双子を村の結界の中に慌てて入れた。

しかし、札をなくした父親は、紅蓮よりも深い傷を背中に受け、数時間後に息を引き取った。

父が死んでから、紅蓮は今まで以上に家のコト、村の仕事、そして妹や村人を守るために武芸に励んだ。

特に棍の腕前は村の大人たちも感心するほどで、その動きは滑らかで独学とは思えないほどだった。

「俺が、父さんの分まで、月風を守るから。」

紅蓮の背中には、あの時に出来た傷が羽を広げた鳥のように痕を残した。

相変わらず、月風の歌声は、村に平和を齎す癒しとなって、彼女が歌っている限り、村は衰えることはない人々を安心させていた。

紅蓮がいつものように森で化け物相手に棍の修行をしていた頃、飛蝶街の男達が、突然村に押し寄せてきた。

「お前の親は、飛蝶街で借金を作った。」

男達は、1人留守番をしていた月風に言った。

その額は信じられないほどの大金で、騒ぎを聞きつけた村の長老も、他の者も、あの実直な父親が賭け事になど興じるはずがないと男達に食って掛かった。

しかし、男達は、そんな長達を暴力で捻じ伏せ、月風を飛蝶街に連れて行くと言つてのけた。

「その子は、ただ、歌の上手な子供に過ぎん！止めてくれ！！」

長の言葉は聞き入れられない。

男達は、村を荒らすだけ荒し、金品を奪うと、逃げ惑う村人を他所に紅蓮の家に火を付けた。

立ち上る火は、風に煽られ村中を焼き尽くしていく。

紅蓮が駆けつけた時には、村は火の海で、彼は、長から月風の拉致のことを聞いた。

彼は、男達を追った。

どんな理由で、どここのヤツが妹を攫っていったのか、長老に聞く間をなく彼は走っていた。

妹を取り戻すため、紅蓮は後を追った。

しかし、多勢に無勢、ましてや月凧を人質のように捕られては、紅蓮になす術はなかった。

紅蓮が10歳の時だった。

焼けた村。

死んでいった多くの知己。

全てが自分のせいだと彼は思った。

「わしらが、ヤツラを止められなかったのが悪いんじゃないよ……。」

長達は、逆に紅蓮に謝ってきた。

村の建て直しには、数ヶ月の時間を要した。

紅蓮の怪我も数週間経ってようやく癒えた。

彼は、月凧の行き場所を教えてくれた男と長の言う通り、飛蝶街を訪れた。

つづく

籠の中の歌姫

華やかな色とりどりの灯りが夜の空を彩っていた。
始めてきた紅蓮は派手な街だと思った。

10歳にしては、背の高い彼を大人と勘違いして、賭博に誘ってくる者もいた。

しかし、彼の頭の中は、妹・月風のこと一杯だった。

「月風？知らない者はいないさ！その大通りの真ん中の店に行つてごらんよ。」

妹のことを語る人の顔は先程まで賭博に明け暮れていたとは思えないほどに穏やかだった。

紅蓮が見たのは、大きな鳥かごの中で歌を歌っている妹の姿だった。

「月風！！」

兄の声に月風の歌が中断する。

彼女は、真っ白な羽の衣装で身を包み、本当の鳥のようだった。

「紅蓮兄さん！」

高い位置から階段を降りて自分のところに駆け寄ってくる妹を抱きしめたかったが、鳥かごは紅蓮の指さえも通してくれなかった。

確かに空気は流れているのに、月風に触れることも出来なかった。

「嬉しい！兄さんが生きていてくれて嬉しい！」

彼女の涙が頬を伝った。

数ヶ月ぶりの再会は、紅蓮を羽交い絞めした男達によりあっけなく終わった。

その後、紅蓮が通されたのは店の奥だった。

賭博場の奥にある広い座敷には、恰幅のいい男が座っている。

「借金のことは、ホントに知らへん！父さんは、博打なんかせえへん！」

長に聞かされた父の借金。

何とかして、誤解だということを言いたかった。

父親の借金など、紅蓮は信じられなかった。

「誰が、父親の借金言つたんや、ガキ？」

主人の右隣にある襖が開いた。

「！！」

紅蓮は言葉を無くした。

そこには、自分達を捨てて出て行つた母・美麗の姿があつたのだ。

「私の借金なのよ。」

美麗は笑っている。少々年は取つたが派手な雰囲気は何ひとつ變つていなかった。

「何、言つてんねん！！お前なんか、おかんちゃうわ！！」

啖呵を切つた紅蓮に美麗は大きく笑つて言つた。

「そうよ、私は、あんたみたいな普通のガキの親になつたつもりはないの。私の子供は、月風だけ。あんたなんか知らないわ……。」

「……何、言つて……。」

「あの子はね、神の子なの。教養も何もないあんたには、分からない話でしょうよ！さつさと村にお帰り！」

今すぐこの女を殴りたい衝動に駆られている紅蓮に店の主人が言葉を挟んだ。

「まあ、まあ……そない非情なこと言つてないわ。仮にもあんたがお腹を痛めて生んだ子やろ？兄ちゃん、あんたが借金、少しずつでも返してくれる言つなら、この女のコトなんか無視して返してやつてもええで。」

その店の主人の申し出に紅蓮は、疑いの目を向けた。

「ホンマや。これまでお父さん亡くしてから2人で仲よう、助けおつて生きてきたんやろ？こんな自分を捨てた女に今更母親面されとくないわなあ……でもな、契約は契約や。」

主人の言葉に母親は何かを言いたそうだったが、男はそれを止めた。『1度取り決めたものを反故にするな。』ということ、紅蓮も小

さい頃から父親に教え込まれていた。

「…ホンマに…金さえ都合付けたら、月風を自由にしてくれるんな…。」

紅蓮の言葉に男は扇子を広げ高笑いをした。

「ええ目えしとるし、根性も座つとる。…紅蓮いうたかいな…自分、月風に毎週でも会いに来るがええわ。特別に手えぐらい握らしたる。」

「帰りにもう1度だけ月風に会いたい。」

「うんうん、そやる。妹は可愛いもんなあ。」

紅蓮は男の横で不満気な顔をしている美麗を睨みつけると部屋に入っていた男と共に出て行った。

美麗は自分の美しさと賢さに酔っていた。

神の子の噂もこの街で知り合ったこの男に聞いた。

人とは違う毛色に、瞳の色。

そして、胸元の印。全てが自分が捨ててきた娘・月風の特徴だった。酔いながら、神の子が欲しいと呟く男に美麗は自分の娘の特徴を話した。

「神の子がそんな近くに居ったんか…。例のコト、約束する代わりに娘もらうわなあ。」

「何？あんた、今何言ったの？」

店主の男は、やらしく笑い美麗に返事をしたが、彼女は酔って寝てしまった。

数日後、美麗は店の男達によって連れてこられた月風を見て言葉をなくした。

「な、なんで…」

「お前が言ったんや、金なる木が自分の娘やて。」

美麗は口を押さえる。

「なんや、今更娘が不憫やて思うはずないわなあ…。お前は村を裏切ったんやで？」

美麗は言葉をなくし、自嘲気味に笑った。

数日前のやり取りを思い出した。

成長した息子の姿に美麗は彼から感じる自分への憎悪を感じた。

「ちよつと、あんた、あの子を返す気なの？」

紅蓮が出て行くなり凄まじい勢いで美麗は聞いた。

「そんなん、嘘や。あの紅蓮言うのが、どれだけ頑張るかしらんけど、お前の小遣い稼ぎにはなるやる思うたんや…。」

美麗は嬉しそうな声を上げ、男に抱きついた。

「あんた、最高やね！」

「そやる？…それにしても噂に違わんなあ。神の子言うのは福をおびき寄せるわ。あれが来てから、この店赤字知らずや。」

男と美麗の高笑いはい止まらなかった。

「紅蓮兄さん…。」

「心配せんでええ、俺が必ず出してやるから。あんまし、悲しい顔せんとき？俺も悲しなる。」

触れることのできない妹の顔。

何度も泣いたのだらう、涙の後が残っていた。

「あんな、アホな女の為に、俺等が苦勞することない。絶対、毎週でも金入れに来るから。」

妹は、せめて兄が元気になるように小さく歌った。

「ありがとう。でも、1日中歌うとるんやろ？休める時に喉休めとき？」

兄の優しさは、変っていなかった。

そして、月風の兄を思う心も変っていなかった。

その日より、月風の歌声は、以前にも増して、高らかに、美しいものになっていった。

飛蝶街を出ようとしたとき、あの男が声をかけてきた。

あの男とは、紅蓮にこの街のことを教えてくれた男だった。

「すまなかったね…まさかあいつ等が村に火を付けるとは思わなかったんだ。」

以前とは違う口調。恐らくこちらの方が本来の喋り方なのだろう流暢だ。

「もう少し、早くヤツラに合流できてれば、違う方法もあったんだけど。」

「…あんた、何者や…。なんで、そんな…。」

男はフツと笑った。

「妹さんは、あの鳥かごに入っている限り安全だよ。」

「えっ？」

「あれは、靈験あらたかな能力者か、同じ神の子でないと破れない結界が張ってあるからね。」

紅蓮は、店の主人も言っていた神の子というものについて尋ねた。

月風は神の子だから攫われたのではないかと。

男は歩きながら、丁寧に答えてくれた。

「そ、そんなコトのために…。」

悔しがる紅蓮に男はあっさり言った。

「本来の働きは違うところにあるんだけどね…。」

「えっ？」

「…とりあえず、俺は味方ってとこかな？」

自分の父と変らぬ年に見える男はニツと笑った。随分笑うと雰囲気が違うなと思った。

「君の信じる通りにすればいい。だけど、いざとなったら、おじさんも手を貸すからね。」

男は歩みを止めて、反対の方向へ歩いて行く。

「おじさん！名前は！？」

何故か聞いておかねばならないと紅蓮は思った。

何故なのかは分からないが、それは大切なことだと考えた。

男は、チラッと紅蓮を見るとまた笑顔で言った。

「加奈陀だよ、紅蓮くん。」

男は手を上げて人ごみに消えていった。

紅蓮は、化け物が落としていく『欲の塊』である金を集めようと思
った。

これなら棍の練習にもなるし、何より気が紛れた。

まとまった金が入ると飛蝶街へと赴き、月凧の身請けのために
店主に金を支払った。

今の彼にとって、月凧と話ができることこそが生きがいになって
いた。

つづく

朱への変化

それは突然言われたことだった。

「なんや最近、紅蓮の髪の色変ってきたなあ。」

と、幼馴染の木祐に、村長に、近所の人に。

水に映る自分の髪は、少し明るめの茶色だったのに、最近はキラキラとした赤味が増している。

よく見ると瞳の色さえ、変化しているではないか。

「月風ちゃんも、代わった色しとったから、お前もこの年になって変化しよるんかなあ。」

何やら変に派手になっていくのが恥ずかしくて、紅蓮は頭に布を巻くようになった。

ある13歳の夜、胸に痛みが走った。

その痛みで目が覚めたと思ったのに、目を開けると炎の中で立っている自分に気付いた。

初めはうちは、まだ、夢なんだと思った。その炎は熱くなかったからだ。

「なんや…ココは…。」

胸が痛いと思っていたのに、キョロキョロと周りを見渡していた紅蓮の背中が今度は、とてつもなく熱くなった。

「痛っ！」

それは痛みを覚えるほどの熱さで、紅蓮は退けぞつたり、前屈みになったり、兎に角身の置き所がなかった。

「な、何やねん！」

ぐつと身体が仰け反った瞬間。背中から、バサッという音がして、痛みが一気に引いた。

「えっ?!」

彼は目を疑った。

自分の背中から、赤い深紅の羽根が生えているのだ。

『自分は、力が欲しいんか？』

誰かの声が響いた。

「何やて」？

『力が欲しいんか？聞いてるんや。』

声は紅蓮の言葉など待つていなかった。

『自分が望むんやったら、『我が子』にしてやるで。けどな、自分が力を望まへん言っんやったら…自分の可愛い妹は、どうなるか分からへんなあ。自分の命も一ヶ月もせえへんうちに命を落とすんっちゃう？…』

なんて、傲慢な言い方。紅蓮はその声にムツとしていた。

しかし、声の主は、そんな紅蓮を無視して、続けた。

『ええか、よう聞けよ。自分はまだ子供やから、考えがめちゃくちゃ甘い！ホンマにあの店主が自分の妹を返す思っつとるやろ…』

目の前に炎が揺らいで鳥の形になった。

「や、約束した！借金肩代わりしたら、月風返してくれるって！」

真正面から紅蓮を見つめる眼光は鋭く、熱風を含んでいるようだった。

『ホンマ…ガキやなあ…。人間が抱いとる『神の子』伝説は、教えてもらたんやろ？』

加奈陀といった男が教えてくれた、永遠の富を与えるという『神の子』のこと。

月風は『神の子』だという。

極悪非道な真似をして、村から月風を攫った男達が、返済終了したからと言って素直に妹を返すとは…。

今になって紅蓮は、炎の鳥の言うことが真実であるように思えた。

「お、俺は、妹くらい…自分の好きな人くらい守れる力が欲しい！

！」

搾り出すような声で言った。

『それくらいの思いでは、足らへん…力が欲しいんやろ？』

カツと目の前の鳥の目が光った。

神々しいまでの鳥の姿…それは、あちこちの社で、長の家之神棚に祭られている御神体に見た姿だった。

「す…朱雀？」

熱風が再び彼に吹いた。一步下がりそうになるところをグツと堪える。

「欲しい！俺は力が欲しいんや！！全ての人を守る力を！！」

紅蓮の身体は炎に包まれ宙に舞った。

「はっ！」

紅蓮は飛び起きた。

流れるほどの汗を掻いていた。

「な、なんやったんや…。」

汗で濡れた寝着を脱ぎ捨て夜風に当たった。

頬を撫でる風の心地よさに大息を吐く。

井戸の水を汲み、顔を洗おうとした時、水面に映った自分の姿に言葉無くした。

月明かりとは言え、はっきりと見える自分の姿に。

「…。」

うろたえる紅蓮に話しかける者が居た。

「落ちて着けや。」

「だ、誰や！」

辺りを見渡すが、虫の音しか聞こえない。

「アホやなあ…せっかく俺が宿ったのに、まだわからへんのかいな？」

それは、頭の中に、心の中に響いてくる声だった。

「お前…誰や…。」

嫌な汗を掻いて来たことに気付いた。

「落ちて着け言うつるんや。ボケ。」

その夜、紅蓮は散々貶されながら、自分が神の子になってしまった

こと知らされた。

「神の子って、なんで、俺が…。」

真つ赤な髪になってしまったことが恥ずかしくて、紅蓮は頭に手ぬぐいを巻きつけていた。

戸惑いながらも棍の練習は欠かさない。

そんな彼に内なる獣は、また言葉をかけてきた。

「そんなん、迦陵頻迦が、お前を選んだからに違いないやんか。」
突然の声掛けにはまだ慣れていない紅蓮は身をグツと引き締める。

「ガリヨウビンガ？なんやそれ、」

頭を小突かれたような感覚が来た。

「痛っ！なにすんねん！」

「ほらほら、余所見しよったら、化けモンにやられるでえ？」

練習相手はもちろん、ここいらに最近湧き出ている化け物のことである。

内なる獣『朱雀』との会話を行いながら、戦うことができる紅蓮の素質は、朱雀も感心していたが、もう1つ飲み込みが悪いとの不評も得ていた。

「迦陵頻迦いうのはなあ、俺のめっちゃ可愛い妹のことやねん。歌が上手うてな…。俺と違って、桃色の羽しとる、ホンマ可愛い子やねん。」

紅蓮は、一応敵を倒していたが、ハタと動きを止めた。

「もしかして、それが、月風？」

呆れたとばかりのため息が自分の頭の中に放たれた。

「ホンマ、アホやな。やっと気付いたんか。そうそう、宿る子が可愛いとその子も可愛いんやと思うたわ。俺は、こんなアホやったけど。」

「うっさい！！勝手に入ってきよって何文句言ってるのや！」
一撃を最後の敵に与えた。

「ほなつて、しゃーないやん。迦陵が、お前がいい言うてんねんも
ん。」

「はあ？」

頬を伝う汗を拭う。

「俺が、朱雀、言うのはもう、理解したやろ？」

「…ああ…（自分が信仰しとる神さんが、こんなにガラ悪いとは思
わへんかったけど。）…あいたっ！また、殴ったな！」

「お前の心なんぞお見通しじゃ、アホ！言っとくがなあ、神獣の中
で一番俺を宿するのが難儀なんやで！前回神から召集が掛かった時も、
俺を満足させる人間はおらへんかった。ゆうたら、俺の攻撃的な神
気に当てられて、人間が耐えられへんのよ。俺って、何気に凄いか
ら。やから、他の連中みたいに赤子の頃から、人間にとりつくこと
ができへんのよね。で、この世に神の子が降臨せなあかん度、俺
の宿る人間の選考にエライ時間が掛かんねん。」

紅蓮は化け物を倒して落ちた金貨を拾い集める。

「へえ。」

「ほなからな、いつも神は、俺を宿すことの出来る人間を選ぶのは
大変や。言うのよ。ほんま、言うたら俺、人間の世界なんてどうで
もええんよ。けどな、迦陵が人間が好きやから、あいつの警護兼ね
て、こつちに来てやつとんの。」

「へえ。（だいぶん、貯まったなあ。）あいたっ！…っ、なんや
ねん！」

「人の話は聞かんかい！」

紅蓮はいい加減腹が立ってきたが相手は神獣。

下手に手を出して殺されては適わんと黙っていた。

「そやから、アイツのお眼鏡に適うやつしか、俺を宿せへんのよ、
やから、君感謝しなさいね。」

「はあ？」

「妹助けたいんやろ？俺もやし。」

朱雀がニヤツと笑った気がした。

「俺の力があれば、妹ちゃんなんか、ちょちよいのちよいで助けられるで？」

「ホンマか！ほな、早速！…痛っ！な、なんやねんなー。」

口を膨らます紅蓮。

「俺様が宿ったからって、そないに勝たれへんで？」

「な、今、ちょちよいのって、言うつつたやんか！」

結構強く叩かれたようで、紅蓮は涙目で抗議した。

「それは、お前が、もっと俺に馴染んで…：：：ちゃうなあ、…俺がお前に馴染んでからの話やちゅーねん。まだまだ、俺のすんばらしー気は使いこなせへん。」

がっかりしている紅蓮。

「じゃあ、何時ならいいんだよ。今週末の面会日には間に合わんのか？」

「無理やな。」

きつぱりはつきり言う朱雀に紅蓮は大きなため息を吐いた。

つづく

飛蝶街

「ここが、飛蝶街かあ…。」

感心したような声を上げたのは雷紋。

「花街とはまた違う活気のよさだね…。」

こちらもキヨロキヨロと辺りを見回している。

「慈音、そんなにキヨロキヨロするな。ガキの旅人っただけで、狙われやすいんだから。」

龍綺に窘められて慈音はしゅんとなった。

「まあまあ、とりあえず、休める宿の確保をしようよ。」

4人は、街のはずれの安い宿屋を目指した。

この街に辿り着くまでも、多くの化け物に襲われ、戦ってきた彼らは、正直疲れていた。

特に飛蝶街に近づくにつれ、激しくなる敵の攻撃に、白妙は、躊躇していた鬼達を放ったほどであった。

彼女が躊躇した理由はこうである。

それは、花街を経って暫くのことだった。

「出来るだけ自分の力で戦いたい。」

白妙は、鬼達を目の前に座らせて言った。

その言葉は鬼達をしゅんと落ち込ませるには十分なものであった。

1つ前の戦いで、白妙は、自らの剣を用いて戦おうとしたのだが、ぬかるんだ土地に足を滑らせた瞬間、鬼達が出て来て、あつと言う間に片付けてしまったのだ。

白妙は、これでは修行にならないと鬼達を叱り、それ以来、自分の命がなければ、何があっても出て来てはいけないと言い付けたのだ。自分にも人にも厳しい白妙のやり方。

しかし、傍で見ている龍綺や雷紋にとっては、その時の光景は滑稽なものであった。

大きな異形の姿をした鬼達が自分達よりも小さな少女の前で膝を付き、頭を垂れて落ち込んでいるのだ。

笑いを堪えている2人に対して、慈音だけは、鬼達と白妙の信頼関係の揺らぎが気になってしまった。

そのため、慈音は、落ち込む鬼達を見かねて口を挟んだ。

「で、でもさ、ホントにピンチの時は、白妙だって分かってるし、俺からも白妙に頼むからさ、そんなに落ち込まないでよ？君達の戦力は、とっても旅に、白妙のこれからの旅に役立ってるんだから。

ね、白妙！」

有無を言わせぬ笑顔に白妙は戸惑いながら頷いた。

敬愛する姫の頷きに鬼達は、まだ戸惑いを隠せない様子であったが。「そうそう、君達の力は、俺達の切り札なんだから。」

と言う雷紋が付け足した言葉に鬼達は気分をよくして、白妙の中に帰って行った。

慈音は、雷紋の言葉の巧みさが羨ましかった。

白妙もホッとした表情を彼に見せている。

胸の奥がチクチクと痛んでいるが、自分には笑うことしか出来ず、少しだけ自分が嫌いになってしまった。

「気にするな？雷紋は小さい頃からっていうか、白澤が宿ってるんだから、口は達者だぞ。」

慰めてくれる龍綺に力のない笑顔を見せた。

「じゃあ、俺ちよつと街を見てくるよ。」

宿屋の一室に荷物を置き、各々が寛いでいると雷紋が言い出した。

「えっ？休まないの？」

「休むよ。でも、街の方が気になるんだ。」

彼は呆氣にとられる仲間に手を振り、夕暮れの街に出て行った。

白澤は、賭け事が好きだった。

それも、相手の心を読んで、勝つのが好きだった。

子供だから『いいカモ』が来たと喜ぶ大人達は、最後には、身包み剥がされて泣きついてきたものだ。

子供で、目が見えないと思っっている大人達をからかうのが楽しかったのだ。

「いい根性してるな。」

声をかけてきた男に言われた。

ボサボサの髪に無精ひげを生やした男は、雷紋に勝負を挑んできた訳ではなく、ただ興味で声をかけてきたようだった。

「どうも。…で、何かようですか？」

男がニヤニヤ笑ってる。

「実はね、あの奥に居るデブと勝負して勝ったら面白いものが手にはいるかもって教えに来たんだ。」

ニヤニヤしているが、隙のない瞳。

（どう？思っ白澤。）

（むむつ。心が読めぬ人間は苦手だのう…。）

「でもさ、おじさん。あんな上座にいる人が僕なんか相手にしてくれないよ。」

につこり笑う雷紋。口調まで変っている。

「ま、そうだな…では、大通りの真ん中にある店に言ってごらん。その男が所有している面白いものが見られるから。って言っても、お前の目じゃ見えねーだろうけど、耳は聞こえるんだろ？なら大丈夫だ。」

無精ひげの男は去って行った。

（何か企んでおるな…。雷紋の目が見えることを知っておる。）

（大通り…行ってみよう。何か予感がする。）

雷紋は席を立った。

彼は歩く時に白い杖を付いている。

ぽんっと、強く大地に杖を突けば、それはたちまち弓に変化する白澤がくれた特殊な弓であった。

雷紋はその杖をつき、巧みに人の波を避けながら、大通りのその店

の前まで来た。

（歌声？）

店の外、喧騒の中であるが、かすかに耳に届く歌声。

ガラス張りの店の中には吹き抜けの全てを利用したほど大きな鳥かご。

（あつ…。）

そこ中では、白い羽の衣装を身に纏い、桃色の髪の長い少女が歌っていた。

見上げる自分の視線に気付いたのだろうか、少女がふと下をみた。

（誰だろう…。優しい感じ…。兄さんみたい。）

雷紋は、近くに居た男に尋ねた。

「この歌声は、何？本当に人間が歌ってるの？」

彼の問いに男は噴出した。

「はは、そりゃよ？この世のモノとは思えないほどの声やけど、あれは、月風言う、この街の歌姫や。金払うと間直で歌が聴けんねんこの街に住むモンには、癒しっつーの？そんな存在よ。」

優しい目で少女を見つめる男達。

「けどよ、その料金が高くて…。かすかに聞こえるこの窓辺に来るのが俺の日課になったわけ。」

窓の外に料金が書いてあった。

確かに高い。

「あんた、目が見えるのかい？」

「…弱視だよ…。これくらい近付かないと見えない。」

料金票にぐつと顔を近付けてみせる。

「目が不自由な分、耳がいいんだな。」

男は勝手に納得していた。

（ま、いいか。それより、白澤…。どうした？）

（あれは、迦陵頻迦よ。）

雷紋は、もう1度彼女を見上げた。

（天上界の歌鳥。…神がもつとも愛した鳥だのう。）

神の子が居た。

あの敵の凄まじい攻撃は接触を避けようとする行為だったんだと改めて彼は思った。

（助けよう…あのままじゃ駄目だ。）

（皆を呼ぶか？）

雷紋は考え込んだ。

（とりあえず、忍び込もう。屋敷の盲点と、不備を探す。）

雷紋は店の裏へとまわった。

つづく

あつさりとした救出

紅蓮は、今週の返済をしようと飛蝶街へと向かっていた。

しかし、今日は、その道中がおかしかった。

今まで以上に手ごわい化け物が次から次へと出てくるのだ。

「どうなってるんねん!!」

いつものように金貨を拾っている暇もない。

その頃、龍綺は部屋の中で寝ていたが、街の塀の外に嫌な予感がして飛び起きた。

「気付いたか？」

尋ねる彼に白妙も慈音も頷いた。

「ちよつと、行ってみてくる。」

立ち上がる龍綺と慈音。

「白妙は、雷紋に教えて。この感じ…。」

「龍綺と雷紋が襲われていた時と同じ感じがする。」

3人はそれぞれの目的に従い宿を飛び出して行った。

迦陵頻迦という神の子が居る大きな店の裏口から侵入した雷紋は、奥にある住居部分の屋根裏に潜んでいた。

（さて、どうしたものか…。）

考えを巡らせていると店の主人が帰ってきたらしい騒ぎを聞いた。

「おかえりなさい、あんた。」

出迎えた派手な着物の女が出迎えていた。

花街で見た、繻子蘭と同じ年頃だろうが、まったく雰囲気が違う。

「月風はどうしている？」

「……ふん、我が子ながら、可愛くない娘だわ…。今日は紅蓮が来ないから、も1つ大きな声で歌わないし、」

ふと、壁にかけている時計に目をやる。

「そういえば、あの小僧、まだ来んな。」

「そうよ、早く来てくれなきゃ、お小遣いもうないのよね…。」

女が高笑いをして、男もそれに合わせるように笑う。

「しかし、思っていたよりもあの小僧…。」

「どうしたの？」

席に座り、酒を呑む男に女は擦り寄っている。

「あれだけの金をあの小僧は化け物を倒して手に入れと言うと
ったやろ、だんだんと金額も多くなっている。」

男の煮え切らない態度に女はイラついた声を出した。

「何が言いたいんだよ！」

2人に声が掛かった。

「つまり、その小僧は、とてつもなく、強くなっている。って言い
たいんでしょう？」

突然1人の少年が天井から降りてきた。

彼は、杖を肩に当てて、片方の手を腰に当てていた。

「な、何者や！」

立ち上がるうとする男を制する。

「どうも、はじめまして。神の子をしています。雷紋って者です。
にこやかな自己紹介に2人は啞然としている。

「あ、信じてませんね？はい、証拠の印。」

雷紋は、胸元を開けて、自分の胸にある『澤』という文字を見せた。
彼の真つ白な瞳は普通の子供ではないことを知らせている。

2人の喉がゴクリと鳴ったことを彼は見逃さなかった。

「これは、これは…その神の御子様が、何故、このような…。」

「ええ、それなんです。」

雷紋は2人の前にでんと腰を降ろした。

「あれは、いけないと思うんですよね…。」

「…と、言いますのは？」

「あなた達、神の子を見世物にしているでしょう…。」

顔は笑っているが目は少しも笑っていない少年の迫力に2人は押され気味になっていた。

「あれ、直ちに止めないとよくないことが起こりますよ。」

2人がギクツとしたのを見逃さなかった。

「神の辛抱と言うのは、4、5年が限度なんですよね…それ以上、神の自尊心を傷つけるようなことをすると……目も当てられぬことになりかねませんね…。」

月風が捉えられ、見世物とされた日は今から、4年が経っていることを事前に彼は街の人から聞いていたのだ。

「そ、そんなの嘘よ!!」

女がヒステリックな声を上げた。

雷紋は、白澤の力として、彼らの持っている杯をぱかりと割った。突然のことで2人は青ざめる。

「神の子をないがしろにしてはいけない。あなたが得た富も、名誉も必ず崩れますよ…。この私を怒らせなくなったら、彼女を自由になさい。それがあなたの方の為ですよ。」

出来るだけ凄みの聞いた声で述べた少年に男の方が完全に震え上がっていた。

「じよ、冗談やないで!せつかくの金蔓を!!」

「ああーっ!」

雷紋は女の言葉にすかさず、大きな声を出す。

「な、何よ。」

雷紋は一枚の紙をヒラヒラと扇のように手で振って見せた。

「ほらっ、そんな欲深いことを言うから、この店の権利書が私の手の中に来てしまいましたよ?」

店主はびっくりして、自分の後ろにあった掛け軸の後ろの金庫を開ける。

「な、ない!権利書がない!!」

この店に忍び込んだ後、雷紋は店主の部屋を人知れず大搜索して、金庫を見つけた。

彼は、恐ろしいほどカンのいい少年で、その上に白澤という頭のいい獣を宿しているため、相手が何を考えて行動しているのか不思議と分かるのである。

だから、金庫の場所も、この金庫の暗証番号も、カンで当て、器用にも鍵も一本の針金で開けてしまったのだ。

（欲深い人の心は手に取るように分かるなあ。）

しかし、元の通り閉められた金庫から権利書が忽然と消え、目の前の少年の手にあるとなれば、店主の恐怖はさらに上昇したようだった。

「ライバルの店の人にも渡そうかなあ……。」

店主は、縋る女を振り払い、大声を出した。

「む、娘を！娘を出せ！！」

大きな声だった。

隣の部屋で控えていた部下達が慌しく廊下を走っている。

（成功かな？）

（お前は、ほんと悪知恵が働く子だのう……。）

（ちよっと、人聞きが悪いけど、ま、いいか。）

店主の案内で、雷紋は、鳥かごの裏に来た。

「封印を解くので、お待ちを。」

雷紋は少し離れた所から事の成り行きを見ていた。

店主は、木の札のようなものを鳥かごに翳し、言葉を発した。

「封印解除！開きませ……。」

足元から、天井までと高くそびえる鳥かごがジクソーパズルが壊れるように崩れていった。

（鳥かご自体が封印の結界だったようじゃの。）

崩れた鳥かごの真ん中に白い鳥の衣装を来た少女が立っていた。ふわふわとした衣装に淡い桃色の髪が床に落ちた。

彼女の後ろには、大きなガラスと何事かと見つめる街の人々が見えた。

店主は、月皿の前にひれ伏し、「お許しを」と震えていた。

その店主の横をにつこり笑った少年がすり抜けて月風の傍にやってきた。

「こんにちは。俺は、雷紋。君は？」

何事もなかったかのように手を差し伸べて握手をしてくる少年に月風もつられて笑顔になってしまった。

「わ、私は月風です。あ、あの…これは…。」

キョロキョロと周りを見る。

「ああ、戸惑うよね、君は自由になったんだよ。っと、ちょっと待ってて。」

雷紋は店主の方に行き、何かを尋ねるとクルリと向きをかえてまた月風の元に帰ってきてしゃがんだ。

「可哀想に、こんなもの、取ってしまおうね。」

鉄球の付いた足枷を雷紋は外した。

「あ、あの私、本当に自由なんですか？借金…。」

「借金？ねえ、借金なんてもう、いいんですよ？」

有無を言わせない声に店主は震えながら、上げた頭をまた下げた。

「いいようです。さ、えーと、お兄さんのところに帰りましょうかでも、その格好は…可愛いけど、目立ちすぎますね…。」

可愛いと言われ、月風は真っ赤になった。

雷紋は、店主に権利書をチラつかせ、普通の服を用意させた。

「10日後まで、この権利書は預かっておきます。下手なことをしないでくださいね。」

雷紋は、堂々と、月風はその雷紋に手を引かれて長い廊下を歩いて行く。

途中、あの女が呆然と見ていた。

「お母さん…。」

少女の声に雷紋が足を止めた。

「あなた、母親なんですか…。」

侮蔑の瞳で女を見る雷紋。

「彼女を愛してさえ居れば、幸せになれたのに…。月風、行こう。」

くいつと彼女の手を引つ張る雷紋。月風はすれ違う母に言った。

「それでも、生んでくれたことは感謝しています。」

女が崩れ落ちるように廊下に伏せたのを感じた。

激しい嗚咽を伴っていた。

「あ、あの…本当に私は自由なんですか？」

「え、そうだけど…君はあの鳥かごが気に入ってたの？」

「ま、まさか！ただ、信じられなくて…。」

俯く彼女に雷紋はにつこり笑った。

「信じていいよ。俺は、嘘つきだけど、白澤は嘘はつかないから。」

彼の言葉に月風は笑った。

「……君の迦陵頻迦も君が笑っている方が好きみたいだよ！」

自分の中にいる『小鳥さん』

小さい頃から月風はそう呼んでいた。

その存在までも知ってる彼。

自分を助け出してくれたのは兄ではなかった。

紅蓮が知ったら悔しがらるだろうか、いや、感謝してくれるはず。

今までだって、兄妹だけで生きてきたわけじゃない。

いつだって誰かに助けられて生きてきた。

これから、自分は誰かの力を借りて生きていくんだと思ったが、
自分も誰かの役に立ちたいと雷紋の背中を見ながら月風は思った。

つづく

新たな旅へ

「加勢するぞ!!」

化け物に囲まれ、諦めが一瞬頭を過ぎったとき、自分への声が掛かった。

ひらりと現れた彼は、長剣を振り下ろし、紅蓮の目の前に降り立った。

「俺もいるよ!」

一陣の風が敵を薙倒していく。

3人は共に背中合わせになり、敵に向かっていった。

「一気に行こう!長引くとウザイ。」

「了解!」

3人のコンビネーションは、初めて合わせたとは思えないほどだった。

あっという間に敵は半減し、何時しか見えなくなった。

3人は、落ちた金貨を拾い上げる。

「なんや、助かった。ありがとう!」

素直な紅蓮に龍綺は少し照れているようで、慈音がかわりに握手をした。

「俺は、慈音。よろしくね!」

「俺は、紅蓮いうねん……あつ、しもうた!早いトコ行かな!」

紅蓮は歩きながら、自分と双子の妹のことを話した。

「えっ、なんかそれって、嘘くさい。」

店主の話に慈音が素直な感想を述べた。

「やっぱり、そう思うか?俺の……あーイヤ……何でもない。」

言いよどむ紅蓮に龍綺が言った。

「自分の中の獣が言うんだろ?店主の言うことを信じるなって!」
紅蓮の足が止まる。

「……気付かない?俺ら、神の子だよ?」

慈音が胸元の印を見せ、紅蓮の胸元を指差す。

「紅蓮もココにあるんだろ？」

龍綺も印を見せる。

紅蓮は、カアツと赤くなつた。

「こいつはアホなんや。」

紅蓮ではなく、彼の頭部からひよいと現れた半透明の赤い鳥が言った。

「朱雀！」

「久しいな、黄龍、白虎！」

呼んでもないのに、慈音の頭からぼわんと白い虎の姿が出てきた。

「おう、久しいな。今回、迦陵が選んだのは、こいつか。」

「そつやねん、めっちゃ不意なんやけどな。」

好き勝手に話す朱雀に紅蓮は恥ずかしくなってきた。

「頼むから、黙つて…俺なんやめっちゃ恥ずかしい…。」

「何をう！な、失敬なやつちやる？」

皆から笑い声が出た。

「相変わらず、騒がしいヤツだ。」

そつ言つたのは黄龍だった。呆れているが、友との再会を喜んでい
るようだった。

飛蝶街に向かつた3人は、これから用があると助けてもらったこと
に感謝の意を述べる紅蓮と向き合っていた。

「俺、妹を救うねん、朱雀はまだ早い言うけど、アイツをいつまで
も見世物にできへん。」

そつ話す紅蓮の後方に慈音は、白妙を見つけた。

「白妙！…あれ？雷紋…その子は？」

慈音の声に振り向いた紅蓮は、そこに居るはずのない妹の姿を見つ
けて呆然とした。

「紅蓮兄さん！！」

少女は駆け出して、彼の目の前に立っていた。変らぬ笑顔に紅蓮は

彼女の頬を抓る。

「痛い！何すんのよ！」

バシッと腕を叩かれ、我に返る。

「な、何で……？えっ、店は？借金は？」

月風は嬉しそうに後ろにいる雷紋を紹介した。

「あの人が助けてくれたの！！あの人が、私を自由にしてくれたのよ！」

「へっ？」

月風の少し後ろに立っている少年。

彼と目が合った。紅蓮はまたぼうつとしてしまっていた。

「こんばんは！はじめまして。朱雀の御子。」

「へっ？あ、ああ……。」

まだ茫然としている。

「兄さん？大丈夫？」

紅蓮は月風の声に反応して、歩み寄ると雷紋の手を取った。

「ありがとう！！ホンマ、何や……どないやって、アイツを自由にしてくれたんか分からへんけど、兎に角ありがとう！！」

深々と頭を下げてくる。

「どういたしましてだよ？君たちには、ちゃんとお礼分、働いてもらうから。」

皆の動きがハタと止まった。

「雷紋？」

龍綺が、ぽんと彼の肩に手を置く。

「えっ、当たり前でしょ？感謝は態度で示してもらわなきゃ。」

紅蓮は呆気にとられている。

「な、何したらええんですか？」

ちよつと、引いている紅蓮に雷紋は笑顔で答えた。

「え？もちろん、君にも、月風にも神の子としての宿命に従ってもらただけだよ。一緒に旅に出ようね！」

全くそれが当たり前のような口調であった。

「へっ？…ちょー待ってな、俺ら村に帰らな…長も心配してるし…。」

「じゃあ、明日。皆で挨拶に行つて、旅に出ようか。」
勝手に話を進めている。

（こつなつた、雷紋は止まらないよね。）

慈音が龍綺に言つと彼は頷いた。

「私、一緒に行きます！」

月凧は身体の前で握りこぶしを作り、行く気満々である。

「へっ？何言つてんのや！女のお前に旅は無理やろ？」

月凧はくるつと紅蓮の方を見て、白妙を指差した。

「彼女も女の子です！それに、受けた恩は返さなきゃいけないわ！」

真つ赤な顔をして無茶を言い出す妹の発言に紅蓮はため息を吐く。

「妹さんが行くのですから、お兄さんは、もちろん参加してくださいね。」

雷紋はにつこり笑った。

（雷紋…遊んでる…絶対、紅蓮で遊んでる。）

龍綺と慈音は口を挟む気はなく、白妙は月凧がはじめての女の友達になりそうな予感にドキドキしていた。

白妙のじつと月凧を見つめる姿に慈音は、嬉しくなった。

「あのさ、紅蓮。一緒に行こうよ。お礼とかそんなの抜きでさ、君たち兄妹は俺達の旅に必要なんだよ。」

紅蓮は、内なる獣が旅に乗り気で今にも喋りそうだったので、それを阻止するためにも先に旅の了承を示した。

「たぶん、月凧は足手まといになると思うけど…ええんか？」

先程のような敵が現れたら、彼女はどうなるのか、それが不安だった。

そのことに対して白妙がはじめて口を開いた。

「私が守る！私の鬼達に守らせる。」

「そうだね、俺も、龍綺も、慈音も、みんな仲間だから、彼女は守

るよ。それに、彼女はそんなに弱くないよ。ね？」
雷紋の笑顔に頬を染める月凧に嫌な予感のする紅蓮だった。

つづく

落下

半ば強引に旅に参加させられることになった紅蓮は、やはり妹のことが心配だった。

なんと言っても、鳥かごの中で、鉄球の足枷を付けられた生活を4年近くは送っていたのだ。

案の上、体力もなく、化け物たちの襲撃の際には、足手まといになっていた。

それでも、皆不平不満は言わず、彼女を守りながら戦っていた。

「ごめんなさい！」

敵に弱点と見抜かれ、集中攻撃を受けかけると誰かが彼女の盾にならねばならない。

白妙の鬼達が順番に守ってくれているが、敵の数が多いと、鬼が1匹でも戦いの中心から欠けることは大きな痛手となっていた。

月風は、見たことのない世界への旅立ちに胸を躍らせ、迷いもなく旅立ちを決意した自分を恥ずかしいと思うようになっていた。

しかし、仲間の皆は彼女のコトを責めたりせず、戦いの後に彼女に歌ってもらえれば、幸せだと思っていた。

「兄さん……」

「なんや？そないな不景気な顔して……」

宿屋にて寛ぐ紅蓮の元に月風は遠慮がちにやって来た。

龍綺と慈音は風呂に入りについているらしく不在で、部屋で本を読んでいた雷紋は、月風の様子に、風呂へ行つて来ると言い残し、席を外した。

「ーで、どないした？」

小さい頃いつもしていたように紅蓮の隣に座り肩に頭を乗せる。

「私、ほんとに足手まといだよ……」

真剣な彼女の言葉に紅蓮は噴出した。

「な、なんで笑うの!？」

ぽかぽかと兄の背中を叩く。

「ははは!そんな気にしとったんか？」

「だって、兄さんは最初反対してたでしょ？」

紅蓮は、二カツと笑って、月風の頭を撫でた。

「月風は気にせんでええんや。それも、これもひつくるめて、皆、月風と旅に出ることを望んだんやから。」

いつも自分を励まし、勇気付けてくれる兄の笑顔だった。

「ら、」

「ら？」

「雷紋も、そう思ってくれてるのかな…。」

紅蓮は、思考回路が止まってしまった。

紅蓮と雷紋は、動と静というか、単純と複雑というか真逆の性格なのだ。

「俺に聞かんといってくれ…アイツは、いいヤツやけど…まだ、ようわからん。」

先の月風救出撃では、無血開城を成し遂げた雷紋のやり方は、紅蓮にはとても無理なものだった。

内なる獣が囁いた。

(昔から、迦陵が宿る子は、あの手の男に弱いねん…。)

紅蓮の顔が引きつった。

(どないしょ!？月風と雷紋が結婚とかしたら、アイツが弟?!ありえへーん!!)

頭を抱える紅蓮に朱雀が鋭い突っ込みを入れたのは、当然のコトであつた。

「あれっ?紅蓮は？」

大浴場にやって来た雷紋に慈音が尋ねた。

湯上りの彼は、真っ赤な顔をしている。

「…君、大丈夫なのかい?真っ赤だけど…。」

「うん、ちょっと、のぼせた!!」

龍綺が慈音に続いて出てきた。

「紅蓮は？」

「兄妹会議。」

「なるほど……」

「やっぱり、気にしてるのかな？」

3人が沈黙する。その沈黙を破ったのは雷紋だった。

「そりゃね……あんだけ足手まといになればね。」

服を脱いだと同時に出了た言葉を入ってきた紅蓮が聞いていた。

紅蓮の表情は厳しく、ギロツと雷紋を睨んでいた。

「だから、アイツには旅は無理やって言つたやろ、今更なんやねん!!」

音を立てて引き戸を閉める。

「紅蓮……あのさ、」

間に入ろうとする慈音を紅蓮は一喝する。

「うつさい! 大体俺は、コイツ気にいらへんかってん!!」

また、沈黙。龍綺は、頭に手を付いてため息を吐き、

「君の妹を君より先に助けたからかい？」

と言う雷紋の言葉に、慈音は、呆氣にとられていた。

その言葉に乗せられた紅蓮は、雷紋の肩を掴んだ。

背の高い紅蓮に肩を押さえ込まれ、雷紋は少し苦痛な顔をした。

暫くの沈黙。

紅蓮は投げ捨てるように雷紋を放すと、服を脱ぎさつさと風呂に入つていった。

「紅蓮……。って、雷紋も風呂入るの？」

心配そうな声を出す慈音に雷紋は意外そうな顔をした。

「なんで、俺が遠慮しなきゃならないわけ？」

そうだけ言つて、彼は風呂場に入つていった。

気まずいまま6人は旅に出ていた。

紅蓮は、月凧の手を取り、雷紋を無視しているし、雷紋は、龍綺とどのように進んでいくかを話している。

白妙は、微妙な空気の仲間達を首を傾げていた。

「慈音？」

「…ん？何、白妙。」

「何かあったのか？」

女の子同士で話はしないのだろうか。慈音はそんなことを思っていたが、

「さ、さあ。」

と口を濁した。

不調和音が漂う足並みに慈音と、平然としていた龍綺までもが、我慢できず、口を出そうとしたその時、月凧以外の5人は異質な気配に身構えた。

さっきまで晴れていた空があつという間にどんよりと曇ってきた。

そこにきて、初めて皆の緊張を感じ取った月凧は、耳元で囁く女の声に、背筋を走る悪寒に思わずしゃがみ込んだ。

「はじめまして、鳥の姫君。」

その気配に皆が月凧の後ろを見るが、次の瞬間その声の主は上空に移った。

「お前！！」

龍綺が、剣を抜いたのを合図に皆が武器を構えた。

「仲良きこと。」

明らかに嫌味が聞こえてきた。

そこには、黒いフード付きの服を纏った赤い唇の女。

それは木蓮を連れ去った女。

「お、お前あの時の！！太夫をどうした！？」

慈音が戟を手に握り締めて尋ねた。

「ふふっ…。白虎の御子は、あの女のコトが気になるのかしら…。」

「当たり前だ！太夫をたぶらかしたくせに！！」

女の笑いが大きくなる。

「知れたければ、自分で探すがいい…。自分が拒絶した女だ…。呼ばば尾を振って出てくるだろうよ！」

一本の弓が女の頬を掠めた。

「くっ！」

「あなたは、いちいち、うるさい人だ。」

女の手がかすかに震えているのを見る。

「お、おのれ！白澤の御子め！」

女は頬に出来た傷から手を離すと天高く両手を突き上げた。

「私の可愛い合体獣^{キマイラ}！我が身より、出でよ！」

暗雲が渦を巻き、女の身に稲妻が走った。

あまりの轟音に月風はしゃがんだまま身動きも取れない。

女の背中が大きく膨らみ、卵の殻が割れるように黒い物体が飛び出してきた。

黒い物体は、静かに落下しながら更に大きく膨らみ、振動を起こしながら大地に足を付けた。

神の子はみな、一歩下がるしかなかった。

現れたのは、猿の顔に人の胴体に異様に長く太い腕、そして鳥の足と翼を持つ化け物だ。

身の丈は、有に3mは越えており、その姿をみた神の子達は、皆が一歩下がった。

化け物は、その大きな翼をバサツと羽ばたかせ、周囲に大風を起こし、化け物を見た驚きで立ち上がった月風の身体をふわりと持ち上げた。

「月風！！」

白妙の声で、振り向いた紅蓮が手を伸ばしたが、

「うわっ！！」

化け物が誰もが思っていなかったほどのスピードで紅蓮に近付き、その雄々しい腕で彼の身体を左後方に跳ね飛ばした。

「兄さん!!」

第2波が月凧を襲う。

しかし、自分を庇うように月凧を抱きしめる人がいた。

「雷紋!!」

月凧を捕まえた彼の腕に力が入る。

声にならない苦痛な表情をした雷紋。

「ら、雷紋?」

小さな声で月凧は彼の名を呼ぶ。

すると彼は返事の変わりに更に彼女を強く抱きしめてきた。

浮かぶ身体。

化け物は、鳥の足の爪を、雷紋の脇腹に食い込ませ、上空へと羽ばたいたのだ。

地上に残された神の子達の元には、黒尽くめの女。

雷紋は、せめて月凧を離そうとその手を緩めたが、化け物は、彼女のふわりと風に靡く着物の裾をその鋭い爪に食い込ませていた。

(くそつ、上から落とすつもりか?!)

(雷紋よ、どうするのだ!!)

恐怖で歪む月凧の顔。

雷紋は精一杯の笑顔を見せる。

「だ、大丈夫…君の迦陵頻迦が…助けてくれるから…。今から、君の着物を切り離す。君は落ちるけど、大丈夫…内なる獣が助けてくれる…強く願うんだよ?」

「ら、雷紋は…?」

彼はまたにつこりと笑って見せた。

「ただでは、死なない!」

雷紋は、腰に挿した小刀で、月凧の服を引き裂くと、重力によりがくんと下に引つ張られた彼女の身体を自分から突き放した。

一瞬ふわりと浮かんだ月凧の身体が、雷紋から離れて行く。

彼女の手は、彼を掴もうと精一杯伸ばすが、あっと言う間に距離が出来た。

（イヤだ！雷紋！！）

彼女の身体が金色に光ったのを確認した雷紋は、その小刀で化け物の足を突き刺した。

化け物は、けたたましい叫び声を上げ、足を振り、彼に突き刺さっていた爪が離れた。

雷紋は、落ちていく自分の身体を反転させ、弓を構える。

「！！」

雷紋は、弓を2、3回放ち、それが化け物の羽に命中したのを確認すると不敵な笑みを浮かべて、意識を手放した。落ちてくる身体。

羽が生えたように身体が浮かんでいた月風はただ、血を空中に巻きながら落ちてくる雷紋に手を伸ばし、先程まで彼がしてくれていたように抱きしめた。

翼の生えた化け物は、雷紋の力が込められた3本の矢を羽に受けて自分達よりもはるかに速い速度でクルクルと回転しながら落ちていった。

抱きしめる雷紋は、月風が揺さぶっても瞳を開けない。

「イヤだ、イヤだよ…雷紋！」

2人の身体を光る球体が包み込むように取り囲み、東の方角へゆっくりと落ちていった。

つづく

月屈の覚悟

一方、残された龍綺達にも新たな脅威が迫っていた。

「どうやら、白澤の御子は死んだようだよ。」

女の声に皆が硬直する。

「嘘を言うな！！」

激昂する龍綺の剣をひらりとかわす。

そこへ、羽を傷つけられた化け物が木々を薙倒し、戻ってきた。

「情けない…もう1人くらい殺すんだよ…。」

女から伸びた手から黒い霧のようなものが化け物を取り囲むと

「！！」

その身体を3つに分裂させた。

「鬼姫、お前の鬼は封印させてもらう。」

再び放たれた黒い霧が白妙を取り囲む。

「白妙！」

慈音がその霧を戟で取り払うが、彼女の胸にある鬼の石には霧が掛かったように黒く変色していた。

女は高笑いをして、天に舞い上がるとその姿を消していった。

3体が増えた敵は、力を共鳴させているようで、強力な衝撃波を放ち、彼らを襲う。

「あかん！強すぎる！！」

吹き飛ばされた時に肩を打った紅蓮が痛めたところを押さえながら言った。

「紅蓮！大丈夫か！！」

「大したことない！それより、ばらけよ！集団やとこいつらあかん！」

1対1。神の子達を選んだ戦い方。慈音は白妙と共に、

「絶対に、死ぬな！雷紋だって絶対生きてる！！」

龍綺の声、彼は西の方に駆けていった。1体がそれを追いかけてい

く。

「当たり前や！あいつが死んだら、誰が月風、守んねん！！」

大きく手を上げて紅蓮が南の方へ駆けていった。

大きく頷く慈音と白妙。

残されたのは、2人と1体の化け物。

「白妙、行くよ？」

「もちろんだ。コイツを倒して月風と雷紋を探しに行く！」

2人は武器を手にして、化け物に向かっていった。

「雷紋…雷紋…イヤだ…イヤだよ…死なないで…」

必死に自分より大きい彼の身体を森のはずれにあった洞窟の中に運んだ彼女は、自分の身体が彼の血で汚れることなど気にもせず抱きしめていた。

（月風…大丈夫よ…白澤の御子は眠っているだけ…今は傷を癒すために仮死状態に陥っているだけ…。）
内なる獣の声。

これほどまでに彼女が迦陵頻迦の声を聞いたことはなかった。

「ほ、本当？死なない？死なない？」

大きな翼が彼女を包んでいるように温かい。

（月風が力を注ぎ込んでいるから大丈夫…。）

緩めることが出来ない腕で雷紋の上半身を抱きしめている。

「わ、私が…もっと…もっと強かったら…。」

月風の涙が止まらない。

（月風は、力が欲しいの？強くなりたいの？）

「…欲しい…皆を守る力が…私のせいで…誰かが傷付くのはやあ！」

胸の印が熱を帯びているように熱い。

「せめて、皆が戦いに集中できるように、自分のコトぐらい自分で守りたい…」

旅を続けていくうちに味わった月風の苦い思い。

今回のように自分を庇った雷紋が多く、血を流し、倒れた場面を目の前で見せられて、彼女の心は傷付いていた。

「こ…このままじゃ、また…。」

月風は、自分が本当に神の子としての自信を無くしかけていた。

そんな彼女に迦陵頻迦は優しく、囁いた。

（月風、あなたが、人を守り、癒す力を望むなら、私はあなたに力を与えましょう…。）

月風がパツと頭を上げた。

「本当？」

迦陵頻迦は優しく彼女を抱きしめる。

（しかし、力を得るためには、覚悟が必要です。それでも言いと言うのなら、外へ出ていらつしゃい。）

雷紋の頭をそつと自分の膝から降ろし、自分の持っていた小さな腰の鞆を彼の枕代わりにした。迦陵頻迦が促すように立ち上がった月風は、雷紋を気遣いながらも、外へと出た。

（月風、これからあなたには、私の力を使えるようになってもらいます。）

「どうすればいいの？」

ギュツと手を握り締める。

迦陵頻迦は、月風に身体の前面に壁を作るイメージをしると言った。
「壁？」

（そう、月風の大切な人達を守る壁。あなたが敵と認めたモノを拒絶する壁を…。）

月風は、掌を見つめた後、自分の前に掌を前に翳す。

（壁…壁…。）

ふわつとした温かい空気が自分の周りを取り囲んでいた。

ジリジリと自分の掌が熱くなってきた。

意識を集中しようとする、と掌に痛みが走った。

「駄目だよ…。手が痛いよ…。」

赤くなった掌。

（休んでいてもいいの？敵が迫っているわ…。）

茂みの向こうに感じる不穏な気配。

月風は身体が恐怖で震えた。

「ど、どうしよう…。」

（このままでは、あなたも白澤の御子も死んでしまうわ…。）

月風は洞窟の中に入ろうとした。

（どうするの？）

「逃げるの！！先みたいに翼出して！」

奥へと入っていく彼女に迦陵頻迦は言った。

（そうね、逃げるのもいいわね…でも、白澤の御子は、今動かすとまた沢山の血が出てくるわ…。それでもいいの？本当に死んでしまわよ…。）

月風の足が止まる。

「…。」

（月風、あなたに残された道は、白澤の御子を見捨てて逃げるのか、洞窟に結界を張り、敵の侵入を阻止することに全身全霊を注ぐかよ…。）

月風は唇を噛む。脳裏に浮かぶ、自分を庇って傷付いていく仲間の姿。

「雷紋を置いて逃げるなんて出来ない。だって…。」

“彼は私のために命を落としかけたから。”

彼女は、踵を返して、洞窟の入り口に腰を据えた。

「雷紋が傷を癒して目覚めるまで、私はココを死守するの。」

少し身体が震えていたが、今、雷紋を救える、守れるのは自分しかないんだと考えた。

「もう1度、頑張るから、小鳥さんも私に力を貸してね！」

手を先程のように前に突き出して壁をイメージした。

温かい空気が彼女の身体を包み、その空気が掌から放出され洞窟の入り口を塞いだ。

敵が姿を見せた。先程、雷紋に大怪我を負わせた化け物ほど大きなものではなかったが、醜く、とても触りたいとは思えないネバネバした糸を引いている。

（絶対に、指一本触らせないんだから！！）

つづく

月風の戦いと雷紋の目覚め

雷紋は真っ白な何もない世界に居た。

「あれ？俺死んだのかな…。」

何処を見ても白一色の世界。

優しくも厳しい世界。

それは、白澤の世界だった。

「白澤…いるのか？」

周りを見渡しながら言う雷紋に彼は答えた。

「遅かったのう…いつまで寝ているつもりじゃ。」

それは、いつもの強気な彼のモノではなく、弱々しい声だった。

「ごめん…ちよつと寝てたよ。死んだと思ってたからね。」

いつもより力の入らない身体を支えながら雷紋が言った。

「早く、目覚めて迦陵の御子を助けてやらねばのう…。」

「えっ？」

白澤の声に雷紋は振り向いた。

かすかだが月風の気配を感じる。

「これは、確かに彼女の気配だけど…どうして、彼女がこんなに力を出せているんだ？」

「決まっておるじゃろ？」

雷紋は再び白澤の世界を見渡した。

「お前を守るためじゃよ。」

あの守られるだけで、敵の攻撃には、怯えてばかりだった彼女が自分を守るために戦っている？

雷紋は白澤の世界をまだおぼつかない足で駆け出していた。

辺りがすつと真っ暗になった。

真っ白な世界に居た雷紋の目は暗さに慣れずにいた。

（月風？）

ゆつくりと身体を起こす。

改めて自分が酷い怪我を負ってしまったのだと理解した。

夥しい血の量で染められた服、そして身体。

そんな自分を月凧はココへどんな思いで運んできたのだろうと考えた。

（くっ…！）

なんとか身をよじって身体を起こす。

それだけで世界が回る。

倒れそうになる身体を目を閉じてやり過ごし、なんとか手を付いて立ち上がる。

明るい光の射す洞窟の出入り口に向かう彼は、月凧の強い気を感じた。

出入り口を覆う半透明の幕のような、壁のようなモノが、化け物の侵入を防ぎ、弾いていた。

敵の数は、雷紋の見たところ、3体。

1体は、そこそこ力のある醜いモノであったが、あとの2体は、今までも幾度となく戦ってきた雑魚である。

「くっ！」

月凧から苦痛な声が上がった。

身体の高い化け物の攻撃はそれなりに威力があり、彼女のまだ不安定な結界は揺らいでいた。

揺らぐ度に、壁の薄いところに輝が入るような音を立てて、月凧のスツと前に伸ばされた腕を、身体を傷付けていった。

「絶対、守るんだからっ！」

月凧の呟きが聞こえた。

雷紋は、頑張る彼女の姿に壁から凭れるのを止めて、いつもの杖を弓に変えると、3本の矢を構えた。

（3匹を殲滅する。）

（了解。）

3本の矢が月凧の後ろから放たれた。

自分の隣を過ぎていく弓に驚いた月風は振り向こうとしたが、雷紋に止められた。

「今は、結界に集中して！敵は倒すから。」

一番聞きたかった声が、月風の耳に届いた。

「はいっ！」

月風の力が益々強くなり、連射された雷紋の矢が醜い化け物の中心を捉えた。

けたたましい声を上げて消えていく化け物。

結局、雷紋の矢は、全体的を貫いた。

敵の姿が消えた途端、月風は雷紋の方に駆けて来た。

「雷紋！！」

体中に傷を負いながら笑顔で飛びついてくる月風に、彼の傷口がすこし辛そうだったが、雷紋も、彼女を労った。

「1人にしてて、ごめんね。」

彼の言葉に首を振る。

「だ、大丈夫！！今まで助けてもらってたんだもん！これくらいしなきゃ、皆に申し訳ないし。」

抱きついた身体を離す月風。

「ごめんね？傷まだ痛いでしょう？」

「手当てもしてくれたの？」

驚く雷紋に月風は、顔を真っ赤にして答えた。

「あ、あのね…迦陵頻迦の力って、応援型というか、その…皆を治したり、盾になったりする力が得意みたい。」

嬉しそうな笑顔だった。

「知ってたよ。」

「えっ？何かの本に書いてあったの？」

真面目に言う月風に雷紋は噴出してしまった。

「な…何？」

「皆、感謝してるんだ。…だって…月風の歌はいつも俺達を癒し

てくれたから。月風の歌は、戦った後の疲れを取ってくれて、時々傷も治しちゃうじゃないか。」

月風は、自分の能力が仲間にも役に立っていたことが判明して嬉しそうだった。

「私、皆の役に立てるんだね……。」

月風の言葉の重さに今まで彼女が抱いていた思いを知った。

「……この先に朱雀の社があるらしいから、そこまで頑張っで行こう？ お互い、ボロボロだし。」

差し出される手に自分の手を重ねた。

「大丈夫？ 動いて傷が開かない？」

心配そうに覗き込む月風に雷紋はいつもの笑顔を見せてくれた。

「大丈夫だよ。社に行くのは一瞬だし。」

「えっ？」

「白妙に教えてもらっただ。力の使い方。」

向き合う2人。月風は胸がチクツと痛んだことに気付いた。

「白妙に？」

「そう。彼女は、物心ついた時から鬼達に力の使い方を教わっていたからね。敵を滅する力以外にも沢山使い道があることを知っていたんだ。……どうしたの？」

「う、ううん。何でもないよ。どうしたらいいの？」

「朱雀の姿を思い浮かべて、……月風なら、紅蓮の顔でもいいかもね、で、社へって願うんだ。」

「……それだけでいいの？」

雷紋は少し苦笑した。

「うーん、でも、ちょっと難しいかな。俺も迦陵頻迦も社を持たない種だから、社って言うのがイメージし難いんだ。」

不安そうな顔になる月風。

「はは、でも大丈夫。俺、何回か練習してるから。月風の方まで、強く願うよ。」

自分を安心させようとしてくれる雷紋の心が嬉しかった。

「うん、私も頑張る！」

2人は、互いに手を取り、社目指して、意識を集中した。

つづく

玄武の神子

生まれた時、少女には何もなかった。

母も、父も。付けられるはずだった名前も。

少女は、短い命を一生この岩牢で終えるはずだった。

古くから玄武を信仰するこの地域の民は、質の良い鉱物がとれることでは恵まれていたが、国の北側という過酷な土地は、農作物が上手く育たないという弱点を抱えていた。

今から、20年前、この地域一体を取り締まる豪族・参進の元に1人の呪術師が現れた。

黒い服に身を包み、怖いほどに白い肌と赤い唇をもつ呪術師は、参進にこう告げた。

「この地を収める玄武様が、嘆いておられる。」

「玄武様が……」

突然出た自分の信仰する神の名に参進は驚いた。

「さよう……玄武様は、この土地が乾くのは、自らの身体が乾いているからだと仰っておる。」

「渴き……」

「そう……したが、わらわは、その渴きを潤す術を持つておる。」

参進は女の言葉に息を呑んだ。

「お願いいたします！ できる限りのお礼はさせていただきます故、どうかこの村の民を助けていただけないでしょうか！」

深く頭を下げる参進と村の一同に、女は口角を上げた。

「よろしい……今から3日後、わらわは、その渴きを潤す術を用いて、この村に潤いを与えよう。もし、この一年の間が、渴きが満たされていなければ、わらわを焼くなり、煮るなりすればよい。ただし、来年のこの月までに、作物が実り、人々の食が潤うようになったならば、わらわに忠誠を誓うのじゃ。」

村人の何人かは、あのような怪しい者の言うことなど信じてはならぬと参進を止めたが、質のよい鉱物もいつか尽きる代物だと分かっている彼らにとって、農作物が実ることは、この村の民が救われることだと、藁をも掴む思いで、呪術師の言葉を信じてみたいのだと民に頭を下げ、説き伏せた。

3日後、再び姿を現した呪術師の女が、村の北にある玄武の岩の祠に向かう姿が目撃されていた。女が祠でどんなことをしたのか、村の者は誰一人として知らなかった。

その年、村は稀に見る大豊作に沸きあがった。人々が呪術師を信じた参進を褒め、これで、村は安心だと胸を撫で下ろした。

しかし、年が終わるにつれ、農作物はまた枯れ始め、人々は来年のことを憂い始めていた。

「もう1度、呪術師さまに術を掛けてもらわねば、来年は今まで以上の不作になるぞ。」

参進のもとを訪れた民は口々に言い始めた。

「しかし、どうやって呪術師さまに連絡をとればよいのだ？ わしは、

「ココに来て居るぞ。」

あの時の呪術師が再び現れていた。

先程まで誰も立っていなかった場所に立っていた。

この人は、きっと玄武の使わされた救世主なのだと参進は思い、頭を垂れ、村のことを話した。

呪術師は、上座に座らされ、参進や村の民の話に耳を傾けた。

「一年前、わらわが申したことを覚えて居るか？」

皆が頭を座敷に付くほど伏せた。

「はい！覚えております。もし、呪術師さまが、約束を守られた時

は、あなた様に忠誠を誓うと！」

呪術師の口角が上がった。

「さよう、では、面を上げるのじゃ。」

呪術師は立ち上がり、参進の前に膝を付くと、彼の顔を持ち上げた。参進はフードに隠されていた呪術師の顔を見た。

「ああ…なんと美しい…まさに玄武の巫女さまだ…。」
ざわつく室内に甘い香が立ち込めた。

参進を初めとする者達は、バタバタと倒れていった。

「これでよい…。」

村の代表者である8人が、岩の祠の前に立っていた。

「よいか、この祠の裏にある洞窟に鉄の格子をつけるのじゃ。」

村人の1人が、洞窟の中に小さな白骨を見て、悲鳴を上げた。

「呪術師さま…これは…。」

「これこそ、玄武様の望まれている生贄よ…。その年に生まれた赤子を捧げる。何、この洞窟に置き去りにすればよい。格子を付けなければ獣に食われてしまうからのう。」

震える民に呪術師は言った。

「何、この先ずっとではない…。4年か、5年後…この地域のどこかに胸元に『玄』の文字を刻み生まれる者が現れる。それこそ、玄武様が真に求める贄。」

参進が尋ねた。

「そ、それまで、玄武様に捧げるのは、この村の赤子でなくてもよいのですね！」

呪術師は、大きく頷いた。

「赤子であれば問題はない…。その『玄』の文字を持って生まれる者が現れるまで…。」

参進と村の代表者は、すでに眼つきが変り、狂っていたことを分かっていた。なかった。

村は、鉱物が採れなくなった。

しかし、作物は他の村に比べると格別に豊作で、参進をはじめとした村の代表者達は、今の暮しに満足していた。

「今年で、全ては終わる。『玄』の文字を持つ赤子が生まれる年になった。これで、赤子を玄武様に捧げることは終わる。」

参進はホッと息を吐いた。

「しかし、どこに生まれるのだ…。わしは、自分の娘が孕んでおるのでな、」

男の娘とは、参進の妻のことだった。

この年に子供を作るつもりはなかった参進のもとに子供が出来た。結婚して5年目にやっと授かった命であった。

「参進よ、もし、お前の子供が『玄』の文字を持つ子ならどうするのだ。」

代表の1人が聞いた。

「言っておくが、お前の子供だからと言って、俺は容赦なく玄武様に捧げるぞ！」

去年、捧げられたのは男の妹が産んだ子であった。

「分かっている…分かっている…」

参進は、子供をその腕に抱くことができなかった。

祠裏の洞窟に置き去りにされる我が子を身を切る思いで見送った。

子を産んだ妻は、攫われたと知り、半狂乱になって、崖から落ちてなくなった。

娘を亡くした父は、病床に臥し、子供を取り返そうとした夫は、捕えられた。

「お前が、妹にした仕打ちだ。」

子供を攫っていった男は涙を流しながら言った。

参進は、その数日後、自らの命を絶った。

置き去りにされた岩牢の鉄格子には、呪術師の張った結界の札が張られていた。

小さな白骨の近くで泣く赤子は、乳を与えられることもなく、その命が尽きるのを静かに待っていた。

「可哀想に……」

誰も居ないはずの岩牢で赤子に声を掛けるものがいた。

「お前は死んではならない。」

彼女を抱きあげる。

「殺されていった赤子の分も生きなければならない。……何より、これから起こる惨事から民を救うために。」

岩牢の付近には無残にも散っていった赤子達の無念が渦巻き、それが化け物と呼び寄せていた。

供物として赤子を捧げに来ていた大人の骨もある。

そんな瘴気の立ち込める岩牢の結界は外界と中を遮る役目もしていた。

あの呪術師が捧げられた赤子を守るために張ったものではなく、中に眠る神の獣を出さないためだった。瘴気と言う呪いで閉じ込めたつもりだった。

しかし、抱き上げる者は、結界の張られた岩牢を抜けることが出来た。

山々に生る木の実や、果実を洞窟に持ち帰っては、すり潰し赤子に与えた。

しかし、彼は、岩牢から抜けることは出来ても、短時間の近距離しか行動が出来なかった。

戻って来ると彼は、赤子に寄り添い眠った。

結界の中であるこの岩牢は、不自由であるようで自由だった。

奥行きの高いこの洞窟は、階段状に奥に下がることができ、その場には、清らかに湧き出る泉が火山の影響を受けて温かい湯気を出していた。

寒い冬の日、温泉の近くの地面に横になり、寒さをしのいだ。

幼く抵抗力の弱い赤子を守るため、彼は必死だった。

「いつかお前を、私を助け出す者が現れる。その間に私がお前に与えられるものは全て与えよう、名も、愛情も、力も……」

赤子は、『暁』という名を付けられた。

金色に輝く髪と淡い紫の瞳は、与えられる全てを見通すように大きなものだった。

岩牢の天井に開けられた穴が、暗い洞窟内に僅かではあるが光を与え、そこから聞こえる風や鳥の歌が暁を慰めてくれた。

「日の光、月の光り、星の光り……鳥の囀り、全て美しいもの。」
彼の教える世界が彼女の全てとなった。

少女は美しく育った。

しかし、誰一人として岩牢に少女が生きていることを知らなかった。自分を育ててくれた彼は、彼女を守るために姿を消し、彼女の心の中に息づいていた。

彼の名を『玄武』と言った。

いつも彼と彼女は心の中で会話をした。

彼が心の中に姿を消してから暁は言葉を声に出すことをしなくなった。

「私に話しかける時も声を出してごらん。」

玄武はこう言うが、岩壁に響くだけの自分の声がとても虚しいものだったため、彼女は声を使わなくなっていた。

（だって、声を出すと淋しいと思ってしまうもの。）

彼女の言葉に彼は何も言えなくなってしまうた。

つづく

穴から落ちてきた龍

ある日、温泉の天井に轟音と共に大きな穴が開いた。

崩れた天井が湯の中に落ち、暁は夜中に目を覚ますことになった。

（私が空を飛べれば、アソコからお前を出して上げられた。）

玄武の言葉。

鉄格子の結界は、奥に行くほど効力が弱まる。

あの結界は、暁達を出さない代わりに、化け物も寄せ付けないものだった。

ところどころに開いている天井の穴は、年を追う毎に大きくなり、結界の力を弱めていた。

暁が赤子だった頃、玄武は外の世界に出て、彼女に食べ物を持って帰ってきていた。

暁が大きくなるにつれ、彼女を生かすために自分の力を彼女に注いでいたため、彼は、彼女の外に出ることが出来なくなった。

（いつか、一緒に外の世界に行こうね。）

暁は、いずれくる未来に期待をしていた。

今日もその穴から、温泉の泉にモノがおとされた。

（ありがとう、）

声を使わなくなった彼女は身振り手振りで天井の穴に向かって礼を述べた。

そこ穴からは、小動物たちが顔を覗かせていた。

毎日、動物達が天井の穴から落としてくれる木の実や、果物が暁にとって楽しみであり、生きる糧だった。

（玄武は、夢の中でしか姿を見せてくれないね…。）

暁が淋しいと思うことの一番がこのことだった。

（淋しいなあ…。）

この淋しさを玄武には解消する術がなかった。

しかし、何かが起こる予感を彼もこの洞窟も、そして世界が感じて

いた。

「くそっ！」

森の中を龍綺は、駆け抜けていた。

後ろの上空を飛ぶキマイラは、木の影を利用して逃げる龍綺を他の化け物を使って広いところにおびき出そうとしていた。

「雑魚も多い！」

逃げながら、敵を倒していく。

隙を見せれば上空のキマイラが襲ってくるのだ。

（せめて、空を飛べれば…。）

青龍と黄龍は、飛ぶ力が弱い。

（龍綺、東の方向に龍の気配。）

龍綺は、青龍の力を利用して、東の方向に低く飛んだ。

木々の間を抜け、剣を振り敵を倒し、辿り着いたのは、頭ほどの岩がゴロゴロ転がっている岩場だった。

「どこだ！」

龍綺は左右を見渡す。すると、折り重なる岩から微かな光が漏れていた。

「あれだ！」

飛びついて手を伸ばす龍綺に上空からキマイラが鋭い爪で襲ってきた。

轟音が響く大地、飛び跳ねる岩の合間に拳大の白い玉が光りながら宙を舞った。

「来いっ！！」

龍綺の身体も宙に舞っていたが、白い玉は彼の声に反応するように彼の伸ばした掌に飛び込んできた。

白い玉が自分の下にきた途端、龍綺の身体はふわりと浮かんた。

（大丈夫か？）

「まだ、不安定だけど…なんとか…。黄龍！青龍！そして、白龍！力をかしてくれ！！！」

（今日も、いい天気だね。）

のんびりと鉄格子の外を眺め暁は、玄武に話しかけた。

人里はなれたこの祠に足を運ぶ者がいなくなつて4年は経っていた。暁を閉じ込めた村も彼女が5歳の時に、巨大な化け物に襲われて人は住まなくなつた。

化け物は、玄武の祠に誰も近付かないように見張りの役をしているようにこの辺りに住む人々を追い立てていった。

誰がそういう風に仕向けたのか。

（どうしたの？玄武…何か緊張してるの？）

（巨大な悪意の塊がやってくる。）

（それは、あの化け物のコト？）

（違う…色々な魂の融合体…それと…。）

ふと玄武が天井を見上げたような気がした。と、同時に何かが崩れる大きな音。

暁は突然のことに耳を塞ぎしゃがみ込んだ。

（な、何？）

（湯の方だ…行こう。）

龍綺は、キマイラとぶつかりながら戦っていた。

剣と爪が激しい接触音を立ててぶつかる。

（龍綺、早く仕留めないと、新たな化け物の気配がする。）

黄龍の言葉。

龍綺は、切れた頬から流れる血を拭う。金色の目を隠していた眼帯を剥ぎ取った。

「邪魔…。」

キマイラが、高く宙を舞い、急降下してきた。

龍綺はその懷に飛び込むように剣先を上に向けた。

青龍の剣は、キマイラの大きく開けられた口に突き刺さった。

「えっ！あ、ちょ、ちょっと！」

キマイラは白目を向いていたが、降下を止めない。

そして、龍綺の剣もキマイラの喉に刺さったまま抜ける様子もなかった。

（このままでは、地面に叩きつけられるぞ。）

冷静な黄龍の言葉だが、剣は一向に抜けようとしなない。

キマイラの筋肉がそれを放そうとしていないようだった。

（龍綺！）

龍綺は咄嗟に、キマイラに突き刺さった剣から手を放し、キマイラの鬣に捕まった。

それと同時にキマイラごと地面に叩きつけられたのだが、その地面は脆く、ひび割れた地面に吸い込まれるように彼は落ちた。

（！！）

龍綺は、驚きで息を吐いた。

ボコボコと自分の口から大きな泡が立つ。

（湯?!）

自分を包む水の気配。それは温かいもので、彼はそれが湯の中であると理解した。

吐いた息を吸うことができず、彼は水面を目指した。

ざばあっ！

大波を立てて龍綺は、大地に足を付けて立っていた。

そして、周囲を見渡す。

（洞窟? あっ…。）

キマイラの身体が泡になって消えていった。

（ココは、清浄な空気が漂っている。）

（聖域? ってことか…。）

胸まで浸かっていた湯から、岸を目指して歩く。

先程まで痛かった傷口が癒されていく。

「すげえな…この湯。」

岸に上がり、濡れた服を脱ぐ。

音を立てて服を絞り、大息を吐きながら、その場にしゃがみ込んだ。
「どうするよ…これから…」

飛びながらキマイラと戦い、かなり北の方角まで来てしまった。

逸れた他の神の子達、特に力の弱い月風のこと、戦いがあまり得意ではない雷紋のことが心配になった。

（龍綺…。）

黄龍の声には彼は顔を上げて、辺りを見た。

（！！！！）

龍綺は、言葉を無くした。

「な、な、」

明らかにうるたえた声が出た。

龍綺の視界に、裸の少女が入って来たのだ。

長い金髪は膝ほどまで届き、大きく開かれた瞳は淡い紫だった。

龍綺は立ち上がり、自分の身の置き所をどうすればよいか考えうろたえていた。

（落ち着け、龍綺。）

少女は、駆け足で龍綺の方によってきて、抱き付くようにその身体をぶつけてきた。

「うわあっ！」

龍綺は、少女と共に倒れていった。

「痛たたた…。」

痛みの次に彼を襲ってきたのは、自分の胸に押し付けられた柔らかな感触。

「わわっ！」

そして、彼女の柔らかな髪にも龍綺はドキツとした。

「あー、うー。」

少女は言葉を発しなかった。

「お前、声が出せないのか？」

彼女の身体を避けながら、その事に気付いた龍綺であつたが、少女の姿にカツと顔を赤くして、立ち上がり、岩にかけてあつた自分の上着をかけた。

「うつ？」

上着を羽織らされて戸惑っているようだった。

「あー！脱がなくていい！！」

彼女に羽織った上着の前を合わせる。

（玄武…。）

黄龍が静かに言った。

「へっ？」

（この娘は、玄武の御子だ。）

合わせた胸元を開けて印を確かめた。

そこには、確かに『玄』の文字。

「ホントだ…。」

ハツとして、また胸元を合わせた。

「ご、ごめん。」

「久しぶりだな…黄龍。」

その玄武の声は龍綺にも届いた。

「なあ、この子、喋れないのか？」

少し心配になつて訪ねた。

「しばらく言葉を発していないので、声が出ないのだよ。」

少女は何回も頷いていた。

「あー、あうー、」

声を出す練習をしているようだ。

「黄龍の御子以外の人間を見たことがないからね…暁は。」

そう、彼女は、自分以外の人間が目の前にいることが驚きで、嬉しくて仕方なかったのだ。

「暁って言うの？」

チラッと見た少女は満面の笑顔で龍綺を見ていた。

「赤子の時にこの岩牢に閉じ込められて以来、暁は私が育て、名を

付けた。」

玄武は今までのことを話した。

龍綺は、暁が気の毒になった。

もし、玄武がいなかったら彼女は一体どうなっていたのか。考えるにぞつとした。

「すべては、玄武である私をココに繋ぎとめておくために行われたものだった。」

暁は、見殺しにされた子供を洞窟の鉄格子の傍に埋葬した。

固い岩壁であつたが、玄武に力を借りて行つた。

「リユー、」

暁に名を呼ばれた。

彼女は、発音ができたことが嬉しいようで、ぴよんぴよん跳ねていた。

「リユー、リユー！」

彼女はまた彼に抱きついてきた。

「わっ、ちょ、ちよつと、む、胸が当たる……！」

龍綺は暁を突き放した。

「龍の御子は、修行が足りないな……。」

「うるさいっ！」

彼は真っ赤になっていた。心配そうに暁が顔を覗き込む。

大きな紫の瞳が自分を見ていることに龍綺はさらに照れてしまった。

「あんま、見ないで……。」

「リユー……あ……ひらい？」

発語が長くなった。

「あつ、あーき、しゃべつよ？へん？」

龍綺は、コロコロ変る暁の表情に妙に照れて、直視できないでいた。そんな彼にまた暁が不安そうな顔を見せたので、彼は彼女の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「大丈夫、変じゃないよ。」

彼女は猫のように龍綺に擦り寄ってきた。

「げ、玄武…ココから出ないのか？」

「ココは、結界が張られている。中は玄武の聖域だが、外には、我々を見張っているやつかいな敵がいるからね。」

「敵って、黄龍が感じていた？」

「そう、ヤツを突破するのは、暁だけでは無理だからね…。」

暁は、龍綺にすっかり気を許しているらしく、彼の傍らでスヤスヤと眠ってしまった。

「あ、暁？…寝てるし…。」

温泉に浸かり、傷はいえたが、キマイラとの戦いで龍綺の体力は限界に近かった。

彼女の寝息を聞いていると自分にも睡魔が襲ってきたようだった。

「だめだ…俺も眠い…。黄龍…、休んでいい？」

大穴の開いた天井からは、夕闇に染まる空が少し見えていた。

つづく

男達の戦略と陰謀

「兄上、南の地方にも大型の化け物が現れたとの情報が入っております。」

王都。

王の座する都。

この彩国の王、遠雷が治める国。

14年前から、現れだした化け物。

民を苦しめ、豊かだった国を枯れさせる化け物を討伐するために弟王・凱漸は、王に、各地域の神々の社や祠の結界の強化をするべきだと願い出たが、軍事参謀である芳崖は、不確かな結界の力よりも、軍事力により化け物を鎮圧するべきだと強く出ていた。

「今、民が求めるのは、安全に暮せる場所である！」

「違う！民が求めているのは、強い国家である！化け物などに屈しない強い国家を求めているのだ！王よ、お聞きください！隣国の郷国は、度重なる化け物に対し、圧倒的な軍事力で対抗し、化け物をこの国へ追いやったのですぞ！」

低い声が玉座を揺らす。

「凱漸殿は、この国のことを本当にお考えになっているのか！あの化け物は郷国の仕掛けたこと、かの国を倒さねば、化け物は尽きぬことなく攻めてまいりますぞ！」

王は、苦痛な表情を浮かべたのち発言した。

「凱漸も芳崖も彩国のことを考えてくれている。それはとてもありがたい。しかし、どちらに向けて派兵するのは、しばらく待つて欲しい。」

苦渋の選択をしなければならない王に、2人の家臣は頭を垂れた。

王は、部屋に籠っていた。

「王さま…。何か召し上がらなくては、身体に障ります。」

そう言つて、国王に食膳を持つてきた者達に王は一瞥を与えただけで下がるように申し付けた。

その時、

「きゃっ…。」

王の足元に茶碗が転がり、中に入っていた茶が掛かった。

「も、申し訳ありません!!」

若い女の声がした。

遠雷王は、気にするなと女を下がらせようとしていたが、女は土下座をして、震えるばかりで、一向に立ち去ろうとしない。

王は、ため息を吐きながら、優しい声をかけた。

「気にするなと申したであろう? さ、顔を上げ…。」

王は、女の顎に手をかけて、くいつと上に上げた。

優しく掛けられた声は、女の潤んだ瞳と濡れた赤い唇に遮られてしまった。

「も、申し訳ありません…。」

「名は?」

王の声も震えていた。

「は…はい、木蓮と申します。」

名前を聞いた王は、その身体を抱きしめていた。

「王は、すっかり木蓮に夢中になっている。」

王宮に流れる噂。

凱漸は、いまだ回答を示さずにいる兄王に苛立ちを覚えていた。

自室で外を見上げる彼の心には、愛しい妻である繻子蘭の顔が浮かんでいた。

（私は、何をしているのだ…あの人を悲しませて…。）

そこへ、一羽の鳩がやってきた。

足に付けた小さな書に彼は手を伸ばす。

『6人の神の子、集結の模様。』

凱漸は、その文を燃やした。

（神の子が6人。あと、2人だ…兄上が軍を使うこと考える前に、彼らには、宿命に従い、化け物と戦ってもらわねばならない…。）

凱漸は、国庫の負担となる軍の使用には反対だった。

民の生活を守るため、軍事費を削減し、それを民の為に役立てようと兄王に進言したのも彼である。

小さい頃に宝物殿に忍び込んで、古文書を読み漁っていた凱漸は、この国に、神の子が生まれたと聞いた時、国が今までにない脅威に見舞われ始めているのだと悟った。

それでも、初めは、ただの思い過ごしだと考えていたが、化け物が民を襲い、国境が封鎖され、郷国も、箕油国にも入ることが出来なくなったと知った時、明らかに異様な空間に彩国が取り込まれていると感じたのだ。

凱漸は、王に自分の感じている不安と真実を進言し、この事態をどうするかと話し合いをしようとしていたが、芳崖が、突然、化け物が彩国を闊歩しはじめたのは郷国の陰謀だと言い出したのだ。

未知の世界の異形のモノを郷国の人間がどうこうできるものかと、兄には言ったが今まで武勲をあげてきた將軍の意見が、浸透しやすいのと違い、凱漸は、王と比べると10歳以上も年が離れているため、国の重鎮達に意見がなかなか通じなかった。

兄の軍が入ることの出来ない隣国に攻め入ろうと、王都の守りが薄くなったとき、もし化け物が攻めてきたら…。

万が一のコトを考えて、王都を守るためには、伝説の神の子を集めなくてはと思っていたのだ。

しかし、集めた情報によると神の子は、まだ、少年少女。

数々の経験を積み重ねられないとの情報があった。

内密に神の子を探し出す役目を背負っていた者からの書には、飛蝶街で、神の子と遭遇したが、思いの他、早く彼らが旅立ってしまった

たこと、彼らの元に強大な敵が現れ、6人は、バラバラになつてしまつたことなどが書かれていた。

「敵の手は考えている以上に早い…。神の子を狙つてくるとは…。

加奈陀…彼らを助けてやつてくれ…。」

男は、傭兵を生業とする流れ者だつた。

彩国中を回り、色々な豪族のもとで用心棒をして暮していた。

その旅の途中で、凱漸という男に出会つた。

とても気持ちのよい男で、同年代と言うこともあり、2人は酒を飲み、国の将来について語り合つた。

その話の中で凱漸は、自らの正体を明かし、男の剣の腕を信じ、自分と共に兄王を助けてはくれないかと頼んだ。

男の名を加奈陀と言つた。

国の為にというより、凱漸のため、友の為に働くのも悪くないと思つた。

国の用事と、視察で忙しい凱漸に代わつて、自分が各地方を回つた。

ある年の春。

久しぶりに会つた凱漸と花街に立ち寄つた。

女を買うなんてことは、2人にはあまり興味のないことであつたが、凱漸がその街一番の花魁に恋をした。

身分の違ふ恋であつたが、友人の彼女を強く思う心に本気を見た加奈陀は、花街を出て、甲村と言う村を治める豪族の傭兵となつた。

国のコトを思い、堅物であつた凱漸が花魁に夢中になるとは思つていなかった加奈陀であつたが、彼もまた、その甲村で生涯をかけてもよいと思う半身と出逢つた。

しかし、彼女とは添い遂げることが出来なかつた。

彼女は、彼が凱漸の依頼で剣の修行と称し、村を離れた隙に豪族の頭と夫婦となつてしまつた。

しかも、彼女は子供を宿していた。

豪族頭の命で、彼女の子供に剣を教えることになったときは、その子供を見るだけで心が痛んだ。
憎らしいはずなのに、その子・龍綺が愛しいと思う自分が許せなかった。

自分がこんなに苦しんでいるのに、彼女は、自分には何も言っただけで、加奈陀は村から去るしかなかった。

村から離れて彼はしばらく酒に溺れたが、凱漸がしばらく王都に籠ると聞き、彼女のことを忘れるため彼の代わりに視察の旅に再び出ることを申し出た。

その旅の途中、彩国が、化け物の闊歩する国へと変化していることに気付いた。

国境は見えない壁に遮られているように塞がれ、彩国の者達は、閉じ込められた状態となっていた。

加奈陀はすぐさまそのことを凱漸に知らせた。

作為的なものを感じた凱漸と加奈陀は、ある夜、同じ夢を見た。

それは、『神の子』という伝説の存在を示唆するもので、2人は彼らが彩国を救う救世主になるに違いないと、彼ら『神の子』を探してみようと考えた。

加奈陀がまず耳にしたのが、飛蝶街の月風の噂であった。

凱漸の調べた伝承によると月風の歌の秘密は『迦陵頻迦』の力によるものだとのことだった。

『迦陵頻迦』の近くには、必ず『朱雀』が存在するとも聞いた。

加奈陀は、美麗が、自分の娘が『神の子』であることを賭博場の店主に酔っ払って話していることを聞き、賭博場の雇われ兵となった彼らが月風を手に入れるためにした非情な行いを許せる訳はなかったが、紅蓮の中に何か光のようなものを感じた彼は、そっと2人を見守ることに決めた。

いつ月風を助け出そうかと思案していたところ、紅蓮の容姿が変化してきたことに気付いた。

（赤い髪に、金色の瞳…。）

それは、凱漸から聞いていた『朱雀』の特徴であった。

きつと、月風を助け出すのは『朱雀』である紅蓮の役目なのだと思うっていた。

しかし、それは、加奈陀も呆氣にとられるほど、スムーズに一滴の血も流すことなく1人の少年によって成し遂げられた。

白い髪に、白い瞳。

彼の容姿で、彼が『白澤』であることを悟った。

早くも3人の神の子を見つけたと思ったら、その彼を捜しに来た少女を見てまた驚いた。

黒髪に、赤い瞳。

しばらく様子を見て彼らに声を掛けようとした。

しかし、加奈陀は機会を逃してしまった。

朝の弱かった彼は、神の子達が出発した後に目覚めてしまったのだ。慌てて、飛蝶街を出た彼は、大きなキマイラを見た。

事もあるうちに、そのキマイラは、神の子をバラバラにしてしまったのだ。

（しまった…。）

彼は、また一からやり直しとなってしまうたのだった。

加奈陀の書を手にした凱漸は、神の子の中にお互いの息子がいることを知らない。

加奈陀にいたっては、神の子の中に自分が剣を教えた龍綺がいることも、自分を裏切ったと思っている女の真意も、かの女がこの世の人ではないことも知らないのである。

この一件が落ち着いたら、凱漸は、繻子蘭を王都に迎えようと考え

ていた。

きっと周囲は反対するに違いない。

けれど、離れている月日が長くなり、彼女からの手紙が少なくなつてくるとその思いは、強くなるばかりであつた。

「な、何と申されたのですか？」

ある日の玉座での兄王の言葉は凱漸を愕然とさせた。

「芳崖の申す通りに決断をしたと言つたのだ。」

兄王の横には寄り添うように愛妾に納まつた若い女がいた。

「兄上、正気ですか！！」

思わず立ち上がる凱漸に兄は言つた。

「お前は、間違っている。国境に結界など張られては居らぬ。郷国よりの難民であつた木蓮がその証人だ。」

抱き寄せる娘は、潤んだ瞳で王を見つめている。

「兄上！何故、このような場に！愛妾などを傍に置かれるのです！！」

「木蓮は、お前達よりずーと、頭のよい女子よ。それに美貌も備えておる。お前の戯言は聞き飽きた。国外でも何処でも行くがよい。」
信じられない王の言葉に、臣下の者も慌て始めた。

「これより、軍事政治面の指導者として、私の代わりには芳崖を据える。解散！」

呆然とする凱漸を他所に人々は玉座を後にした。

つづく

龍綺と暁の攻防

「だー！脱ぐなって言ってるだろうー！！」

龍綺の声が岩牢の中で反響する。

その声を掛けられた少女は、頬を膨らませている。

「これ、じゃま！動き難い。」

今まで裸で暮してきた暁は、隙あらば龍綺に与えられた上着を脱ごうとしていた。

「駄目！ちゃんと前合わせてー！！」

自分の服は彼女には大きいから、合わせたところで肌蹴てしまう。

「…困ったな…。」

「こまった？」

「そう、このままじゃ旅に出られないじゃないか…。」

「あー、このままでもいいよ？」

「それじゃ、駄目なのー！！誰かに見られたりしたら、どうすんだよー！！」

「みる？何を？」

「ヤなんだよ、暁の裸を他の男が見るなん…。」

言っている自分の言葉に詰まってしまった。

戸惑っている龍綺には全く気付かない暁は、ぴつたりと彼の腕に捕まり、柔らかい胸にハツとした龍綺は、慌てて彼女を突き放した。

「（俺…何、言った？）この辺りに店はないし…。」

ふと思い出す。玄武が語った、この地域の昔の話。

「なあ、玄武…この近くに化け物に滅ぼされた村があるんだっけ？」

考え込む龍綺。

「その村に暁が着れそうな服とかないかな。」

彼の案に玄武が感心した声を出した。

「しかし、その化け物は、先程のキマイラよりも強敵のようだが…。」

「

化け物の気配を感じ、黄龍が言った。

「ああ、それなら暁が共に行ければ大丈夫だろう。」

玄武がすかさず言った言葉に龍綺は聞きなおした。

「暁は、1人ではこの結界から出られないが、誰かと共になら出ることが可能だ。」

龍綺はキョトンと自分を見ている彼女の姿を目に入れて、真っ赤になる。

「こ、こんな格好で、敵とか倒したら、み、見えちゃうだろ!!」
真面目に言う龍綺に玄武は笑い、黄龍までもが笑っていた。

「みえる?何?」

ちよんちよんと龍綺の腕を突く暁。

やはり胸元が肌蹴ている。

龍綺は頭が痛くなりそうだった。

「それに、暁が付いてくるなんて、危険だよ。」

その事については、黄龍が答えた。

「それは、大丈夫だろう...玄武の御子という者は天性の武術の達人であるからな。」

「へっ?」

「暁は、強いぞ?」

につこりと微笑みかける暁。

「まだ、戦いは経験してないがな。」

ガクツとなる龍綺。

「と、とにかく!暁は置いていく!!服見つけたら直ぐ帰ってくるから!!」

「あー、おいてけぼり?や、なの。」
淋しそうな顔。

「うつ...だ、駄目!いいから、ここにいて。いいね?」

ごり押しで暁を置いたまま龍綺は、温泉の天井に開けられた穴から外に出た。

「何を焦っている...いや、違うな。龍綺、お前の暁に対する感情は

面白いな。」

笑いを含んだ黄龍の言葉に龍綺はカツと赤くなった。

「う、うるさいな……。女の子に慣れてないんだよ！」

甲村で自由に生きていた時は、女の子との接触があった。

女の子とは言っても、男女の違いなどほとんどない子供の頃の話である。

豪族頭の息子として、将来を有望されていたので、まだ、子供の頃から婚約だの、なんだのと話が上がっていたことは知っていたが、豪族頭の父が全て断っていた。

父と母の生活が愛のないものだとなっていた龍綺は、幼心に結婚というものは、好き合っていなければ悲しいのではないかと思っていた。

だから、父が縁談を断るのは、自分の意見を尊重してくれているのだと思っていたが、今思えば、いずれ閉じ込めることになる自分に伴侶など必要ないと考えていたのだろう。

それ以来、異性と接触したことはなかった。

旅を共にすることになった白妙を綺麗な子だとは思ったが、慈音があれほどに守って、大切にしているのだから、見守りたいと思っていたし、月凧は、手を出すと紅蓮がうるさそうだ。

それに、彼女は、雷紋を気に入っているらしい。

（だからって、暁？ 何考えてんだ俺……。）

自分の気持ちを押さえ込み、彼は今はもう滅びた村へと向かった。

空はどんよりとして、空気は生暖かく、嫌な気配を醸し出していた。

（何かいるのは、確かのようなな。）

辺りに何かいないかアンテナを張りながら歩く龍綺。

青龍の剣の鞘を手で押さえながら歩いて行く。

ガサツと後方で音がして龍綺は、剣を抜いて振り向いた。

「りゅー！」

そこには、いないはずの暁が草を掻き分けて立っていた。

呆然とする龍綺をよそに、彼女は龍綺が振り向いたのを見て駆け寄ってきて抱きついた。

「あ、暁！ど、どうやって…。」

戸惑う彼にぼわんと現れた玄武が言った。

「お前の気配を私の気で繋いでおいたんだよ。これだと一緒になくともあの結界から脱出することができるからね。」

「だ、だからって…無茶だ…。」

「ま、大丈夫でしょう。私と暁を信じなさい。ねえ、暁？」

「あー、げんぶとがんばったよ？りゅーたすける。」

小さくガッツポーズをする彼女。龍綺はため息をついた。

「玄武は、我等のように複数の神獣が合わさってなる者。」

黄龍が言い難そうに言った。

「どういうことだ？」

地響きがあった。

異様な気配。

剣を構える龍綺麗の目の前で、暁の額にある文様が光った。

「暁？」

その光から、細い剣が出てきた。その剣を暁は握り締めた。

「暁？」

龍綺の言葉には反応しない。覗き込んだ彼は、濃い紫に変わった彼女の瞳を見た。

木々が倒れて、大地が裂け、岩が飛んできたのを2人はジャンプして避ける。

暁は、回転しながら、太い木の幹に90度の角度で着地し、バネが足の裏に付いたように跳ね返り、大地を割って出てきた巨大な化け物に切りかかっていった。

（おい、おい、なんだよ！あれは！）

彼女の剣が化け物の肉を切り、化け物は悲鳴を上げる。

もう、服がどうこう言っている暇はなくなってしまい、龍綺は遅れ

を取り戻すように化け物に掛かっていった。

まるで、戦いの為だけに動いているような一部の隙もない暁の動きは、大きな蛇の吹く火を避けながら、その細い剣で首を一刀両断した。

噴出す血飛沫を避けることもなく、暁の着た龍綺の上着は赤く染められた。

本体を倒され、雑魚を相手にするしかなかった龍綺は、血で汚れた暁の元へ駆け寄った。

「暁！大丈夫か？」

覗きこむ彼女の顔に表情はなかった。

「暁？」

彼女の肩に手を置いた。その時、

「気安く触るんじゃないー！」

という少し高い男の声がした。

龍綺は、そうつと暁の頭上を見た。

そこには、半透明の白い蛇がいた。濃い紫の瞳が龍綺を見下ろしていた。

「おう！おめえが龍のガキか。」

ジロジロと自分を見る蛇の瞳に龍綺は呆然としてしまった。

「何…？」

「俺か？俺様も玄武よ！亀のヤツは話してねーのかよ？」

龍綺は人形のように動かない暁が心配になった。

「ああ？俺様が出てる時のじょーちゃんは、別世界に意識飛ばしてるからな、」

ぼわんつと煙のようなものがもう一つ暁の頭上に現れ、亀が出てきた。

それは、暁と出会ってからずっと自分と会話をしてきた玄武の姿だった。

「よう、亀！」

「はいはい、戦闘は終了しましたよ、引っ込んで暁を連れて来てく

ださいよ。」

「けっ、さっさと倒しすぎたか、…龍のガキ、暁のことさっさとモ
ノにしちまえよ！」

突然の言葉に龍綺が慌てた顔をした。

「暁は、いい女になるぜ！今のうちに、手え出しといた方がいいぜ
！」

「な、何言ってんだよ！！！」

蛇は、亀と顔を見合わせている。

「だってよ、なあ、亀？」

「はは…ほら、そんなに龍綺をからかつてはいけませんよ。」

龍綺が真っ赤になっているのを確認すると蛇は、満足そうな瞳を向
けて、

「あばよ、龍のガキ！近いうちにまた会おうな！」
そういうと消えていった。

龍綺は、暁の瞳がいつもの淡い紫になっていくのを見た。
光っていた額の紋様は黒にかわり、

「りゅー？」

いつもの彼女の声がした。

「わっ！」

彼女はまた彼に抱きついてきた。

「あつつき、りゅーと一緒にいる。」

ニコニコと笑顔の暁に龍綺はどっと疲れが押し寄せてきたことを知
った。

つづく

七首の大蛇

焼け落ちたり、何かの圧力によって壊された家。

道路や、壊れた家の玄関口に無惨な姿でさらされている死体。

村に足を踏み入れた龍綺と暁は言葉を無くした。

「りゅー、りゅー？怖い…これ、さっきの化け物がした？」

泣きそうな顔で龍綺を見つめる暁の視界に無惨にも死んでいった人たちを見せることが辛かった。

（やっぱり、連れてくるんじゃないかった。）

そんなことを思いながら暁の頭を撫でると暁が龍綺に言った。

「りゅー？あーは、大丈夫だよ。辛いことに目を背けてはいけないの、玄武が言ってたの。」

少し戸惑ったような、辛そうな複雑な笑顔を見せる彼女を龍綺は抱きしめた。

「りゅー？」

ハッとして彼女を放すと彼女の手を引いて歩いていった。

（何してんだよ、俺。当初の目的を忘れるなっ。服…そう、暁の服探しに来たんだっ。）

村にある家はどれも無惨に壊されていたが、坂の上にある大きな家だけは半壊の状態で、2人はその家を選び調べることにした。

「豪族頭の家かな…？でかいし…。」

壊れた床からは雑草が生えたり、水溜りが出来たりしていた。

寝室であつたであろう部屋を見つけた龍綺は、その部屋にあつた箆笥の引き出しを開けた。

湿気を帯びたり、虫が穴を開けている服がほとんどであつたが、暁が声を上げた。

「りゅー！？」

暁が彼女の瞳と同じ色をした着物を広げていた。

少し、湿っぽい匂いがあつたが、虫による被害はなさそうだった。

「それに着替えなよ。下は…これ穿いたらいい。」

紺色のズボンを龍綺が差し出した。

暁はにこつと笑ったが、服を手に戸惑っているようだった。

「暁？」

「これ、どう着る？あーわからない。」

龍綺はヤレヤレという表情をして、服を着るジェスチャーをする。

（この気持ちは、たぶん親みたいなものなんだろうな…暁にとって俺は、初めて接触した人間に過ぎないんだから…。）

彼女が徐に上着を脱ぎ捨てて胸を顕にしたので、龍綺は、声を上げ、ズボンで彼女の胸を自分の視界から隠した。

「りゅー？」

「あ、暁！人前で、裸になっちゃ駄目だ！！」

「…なぜ？あー、服着るよ？何がいけないの？」

ずいっと近寄ってくる彼女を腕を伸ばして近寄らせないようにする。

「りゅー？顔真っ赤…。だいじょうぶ？」

「だ、大丈夫だから、早く、服着て！！」

叫びにも似た彼の声に暁はびくつとして服を慌てて着た。

しゅんとした暁に龍綺は気の利いた言葉をかけることもできず、家の中を探索していた。

「！！」

先程感じたのと同じような地響きと、気配。

龍綺は剣を抜き、暁は先程と同じように額の紋様を光らせ、剣を出した。

「来る！」

家の壁が突然崩れた。2人は瓦礫から逃れるように外に飛び出し、驚愕の光景を見た。

「な、何だよ…さっき倒したのは、ヤツの一部でしかなかったのかよ…。」

7つの首を振りながら、威嚇の音を出している大蛇がいた。

大蛇の姿を確認すると共に建物の影に隠れた2人は、まだ気付かれていないようだった。

先程、暁が切り落としたのは、その首の1つでしかなかった。

「龍のガキ！ヤツは、それぞれ特殊な力を持つてるぞ、ヤバイな…
ココに巢食う化け物がコイツだったとは。」

玄武の蛇が言った。

「知ってるのか？」

「俺達の世界では悪名高い化けモンよ。…ってこたあ、あやつを召喚するほどの力のあるヤツが敵だということった。」

大蛇の視線から逃れるように、2人はさらに物陰に姿を隠した。

「今の俺達で倒せるか？」

剣を握る手に力が入る。

（俺に暁を守りながら戦いことはできるのだろうか…。）

「せめて、あと2人…。いや、一人でもいい、味方が欲しいもんだぜ。弱点は、身体を中心。ヤツラの首が生えている根元だ。…龍のガキ、これから暁は、お前の為に戦う。だから、お前も、暁の為に戦ってくれ。」

一瞬、暁がいつもの笑顔をみせたような気がした。

「…分かった。俺が、右から行って囷になるから、暁は左から攻めてくれ。」

2人は、二手に分かれて戦うことを決めた。

大蛇は、火を噴くモノ、氷の息を吐くモノ、衝撃波で岩を砕くモノ、大量の水を吐くモノ、眼光で物を石に変えるモノ、毒の息を吐くモノ、ただひたすら牙を向けてくるモノ。それぞれが大きな力を持っていた。

先に暁が切り倒したのは、八首大蛇の偵察の役割を果たす頭だったらしい。

（あれよりも、強いつて訳だ。）

仲間を殺され、怒りに狂っている大蛇はトコ口構わず火を噴き、岩を砕き、暴れている。

龍綺はその攻撃を交わしながら、暁の場所を確認すると、天高く舞い上がった。

「白龍！行くぞ！」

大蛇は龍綺を見つけると一斉に攻撃を開始し始めた。龍綺はそれを交わしながら、ヤツラの意識を自分に引きつけて行く。

どうにかして、ヤツラに一太刀でも与え負担を減らしたかったが、次々と繰り返される攻撃を避けるのが精一杯で、暁を気にしている暇もないほどであった。

（くそっ！）

暁は龍綺が大蛇を引き付けているうちに大蛇の本体に近付こうとしていたが、次から次へと現れる雑魚化け物に手を取られていた。

（このままでは、負ける…。）

龍綺も暁も焦っていた。

その焦りは一瞬の隙を見せ、大蛇の眼光が暁を襲った。

「暁イ！！」

命からがらとは、こういうことを言うのだと龍綺は思った。

石になってしまった暁を抱えて、黄龍の力で結界の中まで瞬間移動した。

火傷や、凍傷を負った自分の身体と抱えた彼女の体を洞窟の湯に浸ける。

龍綺の身体は癒えても、暁の身体は、固い石のままだった。

「黄龍、どうしたらいいんだ！？俺…俺。」

地面を拳で殴る。

驚愕の表情で固まってしまった彼女に触れたもう片方の手が、石の感触をつたえてきた。

「大蛇の術を解く術は、蛇であるモノにしか分からぬ。」

蛇といえば、玄武の中にいる神獣の蛇しか龍綺には思い出せなかった。

銅像のように立っている彼女を抱きしめる。

「ごめん…ごめん…」

自分の半分を持っていかれたような淋しさと痛さが龍綺を襲っていた。

「絶対、助けるから…待ってるよ。」

彼の頬を伝う涙が、石になった暁の肩に落ちる。

そつと撫でた彼女の頬も、抱きしめたときに感じた柔らかい胸も硬くて冷たいものになってしまった。

自分を全身で信じてくれていた。

自分と言う存在に巡り合えた事に心から喜んでくれた。

無条件で必要とされること。

それは龍綺が味わったことのない感情で、たとえ、自分が初めてあった人間じゃなくても彼女のコトを好きになっていたと龍綺は思った。

「暁…絶対、助けてやるからな。」

冷たい彼女の唇に自分のを重ね、龍綺は、結界の洞窟を出て行った。

「どうするつもりだ？」

「暁を石に変えたヤツだけでも倒す！」

龍綺の決意を止めることなど黄龍にはできなかった。

「龍綺、大蛇と戦うことを決めたのなら、お前に私は従おう。しかし、1つだけ我が願いを叶えてくれ。」

何時になく真剣な黄龍の言葉。

「何だ？」

「感じないのか？この近くに龍の玉がある。」

龍綺は姿勢を正し、気配を探る。

先程まで大蛇が暴れていた村の方とは逆の方角に自分と呼ぶ何かの存在を感じる。

「これは…。」

「緑龍の気配を感じるそれを手に入れるのだ。さすれば状況が変わってくる可能性がある。」

龍綺は、暁のことが気になっていたが、それが大蛇を倒せる術なら

ばと黄龍の示す方向へと飛び去った。

つづく

心の変化

静かに風の吹く、緑豊かな沢があった。

流れる水音は、近くに瀧があることを教えてくれる。

「あの瀧壺の中だ。」

龍綺は、しばらく沢に沿って飛ぶと瀧を前に大地に降り立った。

清浄な空気がそこにはあった。龍綺は、服を脱ぎ捨て、瀧つぼの中に入ってしまった。

数メートル先まで見える透明な水の中。

光の射さない深いところにぼんやりと光る小さな岩の祠。

龍綺は自分の中にある3つの玉が共鳴していることを感じた。

祠の岩を少し避けて中に手を入れると丸いものを掴んだ。

取り出したそれは、水の中で緑色に光る玉。その玉は、龍綺の手を離れ、彼の胸の中に吸い込まれていった。

（ぐっ。）

痛みに似た感覚に彼の口から大きな泡が水面に向かって昇っていった。

その感覚は、白龍の玉が自分の中に入ってしまった時にも感じたものだった。

水面から這い出して、一息つくと龍綺は衣服を身に纏った。

「青龍！」

その声で、龍綺の右手は一本の長剣が握られた。

「緑龍！」

新しく得た力の名を呼ぶ。

すると彼の身体を取り囲むように緑の光が包み、龍の鱗のような鎧が身に付けられた。

見た目とは違いとても軽い鎧であった。

「緑龍は、お前の力に合わせた鎧となってくれる。あらゆる攻撃を防ぐ力も持っているから、大蛇との戦いもやりやすくなるだろう。」

黄龍は、仲間が新たに加わり嬉しそうだった。

「白龍！」

龍綺の身体は天高く舞い上がった。

遠くからでも、村の中心にいる大蛇の姿が見える。

大蛇は地中に潜らず、村の真ん中で寝ているようだった。

その場所に向かおうとした龍綺に黄龍は声をかけてきた。

「龍綺、あれを……」

龍綺は、黄龍の示した自分の場所よりも南の方角に見知った顔を2つ見つけた。

龍綺が緑龍を手に入れるよりも数時間前、慈音と白妙はまだキマイラによる攻撃に耐えていた。

彼ら2人に襲い掛かってきたキマイラは、力の本体とも思える巨大な力を持つ魔物で、2人は苦戦を強いられていた。

「白妙……！」

慈音は叫んでいた。

鬼達を再び封印してしまった彼女は、自分の力で戦っているのだが、いつもの切れがなかった。

「だ、大丈夫だ……。来るぞ！」

キマイラの攻撃を避けながら、出来るだけ人里から離れようと二人は北の方角へと走っていた。

キマイラの行う攻撃の振動が2人の足並みを狂わすが、調子の出ない白妙を慈音は必死で守りながら、戟で、風を起こし、キマイラに反撃するが、直接攻撃ではないために慈音は舌打ちをした。
(足手まといになっている……。)

黒い服の女の霧を受けた時、鬼ばかりか自分にも何か呪縛が掛かったような、身体の重さを感じていた。

「白妙は、自分に迫ってくる雑魚を倒して、俺がアレを殺るから！」
慈音の気遣いに白妙は心が痛んだ。

「1人で大丈夫か？」

そう尋ねる彼女に慈音は、そつと頬にキスをする。

「大丈夫！勝利の女神がいるから！俺を信じて！！」

照れなのか、慈音は言いながら、キマイラの元へ飛び去っていった。胸元の鬼の石の封印の効果が、そろそろ消えようとしているのに、白妙の身体の重さだけは動くたびに足枷が、手枷が付くように自由を奪っていった。

（変だ…どうなっている？）

耳元で、鬼の封印をした女の声がした。

「それは、木蓮の恨みの力だよ。」

頭を上げるが人の影はない。

（太夫がどうして…。）

白妙は疑問に思いながらも、大木を背に、襲ってくる化け物を倒していった。

一方、白妙の状況が気になっていた慈音に、白虎が叱り付ける。

「バカモノ！目の前の敵に集中しろ！！お前が倒されれば、夜叉の姫も殺られるぞ！！」

「わ、分かっているけど…。」

「大丈夫だ、じきに鬼の封印の効力が切れる。だから、お前は集中だ！」

ぐいっとな顔をキマイラの方に向けられる。

「わかったよ…さつさと片付けてやる。」

白虎は元々風を操る力に長けており、キマイラの起こす風には影響を受け難かった。

慈音はキマイラに向かっていく。

「結合部を狙え、キマイラを殺る時の基本だ。」

「リョーカイ！！」

慈音は、風を巧みに使い、キマイラの頭部に風をぶつけ仰け反った頭部と胴体の結合部に戟を突き刺した。

「やったか！？」

けたたましい悲鳴を上げて落下していく。

戦によって齎された傷口からは、緑の体液が宙を舞っていた。

「いけない!!」

キマイラが落ちていく方向に白妙がいた。

慈音は慌てて白妙の方へ。

体調が思わしくない白妙は、キマイラが落下してきているのに気が付いていたが、自分を襲ってくる化け物に苦戦を強いられ、避けることが出来ない。

「白妙!!」

慈音の叫び声、彼女は最後の力を搾り出し、落ちてくる敵の体から飛び退こうとした。

キマイラの巨体は、白妙の僅か左に落ちたが、その場所は数十メートル下にある川への崖だった。白妙の身体は巻き込まれるように岩と共に落ちていく。

「白妙!!」

慈音は風の力を使い、彼女の落ちていく身体を追いかけた。

白妙は、必死に自分の手を慈音まで伸ばすが、落ちて来た岩に頭部をぶつけ意識を失ってしまった。

「くそっ!!」

慈音は、それでもなんとか手を伸ばし彼女の身体を引き上げようとしたが、彼女と共に落ちていた化け物の1匹が彼女の足を掴んでいた。

「こいつ! 白妙に触るな!!」

慈音は化け物の手を戟で切り落とした。

しかし、気が付いた時には水の中に落ちており、急流に巻き込まれるように2人は流されていった。

慈音は、白妙の身体を放さなかった。

（死んでも放さない!!）

水面に何とか顔を出した慈音は大きく息をする。

「慈音、水中の化け物が来るぞ！」

「嘘っ！マジで！」

水中に潜ると上流の方から大きな魚が物凄い勢いで近付いて来ている。

（今こそ、近くの聖域に飛ぶのだ！！）

白妙に教わった空間移動。

慈音は、この方法を教わりながら、上手く成功した試しがなかった。

（自分を信じる！！夜叉の姫の為に！！）

気を失い、額に傷を受けていた白妙の顔を見る。

慈音は彼女を強く抱きしめて、頭の中に聖域である入り口である鳥居を浮かべた。

大きく開かれた化け物の口が閉じると同時に2人の身体はその激流の中から消えた。

先に眼が覚めたのは白妙だった。

彼女は何回か咳をして、中途半端に飲み込んだ水を吐き出した。

自分が川に落ちそうになり、慈音に手を差し伸べたところまでは覚えていた。

ふと辺りを見渡すとそこは、轟々と燃えさかる炎。

人の気配はなく、ただ炎が燃えていた。

「前鬼？後鬼？馬頭鬼？牛頭鬼？」

自分の中に声を掛けると静かに返事がされた。

「私は？」

「白虎の御子が、この社まで姫様と共に空間移動されました。」

「随分北の方角に来たようです。」

「ここは、聖域か？」

「ココは、玄武の聖域のようです。何かの神事が執り行われていたようで、この炎が消えるまで人は訪れないようです。」

「願掛けか…？と言えば慈音は？」

鬼達は、慈音が今ある力をほとんど使い果たして空間移動を行った

こと、白妙の負った傷と呪術をはね返そうと更なる力を使ったことを伝えた。

「ど、何処にいるんだ!!」

白妙は、炎の向こうに倒れている彼を見つけて駆け寄った。炎によって赤くなっているはずの顔が青い。

耳を胸に付け、その鼓動を確かめる。彼の身体は冷たく、服からは水が滴っていた。

「何故だ、私の服はそんなに濡れていない…」

「それは、白虎の御子が姫の周りに風の壁を作り、水の浸入を塞いだからです。」

白妙は、慈音が自身のことよりも自分の身を案じて力を使ったことが信じられなかった。

「鬼達よ…この者は何故、これほどに私を助けようとするのだ…」
「鬼達は答えない。」

「それは、姫様が考えることですよ。」

鬼達はそう言うと言白妙の質問に答えてくれなくなった。
冷えた慈音の身体。

彼女はその身体に触れる。

「慈音？眼を開けるのだ。」

頬に触れても彼に反応はなかった。

「ばか者が…何故、私などのために…」

彼女は炎に彼の身体を向けて、濡れてしまった服を脱がせた。

「水が絞れるではないか…」

彼の身体に自分の着ていた服をかけて膝に抱きかかえた。

「今度は、私がお前に力を注いでやる。だから、早く目覚めるのだ…慈音…」

目が覚めた時、慈音は固まってしまった。

（な、何？）

裸の自分に下着姿の白妙が抱き付くように眠っていたのだ。

（白虎！どういうこと？）

（知らぬ…お前の意識がない時に同化しておるわしが目覚めている訳ではなかるう…。）

彼女の寝息が頬にかかり、柔らかい胸が自分の胸に触れている。

（で、でもさ、こ、これはヤバくない？わっ、や、柔らかい…。）

思わず、彼女の身体をぎゅぐゅと抱きしめてしまう。

（わしは、知らぬ。わしは、疲れておる。好きにすればよい。）

呆れたような言葉を残し、白虎はまた眠りについた。

抱きしめた彼女の身体に自分が興奮してきているのを必死に抑えていたが、思春期を向かえ、白妙に好意を抱いている身としては、仕方ないことだった。

白妙は、きつく抱きしめられて眼を覚ました。

「慈音？」

その声に驚いて、彼女の身体を離す。

「ぐ、ごめん…！」

正直に謝ってしまった慈音に彼女はキョトンとした顔を見せた。

「何を謝る？慈音は、私のために力を使い果たしたのだろう？」

彼女の顔がずいっと近付いてきたのを反射的に避ける。

「慈音？」

彼は、白妙の上着を掴んで彼女に背を向けてしまう。

「どうしたのだ？慈音！」

彼に手を差し伸べようとする彼女に

「ごめん、触らないで…、俺は大丈夫だから…。」

と彼はそれを拒否した。

白妙はその言葉が妙に心淋しい感じがした。

（ヤバイって、俺、これ以上彼女に触れたら…。）

彼は、徐に立ち上がり、白妙の方を見ずに、床に置いてあった自分の服を手にとると外に出て行った。

「ちよ、ちよつと廁…。」

まだ乾ききっていない服の感触に躊躇したが、そうは言っておられ

ない状況になつてしまつていた慈音は、そそくさと外に出て行つた。
残された白妙は、急に慈音に突き放されて心を痛めていた。

（何故、心が痛い？親にあれほど冷たくされても耐えてきたというのに…。）

慈音が与えてくれた、仲間という関係、優しい母、自分よりも大事にしてくれるという心。

その彼にほんの少し冷たくされただけなのに、白妙の心は小さな棘が刺さったかのようにチクチクと痛んでいた。

つづく

心の中の小さな炎

数分後、慈音が部屋に入ってきて、自分に掛けられていた上着を白妙に返す。

「ありがとう、寒くなかったよ。」

につこり、いつもの笑顔。

でも、慈音の様子はどこかよそよしくて、話もしてくるが、一向に眼を合わせようとしなかった。

「早く、皆と合流しないとね。木蓮太夫のことも気になるし…。」

彼女のことになる少し悲しそうな表情を見せる慈音。

白妙の脳裏には、赤い唇の女の囁きが蘇った。

あの鬼だけでなく、自分の体調を左右するほどの呪術。

神の子に呪いをかけられる力。

それが、慈音への思い、白妙への嫉妬であることを彼女は理解していない。

「聞いていいか？」

「んっ？」

「木蓮太夫は、慈音にとって何なのだ？」

彼の表情が固まる。

「……。」

言葉も出てこない。彼の脳裏に木蓮太夫に翻弄された情けない自分の姿が浮かぶ。

「太夫は…俺にとって姉同様の人だと思う。…けど…」

「けど？」

慈音は苦笑した。

「木蓮太夫は、俺のことを弟としてではなく、そ、その生涯の伴侶にしたいって思ってるんだ。」

「…夫婦になるのか？」

心にチクチク刺さっていた棘が深くささる。

しかし、彼女はその意味を理解できない。

白妙の質問に慈音は、頭を横に振った。

視線ははるか遠くを見ており、淋しそうだ。

「夫婦にはならないよ。俺は、彼女がどんなに俺のことを思ってくれてても、俺にどんなことしようと、姉なんだから。家族なんだ。」

白妙はかける言葉が見つからない。

「質問は、もういい？夜が明けたら皆を捜しに行こう。俺、疲れたよ。」

彼は、白妙の何かいいかげんな表情を無視するかのようにゴロンと横になった。

燃えさかっていた炎は1周り小さくなつてはいたが、部屋には温かい空気が流れ、2人を優しく包んでいた。

（何故だ、何故こんなに慈音と太夫のことが気になるんだ？）

背を向けて眠ってしまった彼にこれ以上聞くことなどできない白妙は、無理矢理その身体を横たえた。

「おはよう……。」

熟眠感はなかったが、慈音の声で眼を開けた。

神事の炎は凄く小さくなつていて、障子から入ってくる日の光が朝だということを知らせてくれた。

「もうすぐ、人が来ると思うから、外に出よう？」

促されるまま外へ。いつもなら手を差し伸べて自分を起こしてくれるのに。

白妙はそんなことを思いながら立ち上がった。

清浄な空気。

その空間は2人の身体を完全に元に戻してくれた。

建物の裏からこっそりと出た2人は、沢山の人の気配を感じていた。

「どうかしたんですか？」

慈音は、真剣そうに話し合いをする大人達に尋ねてみた。

大人達は、最初、何故こんな朝早くに子供が居るのかと言う眼で見

てきた。

（やっぱり、子供に見えるかな。）

身長だけはすすくと伸びた慈音は少し残念そうだった。

彼は、白妙を守るために早く大人になりたかったのだ。

答えてくれない大人達に少し諦めを感じていた時、長い顎鬚を蓄えた老人が声をかけてきた。

「主達は、神の子じゃな。」

その声は思っていたよりも境内に響き、慈音達を無視していた大人達を振り向かせた。

「分かるんですか？」

慈音の問いに、老人は、軽快に笑って見せた。

「ほっほっほっ、その容姿、纏う氣。全てがそうだと語っておるわい。」

大人達がさきほどとは違う雰囲気で2人を取り囲んだ。

「しかも、そなた達、結界の炎の燃えさかる宮社の中で一夜を過ごしたのであるう？」

周りからは感嘆の声が上がる。

「…大老！」

口々に出る言葉に、老人はすつと手を上げると徐に土下座をした。

「えっ、ちょ、ちよつと！」

戸惑う慈音などを無視して、周囲の大人達もそれに従う。

「わっ、ちよつと顔を上げてください！そんなっ、困ります。」

慈音の感情の籠った声に老人は顔を上げ、皆にも同じようにさせた。

「あの、なんなんですか？」

老人は、重々しい雰囲気で答えた。

「玄武の御子が危ないのです。」

玄武の御子という言葉に慈音と白妙は顔を見合わせた。

白妙にとっては、久しぶりに慈音と視線が合った気がしていた。
「話を聞かせていただいてもいいですか？」

「ここは、先祖代々、玄武の神さまを祭る総本山として知られておる土地なのですが、十数年前のある年、この場所より北にある鉾山の村で農作物が全く育たないという大飢饉が起こりました。その飢饉は、その地域だけに起こった不思議なもので、豊かな水源はあるのに森の木々さえ枯らしてしまうのモノでした。」

大老と呼ばれる老人は話を続けた。

「村の長である男は年若い者でございましたが、村の人の為、どうすればよいのか、度々この本山に文をよこしておりました。」

大老は、村に豊穰を願う祈りを玄武に捧げてみたが、どうもその村に届いている感触がなかったという。

ところがある日、その村から1人の男が本山を訪れてこう告げた。

「黒尽くめの呪術師が現れて、玄武の洞窟に生まれたばかりの赤子を生贄として捧げよと言つて来た。」

黒尽くめの女という言葉に2人は反応する。

「自分は、子供の居る立場の人間として、また、玄武を信仰する者として、玄武が生贄を望んでいるとは思えない、だから、止めて欲しいのだと。」

本山の宮司達が村に向かおうとしたが、化け物が激しく行く手を阻み、辿り着くことが出来なかった。

大老は、宮社にある鏡で村の様子を伺うことにした。

「何かよからぬことが起こるのではと思つておつたのです。」

鏡は、やがて、その村長の下に玄武の御子が生まれたことを知らせたが、長はこともあろうに自分の子供を生贄として洞窟に置き去りにした。

「呪術師が何を考えておつたのかは知らぬが玄武の御子はすでに捨てられ死んでいった赤子のようににはならず、成長された。」

「生きてるんですか？」

大きく頷く大老。

「玄武様の御加護以外には考えられません。私共は、なんとかして御子どのお助けしようとしたのですが、その地に八首の大蛇が出

没しましてな…。敵は、御子様を一生あの洞窟の中で過ごさせようとしておるのですよ…。」

「本当に誰も助けられなかったのか？」

「つい先日、御子様のもとに光り輝く龍の氣が近付くのを感じましたが…暫くして、御子様の氣配が消えてしまいました。」

「死んだの!？」

大老が首を振る。

「いえ、かすかにしか、感じられなくなっただけです。これは、御子様に何かあったに違いないと清浄なる大火でもって、姫様のもとに氣を送り続けていたのです。」

慈音は、少し腕組をしながら考えを言った。

「俺が思うのは、たぶん玄武の御子の傍には、龍の御子である仲間がいると思うんです。」

おおという声上がる。

「俺達は、仲間を探して旅をしていました。でも、黒尽くめの女の妨害に会い、バラバラにされてしまいました。その玄武の洞窟に御子がいるというのなら、俺は、その場所に行かなくてはいけないんです。」

慈音の決意に大老を始めとする大人達が土下座した。

「御子様方!どうか、どうか玄武の御子様をお助けください!!!あの方が亡くなられては何もお仕舞いです!!!どうかどうか…。」
その様子を見ていた慈音が白妙の方を向いた。

「白妙…いい?」

「な、何故だ。確認など取る必要などない!」

白妙はプイツと横を向いてしまった。

(姫…今のは少し可愛げがないですぞ?)

牛頭鬼の声がした。

白妙はそつと慈音の方をみると、彼はすでに大老の方を向いていて話を始めていた。

宮社を出た二人の下に同じ年頃の娘が駆け寄ってきた。

「御子様、御子様。」

仄かに頬を染めて酔ってきた2人は、白妙の方に1度会釈をすると慈音に1つの包みを指し出した。

「これは？」

「握り飯です、旅の途中にでも召し上がりください。」

まだ温かいそれは、タケの皮に包まれていた。

慈音はそれを受け取ると笑顔でお礼を述べた。

「ありがとう…君達の御子様はきっと助け出してくるからね。」

「御子様、頑張つて！」

娘の1人は背伸びして、慈音にちゅつとキスをした。

突然のことに慈音は呆然としてしまう。

「ま、まいったなあ…。」

「御子様、玄武の御子様を救い出していただければ、私の娘をあなたに…。」

その社を守っている一族の長らしい男が、先程慈音にキスをしてきた少女を指して言った。

少女は、まんざらでもないらしく、慈音と目があうと母親の後ろに隠れてしまった。

「け！結構です。」

慈音は慌ててその申し出を断る。

しかし、さっきまで母親の後ろに隠れていた少女に腕を組まれてしまう。

白妙は、そんな少女とのやり取りを他人事のような目で見ていたが、心に何かが引つかかっていた。

（なんだ？この感情は…。）

ようやく、少女から逃れた慈音が照れながら白妙のもとにやってきた。

振り返ると少女はいつまでも彼らというか、慈音に手を振っている。

「なんか、可愛いね。」

そう白妙に言つて来た慈音に彼女は答えることが出来なかった。

つづく

温泉と思春期

玄武の御子のいる洞窟に向かう途中、慈音と白妙は龍神の気配を感じた。

「行ってみよう！」

緑豊かなその土地の真ん中に探していた彼が立っていた。

「龍綺が無事でよかったよ。」

友は互いに握手をした。

「でも、どうして、ココに？」

慈音は、キマイラとの戦いのことや、玄武の社での話を聞かせた。

「そうか……。手助けに来てくれたんだ。」

「玄武の御子もいるんだろ？なんか大老が心配してたけど……。」

龍綺の瞳が僅かに動揺した。

彼は、緑龍の鎧を解き、2人を暁のいる洞窟へと案内した。

「俺がちゃんと彼女を守らなかったから……。」

2人は石になり動かない1人の少女の姿を見た。

龍綺は、暁との出会い、大蛇との戦いについて話をした。

「暁は、龍綺を待ってたんだね。」

そつと龍綺は石になった彼女の頬に触れる。

慈音がそんな彼をみて何か納得したように頷いた。

「な、なんだよ……。」

慈音の笑った顔に龍綺は照れたように膨れて、彼の頭を羽交い絞めする。

「わっ！て、照れてるからって、何すんだよ。」

怒っている台詞なのに、顔は笑っている。

まるで、猫のじゃれあいのようなのだ。

白妙はそんな2人の様子を横目にしながら、暁の姿に視線を移した。
（聖域に入っているというのに、石化が止まらないのは、大蛇特有の術なのか？）

（おそらく、しかし：八首大蛇とは、手ごわい相手です。）

悩んでいるとある言葉が耳に届いた。

「好きなんだね、暁のこと。」

じゃれあっていた2人の方を見た。

（好き？）

「う、うるさい！」

言われた龍綺の顔は耳まで真っ赤だ。

「お前だって、白妙のこと好きなくせに！」

龍綺の一言に慈音は自嘲気味の笑いを浮かべた。

「そのことは、もう、いいんだよ。」

そう言つて、龍綺の背中をぽんと叩いた。

慈音の言葉に白妙は呆然となっていた。

そんな彼女の顔に慈音は優しい笑顔を向けた。

「えーと、龍綺の言つたことは気にしないでいいからね。」

白妙の返事はなく、慈音は、大蛇殲滅のために龍綺と話を始めた。

「じゃあ、8つのうち、1つは倒したんだ。」

龍綺は、それぞれの持つ特殊能力について答える。

「白妙。」

突然名前を呼ばれて彼女はビクツとした。

「な、何だ？」

いつも冷静な彼女がうろたえている。

「大丈夫？もしかして、疲れてる？」

「も、問題ないぞ！」

慈音は少し納得していないような顔を見せたが、すぐに本題を切り出した。

「白妙、鬼達を総動員させてもいい？」

「えっ？」

「（ホントに大丈夫かな？）今、大蛇は7つの首になっているんだ。で、俺と龍綺と白妙と鬼達で7人。1人1首ずつ倒すってのは、どうかなって話していたんだけど……。」

「あ、ああ、そうか、そうだな…。そうしよう。」

おかしいと思いながらも、慈音はそれ以上彼女に追求はせず、翌朝には作戦を実行しようと決めた。

その後、龍綺と慈音は、洞窟の入り口である鉄格子の方へ行き、その間に白妙に温泉を薦めた。

龍綺には『白妙と2人きりになりたくない』と慈音が考えているように、2人の間に何かあったんだと思っていた。

「明日の大蛇戦だけど、石に変えるヤツの動きをどうする？」

「えっ、ああ…黄龍が言うには、あの眼光を跳ね返すほどの盾があれば大丈夫だろうというから、大丈夫だと思う。」

龍綺は、新たに手にした緑の玉の力について慈音に教えた。

「段々、強くなっていくな、お前。」

そっという慈音に龍綺は笑った。

「はじめは…力を得てどうするんだって思ってた。でも、力を得ないと俺は、暁1人守れない。」

誰かを守りたいと思う時、人は力を欲する。

ただ漠然と世界の危機だからと言われ、神獣の言うがままに旅をしてきた。

命の危機も感じたがそれが使命だと戦ってきた。

「母の命を犠牲にしてまで生きたから、とりあえずは、その原因である黄龍の為に頑張ってきたけど、実際、俺は誰の為に、戦ってるんだって感じだった。でも…仲間が出来て、ああ、こいつらといると安心するなって思った。戦わなくてもいい世界がこいつ等と過ごせたら楽しいだろうなって思ったんだ。」

慈音も同じ想いだった。

自分には、愛してくれる母も、花街の仲間もいる。けれど淋しかった。

こんな贅沢を言うてはいけなかったが、自分のいる場所はココではないと幼い頃から思っていた。

母のことは愛しているが、知られてはいけない感情だった。

だから、旅に出て自分の探している場所を見つけないという思いをずっと抱いて生きてきた。

白妙と初めて出会ったときは、自分にとっての居場所と出会えたような感じがした。

もちろん、彼女の美しさに心を奪われもした。

「暁は…俺のそんな思いを全部捧げられるっていうか…全身で俺を信じてくれて、ホントに優しく笑ってくれるから…。」

「絶対、助けような！」

慈音が肘で龍綺を突く。彼はニツと笑った。

「俺のことより、白妙と何かあったのか？」

ギクツとなる慈音。

「ははっ…俺ね、白妙見たり、触れたりすると、押し倒したくなっちゃうんだ。」

「へっ？」

「やりたい！！って男の本能がムクムクってね…龍綺は、暁と接しててないの？」

ドキツとした。

暁に抱きつかれて、その柔らかい胸の感触に触れて、戸惑っていた裏でとてつもなく嬉しいと感じていたことを見抜かれたように思った。

「俺は、白妙としたいけど、白妙はちょっと普通と違う育ち方してるから、好きとかそういうことには、全く興味がないみたいでさ、あんまりがつつくと嫌われるだろ？だから、あえて眼を合わさない、触れないって決めたんだ。」

ゴロンと横になる。

「不自然だった？」

「めちゃくちゃ…あれは、ちょっと彼女が可哀想かもな。」

「ははっ…。」

人の気配に振り返ると半乾きの髪を結い上げた白妙が立っていた。
「終わったの？」

頷く彼女に龍綺は立ち上がる。慈音もそれに合わせる。

「すぐ上がるけど、寒くなりそうだったら、来ていいから。」
僅かに逸らされた視線で慈音が言う。そして、すれ違った。

「お前、経験あるんだっけ…?」

湯に浸かりながら龍綺が言った。

「それを言われると苦い思い出しかないんだけど、始終見てたからね、姐さん達とお客がしてるの。」

湯だけではない暑さが龍綺の頬を染める。

「なんか、姐さん達は、面倒見がいいっていうか、俺の童貞捨てる候補とかにもなってくれてさ、恥ずかしいやら、嬉しいやらだったんだ。」

照れもせず言う慈音に、龍綺の方が照れてしまう。

「でも、母さんは、父さんに出会ってからは一途だったし、母さんから、好きな人とするのが一番幸せなことだから、姐さん達のコトは気にするなって言われ続けてきた。だから、いつか街から出て好きになった人と結ばれたらいいな、母さんみたく、1人の人を好きで居続けられたらって思ってた。」

慈音の顔が苦しいものになった。

「……俺は、木蓮太夫を狂わせてしまったんだ。彼女の気持ちに気付いていたけど、俺には姉そのものだったから、彼女の俺に対する思いは、俺と同じなんだって思ってた。」

龍綺はそれ以上慈音に聞くことは出来なかった。

「白妙を待たせてもいけないし、出るか…。」

2人は湯から出た。

つづく

大蛇殲滅作戦

「じゃあ、昨日立てた作戦をもう1度言うから。俺は石のヤツ、慈音は、衝撃波。白妙は、氷。牛頭鬼は、力自慢。馬頭鬼は、水。前鬼は、火。後鬼は、毒。」

すでに鬼達は、白妙から出ており、彼女の命じた通り、龍綺の指示に従った。

「いち早く倒したものが、首根つこの急所を叩く。いいな？」

慈音はチラッと白妙を見た。

「大丈夫？俺、倒したらすぐ助けに行くね。」

いつもの優しい顔。しかし視線は僅かに左。

「そ、そんな気遣いは無用だ！」

その事に少々腹を立ててしまった白妙はそっぽを向いてしまった。

「おい、行くぞ！」

夜が明け切らぬ薄暗い中、村の中心で眠っているヤツらに8人は飛び掛った。

各々が懸命に戦っていた。

慈音は、どうしても白妙に気をとられるが、風の壁を作り、大蛇の放つ衝撃波をやり過ぎ、龍綺は、大蛇の眼光から身を守る緑龍の力を確信しながら戦っていた。

白妙の鬼達は、血みどろの戦いを強いられていたが、後鬼にいたつては、自らの力が毒を放つものであったため、それほど苦戦もせず、大蛇の首をその爪で切り裂いた。

牛頭鬼は、地上で、大蛇の頭部を受け止め、押し留め、鋭い爪をその頭部に食い込ませていた。

龍綺は度重なる攻撃で大蛇の首を切り落とすことに成功していた。彼は、僅かに石化により動かなくなっていた右足が軽くなってきたのを感じると、すぐさま大蛇の首元へと急いだ。

鬼達は龍綺への気を逸らすために戦いを続け、慈音は、龍綺の次に

大蛇を倒すと一目散に白妙の元へと飛んだ。

氷の息を吐き、周囲を凍て尽くしていく大蛇の攻撃を避けながら、剣から発する明王の炎をぶつける。

氷と炎が激しくぶつかり合うが、白妙の力の方が僅かに押されていた。

（くそっ！）

鬼達はまだ戦っていて呼ぶことが出来ない。

（駄目か…。）

そう思った瞬間自分を庇うように立つ影ができた。

「白妙、負けるな！」

その影は慈音で、彼は風の壁を後一步で到達するはずだった氷の息から防いだ。

「今のうちに、横から攻撃して！」

白妙は、大きくジャンプをして、明王の炎を大蛇めがけて放ち、凍りついた木を足場にして、大蛇の首めがけて剣を振り下ろした。

響き渡る絶叫とともに大蛇は倒れ、その瞬間、戦っていた他の首も絶叫を上げて倒れていった。

龍綺が大蛇の急所に剣を突き刺したのだ。

鬼達は、すぐさま白妙の中に戻り、彼女は、慈音を振り向いた。

「慈音！」

そこには、腕を凍りつかせ苦痛に喘いでいた彼がいた。

その痛みに彼の身体は前屈みにばたつと倒れた。

白妙は駆け寄り、彼の身体に触れる。

何時しかのように冷たい彼の身体。

「い、イヤだ、死ぬな…慈音…！」

白妙は彼の身体を抱きしめる。そして、無意識に彼とともに空間移動した。

彼女が移動したのは、洞窟の湯の中で、彼女はまた慈音の身体を離さない。

「慈音、イヤだぞ？また、私を庇って倒れるな！」

慈音は、湯に浸かった瞬間に気を取り戻していたが、混乱している白妙に強く抱きしめられてどうすればよいか悩んでいた。

「白妙？」

彼の声。凭れる様な姿勢になっていた彼の声は白妙の肩にかかった。

「慈音？」

「…俺…もう駄目かも……。」

「ど、どうすればいいのだ？私に何ができるのだ？」

慈音の中の内なる獣が嗥けている。

白妙の中の鬼達は戦いに疲れ果てすっかり寝入っているようで白妙の助けの声に返事をしてくれない。

「慈音……。」

彼は白妙の肩に手を置くと真っ直ぐに立った。

「慈音？」

白妙は涙目だ。湯に落ちたときの雫か、涙かは分からないものが頬を伝っている。

「大丈夫。ちょっと困らせて…みましたって…やりすぎた？」

苦笑している慈音に彼女の唇がキュッと締められる。

サッと上がる手に叩かれると思った慈音は反射的に身を強張らせたが、次の瞬間自分の胸に飛び込んでくる彼女の身体を感じた。

「白妙……。」

「ばかもの…本当に心配したんだぞ……。」

彼女の身体を抱きしめるかどうかで悩んでしまった慈音は呟いた。

「俺のこと…好き？」

白妙がハッと顔を上げる。

「ご、ごめん！！今のなし。…ほら、龍綺が帰ってきた。」

慈音は、天井から湯の中に落ちてきた龍綺が真っ直ぐ暁の元へかけていく姿を見た。

ざぶざぶと水をかき分けて走る龍綺。

「暁……！！」

彼は暁を抱きしめていた。

固く冷たかった身体は徐々に柔らかくなっていく。

「……りゅー？」

か細い声がした。

自分の背中を掴む手が、見つめてくる目が愛おしかった。

「暁。」

「りゅー……好き。ありがとう……。」

顔を自分の胸に埋めてくる暁を彼は抱きしめた。

一方、慈音は、白妙の身体を離し、龍綺に声をかけようとした。

そんな彼の袖を後ろにいる白妙が引つ張っていた。

「何？白妙も岸に上がろう？」

いつもの彼の笑顔。しかし、白妙は動かなかった。

「どうしたの？具合が悪いの？」

慈音は心配になって彼女の顔を覗き込んだ。

「しーろたえ？」

くいつと上げた彼女の顔が慈音に近付き、その唇にちゅつとキスをした。

びっくりしたのは、慈音で、彼は思わずのけぞって、口を押さえ、

湯の中に尻餅を付いてしまった。

顔だけが水面に出ている状態の彼を他所に白妙は岸へと上がっていき。

慈音は慌てて立ち上がり、白妙のあとを追う。

「白妙……い、今のって……。」

ぱつと捕まえる彼女の細い手首。

振り向いた彼女の頬は赤く蒸気していた。

「イヤだったんだ。」

「へっ？」

「口付けされている慈音を見るのは、イヤだったんだ。」

思い出す、玄武の社を出る時に行われたことを。

「えっ！」

彼女をグッと引き寄せる。水面が大きく揺らいだ。

「そ、それって…ヤキモチ？」

カツと白妙の顔が赤くなる。

「分からない…でも、」

慈音は抱きしめていた。

「慈、慈音？」

「俺は、白妙が好きだから。それは覚えてて…。」

ふと緩められた腕。

見上げると慈音の嬉しそうな顔があった。

慈音は岸にいる龍綺と視線があった。

お互いに腕を上げる。

「な、なんだ？」

腕の中で不思議そうな顔をする白妙の頬に慈音はちゅっとキスをした。

「慈！」

「色々しなきゃいけないコトがあるけど、白妙のことに關しては遠慮なく行くから。」

「なっ!？」

ニツと可愛い笑顔に白妙は少し嫌な予感がした。

つづく

集光の緑の乙女

王都の少し南にこの国の海の玄関口と言われる大きな港町・集光がある。

人々の活気が一番ある豊かなこの街は、王都に使える軍師・芳崖の妹が嫁いだ街であつた。

彼女の夫を選んだのは芳崖自身で、その選択は、彼がどんなに妹のコトを大切にしているかを物語るものであつた。

当初、芳崖は妹の嫁ぐ相手として凱漸を考えていたが、彼は、王以上に多忙な男で、妹が淋しい思いをするかもしれないと今の相手を選んだ。

人徳があり、真面目な男は、国一番の貿易街を治める豪族の息子であつた。

2人は芳崖の言うままに婚姻を結んだ。

芳崖の妹・芳蘭は、鬼將軍との異名を持つ彼とは違い、優しく、大らかで、兄の選んだ男とも性格が合い、2人は幸せな生活を送っていた。

そんな仲のよい夫婦の下に1人の娘が生まれた。

娘は深い緑の色の髪に薄緑色の瞳を持つ不思議な容姿を持っていた。母となつた芳蘭と父になつた燐水は、喜びに一際心を躍らせた後、兄・芳崖のことを考えた。

戦闘や、政治において柔軟な考えを持つ彼には、唯一妹達夫婦を悩ませることがあつた。

彼は、自分のことはさておき、普通を好むのだ。

女の好みも、自分以外の家族の出世は「よし」とはせず、服装なども、特に容姿に関しては、うるさいほど普通を重んじた。

流行モノだといって、普通らしからぬ装飾のされた髪飾りなどは、簡単に却下され、職人の技術の粋は込められているが、地味なものを「普通のモノ」として、妹に与えた。

「こ、こんな緑の髪に緑色の瞳だなんて…兄様はきつと許してくれないわ。」

我が子は可愛いが、早くに親を亡くし、兄に育てられた芳蘭として、兄を失望させたくなかった。

妻の思いを知っていた夫の燐水は、そこである考えを持った。

国を蹂躪する化け物により親を亡くした子供の1人を引き取り、その子を我が子として、兄に知らせ、生まれたこの赤子は、兄である芳崖がこの街を訪れると分かった時には悟られぬよう北にある朱雀の社で育ててもらおうというものだった。

「そんな！」

「兄上が来るのは、よくても1年に1度。もちろん、引き取った子供も、この子と同じほど愛情を持って育てよう。」

芳崖の「普通を好む」という事以外に妹の芳蘭には、その他にも気がかりのコトがあった。

「兄上は、頑固な方だけれど、情の厚い方。生まれたこの子だって受け入れてくれると思うわ。けれど、ここ最近の兄上は…。」

王の弟君である凱漸と何かと意見をぶつけているという。

「凱漸皇子は、神の子を捜すのに躍起になり、国のことなど気にしていないとのこと。義兄上と話が合わなくて当然だよ。」

神の子のことを夫婦は知っていた。

その者を手に入れると幸福がやってくると。

しかし、それとともに、その命を狙って化け物が寄ってくるとも言われている。

「この子は、神の子じゃないわよね？」

少し不安になって芳蘭が尋ねた。

「ち、違っただろう…ほら、神の子は胸元に独特の文字があるらしいし…。それに、芳崖様は、そんな伝説に惑わされる方じゃない。」

最近噂になっていることだった。

「私は…この街には化け物の出現が少ないけれど、やはり、異形のモノを退けるには、神の子は必要だと思っているの。でも、兄上は

…神の子こそ、災いの元だと言い出しているのよ？もし、可憐がそんな風に思われたら…。」

腕に抱く赤子を抱きしめる。

「だ、大丈夫だよ…義兄上にとって、お前はかけがえない妹だ、その妹が心から愛している子供をどうにかしようなんて思ったりされないよ。」

優しい燐水。芳蘭はホツとした息を付き、彼に凭れかかった。

「でも…兄上は最近、富に軍事費を増やすことばかりを言ってる…。」

「軍事費をもつと増やすべきだとは、前から言っていたではないか。」

「でも、あのように敵を作るような発言を繰り返しては…。」
夫婦は寄り添いあい、ため息を吐いた。

「この街のように平和で活気のある国に早くなって欲しいね。」

集光は、国一番の貿易の街で、南にある朱雀の社のお陰か化物が周辺に現れることがなく、人々は平和に暮らしていた。

この街の人のほとんどが朱雀を信仰しており、明るく世話好きでそんな人柄のよい街としても有名だった。

しかし、人口の偏りを防ぐため、街の住人となるには幾つかの審査が必要で、その審査を任されたのが燐水の一族であった。

「さて、愛しい可憐には、どんな兄弟が必要だと思う？」

水際の言葉に芳蘭はにっこりと微笑んだ。

「そうね…。あなたのように優しく、兄上のように強い男の子がいいわ。きっと可憐を守ってくれるもの。」

芳蘭の胸の中ですやすや眠る赤子はこの先に待ち受けている過酷な運命をまだ知る由もなかった。

「ずるい！ずるい！ずるい！！」

可愛い声が屋敷の中に響いていた。

その声を聞きつけて芳蘭が呆れた顔でやって来た。

「可憐、何事なの？」

「母上！兄さまは、ずるいよ！！あのような立派なものをもらって！！」

「お前は、女だろ！！剣なんか必要ないだろ？」

「同じ年の男の子。名を芳際と言った。」

彼は、芳蘭夫婦が望むような優しく、剣術に優れた腕を持つ少年へと成長していた。

「可憐だって、剣術を習っているのに！兄上だけ、誕生日に剣で、私は……」

「素敵な洋服をお父様から戴いたでしょう？」

物心付いた頃から、可憐は兄である芳際の真似ばかりをし、彼が勉強に力を入れると負けじと勉強に励み、彼が剣を習い始めると自分も習うのだと言って聞かず、そのお願い通りに両親は負けてしまった。

多少の我儘を許してしまう理由が芳蘭夫婦にはあった。

人とは違う、髪の色に瞳の色を持つ可憐は、屋敷の外に出て、知られてはいけない存在として育てられた。

屋敷の信頼の置ける者以外を彼女のいる離れに近寄らせず、彼女には「屋敷の外に出ると身体が弱ってしまう病気だ」と嘘を付いていた。

しかも、年を取るに従って、可憐の胸元に浮かび上がってきた『麒麟』という文字。

神の子の存在を察知したら直ちに王都に知らせよとお触れがあった。

それは、凱漸皇子から出されたものであったが、もし、それに従えば兄を裏切るようで憐水と芳蘭は、その命には従えず、ひたすら可憐の存在を隠して暮してきたのだ。

そのため、彼女の生活空間は、離れと僅かな場所だけだった。

勉強は両親が、裁縫や行儀作法はばあやが行ってきた。

自由のようで自由を許されない可憐は、自由に屋敷と外を行き来している芳際が羨ましくて仕方ないのであった。

「お母様も、お父様も、お前のコトを思っ言ってるんだから、我儘言つなよ。」

「兄上には、分らないもん！」

彼女は大きな瞳に一杯の涙を溜めて部屋の中へと入っていった。ため息を吐く母と兄。

「その内、お腹空いた」と言っ出てくるんだぜ。」

芳際の言うことはいつものことで、可憐は単純なところがあつた。母は笑つて照れている兄を見る。

10歳を越えた時、芳蘭夫妻は、芳際に全てのコトを打ち明けた。自分の実の親は、化け物に殺されたこと、自分がこの家で育てられる理由について、芳崖という伯父について、そして、可憐のこと。彼は、屋敷の外に出られない可憐が不憫だと思つた。

「いつか、この国の情勢が落ち着いたら、兄上には、私から可憐のことを言おうと思ってるの。兄上は、今お国の為に心血を注ぎ込んでおられるから可憐のことで御心を煩わせてはいけないわ。だから、それまで芳際には、可憐を守つて欲しいのよ。」

彼は、両親の言葉を守つてきた。

ある年、燐水と芳蘭に衝撃的な出来事が起こつた。

それは、凱漸の謀反と言う事件だつた。

「いざとなつたら、凱漸様を頼りにしようと思つていたけれど……国王は凱漸様を拘留してしまわれた。」

可憐が15歳になるという年の春、凱漸は、国王と意見を対立。謀反の疑いで拘留されてしまった。しかも、その拘留を進言したのは芳崖だという。

そんな母と父、そして兄の思いなど知らない可憐は我儘を言つていつものように困らせていたのだ。

妹の我儘は、まだ、許せる範囲だ。

しかし、芳際は思った。

剣を習いたいと言ってきた可憐の腕が万が一自分よりも強くなってしまったら、兄の威厳がなくなるなあと。

「そうね、兄上より私の方が強くなるかもね！」

憎らしい口まで利く妹に芳際は呆れてしまった。

「そんなことあるか！」

彼女は外に出られない分何事も貪欲に吸収しようという逞しさがあった。

「出来ることは何でもしたいの。私は、経験できるはずのお友達との買い物や、食べ歩きが出来ないんだもの。」

育ての親とも言つべき「ばあや」が月に一度もってくる集光の若者向けの雑誌。

その雑誌には、集光の若者が楽しそうに買い物や飲食店の紹介をしていた。

屋敷から出ることの出来ない可憐には経験できないことであった。

つづく

集光の光が消えた日（前書き）

痛々しい表現があります。

集光の光が消えた日

「あなた…可憐のこと…どうなさいます？凱漸様が拘留されたのであれば、可憐の身はどうなるのでしょうか。」

「義兄上は、神の子は化け物を呼ぶ災いの元で隣国から送り込まれた災いとまで言っている。可憐は、今までよく我慢してくれたが、いつ外部に彼女の容姿のことが漏れるか分からない。」

「ええ…兄上に気付かれる前に、社にあの子を移しましょう？いずれ平和になれば、兄上も分かってくださるわ。」

夫婦は、娘・可憐を狭い屋敷の離れではなく、大きな朱雀の社に匿ってもらおうと考えた。

今までも芳崖が集光に現れると分かった時点で、可憐を眠らせ、治療という目的で社に移してきた。

今度も、その計画で可憐を社に送り、その強固な結界の中で暮してもらおうと考えていた。

しかし、そう考えてきた夫婦の下に、燐水の屋敷に芳崖の遣いの者が突然やって来た。

忙しい芳崖の代わりに妹夫婦の様子を見に来たのだらうと誰もが思っていた。

「義兄上は、お元気でしょうか。」

そう尋ねる燐水に遣いの者は失笑した。

「ええ、それは…。」

男は、一口酒を飲むと燐水と芳蘭、そして、芳際に視線を送ってから言った。

「ところで…こんな噂を聞いたのですが…。」

「は？はい…どのような…。」

男は、ニヤツと笑った。

その笑いに燐水も、芳蘭も背筋を寒くし、芳際に至っては、床に置

いた剣を握り締めていた。

「この屋敷には、毛色の変った娘がいるそうですね…。」
「みなの方が硬直する。」

「なるほど、真実のようだ。」

「い、一体何のことでしょうか？」

「燐水は出来るだけ平常心を保ちながら笑って尋ねた。」

「ふんつ、では、質問を変えよう…現在、この国を蹂躪している化け物どもの餌が何であるか知っているか？」

「3人は答えない、芳際に至っては、男を睨みつけている状態だ。」

「それはな…他とは違う髪の色に瞳の色を持つ子供…。」

その場にいた者が身体を硬直させる。

「先程、国王が正式な命を出されたのだよ、毛色の違う子供を王都へ引き渡せば、その者を匿っている家族、街の安定は約束できるが、引渡しを拒否、もしくは、虚言を吐くものには、死をと…。」

「王は、そのような子供をどうするとお考えなのですか？」

緊張を悟られぬよう燐水が尋ねる。

「王は、そのような子供の中に『神の子』がおると考えておられるのよ…。神の子は、敵国が送り込んだ刺客。」

「私の聞いた話では、『神の子』は、その者の土地に繁栄を齎すと聞きましたか。」

「確かに…そのような考えもある。しかし、国の王がそう考えておられる以上、毛色の変った子供は全て王都に集合させよとのこと。」

その命で持って、敵国が仕掛けた化け物を鎮めようと仰られたのだよ。」

「い、命…。」

両親の心に冷たい水が流れ込むようだった。

「そう、化け物を鎮めるための生贄だよ…。すでに隣の村から明るい茶色の瞳を持つ子供が王都に連行され、人柱として王都の結界に捧げられた。その人柱が神の子であれば、言うことはない。化け物も、敵国の軍も王都に入ることは出来なくなるだろう。」

芳蘭はにっこりと笑顔を見せて立ち上がった。

「使者の方…新しく入りましたお酒をお持ちいたしましょう。」
彼女は部屋を出ようとした。

「奥方…。」

呼び止める声に身体を硬くする。

「はい、何でしょう…。」

「楽しみにしておりますよ…。」

芳蘭は、にこつと笑うと燐水、芳際に視線を送り、部屋を出て行った。

客間から、その気配が届かない位置まで来た途端、芳蘭は走り出した。

可燐の待つ離れへ。

「母上…どうされたのです？」

芳蘭は可燐を強く抱きしめると震える声で言った。

「可燐…よくお聞きなさい…。南にある朱雀の社へ今すぐ向かうのです。」

ばあやが芳蘭の後を追うように入ってきて、可燐の荷物をまとめはじめた。

「ど、どうしたの？」

「ココに居ては駄目…ばあや…。」

いつも穏やかなばあやの表情も険しいものだった。

可燐は母の袖を捕まえた。

「母上？」

「…お前を屋敷から出します。お前には、沢山の嘘を付いてきました。しかし、今はその理由を述べる時間がありません。母がきつとお前の叔父上を説得して、社から出られるようにしてもらいます。」
ばあやに手を引かれ、可燐は屋敷の裏口から外へ出た。

夜道を小走りで抜けていく二人。

可燐は初めて見る街の風景に目を奪われていた。

「嬢さま、今は一刻も早く社へ…。」

「ちょ、ちょっと待ってよ。私は、屋敷から出たら病気になるじやなかったの?」

ばあやの腕を振り払い、可憐は立ち止まった。

「嬢さま…違うのです…さ、こちらへ…訳はばあやが歩きながらお話いたしますゆえ、早く、こちらに。」

ばあやの切羽詰った言葉。

可憐はその言葉に自分の選択権はないと悟った。

「さて、燐水どの…。この国自体に結界が張られていないのは何故か御存知でしょうか?」

男は冷たい視線を燐水に向けて言った。

「えっ?」

言いよどむ彼に使者は、大きな笑い声を見せた。

「使者殿?」

「はははっ、まこと人間とは愚かよ。」

使者の瞳が赤く光る。

そこへ酒瓶を持った芳蘭が帰ってきた。

「あなた…。」

異様な空気に親子は一所に固まった。

「この街に麒麟の御子が生まれたことは、芳崖様はとうの昔に御存知よ。」

「!」

芳際は、剣を抜く。

「この街に化け物が出ないのは、芳崖様が我等に襲うなと申しただけだ…麒麟の御子の心を傷付ける。それが目的よ…。」

「こ、この化け物め!」

芳際は使者に切りかかった。

「芳際!!」

両親の目の前で彼の身体は一瞬の間に2つに分かれた。

「イヤあゝ!!」

芳蘭の悲鳴。倒れた芳際の向こうに鎌のような腕を持った男がいた。燐水が芳際の落とした剣を握り締めた。

「バカな男よ。」

「あ、義兄上は…。」

「お前の知っている芳崖様はもう居らぬ。あの方は我らの王に従う者。やがてこの国を深遠の闇に導く大いなる力。神は、お前のところに麒麟の御子を宿すことで芳崖様を光へと導こうとした。しかし、お前達は、麒麟の御子と芳崖様を遠ざけた。」

大鎌を持った使者の背中から昆虫のような足が突き出した。そして、ボツと口から火を吐くと自分の座っていた座布団に火を付けた。

「神の子が、互いに出会い、その絆を強めている中、今だ麒麟の御子は1人。その力を開花すらしていない。ならば、心を傷つけて、麒麟そのものを汚せばよい。さすれば、神の子はその最後の絆を手にすることなく、我らが王に平伏することになるのだ。」

「あ、あの子は、死なせない！あの子は私達の希望だ…！」
燐水の言葉。

その言葉に化け物は高らかに笑う。

「ほんに愚かなり！我らの仲間はずでに麒麟の御子の傍に…。」
芳蘭の脳裏にはあやの顔が浮かぶ。

「さて…お主等には、麒麟の御子が闇に落ちるのに一役買ってもらうぞ。」

大鎌は振り下ろされた。

「ば、ばあや、痛い！痛いってば！」

街を取り囲む塀を越え、可燃は社へと続く道を引つ張られていると思っていた。

「違う！違うでしょ…！」

手を振り払う。

「こつちからは、社の気配がしない…！ばあや…あんた何者なの…。」

「

背筋を這う恐怖。ばあやは背を向けたまま言った。

「お嬢様？振り返って御覧なさい？」

その声は、ばあやのものではなく若い女の声であった。
可憐が目にしたのは、塀の向こうに立ち上る炎。

「あ、あれは……。」

女は高笑いをしていた。

つづく

麒麟の神子の旅立ち（前書き）

長いです。

麒麟の神子の旅立ち

紅蓮が、キマイラを倒し、辿り着いたのは、朱雀の社だった。

「お目覚めになりましたか？」

目を覚ますと1人の初老の女が居た。

「ここは、どこや？」

紅蓮の声に女は深く頭を下げた。

「お待ち申し上げておりました。朱雀の御子様。」

目覚めた時はもう、日が高いところまで昇っていて紅蓮の視界はその眩しさに目を細めた。

そこに居たのは、女ばかりであった。

「昔から、朱雀に使えるのは女と決まっておりますから、この社をお守りするのは我等女でございます。」

「はあ…。」

清々しい空気、清浄なる気の立ちこめる聖域。

腹いっぱいのだんご料理を口にした紅蓮に宮司が言った。

「実は、朱雀の御子にお願いがあるのです。」

そう切り出されたのは、夕餉の場であった。

「何ですか？俺助けてもらうたし、できることなら何でもするけど。」

その言葉に一同が安心している。

「ココより少し北にある集光という街に麒麟の御子が居られます。」

紅蓮は茶碗を落としそうになった。

「き、麒麟だつて！」

「はい、兼ねてより、集光にはあなた様と年頃の似た麒麟の御子さまが居られました。」

宮司は、麒麟の御子の誕生から、集光の長である燐水と芳蘭のこと、芳崖との関係、今現在、王都で何が起きているのかを話した。

「芳崖將軍を兄上に持つておられる立場上、凱漸皇子を頼ることも

出来ず、彼ら夫婦は、御子を今後この社へ匿つてほしいと信書を送つて参られました。集光の人々は、信仰も深く、温かい人ばかりですが、街に結界を張つてはいませんでした。」

「えっ！あんな大きな街やのに……？」

「はい、何故か集光には、化け物が接近してこなかったのです。平和で温かい街です。しかし、おかしいのです。我らの祈りも、破魔の札さえ弾かれてしまうのです。」

「もしかして、集光の街は……。」

「すでに何者かが強力な結界を引いているということになります。我らの祈りを遮断するようなものが、麒麟の御子のためになされた結界だとは思えません。忠告をするため社を出た者は、2度と帰ってきませんでした。…麒麟の御子が幼い頃は、こちらに度々静養に来られてまして、御子をこのまま社で引き取ることも申し出ましたが、断られ、ここ数年は全く音沙汰すらなかったのに、突然の信書何か作為的なことを考えてしまうのです。」

廊下を走る音に紅蓮は気をそらした。

「何事です、騒々しい。」

「大変にございます！！集光の街が、街が燃えてます！！」
息を切らして伝えた言葉に紅蓮は立ち上がった。

「とりあえず、麒麟の御子を救いに行つてくる。」

紅蓮は、夕餉もそのままに社を飛び出した。

（どう、思う朱雀。）

内なる獣に問いかける。

（敵の本体は、その芳崖という男の中にあるぜ、しかも、用意周到。）

（どういう意味や？）

（ヤツラのしたいことは、麒麟の御子を闇に落とすこと。）

社から出るとさっそく、小物であるが化け物が襲ってきた。

紅蓮は、棍を取り出し倒していく。

（闇についてどういう意味や？）

（そもそも麒麟は、我等神獣の頂点に座する者と言うてええ。その神獣を宿す御子は、それは我等には必要不可欠な存在だろ？でも、やすやすと倒すことはできない。でも、麒麟の御子は、まだ覚醒前で、麒麟としての力は発揮できない状態。つまり、ただの人間の状態に近い。敵だったら、今のうちに何とかしようと思っぜ、そうだろ？でも、神獣を宿す御子の身体を壊すことは容易ではないから、先に人間である御子の心を壊しておこうとしている。）

（御子の心？）

（そう、人間として、愛情を注がれ、慈しみられて育てられた御子に、悲惨な…たとえば、自分のせいで家族が死んだと思わせるとか、街の人々が死んだとか思わせろんだよ。）

紅蓮は気付いた。

（どうした紅蓮？）

彼は、街とは反対の方向に走り出した。

（おい？）

（こっちにいる！）

木々をすり抜け、夜道を飛んでいるように走る紅蓮は、ある光景を目にすることになった。

「街が…。」

塀から見える炎に可憐は走り出そうとしたが、自分よりも年配であったはずのばあやが行く手を阻んだ。

「何処に行くのかしら、麒麟の御子…。」

「麒麟？…何言ってるの！そこをどいて！！父上や母上のところに行くんだから！！それに、あなたはばあじゃない！！」

可憐は胸の奥から、光が昇って来ようとしているのを感じていた。

「私は、お嬢様のばあやよ？と言っても、その皮を被っているに過ぎないけれどね！」

ばあやの顔や、肩が大きくひび割れる。

「きゃっ！」

ばあやの身体が引き裂かれるように無理矢理上下に伸ばされていく。

「はじめまして、麒麟の御子。」

そこから現れたのは、赤い唇の女だった。

鮮血に染まった身体と白い肌のコントラストが月明かりに照らされている。

「ば、ばあや…ばあやをどうしたの…！」

気丈に女に質問をしていく。

女は、手を真横に上げると闇から黒い霧のようなモノがやってきて彼女の身体を包み込んだ。

女の身体は黒い服に包まれ、赤い唇だけが目立っていた。

「今頃、台所の釜で焼かれてるんじゃない？」

「なっ！」

「私が必要としたのは、ばああの皮だけよ、麒麟の御子…。」

可憐は、先程からこの女に対して嫌悪感しかなかった。

「よくも、よくもばあやを！」

懐刀を抜き、女に飛びかかって行けど、女は空中を舞い、ひらりと避けた。

「今頃、麒麟の御子の大切な人たちも、あの炎の中なんじゃないの…！」

後方に飛び去った女を見据えていた可憐は街の方を振り替えた。

「ま、まさか…。」

「そう、そのまさか…あなたが、麒麟の御子でさえなければ、みんな死なずに済んだのにね…可哀想に…。」

「き、麒麟の御子って何のコト？」

女は高笑いをする。

「安心して、あなたのお母様は助かってるかもよ？だって、あいつの趣味は、人間の女を孕ませることだもの…。」

「何を言ってるの…！」

「あなたのお母様は、化け物の子供を生むの。そう、あなたの兄弟

を生んでくれるのよ。めでたいことだわ…。」

「う、嘘よ！ふざけないで！」

街の方からの火の手に紛れて人々の悲鳴が聞こえる。

「ほら、あなたのせいで、沢山の人が泣いてるわ、叫んでるわ、」

「私のせい？」

女は、可憐が力なく懐刀を落とすのを見逃さなかった。

そして、すっと近寄り彼女の耳元で何かを告げようとした。

その時！

「！！！」

女は再び後方へ飛びのいた。

可憐の目の前に、大地に一筋の光と共に棒が突き刺さっていた。

可憐は、呆然とする中、自分の視界が誰かの背中で塞がれたのを理解した。

「大丈夫か！？」

掛けられた言葉は、芳際よりも低く、高い位置からのものだった。

「な。何故お前が！」

苦々しい言葉を女が吐く。

「自分が生んだキマイラの最期も知らへんのか？」

「朱雀の御子…。」

紅蓮は自分の背中の方にいる少女に言葉をかけた。

「ええか、自分をしっかり持てえよ。今回のことは、あなたのせいやない！悪いんは、全部あいつ等のせいや。自分の内なる獣に問いかける！」

「内なる獣…。」

可憐は胸元に手をやる。何か温かい気配を感じた。

目を閉じた瞬間彼女は違う場所に立っていた。

豊かな緑の大地の広がる草原に自分と同じ色の鬣と瞳をもつ獣が立っていた。

「可憐、やっと逢えたね…。」

優しい声だった。

「あなたが、麒麟？」

その獣は静かに可憐に近寄るとその頭を彼女にこすり付けた。
長い一本の角は、金色に光っている。

「そう、僕は、君に逢いたかったよ。」

少年のような声だった。

「私が、もっと早く君に逢えてたら、街はあんなにならなかったの？」

麒麟は、少しブルブルと頭を振るわせた。

「違うよ。あの街に君が生まれることを敵は知っていたんだ。敵が選んだ男が君の母上の兄上だったからね。神様は、それを阻止しようと君を母上の元へ送り込んだ。けれど、彼はそれよりも早い速度で敵に捕らわれてしまったんだ。それに、彼の頑固な性格は、母上や父上を混乱させて、君を外に出すことを止めてしまった。全てが、敵の策略だったんだ。」

「皆、死んでしまったの？」

大粒の涙が零れるのを麒麟は舐め取った。

「そうだね…辛いね…でも誰も君を責めたりしてないよ。」

「父上も？」

「そう。」

「母上も？」

「そう。」

「兄上も？」

「もちろんだよ。それよりも君に謝ってばかりいるみたいだ。」

草原の麒麟の向こうに3人が立っていた。

可憐は走り出す。芳蘭が駆け寄ってきた可憐を抱きとめた。

「可憐、ごめんなさい。私達が、お前を手元から離すのが怖かったばかりに…。」

「そ、そんなことないよ、私は、母上や父上、兄上と一緒にいられて嬉しかった！幸せだったよ！だから、そんな顔しないで。」

声は涙に震えていた。

「可憐…約束してくれないか…。」

「父上…。」

「決して後を追わないと。私達の姿を見ても、憎しみで心を支配されない…。」

可憐の身体が強張った。

「父上…。」

「可憐、お前を守りたかったよ。」

芳際が可憐の頭を撫でた。

「もう、逢えないけど、俺達は、いつまでも可憐を見守って、傍に
いるからな。」

「イヤよ、1人にしないでよ…。」

薄れていく3人。

「お前がこうやって、麒麟に向き合ってくれたから、私達は、お前
に言葉を告げることができたんだよ、可憐。」

「愛しい可憐。私達が消えてもお前には、大切な友ができるわ。」

手を伸ばすが母の身体に触れられない。

「母上、やだ！友達なんていらない！！母上や、父上がいい！兄上
がいい！」

「ばあゝか！！」

自分は触れることが出来ないのに、芳際の手が可憐の頭を小突いた。

「あ、兄上？」

「馬鹿だな…ほら、見てみるよ？」

振り返るとぼっかりと空に穴が開き、そこでは、1人の赤毛の少年
がばあやを殺した女と戦っていた。自分を庇いながら。

「あの子は…。」

「お前を俺達の代わりに守ろうとしてくれてる。」

少年は大きく女に弾かれるが、踏ん張って、何度も女に攻撃を加え
ている。

「あの子は、お前の仲間だよ、可憐…。」

「仲間…。」

「そう、お前と共に戦ってくれる仲間だよ！ま、お前の腕じゃ足手まといだろうがな！」

「兄上！！」

3人の姿は益々薄くなってくる。

「行けよ、お前を待ってる。」

可憐は麒麟の元へ走り出した。

「忘れんなよ！俺達はいつまでも、可憐を守ってるんだから！」

芳際の言葉を背に可憐は麒麟のもとへ。

「麒麟！」

「可憐！行こう！彼が待ってる！」

可憐は麒麟の身体に触れた。

闇色に染まった戦いの場所が光に包まれた。

（帰ってきたぜ！）

朱雀の声に紅蓮はホツとした。

戦っていた女は、信じられないという舌打ちをしたかと思うと、姿を消した。

「待て！…くそっ！」

可憐は現実世界に戻ってきたがその場にへたり込んでしまった。

「大丈夫か？」

兄よりも低い声。大きな金色の瞳がそこにあった。

触れる手が自分を心配していることが伝わる。

「俺は街に行くから、麒麟の御子は、社へ避難しとつて。」

放れて行く手。それを可憐は掴んだ。

「私も行く！」

紅蓮は躊躇した。

女との会話。きっと彼女の家族は酷い死に方をしているだろう。それを彼女に見せてはいけないのでは…そんな思いが巡る。

「や…でも…」

「大丈夫。父上や、母上、兄上を自分の手で弔ってあげたいの。」
キユツと結ばれた唇。

それを彼女の決意と紅蓮は取った。

「じゃ、行こか。」

あつさりと認められるとは思っていなかった。

「えっ？」

「自分の身内ぐらい、自分で弔いたいやろ？」

紅蓮は自分の化け物により無惨な死を告げた父親のこと、その父を月風と共に弔ったことを思い出した。

差し出された手は、温かいものだった。

大きな鎌を持った男は、すでに人の形を保っていなかった。

「蠮螋？」

可憐は目を見開いた。蠮螋が抱いているのは、1人の女性の身体だった。

「母上！」

彼女は生きていた。イヤたしかに手を差し伸べた。

「騙されんな！あんたの母さんは、成仏したんや！」

差し伸べた手を引っ込める。

「可…憐…。」

自分を呼ぶ母の声。涙が出そうだった。

「あんたが、倒されへんのやったら俺が殺る！」

棍を蠮螋の化け物に向ける。

「うっん、私が…私が母上の肉体を解放する！」

「分かった…俺は、この火を消す。」

紅蓮は、屋敷を出て、朱雀の力で、海の水を救い上げ、街の火を消していく。

「おいおい、麒麟の御子を1人にしているのかよ？」

「大丈夫や。彼女は強い。」

「いい？間合いを取るんだよ？」

長い鎌付きの手。片方は母の肉体を貫いている。

「懷に飛び込むんだ。」

手にした剣は、落ちていた兄のモノだった。

可憐は、声の限りを叫び、蠅螂の懷に飛び込むと、母の身体ごとその胴体を貫いた。

「可…憐…ありが…と…。」

母の身体が光の粒に変わり消え、蠅螂は大きな悲鳴を上げながら、闇に消えていった。

「お見事。」

しよっぱい雨が上空から降ってきた。

「火も消えるから、安心してええで。」

にこつと笑う少年。

「名は？」

不意に尋ねられ、少年は聞き取れなかった。

「んっ？何て？」

「…私は、可憐、可憐よ。君の名は？」

歩み寄り、彼に手を差し出す。

「俺？俺は紅蓮。朱雀の御子や、よろしくな、麒麟の御子、いや、可憐。」

家族以外から名前を呼ばれるのは久しぶりだった。

自然に涙が出てきた。

「あ、あれ？」

戸惑ったのは紅蓮も同じだった。

「ど、どないした？大丈夫か？どつか痛いんか？」

おろおろしている。

その慌てっぷりに可憐は噴出した。

「だ、大丈夫！ホント…これからよろしくね。」

彼女の心からの笑顔に紅蓮は胸の奥がきゅんと跳ねた。

家族の墓を社近くの墓地に作った。

化け物に全て消滅させられたため、その墓の中には何もなかった。

「母上の簪。父上の眼鏡。そして、兄上の剣…、これと一緒に埋葬してほしい。」

可憐の願いは叶えられた。

宮司が可憐の元へとやって来た。

「私達があなたの存在を知ったのは、これが天から降ってきたからです。今こそお返しできますわ。」

彼女に渡されたのは、一本の剣だった。

（僕の剣だよ。）

可憐の中の獣が言った。

「ありがとうございます。」

可憐は社の境内で1人考え込んでいる紅蓮を見つけ駆け寄っていた。

「敵の正体はともかく、敵が何処におるんか、分かった。」

紅蓮は朱雀と話をしているようだった。

「でも、バラバラじゃ負けるぜ？」

頭の上に綺麗な赤い鳥がいた。

「おっ、麒麟の！もう大丈夫なのか！」

気さくな朱雀に可憐はふっと噴出した。

「駄目だよ、可憐。笑っちゃ。」

焦っている麒麟が可憐の頭上に現れた。

「ご、ごめん…。」

「ええねん、初対面から、コイツ、ガラ悪いから。俺は気にしてへん。」

ニカッと笑う紅蓮の頭を朱雀がポカッと殴った。

また、笑いが起こった。

「ありがと！」

「へっ？」

「紅蓮がいたから、笑ってられるよ、私。」

紅蓮はカッと赤くなった。

「あ、照れてる？」

「うっさいわ！自分…準備でけたんやったら、出発や。皆と合流する。」

「うん！ついて行くよ！だから、よろしくね！！」
元気な神の子がいたもんだと紅蓮と朱雀は思った。

つづく

親達の苦悩

凱漸幽閉の噂は、遠く西方になる花街にも届き、いつも冷静な繻子蘭の心を乱してた。

（旦那様…。）

しかも、国からの、髪の色、瞳の色の違う子供を見たならば、役人に引き渡すようにとの命が降りてきた。

役人達は、慈音の行方について彼女や、花街の女達を取り調べる毎日を送るようになった。

「一体、慈音が何をしたって言うのですか！」

詰め寄る繻子蘭に役人達は、『国からの命』としか言わない。

街の女達のアイドル的存在だった慈音の情報を売るものは居らず、役人達は、苦勞を強いられていた。

「旅に出た息子からの便りなんてありませんよ、全く薄情な子で…、御不満なら、家捜しでもなんでもしたらどうです？」

繻子蘭のもとに慈音からの便りが届いたのは一度きり。

飛蝶街で、2人の御子に出会ったというモノだった。

しかも、それは、イズナという魃によって齎せた不思議な便りで、手元には何も残っていなかった。

何とか、慈音達の行方を知りたいと思っていた役人は、ぼそっと漏らした。

「国に災いを呼ぶ存在だとのことだというのに…。」

何度目かの追求で役人の1人が言った。

（子供たちから聞いたことと違う。あの子達は、神様に祝福された子達のはず…。）

旅立ちの日に語られた神の子のこと、やがて訪れるであろう国の危機。

自分と彼の子供である慈音が嘘を吐くわけがないと繻子蘭は確信している。

（あー、イライラするわ… ipp そのこと、旦那様に会いに行こうかしら…。放蕩息子はまったく便りを寄越さないし…。）

凱漸のことに加えて、慈音や白妙のことも心配の種になっていた。

「お前が縹子蘭かい？」

振り返った先に黒尽くめの女がいた。

一人で考え事をしたいと部屋に引きこもっていた彼女の元に。

「誰？」

ちりちりと肌に警告を知らせる感覚が襲う。

「凱漸皇子に逢いたくはないかい？」

愛しい夫の名前に縹子蘭は目を細める。

「何？あなたは何者なの…。国の遣いの方にしては、禍々しいわよ、その雰囲気。」

フードに隠れて見えないのに女が舐めるように自分を見ていることへの不快感が縹子蘭を襲う。

「出て行ってくれないかしら？ここは関係者以外立ち入り、」

いい終わらないうちに女が言った。

「神の子を産んだ女…。」

「えっ？」

女の伸ばした手から黒い霧のようなものが出て、部屋を包んでいく。
「…?!」

縹子蘭は意識を失った。

「今頃、雷紋はどうしているかしら？」

彩の町の長の妻・美鶴は、夫・彩紋の服の繕いをしながら呟いていた。

彼が出て行ってから、村は平穏そのものだ。

時々知らせてくれるイズナが雷紋の無事を知らせてくれたいた。

しかし、ここ数週間全くの便りがなく、夫婦は心配していたのだ。

その上に国から回ってきた「御触れ」に夫婦は戸惑いを見せていた。
不安を隠せない美鶴に彩紋は言った。

「あの子は聡い子だ、白澤様の言いつけを守り、ちゃんとやってるさ。」

村人も、誰一人として雷紋が目が見えていることは知らないし、彼の髪が白いのは、幼い頃の病気が原因だと思っている。

「そうよね、あの子は、病気に侵されて、白髪と盲目になったってことが通じていたもの。私達以外の誰も雷紋の正体には気付いてないわ。」

自分を納得させるように呟く妻。

それにしても、と長である彩紋は思った。

白澤から聞いた、神の子の存在と国が思っている神の子というものがまるで違う方向を向いているのではないかと。

神の子を捜していると風の噂で聞いた凱漸皇子が反逆罪で投獄されたとも聞いた。

「一体何が起こっているのか…。」

「一番最近の便りでは、雷紋は、5人の神の子と出会ったと言っていたわ。あの子を含めてあと、2人よね…すぐに見つかるわ…、でも…。」

雷紋は弓術は得意だったが、あまり、喧嘩などをしたこともない子だったから、もし、化け物に襲われでもしたら、他の子に迷惑をかけるか。それも心配の1つだった。

「危うきに自ら近寄る子ではないが、お前に似て、運動神経が鈍いからなあ…。」

彩紋の言葉に妻・美鶴は、頬を膨らまして拗ねていた。

その表情に夫は、穏やかな笑顔を見せる。

（ああ、私を気遣ってくれたのね。）

美鶴も自然に微笑んでいた。

夫婦の絆はとても強いものだった。

雷紋が彼らを自慢にし、敬愛していた理由の1つである。

「あの子は、きっと上手くやってるさ。」

呟いた長に答える声があった。

「お前達が、神の子の親かい？」

振り向いた先に黒尽くめの女。

彩紋は、美鶴を庇うように女の前に立った。

「何者だ！！」

気配もなく現れた女に異様な気を感じる夫婦。

「一緒に来てもらうよ。」

黒い霧のようなものが部屋に立ちこめる。

「?!」

雷紋の両親は、意識を失った。

「退屈だわ……」

飛蝶街の賭博場を構える店の住居部分で、明るい街を見ながら、美麗は呟いた。

彼女は、月風が消えて以来、何をしても退屈で仕方なかった。

確かに、欲に目が眩み、紅蓮と月風のもとを飛び出した。

贅沢をさせてくれるという賭博場の店主に調子に乗って、自分の娘のことを話した。

まだ、共に暮している頃、幼い月風の歌を聞くことが好きだった。

可愛い歌声は、自分の欲に塗れたこの感情を癒し、家族と暮していくことの大切さを教えてくれた。

飛蝶街に来たのだって、本当は夫の仕事の手伝いのためだった。

賭博場に店主に依頼された金の髪飾りを届けに行つて、引き止められたのだ。

本来困うはずだった女を店主は捨てさり、美麗を困った。

子供や、夫のことが気になり、何度も抜け出そうとしたが、その度に店主は見たこともないような贈り物をした。

美麗は、それでも、夫や月風、紅蓮の元へ帰ろうとした。

しかし、そう申し出た彼女に店主は、贈り物の代金を全て美麗の借金だし、払えないのなら、家族から根こそぎ貰うと言い出した。

美麗は動くことができなかった。

『夫を、家族を捨ててしまった。』
小さな村だ、きっと自分のコトは悪く言われているだろう、ならば、もっと悪女になってやる。

彼女は自分の思いを素直に言うことのできない女だった。

案の定、美麗が村を出たという悪評は村に蔓延し、紅蓮も月風も母に対して何の未練も持たなくなっていた。

店を出て行きさえしなければ、店主は扱いやすい男だった。

肌を許してもないのに、次々に要求をしてくる美麗の言うがまま店の規模を広げ、成功していった。

美麗には商才があつた。

店主はますます彼女を手放さなくなった。

そんな生活の中、ふと月風の歌が聞きたいと思った。

それは、自分の夫の死を知った時だった。

（あの人の死に目にも会えなかった…。）

店主は意気消沈している美麗の独り言を真に受けた。

店の改装と言つて、店の右前の窓を壊し、店主はそこに大きな鳥かごを取り付けた。

そして、数日後に店主は、月風を攫ってきたのだ。

「ど、どういうこと？」

「美麗《お前》が、月風の歌を聞きたいと言つたからだよ、気に入ってくれたかい？」

ふわふわの衣装に鉄球のついた足枷を付けた月風は、鳥かごの中の鳥のように歌いことを強いられた。

怯える様になっていた彼女は、美麗を見るなり、憎しみとも取れる視線で睨みつけてきた。

店主に、月風を村に返すように願い出たが、店主は、月風が金になると踏み、それを拒否した。

村に紅蓮を１人にしてしまった。

自分は子供達にとんでもない苦勞を負わせてしまった。

美麗はそう思っているくせに月風には冷たい言葉しかかけられず、彼女を取り返しに來た紅蓮を見て無理難題を言う店主に従ってしまった。

（バカな母親だわ…。）

美麗は、月風を取り返すために來た紅蓮を見て、泣きそうになった。それは、彼が死んでいった夫に似てきたから。

雷紋が月風を自由にした時、内心美麗はホツとしていた。

長年染み付いていた憎まれ口をたく口は、最後まで変わらず、店を出て行く月風を見つめることしかできなかった。

国から、髪や毛色の違う子供を役人に引き渡せとの命が來た時、美麗はひたすら月風の無事を祈った。

店主は、お上の取調べにイヤってほど、月風のことを話した。

月風を連れ去った盲目の少年のことも。

やがて、月風は役人に連れて行かれるのかと思うと店主が心底憎かった。

おそらく、紅蓮も月風と共にいるだろう。

となると紅蓮は、月風を庇って役人に立てつき、処罰されるのではないかと胸を痛めた。

そんな思いにふけていると、声が掛かった。

「子供に会いたいかい？」

背筋が凍った。

振り返った美麗が見たのは、黒尽くめの女。

「な、何者だい！人様の家に勝手に！」

「子供達に合わせてやろうと思ったのさ。」

「えっ、お前さん、あの子達を知っているのかい？あの子達は無事なのかい？」

美麗は、女にしがみ付いた。

「ふん、しょうもない聖母だと思っていたが、どうやら真の思いは違っらしい…。」

「な、なんのことだい、ねえ、あの子達は…。」

黒尽くめの女の赤い唇の口角が上がった。

美麗の背筋にまた寒いものが走り、彼女は、女から離れた。視界が、黒い霧でばやけていく。

「な、なんだい、これは！」

美麗は、女を罵りながら意識を失っていった。

「凱漸様が拘留された?!」

朱雀の社で加奈陀は身体を休めていた。

つい先日までこの社には、紅蓮と可憐がいたというのに、またも、一足遅かったのだ。

「はい、コトは重大でございます。噂では、凱漸様は、流刑島へ流されるとか…。」

流刑島。

王都から、北に真っ直ぐ行ったところにある小さな島。罪を犯した者達が流される島である。

「宮司、朱雀の札を何枚かいただけますか？」

「数枚？」

加奈陀は、ははっと笑った。

「そう、数枚。馬鹿だと思われるかもしれませんが、俺は、剣以外はただの人。単純攻撃をしてくる輩に負けるとは思わないんですが、術には、刃が絶ちませんからね。木の札一枚と紙の札を4枚は欲しいですね。」

宮司は、後ろに控えていた者に合図を送る。

「分かりました。すぐに用意いたしましたよう。」

加奈陀は、流刑島を屈指すつもりであった。

つづく

嫌な予感

「どうしたの？」

黒い長い髪を触りながら月風は尋ねた。

小さい祠に来た時、雷紋は、月風に髪粉で髪を黒く染めるように言った。

「君の髪の色は目立つからね。化け物にも見つかりやすい。イヤかい？」

雷紋の言葉に逆らうはずのない月風は、言う通りに髪粉で、髪を黒く染めた。

「大丈夫、それは、イズナが見つけてきてくれたもので、身体に害はないし、洗えば、取れるよ。」

桃色の髪が珍しいことでよく苛められたが、兄の紅蓮も、父も綺麗だと褒めてくれた。

だから、染めてそのままだったらどうしようと思ったのだ。

「ん？イヤな予感がするんだよね…。」

心配する月風に雷紋は答えた。

雷紋は、イズナを遣い、周辺の村や町の様子を伺っていた。

その中で、お上が、自分達のような異色な子供を捜している事実を知った。

「ホントは、目の色も変えたいんだけど…。」

そう言つて、雷紋が取り出したのは、小さい薬。

「どこかの村や町に入る時は、これを飲んで。瞳の色が黒くなるから。」

手に取った薬は怪しい色合いで、飲むのにはかなりの勇気が要った。

「不味いと思うけど、分かってるよね？」

有無を言わせない言葉。

できるだけ戦わなくて済むように彼はいつも考えているようだった。

苦々しい顔をした月凧は具合が悪そうだった。

病人と盲目の少年の2人連れに同情した店の主人は、快く、2人を宿に泊めてくれた。

「大丈夫？」

「…まだ、気分が悪いよ…あの薬…ホントに人間が飲んでも大丈夫なの？」

月凧の具合の悪さは、目の色を変えると言う薬によるものだった。

「生きてるでしょ？大丈夫。死なないよ。それに慣れてくるから。」

「一週間毎に内服しなきゃいけないなんて、地獄だよ…。」

月凧の言葉に雷紋は笑った。

「雷紋は、いいよねー、飲まなくてもいいんだもん！」

拗ねる月凧。

（妹って、こんな感じなのかな。）

雷紋は、月凧との旅が楽しいと思った。

一方、月凧は、惚れた弱みからか、雷紋には従順で、優しいやら、冷たいやらの雷紋に振り回されていた。

「イズナの情報で、紅蓮ともう1人、麒麟の御子が出会ったみたいだ、こちらに向かっている。合流できたら、慈音と龍綺のところへ行こう。」

月凧は濡れた手ぬぐいを額にあてた状態で寢床に仰向けになっている。

「うん、慈音ちゃんと龍綺くんは一緒なんだね。」

「イズナに、足を止めて置くように伝えた。玄武の御子もみつけたそつだよ。これ以上バラバラはよくないからね。国の情勢も何やら怪しくなってきたし。集まっておかないと大変なことになりそうなんだ。」

真剣な雷紋の顔。手ぬぐいの下からその顔を見つめる。

「何？」

「うっん…雷紋くんと一緒によかったなって思ってた…。」

月風の言葉に雷紋は苦笑した。

「変な薬飲まされたのに？月風は変わってるね。」

からかう言葉に月風はぶうつと頬を膨らませた。

それを見て笑う雷紋。

「リスみたいだ、その顔。」

「も！意地悪！！」

「可愛いつて言ってたんだよ？」

カアツと赤くなった月風を無視するかのように雷紋は宿屋に置いてあった新聞に目を通した。

（同じ年なのに、子ども扱いするんだから！）

ふと、雷紋が顔を上げた。

見上げた顔は青く、小刻みだが震えている。

「どうしたの？雷紋くん…えっ？」

月風も背筋が寒くなるような感覚を感じた。

（何？何か嫌な予感。）

「月風…大丈夫だね？」

「う、うん…なんか変な寒気がするけど…。こ、これって…何かあったの？」

雷紋が辛そうな顔をした。

「彩村の父さんと母さんの気配が消えた…。」

「えっ？」

雷紋は、イズナに命じて両親の身体に特殊な結界を施していた。

その結界は雷紋に繋がり、両親の無事を知らせてくれていた。

その結界が壊されたのだ。

「月風…紅蓮を迎えに行こう。」

「えっ？兄さんを…？」

雷紋は荷物を纏め始めた。

「敵が本格的に動き出したんだ。悠長なことはしてられない。」

雷紋の感じる危機を月風も感じた。

「大丈夫か？」

振り向いた先に息を切らして山道を歩く少女。

少女は、にっこり笑って大丈夫だと言った。

すると少年は大きいため息を吐いて、少女の方を振り返った。

「ほら、足…えらいことになつとるやんか…。」

少女の穿いていた靴を脱がすそこには、擦り切れた皮膚と、裂けた血豆。

「もう少し、行つたとこに小さいけど祠があるから、そこで休も。」

「ご、ごめん…。」

自分のせいでかなりペースは遅いんだと少女は自覚していた。今まで歩くという生活を十分に出来なかった彼女にとって、山道を延々歩くことはかなりの痛手をこうむることだった。

剣の鍛錬などはしてきたつもりだが、瞬発力に優れていても、持久力は皆無だった。

「ええねん、俺が早すぎるんやと思う。月風にもよう怒られとったから…。」

「で、でも妹さんのことが心配なんでしょう？ごめんね…。」

少女は、少年の背に負ぶさった。

この姿勢でもし化け物が出てきたら、ホントに足手まといだ。

「んー、この感じの距離だったら飛べるやろ…。」

少年はそう呟くと何かに集中しているようだった。

「よう、捕まつとき。」

目の前がぐにやっと歪んだ。少女は、眩暈を起こしたのかと思い、固く目を閉じた。

「目え、開けてええで？大丈夫か？」

目の前には、小さな祠。

小さい結界ではあったが、可憐の傷は見る見るうちに癒えていった。

「ごめんね…。」

今まで本当に大事にされすぎて可憐は世間一般の常識を知らなかった。

途中で立ち寄った小さな村では、お金を払うということを分からず無銭飲食をしようとしたことがあった。

「ええ言うとするやろ？ あんましつこく言うと殴るで？」

笑いながら言う紅蓮。

「うん…紅蓮は優しいね…。」

今2人は、イズナが送ってきた雷紋御用達の髪粉と、薬で見た目が普通になつていた。

薬をのんでから暫く調子の出なかった紅蓮であつたが、慣れるのは、可憐より断然早かつた。

調子が出ないところに酷い靴擦れ。

可憐はホントに自分が情けないと思つていた。

「へっ？ ああ、可憐は月風と似とるから、なんか世話焼いてまうんやろな。」

妹という言葉に少し胸が痛んだが、兄・芳際のことを思い出した。

「兄貴言うのは、下のもんを大切にする義務があるねん。月風をあんまり大切にできへんかつたから、可憐を大切に出来るのは嬉しいねん。」

優しい笑顔。

彼女が毎晩のように夢に魘されていることを紅蓮は知っている。

敵の見せた幻とはいえ、母を剣で切つたのだ。

（しゃーないよなあ…。）

可憐の頭を撫でる紅蓮の手が止まつた。

「どうしたの？」

彼は辺りを見渡す。

（なんや、この感覚…胸が苦しいような…。月風になんかあつたんか？…いや、月風やない…なんや？ めっちゃ気分悪い…。）

自分の袖を引っ張って様子を覗き込む可憐。

不安そうな顔だ。

「可憐、傷の具合よかったら、雷紋のおる場所に向かうで？」

「えっ？…う、うん。いいよ。大丈夫…。」

いきなりのことで戸惑う可憐。

「なんや、めっちゃイヤな予感がするねん…。」

いつになく真剣な顔の紅蓮に可憐も胸の鼓動が早くなった。

つづく

合流を目指す

「大丈夫か！慈音…。」

玄武の岩牢の中、慈音は急な眩暈に襲われた。駆け寄る白妙に背中を支えられる。

「母さんに何かあった…。」

「えっ？縹子蘭母さんに？」

白妙の瞳にも不安が広がる。

「行かなくちゃ…。」

龍綺が慈音の腕を捕まえる。

「待て。…落ち着けよ！！」

慈音の動揺した姿を皆はじめて見た。

「けど！」

「慈音、落ち着くんだ。」

彼の行動を止める白妙を慈音は払いのけた。

その力が何時になく強く、白妙は後方に尻餅を付く。

「あっ…。」

彼女の姿を見て慈音は我に返った。

「ご、ごめん…大丈夫？」

手を差し伸べて白妙を起こす。

白妙は泣きそうな顔をしていた。

「ごめん…大丈夫？」

白妙はふんつとそっぽを向いた。

「縹子蘭母さんのことなら、私だって心配だ。ひ、一人で突っ走ろうとするな。」

慈音は、そっと彼女の頬に手を当てて、自分の方に顔を向けた。

「うん、ごめんね。焦ってもヤツラの罠に嵌るだけだね…。」

「敵は、恐らくだが、俺達神の子の親に何かを仕掛けるつもりなんだ。暁の御両親はもう亡くなってるし、俺も母上はいない。父上は、

あの師匠だから、簡単に捕まるとは思わないし…。」

「あー、1人なの。家族いないの!」

なんだか楽しそうに言う暁。

親と言う存在を知らないのだ。

龍綺は、彼女の頭を撫でた。

「しーの親は?」

小首を傾げて白妙に尋ねる。

その真っ直ぐな瞳に白妙はタジタジだった。

「私の親は…たぶん生きているだろうが、私に対しては、愛なんて感じてないだろう。」

少し淋しそうな白妙の肩をちょんちょんと突き、笑顔を送る。

「な、何だ?」

「白妙の母さんは、俺の母さんなんだからね。」

照れた顔を見せる白妙。

その様子を見ていた暁が龍綺を覗き込む。

「りゅーのおかーさんは?」

「えっ?」

「りゅーに、おかーさんいないの?」

龍綺は返答に困ってしまう。

「りゅーは、お父さんがいるんだよ、な、龍綺。」

慈音の言葉。

それは、まだ自分のコトを知らない父・加奈陀のことを差している。

「おとーさん?それ、いいの?嬉しーコト?」

暁は龍綺に父親がいると聞き嬉しそうだっ

「でも、お父さんって何?」

やはり、彼女は分かっていたいなかった。

「兎に角、雷紋達が大急ぎでこちらに向かっているらしい。ある程度のところまできたら、空間移動をしてくるだろう。」

「待つしかないな…。」

暁以外の3人はため息を吐いた。

「どこに向かっているの？」

桃色の髪を黒の髪粉で染めた月風が尋ねた。

随分とハイペースで山道を下っている。

「紅蓮たちと合流するために、美也町に向かっている。」

雷紋の張り詰めた気がピリピリと後ろを行く月風にも伝わってくる。

「だ、大丈夫？」

彼のこんなにも余裕のない顔を見たのは初めてだった月風。

「何が……？」

雷紋の中には、紅蓮や仲間との合流、敵との遭遇の際に月風を守れるか、そして、消えたと思われる両親のこと。

色々考えを巡らせなければならなかった。

そのために余裕がなくなっていた。

月風は、できるだけその緊張感を和ませようと話しかけるのだが、あつという間に会話は途切れてしまうのだ。

「何でもないです……。」

しゅんとなってしまう月風に声が掛かる。

「月風。」

先に行く雷紋が手を伸ばす。

「何？」

嬉しくなってその手を取る。

「山道に出る。人通りも出てきたからね。」

月風はまたしゅんとなっていた。

雷紋は、その容姿を利用して盲目の少年を演じている。

そのため、人通りが多くなったり、村や町に入ると月風を杖代わりをしているのだ。

敵の正体がハッキリしない以上、信じられる人間は少ない。

その様子を雷紋は鋭い感覚で探っているのだった。

「美也町で紅蓮と落ち合う予定なんだ。」

それは、イズナを使って取り合った連絡。

月風には断片しか伝わっていなかったことだ。

「大丈夫、紅蓮にもうすぐ逢えるよ。」

少しだけ見せた雷紋の笑顔。

それだけで気持ちが上がする自分に月風は気付いていた。

町や村に近づくにつれ、その道中には、化け物を遠ざけるための道祖神が置かれている。

人々の旅の安全を守る神として、白澤を祀ってある場合が多い。

しかし、白澤という名よりも道祖神としての名が通っているため、白澤は少々淋しい思いをしているのであった。

「ここまで来ると化け物は大丈夫だろ…月風？」

「ん？何？」

「この町はあんまり治安がよくないらしいから、俺から離れないようにして。」

「う、うん。」

「ただでさえ、俺達は子供な旅人なんだから。」

あまり人との関わりをしてこなかった月風にとって、2番目の町である。

先日まで泊っていた村は、のんびりしていて月風も安心していられた。

飛蝶街は、賭博の街であったが、治安はしっかりしていた。

いつも鳥かご越しに街の様子を見ていた月風にもそのことは分かっていた。

街まであと僅かと言う距離で雷紋が急に立ち止まった。

後ろに引つ張られるように立ち止まった月風が彼を見る。

「どうしたの？」

「やっぱり…うん、そうしよう。」

雷紋は1人納得をして、彼女から離れた。

「何？」

「俺も、薬使って目の色と髪の色変える。」

そう言っつて、道祖神の方へと歩み寄る。

「ちょっと、この下の沢に行つて来るから、月風は、この道祖神の傍を離れないように。」

そう行つて彼は、崖を降りて行つた。

理由を聞かずにいた月風はただ呆然とその場で立ち尽くした。

（小鳥さん…、雷紋つてば、何考えてるの？）

小鳥さんとは、月風に宿る神獣・迦陵頻迦のことである。

（…白澤ほどの心を宿す人間の考えなど分らない…。それに、あの雷紋という人間は相当頭が回るみたいね。）

道祖神の横にある丁度いい大きさの石に腰を掛け、月風は両膝に肘を付き、頬を両手で支えた。

出るのは、大きなため息。

「お嬢ちゃん、可愛いね、どうしたの？そんなトコに座つてさ。」
声が掛かり見上げるとそこには、3人の青年がいた。

月風を随分年下に見ているようだった。

「…。」

自分より少し年上であろう男性に声を掛けられるのが初めての月風は彼らがとても怖く感じた。

「あれれ？口が利けないのかな？」

1人の男が月風の腕を掴み立ち上がらせる。

その力が強く、月風は男の腕の中にスッポリ入ってしまった。

「きゃっ！」

「ひよほほっ！軽っ！」

ぎゅっと抱きしめられ、月風は頭の中が真っ白になった。

「おいおい、子供相手だぜ？」

「へへっ、いいんだよ、身体はほぼ大人、穴さえありやあな…。」

男の言っている意味など分かっていなかった月風であったが、内なる獣である迦陵が危険を知らせてきたため、身体が恐怖で震えた。

「やつ！」

抵抗するが、その力はいとも簡単に阻まれる。

「はははっ、そんなことしちゃうとお兄ちゃん、どうしよっかなあ

…。」

ひょいっと身体が持ち上がる。

月風は、荷物のように男の身体に担がれた。

「何してんの？お兄さん達。」

彼らに声が掛かった。

振り返るとそこには、肩を越す黒髪に、黒い瞳の美人。

「おおっ！こいつはまた、綺麗なオネエサン！」

「えっ？でも声が低いような…。」

その人は、スツと寄ってきて、男達に、にっこりと微笑んだ。

男達の頬が染まる。

「あーんして？」

言われるがまま口を開ける男達。

「…！」

ごっくんっ。

男達は何かを飲み込んだ。

「ああーあ…飲んじゃった。」

その人の冷やかな笑いに、1人の男が胸倉を掴んできた。

「このあまー！何しやがる…！」

「何って？それはこちらの台詞だってーの。数少ない道祖神の前で

何してくれてんのかなあ。」

胸倉を掴む手が微かにしびれ始める。

「な、なんだ…。」

胸倉を掴んでいた手を払いのけ、月風を担いでいる男の方を向く。

「お、お前…何飲ませた？」

月風の腰を抱いていた手が痺れで外れていく。

彼女の身体はするつと降りてきて、それを支える。

「大丈夫？月風…。」

少し濡れた髪、色は違うが、その声も視線も雷紋だった。

「…。」

「ごめんね、遅くなって。怖かったね…。」

頭を撫でる手も雷紋だった。

月風は言葉にならない。

「ま、待ちやがれ…。」

「さ、行こうか…。」

男達が膝を付く。

「おやおや、足に来ました？」

雷紋は振り返り、男達の方に歩み寄るとその視線に合わせた。

「さつき飲んだのは、さる呪術師から貰った呪い丸です。もうすぐ楽になりますからね。」

「！！死、死にたくねーよ！」

男の1人が震える声で言った。

「頼む、許してくれ…ほんの冗談だったんだ…。」

その様子に雷紋は満足そうだ。

「なっ、姉ちゃん…？」

雷紋の笑顔が引きつっていた。

「俺、男なんだけど？」

心底驚いたという顔。

と同時になお一層苦しむ男達。

「ぐわあゝ！！」

「呪い丸ってね、飲ませた人の思い通りに呪えるんだよ？」

男達が手を合わせる。

「仕方ないなあ…。お兄さん達、美也街の人？」

頷く。声は出せないらしい。

「じゃあさ、俺達の宿とか、用意してよ。勿論タダで。」

びっくりしたような顔。

「イヤだとは、言わないよね？呪い丸って、人くらい殺せるんだよ？」

につこり、それこそ氷の微笑みだった。

それに頬を赤らめる男達。

「（怒！）何、赤くなってるのかなあ、お兄さん達…言うこと聞く

の？ヤなの？」

「き、聞きますうゝ！」

男達の身体が急に楽になった。
ほっとため息を吐く男達。

彼らは自由になった途端雷紋に掛かってくるのかと月凧は思っていたが、マジマジと雷紋と月凧を見比べた。

「何？」

「いやあゝ、どっちもべっぴんさんだと思ってさ。」

「また、呪われない？」

苦笑して首を振る男達。

「さ、こつちへ。美也村はすぐそこですぜ。」

月凧はまだ震えている。

「済まなかったな……。」

男達の中のリーダー格の青年が言った。

しかし、月凧は、雷紋の後ろに隠れてしまった。

「もしかしないでも、月凧を襲った理由があるのかな？」

雷紋は、きゅっと彼女の手を握っていて、できるだけ月凧が安心できるようにしてくれていた。

男達は、その言葉に顔を見合わせる。

そして、ため息。

「お前さんは、勘がいいつちゅーか、すげえな……。」

男達の言葉に月凧はやっと安心して顔を覗かせた。

「何か、あるんですか？」

「あ、ばっかっ！」

雷紋の言葉とほぼ同時に、

「えっ！知恵を貸してくれるのか！！」

という男達の言葉。

雷紋は額を押さえて、ため息を吐いた。

（な、何？いけないこと言ったの？）

雷紋は、キュッと月凧の手をきつく握ると男達に言った。

「とりあえず、話は聞いてもいいけど、決めるのはあくまでも俺達で、先に美也村で休んでからだから。」

「つれないっすね…あたたたっ。」

きりきりと男達の胃が痛み出す。

「言っただでしょ？ 主導権はこちらにあるんだよ。さ、案内してよ、お兄さん達。」

ちらつと雷紋の横顔を見る。

黒髪と黒い瞳になると少し大人っぽく見えるのに、女の子みたいに綺麗だと思った。

「何、見てんの？」

少し頬を赤くした雷紋が月凧を見ずに言った。

「えっ、あおうっ！…ご、ごめんなさい…。」

月凧は雷紋が頬を赤らめたことなど気付かずに謝っていた。

少し上から聞こえる雷紋のため息に月凧は、心がしゅんとしぼんだ。

つづく

鏡の中の2人

「町長の息子…世も末だね…。」

2人が案内されたのは、美也町の町長で豪族の堆家だった。

「…この町は、無宗教って言うか、その信仰心が薄くてさ、結果の力が弱いんだ。ここ最近は、化け物が知らない間に町に侵入していることだってあってさ、すっかり、人も変ってしまつて、強盗とか、強姦とかの犯罪が増えてしまつたんだ。」

町長の息子がため息を吐いて言う。

「で、なんとか結界の力を強めようつてことになつて朱雀の社に人を派遣したんだけど、誰も帰つてこなくて…したら、町にやつて来た呪術師が助言をくれたんだ。美也町から少し北にある道祖神で1人にいる少女を西の化け物に捧げよつて。命を捧げる言うのではない、ただ、その…アレだ…。」

言い難そうに月風を見る。

月風はイヤな感じを受けて雷紋の方を見た。

(…雷紋くん…。)

「ココ数週間で、町の働き手が次々に、家の中で失踪してるんだ。どうやって、ヤツラが侵入したのかも分からないし…、消えた人達が、家族ともめていたなんてコトも聞いていたからさ、家出じゃないかとか色々考えてたら、突然、家の中に失踪していた家族が戻ってきたつて、大慌てでココまで教えに来てくれた奥さんがいたんだ。」

「問題なのは、失踪した人だけ？」

息子は、ハツとなり面を上げる。

「イヤ、それだけじゃない。この町では、眠り続ける人も数人出てきた。ただ単に、眠っているだけならいいんだけど…。」

「もしかして、眠っている人達つて、皺くちやになつていつて、死んだ？」

息子は、びつくりしたような顔を見せた。

「そ、そうなんだ…このままじゃ、町は死んでしまう。だから、俺達は、呪術師の…」

雷紋の表情が何時になく険しいモノになっていた。

「その呪術師って…黒尽くめの赤い唇の女？」

雷紋の質問に町長の息子は息を呑み、月風は雷紋の告げた容貌に思い当たる人物を頭に浮かべ両手で口を塞いだ。

「な、なんで知って…」

雷紋は考え込む。月風はそつとその顔を覗き込む。

また、冷たい言葉を投げられるのではないかとビクビクしてしまっていた。

しかし、彼女の視線を感じて自分を見た雷紋の目は、とても優しいもので、月風を戸惑わせた。彼は、そつと彼女の耳元で囁く。

「大丈夫。2人なら、なんとかなるって。」

囁かれた声に月風はカツと顔を赤くして、身体をさつと退けた。

「月風？」

「あつ、ご、ごめんなさい！私、ちょっと、お、お手洗い借ります！！！」

月風は部屋を走って出て行った。

（どうしよう！どうしよう！）

頬を押さえながら駆け込んだ洗面所。

鏡に映る自分の顔が真っ赤であった。

あの道祖神までの距離、襲ってくる化け物がいなかったわけではなかった。

でも、あの洞窟の時のように月風の力は発動しなかったのだ。

内なる獣・迦陵頻迦は、月風の思いが足りないと言ってきた。

どこか雷紋に頼っていて、自分は守られる立場にあると潜在的に思っている。

誰かを守りたいと強く思うことで発動する彼女の力は、まだまだ発

展途上で、化け物の気配すら探れなかった。

「雷紋が、旅の疲れを感じるのは仕方ないよね…私ってば、すっかり足手まといに戻っちゃったんだから。」

もう1度、鏡の中を見る。

「でも、大丈夫！絶対私は、復活するんだから。」

根拠のない励ましを自分に送る。

笑った笑顔が、自分を見つめる自分が映っていた。

いつもと違う、黒い髪に黒い瞳。

「何か違う…私の顔だけど…！！」

真っ赤な唇だった。

紅を引いたことなどなかったのに確かに鏡の中の自分は紅を引いていて、その唇がくつと口角を上げた。

「えっ？」

月風は鏡に手を伸ばす。

もちろん鏡の中の自分も手を伸ばしていたが、鏡の表面に指先が触れた瞬間、月風の悲鳴が屋敷に響き渡った。

客間にいた雷紋がその悲鳴を聞きつけ、洗面所へと走った。

「月風！！」

勢いよく開けた先にあったのは、鏡の中に引き込まれ、足だけがこちらの側にあつて、バタバタと動いている月風の姿だった。

雷紋は、彼女の足を掴んだ。

「月風！」

引っ張り出そうとする雷紋の力など無視するかのように、鏡の中に引きずり込まれていく。

「は、放すもんか…月風…。」

雷紋の足が宙に浮いた。

上半身が鏡の中に入っていく。

（だ、駄目だ！）

雷紋の身体は、月風とともに鏡の世界へと引き込まれていった。

「雷紋くん、雷紋くん…。」

雷紋は月風の声で目を覚ました。

まず、目に映ったのは、心配そうな月風の顔で、その次に視界を占めたのは、暗い洞窟だった。

雷紋は、ゆっくりと身体を起こす。

どうやら少し頭を打ったらしく、眩暈と共に頭痛が彼を襲った。

「大丈夫？」

覗き込むのは、変わらず心配そうな月風の顔。

「大丈夫だよ、月風は？」

「月風は大丈夫だよ…雷紋くんがココに落ちるときに庇ってくれたから。」

月風はそういうと雷紋の胸に自分の身体を預けた。

「月風？」

彼女の身体が震えだす。

「これから、どうなるの？月風…怖い…。」

雷紋は、少し間を置いてから、彼女の身体を離すと、立ち上がった。

「とりあえず、ココが何処なのか探ってみよう。」

差し出した手を月風が取る。

彼女は、雷紋の腕に絡み付くように身体を押し付けている。

「怖いのか？」

左手を岩壁に付きながら言うと、彼女はハッと顔を上げて、またギョツと雷紋の腕を抱きしめた。

（歩きにくい…。）

「月風…。」

彼女の消え入りそうな声が聞こえた。

「足手まといだよね…。雷紋くんに助けてもらってばかりで…月風・
・ホントに神の子なのかなって、毎日思ってるんだ。」

「月風…。」

彼女は涙を溜めた瞳で雷紋を見つめていた。

「でもね、月風、皆と…ううん、雷紋ちゃんと離れたくないの！一緒に

にいたいのに！」

月風のか細い腕が雷紋を離すまいと背中に戻った。

「月風…。大丈夫だよ？俺がいるんだから…。」

月風は、優しい雷紋の言葉に流していた涙を止めた。

「ご、ごめんなさい…。私が油断したから、こんな変な世界に飛ばされて…。雷紋くんを巻き込んだじゃったんだよね…。」

見上げる月風に優しい微笑の雷紋がいた。

「何言ってるんだよ？君はよくしてくれてるよ？君がいなきゃ、俺だってココまで来れなかったんだよ？さあ、泣かないでよ、月風には、笑顔が似合うんだから。」

頬を伝う涙を雷紋が唇で止めてくれた。

「ら、雷紋くん！？」

月風は、自分から、彼に泣きついたくせに彼の行動に顔を真っ赤にした。

「どうしたの？俺…。何か変なことした？」

「だ、だって、頬に…。」

雷紋はクスツと笑った。

「ばかだなあ…。男ってね、好きな子の涙には弱いんだよ？」

「好きな子？」

雷紋は優しい笑顔で、月風を引き寄せた。

「雷紋くん！」

少なからず、雷紋に好意を寄せていた月風の心が跳ねる。

「可愛いね、こんなに胸がドキドキしてる。」

雷紋の手が決して大きくはない彼女の胸を包んだ。

月風は、更に訳が分からなくなりそうだった。

「ら、雷紋くん！」

流行る鼓動が止まらない。そんな月風に雷紋は耳元で囁いた。

「イヤ？俺は、月風が好きだよ？その唇だって、頬だって、胸だって、全部抱きしめたいんだよ？この旅だって、君みたいに可愛い子

だって知っていたら、一緒になんて思わなかった。月風のことは、俺が全力で守るから、君は何もしなくていいんだからね！」

情熱的な雷紋の言葉に月風は失神しそうだった。

しかし、心のどこかに引つかかるものがあつた。

（雷紋くんって、こんなだったっけ？優しいのは、ホントだけど……。）

月風はハッとして、彼の身体を自分から引き離した。

「あなたは、誰？」

「はい、よく出来ました。」

聞き覚えのある声が、月風の後方でした。

振り返る月風は、先程まで、岩のゴツゴツとしていた壁があつた場所に、雷紋が立っていることに気付いた。

彼は、右手に何かを持っていて引き摺っている。

「雷紋くん！」

月風は2人の彼を見比べる。

雷紋は、引き摺っていたものを月風の前に落とした。

「えっ！」

月風は驚きで口を自ら塞ぐ。

そこには、苦しみに悶える自分が倒れていた。

彼女の胸には、鏃が刺さっている。

「な、何故分かった……。」

白目の黒い雷紋が倒れた月風に近寄り、肩を貸し、立たせる。

「月風？何故、アレが俺じゃないって分かったの？」

質問を無視して、雷紋が本物の月風に尋ねた。

啞然としていた彼女は、ハッと我に返ると2人の雷紋を見比べながら言った。

「優しさが違うから……。そっちの雷紋くんは、私に旅をさせていることを後悔してて、私に何もしくなくていいって言ってくれた……。で

も、私が知ってる雷紋くんは、私と兄さんを仲間にするためには、手段を選ばない人だし、何より、2人なら、大丈夫って、私のコトをただの飾りみたいに扱わないもん！」

雷紋がプツと噴出した。

そして、仮面の外れていく化け物の方を見る。

「な、何故、私が本物の月風ではないと？」

息も絶え絶えな敵が尋ねた。

「第一に、月風は、自分のことを『月風』とは言わない。」

月風は自分のことを言っている雷紋が自信ありげに言っ、手を繋いできたことにびっくりした。

「か弱そうदैいて、結構図太い性格しているし、」

月風は、キツと雷紋を睨む。

「俺のことを分かつてる。」

今度は、カツと顔を赤くした。

「君達、美也町の西に住む化け物だろ？」

化け物は、高らかな笑い声を上げた。

「いきなりなヤツ……」

あまりの大きさに岩が共鳴する。

「御館様のため！神の子よ！死んでもらう……！」

そういつた彼らの前に雷紋は手を伸ばす。

「鏡の中に属する魔物は、真の名を呼ばれると死ぬってホント？」

につこりと冷たい笑みを浮かべている雷紋。

化け物は、ギクツと動きを止めてしまう。

「鏡の一族が敵にその真名を知られてしまうと、絶対服従となる。

力ある人間、もしくは聖なる生き物に名を知られ、呼ばれるとお前達は死ぬんじゃないか？名前につてのに特別な思いがある？

「ぎて、お前は月風の名を連呼したんだろ？」

化け物は、フツツと笑った。

「神の子とはいえ、我らの名を知っているはずがなかるうに！」

「ま、普通はね……。でも、ちょっと気になってたことがあったんだ

よ。」

月風がちゃんと雷紋の袖を引っ張る。

「月風は、たぶん気付かなかったと思うんだけど、俺達が吸い込まれた手洗い場の鏡の左下と、右上に小さく文字が彫られたたんだよね……。」

気付かなかったと、月風は大きな瞳で語っていた。

「ところが、部屋の鏡のには、そんな彫り物なかったし、手洗いの間にあった他の鏡にもなかった。じゃあ、あれは、何のことを指しているんでしょうかね？」

化け物を見るからに狼狽した表情を見せていた。

「俺ね、ちよつとでも引つかかることが視界や耳から入ると重箱の隅を突くほどのことにまで記憶されてしまっつていう特技があるんだ。なんなら、言ってみようか？」

「ま、待て……。命を奪うのは止めてやる、言うな。」

2人の化け物は頭をうな垂れながら言った。

その言葉に雷紋は失笑した。

つづく

赤と白と黒と緑

「やだなあ…どっちが今、優位に立ってるか分かって言ってるの？」
化け物の顔が人からそれらしい容貌に変わっていく。

「ねえ、どっちがいいか選んでよ。」

「…？なんだ…。」

「ココで俺達を逃がして、命を存えるか。俺達を逃がしたことで、その御館様、もしくは、黒尽くめの女に殺されるか。」

化け物は、身体を硬直させた。

「そう、どっちみち、君達には、死しか待っていないんだ。」

握られた雷紋の手が汗ばんでいたのを月風は感じた。

「大人しく、鏡の世界で暮していればよかったのに、人の味を覚えて、本物の化け物に成り下がるとはね、あまたの人の命を奪った罪は、懇願されたところで許されるはずはない。」

フルフルと震えだす化け物は、お互いに身を寄せ合っているようだった。

「雷紋くん…。」

「…月風？ココから出よう。」

「えっ？出られるの？」

優しい笑顔。

「君さえ、力を貸してくればね。」

月風は急に笑顔をしぼませた。

「…駄目だよ…最近、あんまり上手く小鳥さんの力が出てこないんだ。」

雷紋が少し呆れたような顔をした。

「俺が怪我した時、必死で力出してくれたでしょ？」

「でも、あの時は…。」

雷紋が不意に月風の耳元で小さく語った。

「真名の話なんか、うそつぱちなんだから、ヤツラが騙せれている

うちに出よ?」

ウインクをしてくる雷紋に今度は月風が呆れた顔を見せた。

「元いた場所、行くよ?」

「えっ!」

雷紋と自分の身体が光り始めた。

月風は焦って上手く集中できない。

「大丈夫。2人なら、なんとかなるって。」

月風の変な緊張感が取れて、2人は暗闇の洞窟から明るいところに出た。

「わっ、凄いや。ホントに帰ってこれたよ。」

雷紋の声で彼女は目を開けた。

そこは、もといた屋敷の御手洗いの鏡の前だった。

「んっ?」

雷紋の言葉に疑問を持っていた月風であったが、激しく鏡の割れる音に我に返った。

自分には、何か服が頭から掛けられている。

「な、何!」

月風は、咄嗟に身体を丸くした。

バリバリと鏡を踏む音。

「終わったよ?」

雷紋の声のした方を見る。

そこには、いつもの優しい笑顔の彼がいた。

よくみると、彼は、上半身は肌着姿で、頬に傷を作っていた。

「雷紋くん!」

「さ、後始末しに行くよ。」

雷紋は月風の手を引いて手洗い場を出た。

その場には、町長の息子がいて呆然としていた。

雷紋は、化け物の正体、鏡が侵入口であることなどを話して、もう、大丈夫だろうと話した。

「ちょっと、聞いていいか？」

町長の息子に雷紋が尋ねた。

息子は、口に入れた食べ物を噎せかけたが、大きく頷いた。

「呪術師の女が、月風を生贄にしろって言うてきた時には、なんかおかしいって思ったんじゃないの？」

夕餉の席で雷紋は尋ねた。

「…ああ、命かからがら逃げれたヤツらは、美しい女に誘われたって言うてたからさ、なんで、生贄が女の子なんだ？って。」

「あの鏡の敵は、女型が淫魔。男型が夢魔ってトコかな。2人とも誘うことが仕事だけど、淫魔は、人間の性を奪い、夢魔は、夢を奪う。あの2人の感じからすると、力関係は、淫魔の方が強そうだからね…。この町で起こった出来事はほとんど、淫魔であるあの女が仕掛けたことなんじゃないかな。」

「化け物に性別ってあるのか？」

「基本的にはないけど、あの淫魔は、男の精気を奪うことが好きなんでしょ。月風とは思えないくらいのアプローチだったからね。夢魔に狙われるのは、」

雷紋はちらつと月風を見る。

「夢見がちな女の子が多いし？」

月風は、にたと笑う雷紋が自分をからかっているのだと理解して、ぷんつと拗ねた。

その状況を見ていた町長の息子が、

「なあ…あんたらって何者？なんで、まだ若いのに、化け物の闊歩するこんな国を旅してるんだ？見た目は普通のガキなのに、なんでお前、雷紋はそんなに物事を知っているんだ？」

何かを言いかけた月風の脇を雷紋が肘鉄した。

（酷い！女の子なのにイ！）

神獣を通して、雷紋に言葉を伝える。

（余計なこと言いそうだったでしょ？）

「それは、聞かないでほしいんだけど？駄目ですか？」

息子は、手先がピリピリし始めた。

「あ、あ……いいや、駄目じゃないです。」

「大切なお遣いを頼まれているんです。ある意味、子供の方が動きやすいってこともあるんですよ。」

につこりと笑う顔にその場にいる男達が頬を染める。

雷紋の顔が引きつる。

「！」

月風が何かを感じて、窓の方を見た。

「どうしたの？月風……」

「うっん、何でもないの。（紅蓮兄さんの気配を感じるの。）」

雷紋は立ち上がる。

「どうしたんだ？」

「月風が少し、外の空気を吸いたいみたいなんだ。」

促して月風を立たせる。

「行こう、紅蓮もきつと君を捜している。」

キマイラとの戦いから、一ヶ月は経っている。

毎日のように顔を合わせ、自分を励ましてくれていた紅蓮との別離は月風にとって大きなストレスとなっている。

雷紋は、彼女が上手く力を使えない理由がそこにあるのではないか
と
思
っ
て
い
た
。

屋敷の表に出た雷紋と月風は、大通りの人ごみをかき分けてやってきた紅蓮を見つけた。

月風は思わず駆け出していた。

雷紋がイズナに渡した髪粉と薬のせいで黒髪に黒目の姿であるがその瞳の輝きは、紅蓮以外誰の者ではなかった。

「紅蓮……」

その後にくくであろう兄さんという言葉は感極まって出てこない。

紅蓮は彼女の声に気付いて彼女を見つけた。満面の笑顔が雷紋にも

分かった。

「月風！」

2人は抱きしめあっていた。

「心配したんやで、ホンマに……。」

「ごめんなさい……雷紋くんが、雷紋くんがね……。」

涙で声にならない月風。

その後ろにいた雷紋が優しい笑顔で近付いてきた。

「無事でよかったよ。」

手を出す雷紋の手に音を立てて紅蓮は握手をしてきた。

「それは、俺の台詞やる？」

2人は、別れるまでのギクシャクしていた空気など何処行く風と言う感じで笑い合っていた。

「……そちらが、麒麟の？」

3人の様子と呆然と見ていた少女は、自分に皆の意識が向いていることに照れてしまった。

「は、はじめまして……。可憐です。」

月風や雷紋が人懐っこい笑顔で迎えてくれたので、可憐はほっと胸を撫で下ろした。

「兎に角、中に入つて。今日一日はゆっくり休んで、明日には、出発しよう。」

雷紋の台詞に驚いたのは可憐だった。

「そんな！来たばかりなのに。」

箱入り娘で育った彼女は、この町まで来るのにもかなりの無理をしてきた。

「……悪いね……でも敵が動き出したみたいなんだ。早いとこ皆と合流しないと大変なことになる。」

「で、でも、社もないこんな町で。このマメだらけになった足がよくなると思えないわ！今日だって眠れるかどうか分かんない！」

「じゃあ、何時だったらいいの？」

先程のような優しさの感じられない表情をみせる雷紋。

可憐は、カツと怒りで顔を赤くした。

「分かんないわよ!!」

どういうわけか彼女は月凧を引っ張っていく。

月凧は、雷紋と紅蓮に任せといて!という顔を見せて、彼女に従い去って行った。

「なんか…あまり分かってない?」

紅蓮の方を見て雷紋が尋ねた。

「んっ? ああ…まあ、可憐も色々あったからなあ…。」

紅蓮は、可憐から聞いたこと、朱雀の社で聞いたことを雷紋に語った。

「責任を感じてるのか…。」

ココは、屋敷内の大浴場。

今は、紅蓮と雷紋の2人だけ。

というか、そうするように町長の息子に頼んだのだ。

「まあ、敵が見せた幻覚とはいえ、母親の死ぬとこ見てしもうたらな…。あれでも、かなり我慢しとるんや。毎晩魔されとるし、敵は襲ってくるし、人通りの剣術は心得てるみたいやけど、幻術系の化け物には、簡単に騙されそうになる。この町に来て、やっと一息できるって思ってたんとちゃうかな。」

湯を掬い顔にかける。

湯に浸かる前に、髪粉で黒色を落とし、彼の髪はすっかり赤い色に戻っていた。

「なんで、お前の髪は、黒のままなんや?」

「これ?これは、髪粉じゃなくて、薬物投与によるものなんだ。」

「えっ、そっちの方がめんどくさいやんか。」

雷紋は苦笑する。

「ま、ね…でもコレは副作用があるんだ。」

「副作用って、大丈夫なんか?」

「俺の場合は、髪が伸びるって程度だからね。でも、これを試しに

飲んだ父さんは3日3晩苦しんだ。」

紅蓮が呆れた顔をしてる。

「そ、その薬って誰が作つとるんや？」

「ま…まあ趣味かな。ついでに、指導者は、白澤。」

雷紋の頭の上に出てきた白澤がニツと笑った。

「すべては、雷紋の将来を考えてのことよ。」

白澤の話は止まらなかった。

「月風は、よく、あの冷徹な子と一緒に旅してたね。」

風呂から上がり、髪粉でお互いの髪を黒く染めた少女2人は、1つの部屋を宛がわれた。

「雷紋くんは、冷たい人じゃないよ。いつでも皆のことを考えてる。」

可憐はふんつと鼻を鳴らす。

「でもさ、自分の親を助けたいから早く行きたいんじゃないの。世界がどうかより。」

月風が本心で言ってるの？というような非難の目を向けた。

「だって、雷紋くんの家は、きちんとしてて、彼は自由に動ける立場で、今だって生きてるんでしょ！私は、皆殺されてしまったんだよ、紅蓮しか頼れる人がいなかったから、一緒に旅に出ようって思ったのよ、それをどうして今日あったばかりのヤツなんかに従わなきゃいけないのよ！」

可憐は言いたいことを言った。

月風はグツと感情を抑えたように言った。

「でもね、雷紋くんは、今まで一度だって、自分の家族の自慢をひけらかすことはしなかったよ。両親のことを聞いたこともない。それが、何故だかわかる？私も父さんを目の前で化け物に殺されてるし、龍の御子である龍綺くんは、お母さんを目の前で亡くしてるわ。夜叉の御子である白妙にいたっては、両親に捨てられた過去を持つ

てるの。そんな御子のことを知っているから、雷紋くんは、あえて自分の両親のコトを語らないの。今回のコトだって、自分の両親のコトだけじゃないわ。慈音くんのお母さんだって危険な状態になってるんだよ。」

可憐は月風の真剣な瞳を見ていた。

「雷紋くんは、頭はいいけど、戦う方は苦手だって言ってた。どう考えても足手まといにしかない私をいつも守ってくれたし、励ましてくれた。私は、雷紋くんだから、彼が考えていることに従ってきた。だから、可憐ちゃんが雷紋くんを否定するなら、私は、可憐ちゃんとは一緒にいられない。」

「月風…。」

「白妙ちゃんは、優しいけどあんまり喋ったりしてくれないから、可憐ちゃんが初めてのお友達になるんだって楽しみにしてたんだけど…。」

可憐にとっても月風はじめての同性の友達になる存在だと思っていた。

だから、月風の言葉はとても心に突き刺さっていた。

「そ、そんなこと言わないでよ…分かったから。…我慢するよ。」
渋々といった表情の可憐。

月風は一応ホッと胸を撫で下ろした。

「じゃあ、寝ようか。明日は早いし、可憐ちゃんも疲れたでしょ？」

「…くたくた。紅蓮ってば、めっちゃくちゃ足が速いんだもん、お風呂に入って足を解せてなかったら最悪だったよ。」

普段は明るい可愛い少女なんだろうと月風は思った。

（よかった…とりあえず引きとめ成功。後は、可憐ちゃんに雷紋くんのよさを分かってもらわなきゃ！）

1人張り切る月風であつたが、心のどこかが痛んでいたことに気付いてなかった。

222

赤と白と黒と緑（後書き）

だんだん、副題に困ってきた。

旅が始まる

次の朝、朝食の席で可憐は頬を膨らまし、横を向いたまま雷紋に言った。

「あんたは、気に入らないけど、月風がどうしてもって言うから、一緒に行つてあげることにしたの！感謝してよね！！」

月風は、慌てた表情で、紅蓮は呆れている。

雷紋はため息を1つこぼすと、にっこりと優しい笑顔を可憐に向けた。

「……！……」

その優しい笑顔に3人はびっくりしてしまっていた。

と言つても、紅蓮はその笑顔にびっくりしている可憐に驚いたのだ。

（な、何やねん……）

「さ、朝の活力、御飯にしよ！」

雷紋に促されて4人は席に着いた。

食べ盛りの若者の席にはこれでもかと食事が置かれている。

町を救つた彼等への手向けであった。

雷紋の動向を目で追っている可憐を月風は複雑な気持ちで見ている。

「で、今日のコトなんだけど、旅立つ前にこの町に結界を張ろうと思う。月風、方法の説明は終わってるよね？」

月風は、今回の旅の途中、雷紋と白澤から結界の張り方について教授を受けており、麒麟の御子が仲間に加わった時点で彼女に結界の張り方を教えておくようにと雷紋に言われていたのだ。

雷紋を身を挺して守つた迦陵頻迦の結界とは少し種類の違うものであったが、本来はこちらの方が簡単でこれを完璧にマスターできれば、迦陵頻迦のあの強力な結界も上手くひきだせるのではないかと雷紋は月風に告げた。

そして、祠や、道祖神などの神仏像を見つけるたびにその結界を張

る練習をさせていた。

「もしかして、してないの？」

月風は雷紋の期待に答えられていなかったことに恥ずかしくなった。

「…まあ、いいか。紅蓮、教えてあげてよ。」

「無理。」

「へっ？結界張れるだろ？」

「ちやう、人に教えるのが無理やいうてんのやって…。」

雷紋は妙に納得してしまった。

彼は完全に肉体派であった。

「…教える相手は俺でいい？」

雷紋がきょとんとしている可憐に言った。

「へっ！…それは必要なこと？」

嫌そうな、それでいて照れているような顔だった。

「町や村の人の中にこれ以上の犠牲者を出さないようにするためにはね。」

可憐の中には、犠牲者が出るということに耐えられないと考える心が強くあった。

「分かった。教えてよ…これ以上人が傷付くところなんて見たいくない。」

「じゃあ、食事が終わったら、教えるよ。」

「私が教える！！」

月風が席を立った。

あまりの勢いに、お茶の入った茶碗が倒れた。

「わっ、何してん！自分！」

そのお茶が紅蓮の身体に落ちた。

「…ごめんなさい。」

月風はしゅんとなる。

暫く続く食事がおわり、町長の息子が手配した召使が部屋の片づけをし始めた。

「月風は、紅蓮と一緒に町の南と西に散って。俺は、可憐に伝授し

てから行くから。」

「了解。月、行くぞ?」

「あ…うん。」

雷紋と可憐が2人きりになることに月風は、内心焦っていた。

(どうしよう…可憐ちゃんが雷紋くんのこと好きになったら…。だ
って、術の伝授って…。)

それは、額と額を当てて、直接白澤が、相手の内なる獣に伝えるものだった。

月風が教わった時も、雷紋はその額を自分の額に付けてきた。

長い睫と極近くで聞こえる彼の声に物凄くドキドキしたものだっ

「さて、可憐。手を貸して。」

誰もいなくなつた部屋で雷紋は言った。

「えっ?」

「相手に触れることで白澤は、君の神獣に術の伝授というか、術の解放儀式を行えるんだ。」

「儀式。」

「そう、神の子の中で、術のことを覚えているのは、夜叉の子だけなんだ。俺も忘れてたけど、白澤は、自分の得た知識を忘れるなんてことは、許せない性格だからね。自分が御子だって自覚した時に訓練させられた。君の麒麟もきつと忘れていただけだから、きつと白澤が思い出させてくれるよ。さ、手を出して。」

可憐はちよつと躊躇した。

「怖い?」

「…!! 違っ!」

「大丈夫。辛いのは、忘れてる神獣だけだから。」

自分の中の麒麟が怯えたのを可憐は感じた。

「怖がらせないでよ、麒麟はまだ子供なんだから!」

可憐が見た彼はとてもまだ幼く、生まれたばかりのように感じた。

「はい、手。」

「はい、分かったわよ。」

ぱちんつと小気味いい音を立てて可憐が手を重ねてきたので、雷紋は思わず笑った。

「何よお！」

可憐の顔は真つ赤になっている。

「イヤ、可憐つて可愛い人なんだね。」

その言葉に彼女は益々真つ赤になって拗ねた。

「…からかつてるわけじゃないんだけどね、さ、始めようか。」

「…うん。」

その後、可憐は、北。

雷紋は東の方角に立った。

神獣の力を借りて、意識を合わせ、美也町に結界を張った。

そして、再び屋敷にて待ち合わせた。

月風が一番遅く屋敷に帰ってきたのだが、その時には雷紋と可憐はすっかり打ち解けているようで、可憐は、雷紋の肩に手を置いて、月風に手を振ってきた。

「月風！！早く！！！」

「お前、元気やな。」

「うっさいなあ、紅蓮は。」

少しの間一緒に旅をしてきた紅蓮とは当然の如く仲がよく、旅立った後も月風は何だか疎外感のようなものを感じていた。

朱雀の木札を雷紋と月風の分まで用意してくれていた紅蓮のお陰で、化け物との遭遇は極端に減っていたが、余計なことを考えながら歩いていた月風は草に足を取られ、滑ってしまった。

紅蓮に笑われ、可憐は心配してくれたが、彼女と目を合わせられなかった。

「しょうがないなあ…。」

雷紋が手を出して、月風を引き上げた。

「きゃっ。」

勢いよく、雷紋の胸に飛び込んでしまう。

「雷紋、そいつ頼むわ。案外っていうかトロくさいヤツやねん。」
紅蓮の言葉に可憐が、

「月凧に失礼だよ！」

と言って、紅蓮とじゃれていた。

その間も雷紋は、月凧の手を放さない。

「ら、雷紋くん…私、大丈夫だよ。」

「ま、いいんじゃない？紅蓮の許可も出たし。」
につこりと笑って言う雷紋。

「で、でも…。」

戸惑う月凧を雷紋が覗き込んだ。

「イヤだった？」

月凧は真っ赤になった。

「あ、うっ…。」

「ははっ、イヤになったら言って。」

雷紋は、月凧の手を放すことはなかった。

つづく

父である真実

「困ったな……」

ふと漏らした言葉。

彼には珍しい弱音だ。

朱雀の社を出て、北を目指していたはずだった。

国の南にあたるこの地から一刻も早く凱漸のもとへ駆けつけたかった。

ところが、思った以上に化け物の出現が多く、その行く手を阻むのであった。

加奈陀は、手元の護符を眺めていた。

身体に張ってあったはずの札が早くも3枚に減っていた。

（今から、朱雀の社に戻るか？イヤ……）

ふと腕の中にいる小さな子供を見た。

朱雀の社から少し北にある村の出身だという少年と少女は、安全と思われた祠への道で化け物に襲われた。

結界の中に入ってこないはずの化け物の手が入って来たことで、同行していた大人（おそらく彼らの父親だろう）は、無惨にも金魚すくいのように化け物の大きな手で掬われ、結界の外へと引きずられていった。

子供達は、パニックになり、愚かにも父親の後を追って、結界を出てしまったのだ。

彼ら兄妹の持っていた護符は効力をほとんど発揮しておらず、力の弱い化け物にしか影響を与えなかった。

父親を攫って喰った化け物は、大きな手に牙の生えた口という、不気味なもので、不味いといって、父親の骨をあつという間に吐き出した。

化け物には、口しかなかったが、子供達を見つけると舌なめずりと

して、涎をたらした。

「なんと、美味そうな子よ…。」

言葉を喋る化け物は妖力も強く知能も高い。

今にも襲わんとしたところに加奈陀は出くわした。

朱雀の社で貰った札は、絶大な効果を持ち、加奈陀を助けてくれた。王都へ向かうルートを探りながらの道中で、加奈陀は、化け物に襲われそうになっている人を助けたが、その人が無事に帰途につけるように朱雀の札を渡さなければならぬ状況に出くわした。

そのお陰で、5枚あった護符が今では3枚。この兄妹に渡してしまえば自分の心の臓を守る1枚だけとなってしまうのだ。

かといって、この兄妹を彼らの村まで届ける猶予は彼にはなく、悩んでいた。

しかし、家に帰りたいと願う子供に役に立たない護符だけで帰るとは言えない。

結局のところ加奈陀は子供達に自分の持つ護符を一枚ずつ渡し、振り向かず村へと走れといい、大きな手の化け物に対峙した。

異様なほどの気を放つ化け物に自分の剣が通じるか分からないが。

加奈陀はそう考えながら、懷から出した小瓶の水を剣に振りかけた。

（やるしかないか、凱漸が気になるしな…。）

剣を翳し、手の化け物に切りかかった。

小指と薬指を切り落とした加奈陀であったが、自らも化け物の爪で傷付き、立っているのがやっとであった。

（死ぬのか…？）

自分の死を予感した時、上空から、突然黒い光が雨のように降ってきて、手の化け物だけを貫いた。

（なんだ…？）

上空を見つめる加奈陀の元に黒い衣を風に棚引かせた女が降りてきた。

「捜したわ…剣士・加奈陀…。」

女の顔は唇しか見えない。しかし、その真つ赤な唇が禍々しかった。
「何者だ…。」

女の口角がくいつと上がった。

「私の名は、欄梓…。この世界を統べる王の側の者…。」

加奈陀は剣を構える。

「王だと…?」

女が黒い服の袖を広げた。と同時に1人の女が転がってきた。

片手だけを女に掴まれてだらりとした姿。加奈陀には見覚えのある女だった。

「あら?顔見知りなのね…。」

それは、飛蝶街で大賭博場を経営する男の妻として、情婦として存在していた女だった。

加奈陀の疑問を悟った女が軽く笑った。

「何をするのか分からないって顔ね…。この女は、神の子を生み出した聖母なのよ。」

ポツポツと雨が降り出した。

加奈陀の髪や衣服を濡らす雨は、女を濡らしてはいなかった。

「聖母…。」

スツと加奈陀を指差す。

「そして、あなたは聖父つてところかしら…。」

「…その聖母とやらをどうするんだ!」

女は、一瞬言葉を失っているようだった。

「そう…知らないのね…。」

「な、何のことだ…?その女を放せ…。」

一太刀振りかざすが女はそれをひらりとかわした。
土砂降りになった雨が加奈陀の視界を塞ぐ。

「あなたも必要なのよ。この計画には…。」

「?」

「本当に知らないのね…。甲村で、あなたは愛する女と結ばれた…。」

加奈陀は、脳裏に浮かぶ一人の女の姿を打ち消した。

「その女は、お前が、凱漸皇子の命で村を離れた隙に、村一番の豪族の元に嫁がされた。」

加奈陀の剣を握る手に力が入る。

「女の家族にとって、流れ者のお前より、村一番の豪族に嫁いだ方が幸せだ。そう感じるのは当たり前のこと…。娘は、もちろん家族の意見に反対をした。お前と愛を誓い合った龍神の祠で自分の身に起こった変化を感じ取っていたからね、それは命を懸けた訴えだったのさ。」

もう1度愛した女の顔が脳裏を掠めた。

「ところが、豪族の頭は、それも含めて娘を自分の愛妾として迎えた。それは、何故か…。」

自然に唾を飲み込んでいる自分がいた。

「娘が宿した命が、神の子だったからさ！」

加奈陀の目が大きく開かれ、黒尽くめの女を凝視する。

「神の子は、欲深い人間にとって宝の木。娘に愛などなくても自分のモノにする必要があった。豪族頭は、村に帰ってきたお前が娘の気を変えないように、子供を人質に取った。お前に嫌われても愛想をつかされても、龍神の御子を守らねば、愛する子を守らねばと、娘はある誓いを立てた。」

「な…何のことを言っているんだ…。」

女はさも愉快的な物語を語るかのように加奈陀に聞かせる。

「龍神の御子を自由に出来るまで、何も語らない、我が子にも声を掛けない。それは、娘にとって、我が子を守る唯一の方法だった。豪族頭は、娘に何とか話をさせよう、その誓いを破らせようと御子の剣術指南役として、お前を屋敷に招き入れた。愛しい男を目の前にすれば、言葉を喋り、御子の自由の為に掛けていた誓いを破らせることができるだろうと考えていた。」

雨音がやけに静かに加奈陀の耳に届いていた。

「しかし、そこで豪族頭が思ってもみないことが起こった。彼にと

つて愛情を注いだはずの龍神の御子は、本当の父親と共に旅に出た
いと言つて来た…。」

「龍…綺…。」

「豪族頭は、宝の木をみすみす逃がすではなく、御子を特殊な結
界の中に閉じ込めた。その結界は、御子にとつて大切な人の命を切
らなければ壊せないものだった。もちろん、それは私が豪族頭に上
げたモノなんだけど。」

「綺は…綺は…どうなった…。」

頭の中にある愛しい女の名を告げる。

欄梓が失笑をした。

「龍神の御子にたてた誓いとその命で、結界を壊して死んだわ…ま
さか、殺される訳でもない龍神の御子を助けるために自分の命を捨
てるなんてね…。」

意外そうな声を出す。

「綺が死んだ？」

加奈陀の身体力が抜ける。振りかざしていた剣を杖のように大地
に突き立てる。

「そう、龍神の御子はお前と、お前の愛した娘の子供…。かわいそ
うな娘は、お前に裏切り者と思われたままこの世を去ったの…。」

加奈陀は、自分の愛した娘の最期と、飛蝶街から旅立つ紅蓮の傍に
自分の子供がいたことを初めて知った。

幼い頃に剣術の指南までした子供。

自分を慕ってくれていたが、裏切りの証だと思っていた加奈陀は極
力彼の顔など見ないようにしていた。そのせいか、あの街で龍綺と
出会っていたのにも関わらず気付かなかったのが。

また、変装をしていた自分のことを龍綺が気付く訳はなかった。

「絶望に歪んだ顔は美しいわ…。いらっしやい…お前の身体と心利
用させてもらう。」

黒い霧が加奈陀を包み込み、女の中に吸い込まれていった。

う
う
く

薬の副作用

「雷紋のイズナが知らせてきた通り、俺はこっちも動く必要があると思う。」

龍綺の言葉。

ただ待っているだけでは、なかなか進まないと悟ったことだった。

「言ってきた地点は？」

「王都との境にある街、静香。」

広げた地図のある街を指差す。

「この街は、王都の情報発信源でもあるからね、色々なことが分かると思うよ。」

慈音がイズナが持ってきた雷紋の薬を皆に見せた。

「髪粉は、雨で流れてしまってから、目の色を変える薬と共にコレを飲んで色を変えたほうがいいって言われたんだけどさ…。」

髪の色を黒に変化させる薬。雷紋の言葉では、副作用があるらしい。「いいなあ…白妙と龍綺は黒髪で…。」

イズナの言うことには、雷紋の父は、薬の副作用で3日間寝込んだらしい。

薬を手にとって息を吐く慈音。

龍綺は、それを飲まなければならない暁が気かりであったが、当の本人は、全く気にしていないみたいで、龍綺の持っている薬を飲みたくて仕方ないと言った感じであった。

「わっ、せつつくなってば、」

「それ、あーのでしょ？りゅーの違う！早く頂戴！！」

暁はパツとそれを龍綺からもぎ取ると何のためらいもなく口へと運んだ。

「暁！！」

皆の視線が彼女に注がれた。

「ぐっ！！」

暁が大地に膝を付いた。

龍綺は、彼女を支えようとしたが、眩い光が彼女の身体を包みその手を弾いた。

「暁！」

彼女の身体を包んだ光が消えるのに数分が掛かった。

「暁…。」

光から解かれた暁の姿を見て、一同は息を飲んだ。

「あー、胸なくなつた…。」

光から解かれた暁が発した初めての言葉。

少し低くなつた声。

髪は黒くなつたが、明らかに長さが短くなっていた。

慈音は、そつと龍綺を見た。

おそらくこのメンバーの中で一番衝撃を受けているのは彼だと思つたからだつた。

案の定、龍綺は呆然としていた。

「マジかよ…。」

暁はいつものように龍綺に笑顔だつた。

「りゅー！あー、りゅーやジオと一緒に！おつこの子！」

力瘤を作つてみせる。龍綺はがっくりと頭を垂れた。

「…性別が変わるのは、イヤだなあ…。」

「ジオ、女の子になる？」

暁は、嬉しそうだ。

「暁、はしやぎすぎ…。」

龍綺に窘められる。彼は幾分性別の変わってしまった暁に順応しようだつた。

「と、兎に角…髪の色を変えないといけならしいから…。」

「早く飲むんだな。」

あつさりという白妙に慈音はがっくりなりながら、薬を飲んだ。皆の注目が集まる。

「うっ！」

彼は頭を押さえて苦しみだした。

「どうした！慈音！！」

「あ、頭が痛っ！」

膝を付く慈音。飲めと言った手前、白妙は彼の苦しみように戸惑っていた。

「……大丈夫…なんか落ち着い…。」

慈音の動きが止まる。

「どうした？大丈夫か？」

慈音の銀色の髪は黒色に変わっていたが、暁のように性別が変わったという訳ではないようだった。しかし、彼は、頭を両手で押さえたまま立ち上がり、黙っている。

「大丈夫か…。」

「く、黒髪になったからって…コレは、駄目なんじゃないだろうか…。」

そつと離れた手の下には、ちょこんと縞模様の耳が生えていた。

龍綺はプツと噴出し、暁は、その耳を弄りに来た。

「や、止めるって、龍綺、暁止めて！」

笑いながら、彼は、暁を止めた。慈音はチラッと白妙を見る。

彼女は、じーっと慈音を見ていた。

「白妙？」

彼女の顔を覗き込む。彼女はずっと慈音の生えてきた耳を見つめている。

「可愛い！慈音！可愛いぞ！！」

何時になく嬉しそうな声に慈音も、龍綺も哑然とする。

暁は、白妙と一緒に可愛いを連発していた。

「しっぽー！」

暁がぎゅうつと慈音の服を突き破って出て来ていた尾を引っ張った。

「ぐわっ！」

慈音は眩暈を起こすような感覚に膝を付く。

「あー、止め。」

ぱつと手を離す。

白妙は慈音を覗き込んだ。

「だ、大丈夫か？」

「う…うん。なんか眼が回った。」

「と、とにかく、今日は休んで明日の早朝に出よう。」

具合の悪そうな慈音を見て龍綺が言った。

「冷たい水持つて来たぞ。」

夜まだ本調子になっていなかった慈音に白妙は水を運んできた。

「ん…ありがと…。」

心配そうな顔をする白妙。

「大丈夫だよ。暁にかなりキツク握られたせいだと思っから。」

「触っていいか？」

「へっ？」

白妙の瞳がキラキラしている。

見たことのない表情に慈音はフツと笑った。

「いいけど、大事に扱ってね。」

そつと白妙が尾に触れる。

「んっ…。」

「痛い？」

すつと撫でる。

「ちがっ…んっ…。（変な声が出る…。）な、なんか…あつ。」

「ど、どうした？」

慈音は起き上がって、御辞儀をする姿勢を取った。

「だ、大丈夫か？」

「…ご、ごめん。ちょ、ちよつと用をたしてくる。」

人間の耳を真っ赤にしたまま慈音はその場を去った。

次の日、慈音の敏感な尾は消えていて彼を安心させた。

「どうなるかと思った。」

「耳は消えないんだな。」

頭を布で覆う。光の下でみた慈音の瞳は黒いものになっていた。

「瞳の色が違うというのは不思議な感じだ。」

と互いの眼を見て御子たちは軽く笑った。

一方、小さな白虎の祠に結界を張り、今後のことを考えていた雷紋は、紅蓮と可憐、そして月凧に髪の色を変える薬の必要性について話をしていた。

「でも、その薬って副作用があるんでしょう？」

可憐が拒否しますって顔で言った。

「個人差があるけどね。」

「雷紋のおとんは、3日寝込んだんやろ？大丈夫か？」

雷紋は、自分の言ったことを紅蓮が覚えていたということにちよつと感心したようだった。

「…あ、あれはさ、黒髪の人が飲んだからそういうことになったからだと思ってるんだけど？」

「ほんまか？」

じつと見つめる紅蓮、可憐、月凧の視線。

「人体実験をそれほどしてないからねえ…白澤の言う通り材料集めてさ、ま、その材料は言えないけど。」

3人の表情が曇る。

「大丈夫、死んだりしないって、目の色の薬くらいの気分の悪さがちよつと起こるくらいじゃないかなあ…。」

「材料言えないって、飲む私達にはとっても怖いんだけど？」
顔をききつつた可憐。

「じゃあ、どうする？今からこの珠国は雨季に入るんだよ？傘持つとか、雨合羽着て、化け物と戦うの？髪粉の色が落ちて手配中の子供だって誰かに密告されたら？龍綺たちと合流する前に御用だ。となると、捕まったと考えられる母さん達を助けることもできない。」

「しんとなる言葉。」

「分かったわよー!! 飲めばいいんでしょー!!」

「そ、飲めばいいの。」

笑顔の雷紋が憎らしいとさえ、皆は思った。

紅蓮と可憐が勢いよく薬を飲む。傍で雷紋は月凧に声をかけた。

「月凧は、薬に弱いみたいだから、ちょっと心配なんだけど… 飲める?」

目の色を変化させる薬は、紅蓮や可憐には大した気分不良も与えなかったが、月凧はそれに慣れるに2日は掛かっていた。

覗き込まれた雷紋の顔。

「大丈夫!」

怖いと思っていることを悟られないよう月凧は笑顔で薬を飲んだ。と、後ろから叫び声がした。

「「なんじゃこりゃ!」」

振り返った雷紋が見たものは…。

「そうきたか…。」

雷紋の呟きに、声が飛ぶ。

「そうきたかじゃねーだろ! どーすんねん!」

雷紋の視線が下のほうへと移る。彼はしゃがみ込み、声の主と目線を合わせた。

紅蓮は、薬の副作用として、5歳くらいの身体になっていたのだ。

「そうよ、そうよ! 自分は、ひよっと髪が伸びただけだから、いいかもしれないけろさ!」

紅潮した顔と呂律の回らない口調になっているのは可憐。

「ろーして、こんなに、目が回る〜?」

どうやら、酒を飲んだような状態らしい。千鳥足だ。

さつきから、感情のコントロールが上手くいかないらしく泣いたり、笑ったりと忙しい。

「めっちゃ、うつとーしーで、コレ。」

「うつとーしーなんて、ひろい！ひろいよ〜くれん…ひつく！」

「最悪一週間。一週間くらい経ったら、薬の副作用は消える。そのあとは、白澤が用意した『神媚丸』の作用で、神の子の力を使うときだけ元の髪の色に戻るはずだから…って、月風？大丈夫？」

振り返ると彼女は祠の後ろに身体を隠して出てこない。

「諦めて出てこんかい！」

イライラしているのは紅蓮。

「だってえ〜恥ずかしいよ〜。」

消え入りそうな声。

「そんなころないよ、月風とっても綺麗だから、出ておいで？」

優しい雷紋の言葉に月風はゆっくりと立ち上がり、祠の影から出てきた。

雷紋の肩までしかなかった身長がすっかり伸びて、視線は雷紋の少し下。

豊かな黒髪が包む身体はすっかり大人の女性だった。

「20歳くらいかな？」

うるつと視線が緩む月風。

成長した身体に服が耐え切れず、肩とか脇とかは裂けており、月風は小さくなった紅蓮の服を羽織ることになった。

「いつまで、泣いてるの？気にしなくていいのに…。可憐みたく酔っ払ってる訳でも、イズナが教えてくれた慈音みたいに耳が生えた訳でもないでしょ、」

よしよしと頭を撫でている雷紋。

紅蓮は、突然走り出したり、笑い出したりする可憐に手を焼いている。

「じゃ、見てない？」

やっと喋った月風の言葉は理解不能だった。

「えっ？」

しかし、雷紋には心当たりがあるようで内心ドキツとした。

「服破けた時に、見えてない？」

月凧が言っていること。

もともと胸の部分をくり貫いたようなデザインの服だった。

それが、突然大きくなった月凧の身体に順応できず、中心から物凄い勢いではじけたのだ。

「（しつかり、見えたけど、内緒にしといた方がいいか。）何を？」

「…胸…。」

「えっ？何？聞こえないよ？」

少し意地悪を試してみたくなった雷紋であった。しかし、そのお楽しみも…。

「あのさあ…お取り込みのところ申し訳ないんやけど…。」

疲れきった表情の紅蓮に中断されることになった。

「あの酔っ払いどないかして…俺じゃ、運ばれへん。」

可憐は電池が切れたように寝始めたようだった。

自分しか運ぶ者がいないという現実には雷紋は眩暈を覚えた。

つづく

移動中・・・

「りゅー？どしたの？顔色悪い…。」

洞窟を出て暫くして暁が具合の悪そうな龍綺に声をかけた。

他の2人も龍綺を気遣う。彼は胸元を掴んでいる。

「…どうやら、父上も、捕えられたらしい。」

龍綺の話によると父である加奈陀という男は、凄腕の剣士で、そう簡単には敵の手には落ちたりしないであろうと皆考えていた。

「なっ…。マジで？」

「この感覚…たぶんそうだろう…くそっ…。」

合流地点に向かう道中で、龍綺達は、ある村に立ち寄った。

王都にそれほど遠くない村がこんな活気がないなんてと、暁以外の御子達は思っていた。

暁は、初めて見る外の世界、人の暮す世界に好奇心が刺激され、龍綺が目光らせていないとどこにいか分からない状態であった。

頭に布を巻いて、生えてきた耳を隠していた慈音は、目の当たりにした情景に言葉を無くした。

そこには、役人に獲れえられ、後ろ手に自由を奪われた子供達が居た。

下は3、4歳から自分達と同年代くらいの子供達の姿があった。

その周りでは親であろう大人たちがすすり泣いている。

「慈音、コレだ。」

白妙に言われて、見たものは、国から出された『お触れ』。

髪色や瞳の色の異なる子供を神の子予備軍として、国に差し出すこととなっていた。

「助ける？」

慈音の言葉に白妙が反対した。

「今出て行けば、私達は雷紋と合流すらできない。子供達は、王都

に連れて行かれるが、すぐに殺される訳ではないだろう…ここは、堪える。」

「でも、あの子達…。」

少し、髪の色が薄いというだけで捕えられた子もいるらしく、明らかに手当たり次第な印象を受ける。

「神の子の印象を悪くする目的も国にはあるんだろう。」

神の子である疑いを掛けられ連れて行かれる子供の親にとって、神の子は忌むべき存在となっていくだろう。

敵の目的がなんであれ、雷紋たちと合流を果たしていない今は動くべきではなかった。

「あー、アレ嫌い…。」

縛ってある縄を見て暁が言う。

身体はすっかり男の子だが、可愛さは今まで通りなので、龍綺はこんな風に抱き付かれると内心は複雑だった。

「兎に角、必要な水と食料を手にしたら、ここを出よう。」

村の中心にある井戸で水を各々の持つ水筒に入れる。

龍綺の腰にはもう1つの水筒がぶら下がっており、それには玄武の岩牢にあった温泉の湯が入っていた。

後ろ髪を引かれる思いで4人はその村を後にした。

同様の出来事は、雷紋が訪れた小さな村でも見られた。

「今は、一時も早く皆と合流をするべきだ。」

雷紋の意見に紅蓮は激しく噛み付いたが、雷紋に諭され、子供達を助けることはしなかった。

「大丈夫よ、…彼らは神の子じゃないわ。」

可憐の言葉。

少し酔いが覚めているのかはつきりとした言葉であった。

紅蓮の思いを伝えるかのように糸のような雨が空から落ちてきた。

「くそっ！」

小さい身体になってしまったが、力はそのままであったため、紅蓮が蹴り上げた頭部ほどの大きさの岩は、4つに砕かれた。

「急ごう…。」

雨脚が激しくなっていた。

途中で化け物に何回か襲われ、敵を倒しては、近くの祠で力の回復をし、再び歩くということを繰り返していた。

「白澤の用意した神媚丸は、その人の願いを1つかなえる力を持つ。それを練り込んだこの薬は、俺達にとって都合のよい薬なんだ。」
紅蓮が棍を使う時、雷紋が弓を放つ時、可憐が剣を使う時、その時だけ、彼らの髪や瞳の色が元に戻る。

本来の色を取り戻すことは、彼等が神の子としての力を発揮できるということだった。

神媚丸は万能薬だったが、その力を現す色まで封じることが出来なかった。

人の手のはいった祠の近くにある東屋で雨宿りをしながら雷紋は語った。

「もうすぐ、慈音とも合流できるから…可憐、月風頑張ってくれろ？」

肉体的な疲労が癒えても、精神的な疲労は中々癒えることがない。それでも彼らは進まなければならぬのだ。

「私は、大丈夫だよ。」

精一杯の笑顔。月風は、戦いの間、自分の周りに結界を張りながら、皆に回復の力を送り続けていた。

東屋の扉に凭れる様に休んでいた月風の姿を見ると彼女が無理をしているのが痛いほど分かる。

頬に掛かる髪をそつと避ける雷紋に笑顔を見せる。

（無茶させてるからなあ…。）

一方、常に酔っ払った状態で戦っている可憐もかなりの疲労の色が窺えた。

「気分はよくないよ。動くたびに酔いが回る感じ。お酒なんか飲んだことないから、余計……」

時々、戦いの後は、食べたものを吐いている姿を見ていた紅蓮は、彼女をゆつくり休ませて上げたいと思っていた。

「次の町で少し休もうか……」

月風が首を振る。

「駄目だよ……雷紋くんのお父さんやお母さんが……」

「大丈夫、それくらいの時間。次の町にはいい温泉があるって白澤も言ってるし、きつと疲れが取れるよ。」

薬を飲んでそろそろ一週間。

薬の効果は落ちてきているはずで、小さくなった紅蓮は日を追うごとに大きく成長しているし、月風も元の身長に近付いてきている。

「私のこの酔いも早く冷めて欲しいよ。」

おでこに濡れた布を置いて休んでいる可憐。

「静香まで、あと2つ町や村を越えればいいんだ。」

本当なら、空間移動の力を借りて慈音達の方へ行きたかった。

しかし、どこに役人の目があるか分からないため、祠同士を結んで飛ぶことは出来なかった。

今こうやって休んでいる東屋の近くには、武装した兵隊が祠を見張っている。

対外的には、化け物からの襲撃に備えてのことだとされたが、彼らは、神の子が訪れるのを待っているのだ。

厳戒態勢の情勢の中、14、5とはいえず子供が旅をしていることに役人や、兵士の目は厳しいがなんとか誤魔化してきた。

それまでは、雷紋の父母の使いとの言い訳を用意していたが、彼らが捕えられた以上その言い訳は効力はないだろうと考えたのだ。

「おい、お前達。」

兵士が声をかけて来た。

旅の理由については先程述べたばかりだから大丈夫だと思ったが、何の用事があるのだろうと思った。

声をかけて来たのは3人の体格のいい男達。

「大分疲れておるようだな、どうだ、その簡易の宿で休まんか？」
明らかに月風、可憐を見る目がいやらしい。

「おつ、よく見るとお前、可愛い面してるじゃねーか。」

それは雷紋を見て告げられた言葉。

雷紋は自分の顎に掛けられた手を振り払った。

「何しやがる！俺達は、国王に使える兵士だぞ！！」

休んでいる月風が静かに目を開ける。

「動けねーのか、御嬢ちゃん…。」

ゆっくりと身を起こす月風の様子を舐めるように見る兵士に、雷紋は彼女を抱きしめた。

（ここで、コトを起こすことは出来ないが…。こいつらつ。）

一番身体の小さい紅蓮が大きな男に東屋から投げられた。

それでもくると身体を回転させて大地に着陸する。

「なんだ！この嬢ちゃん、酒臭せーぜ！」

力任せに可憐の腕を持ち引き上げる。

彼女の身体はいとも簡単に男の胸の中に引き込まれる。可憐の苦痛に歪む顔。

「いけないねー…子供が飲酒するなんて…。」

「彼女を放せ！」

月風を抱きしめながら、雷紋がその兵士の腕を掴むが、反対側から月風を奪われてしまい、雷紋も後ろから捉えられてしまった。

「ちえ、俺の相手は男かよ…ま、穴があれば…いいか…。」

ぞつとする言葉。雷紋は、近付いてきた男の口に指を突っ込んだ。

苦しさに男は、雷紋を乱暴に大地に投げ捨てる。

彼の身体は、東屋のテーブルにぶつかって床に倒れる。

「ガキ！何を飲ませやがった！！」

男の鋭い目。

隣では、小さく月風が悲鳴を上げた。

「月風！！」

その隣では、紅蓮が思い切り可憐を抱きしめている兵士の頭を蹴り飛ばしていた。

雷紋は再び起き上がり、月風に今にも口付けようとする男を捕まえて口に薬を突っ込んだ。

ゴクリッと飲み込む音がした。

2人の男がブルブルと震えだした。

男達が飲み込んだのは、『呪い丸』であった。

力が緩み、月風を放した男から奪うように月風の身体を引き寄せる。

「大丈夫？」

優しい雷紋の瞳と声に震えていた月風も安堵の息を飲む。

紅蓮が頭を蹴飛ばした男は、白目を向いて倒れていた。

「こっちも、大丈夫や。」

雷紋はすかさずその男にも『呪い丸』を飲み込ませた。

激しく降る雨で男達の口に突っ込んだ手を洗う。歯型が付いて少し血も滲んでいる。

「雷紋くん、大丈夫？」

のた打ち回る男達。雷紋はその男達の伸びてきた手の甲を踏みつけた。

「国王に仕える兵士が浅ましいことをするなよ…子供だと思って舐めるな。」

紅蓮の身体は、雷紋と同じくらいの大きさに成長していた。

「明日くらいには元に戻りそうだね。」

雨に濡れた紅蓮は、その声を掛けてきた可憐を気遣っているようだった。

「私は大丈夫だよ、なんか腕掴まれて目が、というか酔いも冷めてきた。」

いつもよりはつきりした目で紅蓮を見ている。

赤くなった腕を摩っているが、その視線は、気にするなと可憐を守れずにいた紅蓮を慰めていた。

「さて。」

雷紋は、男達に並ぶように命じた。

呪い丸の威力で男達は言いなりの状態だ。

「雨で濡れた身体と、言いようのない屈辱を味合わされた罰を受け
てもらおうよ。」

こついつときの雷紋の恐ろしさを彼らは知らなかった。

つづく

木蓮の一刺し

「あと1つの峠を越えたら静香に着くな。」

龍綺がほつとした声を出した。

これまでの道中で、国王がもはや正常な精神状態ではないことを悟った。

慈音の父である凱漸皇子の噂も沢山耳にした。

しかし、皆どれも好き勝手に言っているだけのようにも思えだし、早く情報発信源の街と言われる静香に到着したかった。

薬を飲んで、一週間。

暁は、男の子から女の子の身体に戻っていた。

「あー、これ邪魔だから要らなかった。」

そういうのは、まだまだ元通りではいが膨らみかけた胸だった。

「そ、そう?」

複雑な返事をするのは龍綺だった。

一方、慈音は、すっかり耳が消えてしまった自分を白妙が時々淋しそうに見ていることに複雑な心境を抱えていた。

「そ、そんなに耳、可愛かった?」

「ああ、とっても似合っていたぞ!」

こんな時に力説する白妙を可愛いと思いつながら、複雑だ。

御子達が出会ってから一年近く、慈音も龍綺も一年ですっかり背が伸びていた。

しかし、状況は極めて悪い。

父親や母親を人質状態に捕られてすでに一週間以上。

ハイペースな道のりは困難を極めたが、もうすぐ皆と合流できる。

その喜びだけを胸に秘め御子達は旅を続けてきた。

「よし、行こう!」

道祖神の像の前から4人は再び歩き出した。

あと、数キロで静香の街だ。

「慈音…。」

後方で声がした。

振り向いた4人が目にしたのは、ボロボロの衣を纏い、傷だらけの木蓮だった。

「木蓮姐さん…。」

駆け寄ろうとする慈音を龍綺が止める。

その様子に木蓮は苦笑をし、大地に倒れた。

「姐さん！」

龍綺の腕を振りほどき駆け寄る慈音。白妙もそれに続く。

「逃げてきたの…慈音…あなたに逢いたかった…。」

抱き起こす木蓮の胸元は血塗れで、深い傷がその服の下にあることを物語っている。

「姐さん…。」

「繻子蘭姐さん達は、流刑島に送られたわ…あいつ等はあの島で何かをしようとしている。止めなくちゃ、世界が…。」

木蓮がガボツと吐血をした。その瞳は白妙を捉えていた。

「白妙…ごめんなさい…あなたのこと…。」

差し出される手。白妙はその手を取ろうとした。

と、その瞬間、肉に刺さる鈍い音がした。

「ぐっ！」

木蓮の長い鋭い爪が白妙の身体を貫いていたのだ。

龍綺が駆け出してきたて剣を抜き、咄嗟にその腕を切り離した。

白妙の身体を2人から離すと突き刺さった爪を抜こうとした。

しかし、思うように抜けず、玄武の温泉の水の入った水筒の封を切りその刺さった場所にかけた。

慈音は、木蓮を放し、白妙の元へ向かおうとしたが、木蓮の腕がそれを止める。

「木蓮…！」

物凄い力で、慈音は後方へと飛ばされた。

「うわっ！」

彼の身体は大木にぶつかり止った。

さつと龍綺と白妙の間に立った暁は、額の印を光らせて戦闘態勢だ。立ち上がった木蓮は手首から先を失っていることにも平然として御子達を見据えていた。

そして、高笑いを響かせると砂が崩れるように消えていった。

慈音は痛んだ背中を庇いながら白妙に駆け寄った。

「白妙！白妙！！」

白妙はにつこりと笑う。

時を同じくして胸元の4つの石から鬼達が現れた。

「姫様の御身体、暫し我等に預けてもらおう。」

ふわりと抱きかかえられる。

「白妙！」

油断した自分に責がある。

慈音は咄嗟に鬼の足を掴んでいた。

「白虎の御子よ。案ずるな…姫様を暫しお父上の元へ預けるだけのこと…。」

「父上？」

「金剛夜叉明王様の元へ…。」

4匹の鬼に囲まれるように見えなくなった白妙の身体は、光に包まれて消えていった。

後に残された慈音は、大地に拳を叩き付けた。

「全く、役に立たない女ね…。」

傷だらけの身体で、倒れている女。

意識はあり、瞳も開いているが、その命は死へと一步一步近付いていた。

「御館様は、白虎の御子を殺して、夜叉の姫の心を壊せと言ったのよ！」

掴みあげられた髪の毛。微かに苦痛の声が上がる。

「殺してしまえば白虎の御子の心は永遠にお前のモノだったのに…。」

「
投げ捨てるように女を床に叩きつける。」

「御館様、いかが致しましょう…夜叉の姫がいなければ、例の封印は破れません…。」

1つ高い上座で頬を付きながら見つめていた男の口が動いた。

「夜叉の御子を手に入れることはできなんだか…ならば、先にこの国の崩壊を見届けよう…。」

男は立ち上がった。それにひれ伏す黒尽くめの女。

上座から降りた男は、ツカツカと倒れた女の元へ寄り、女の顔をその足で踏みつけた。

「お前の肉体と魂を分離させる。何、すぐに器をやる…欄梓。」

「はい、御館様…。」

「国王の最期が近い…分かっているな？」

欄梓と呼ばれた女は暗闇に消えた。

倒れた女の額に大きな男の手が置かれた。

大きく見開かれていく目。女の身体はワナワナと震えだし、大きく仰け反るとがくりとその身体を落とした。

男は、ふつと軽く笑うと立ち上がった。

「さよなら、木蓮の身体…君の魂はまだまだ利用させてもらっよ。」
カツカツと音を立てて男はその暗闇から去って行った。

道中も化け物は、龍綺、暁そして、慈音を襲ってきた。

慈音は、一心不乱、憑き物が落ちたように今までのような笑顔は見せず、ただひたすら進んでいるという様子で、龍綺は、いつか彼が倒れはしないかと心配になっていた。

そんな龍綺に、

「大丈夫…鬼達は、何時だと言ってはくれなかったけど…きっと白妙は帰ってくるから、それまでにちよつとでも彼女が楽できるよう頑張ろうと思うんだ。」

慈音はそう返答してまた前を向く。

「…とにかく…もうすぐ静香だから、街に着いたら絶対寝るよ？お前ここんとこ全然寝てないだろ？」

目の下のクマが彼の不眠を物語っていた。

「…うん、ありがと。でも、大丈夫だから…そうでもないと俺…」

慈音はとにかく進んでいくことを心に誓っていた。

「りゅーあれ、街？」

そこには、高い堀に囲まれた大きな門があった。

化け物避けの堀であろうか、来るものを拒絶するかのような高い堀を見上げた。

赤黒い門には2人の男が立っていた。おそらく門番だろう。

「止まれ！何処から来た。」

幾つかの質問を受ける。

子供と言っても、大人の身長ほどの龍綺と慈音相手に門番はそれほど警戒することはなかった。

それよりも、可愛く、笑顔で話しかける暁に気をよくしたようで、色々と3人の旅の話を聞いて来た。

化け物の闊歩するこの国を旅するという勇氣に敬意を払っていると述べた彼らは、こんな忠告をしてきた。

「中に入るのいいが、命が惜しかったら王都への道を目指すなよ。」

最終的に王都を目指そうとしていた龍綺達は、その話に驚きを隠せなかった。

「王都はそれほどまでに危険なんですか？化け物に占領されたとか？」

慈音の問いに、門番は2人して笑った。

「王都で怖いのは、化け物じゃねーよ。今、王都は国王派と軍部に分かれて争いが絶えない、つまり人間同士の争いよ。」

「軍部はなんとか、国王が王都から逃げ出さないように城を包囲して、王都以外の街に飛び火しないようにしてくれてるが、どうなる

か…。」

脳裏を『？』マークが飛ぶ。

「国王陛下がなんだって？」

門番は少し呆れたという顔をした。

彼らの話によると、最近、王は「神の子」という存在に縛られて、少し髪や瞳の色の違う子供を王都に連れてきては、どこかに閉じ込めはじめ、国への税金をいきなり上げたり、罰則をきつくし始めたりにしていた。

いくらなんでも強引過ぎるやり方に、軍の將軍・芳崖が国王に反論子供達を里に戻すべきだと進言した。

すると、国王は、弟凱漸皇子、よろしく芳崖までも流刑島へ送ろうとした。

それに反対した軍部が国王に反旗を翻したというのだ。

「ちよ、ちよつと待てよ、芳崖將軍は最初、神の子を異分子扱いしてたんじゃない。」

門番は龍綺にふんぞり返り、言いのけた。

「芳崖將軍は、国王が隠し持っていた古文書を密かに手に入れて、神の子の存在が国にとって必要だ、凱漸皇子の言っていた事が正しいと考えを改めなすったんだよ。」

慈音と龍綺は顔を見合わせる。

「国王へ立場の変更、凱漸様の釈放を願い出て、逆に捕まってしまったんだよ。」

「えっ？芳崖將軍は、捕えられてるのか？」

ホントに何も知らないのだなと門番達は龍綺達に笑って教えてくれた。

「一時のコトさ。すぐに軍部が助け出したよ。」

「じゃあ、戦ってるのは、軍と王？」

「そ、国王は、妙な愛妾を傍においてから、化け物を操る術を身に付けたらしくってな、戦ってるのは、軍と化け物だ。」

「だから、王都は大変な状態でさ、下手に近付くと怪我するって寸

法さ。その愛妾がホントは、敵国のスパイで、国王陛下も実は操られてるって噂さ、お妃である龍神の巫女様もどこかに幽閉されてその力を出せずにいるというし…。」

「凱漸皇子は？」

「芳崖將軍は、助け出されてから、俺達に、この騒動が落ち着いたら必ず助け出すと、言ってくれてるんだぜ、芳崖將軍は、国王と違って、女の色香に惑わされたりしない実直な方よ！」

龍綺達は、街の中に入ることを許された。

「どう思う？今の話…。」

「分からない…紅蓮から聞いた話を様子が違っているし…。」
ふと前方に目をやる。

そこには、雷紋が立っていた。

「お疲れさん。」

龍綺達は、お互いの腕をぶつけ久しぶりの再会をした。

つづく

これから戦略

白妙を覗く7人が静香と言う街で再び出会った。

僅か数ヶ月の間であったにも関わらず、皆が大人びて見えた。

「雷紋、どういうことだ？」

この街で聞いた情報と、可憐や紅蓮が聞いた黒尽くめの女の言葉がまるで違うのだ。

龍綺も慈音も不思議でたまらない。

「もし、敵が芳崖じゃないなら、やっぱり敵は国王なのか？」

考え込んでいる雷紋が言葉を発した。

「龍綺…、白澤が言ってるんだけど、龍神の巫女…お妃と話をしてみてはどうかって…。」

キョトンとする龍綺。

「そうだね、龍綺くんは、龍の御子だから、龍神の巫女であるお妃様とは離れててもお話できるかも…！」

龍綺は内なる獣に問いかけた。

（黄龍？できるのかそんなこと…。）

神の子同士なら、声にしなくても話が出る。

（龍綺が八龍の玉をすべて集めていないと無理だな…。）

がくりと頭を垂れる姿に龍綺の返事を理解した一同であった。

「龍神の玉って、あと何個集まればいいの？」

月風が尋ねる。

龍綺の元には、黄龍・青龍・白龍・緑龍の4つの玉があった。

「はつきり言って、玉のこと忘れてた…。」

龍綺は改めて落ち込んだ。

「あと4つか…今、この国がどういう方向に進んでいるのか分からないからなあ…。」

「あー、りゅーの捜す…！」

皆が暁の方を見る。

「暁は、黙ってなさい。」

龍綺の言葉に暁はぷーっと頬を膨らます。

「だって、ソレないとりゅー強くない。龍神の巫女？さまとお話できないでしょ？」

「まあ、まあちよつと落ち着いて…。兎に角、龍綺がしなきゃいけないことの1つ、龍の玉集めは達成してないんだ。あと、父さんにも会えてない。王都にすれば慈音も父さんに逢えると思ってたけど、凱漸皇子は囚われてしまったし…。」

「王都には、なんか特別な結界が張られてて…たぶんかなりの力を使わないと入れないと思うの。」

今回の旅で月風が結界関係の情報を察知する能力に優れていることが分かった。

「何かを仕掛けるために結界を張っているんだと考えているんだけど、奴らが何を考えているのか分からないんだ。この街で流れている噂も何処まで本当なのか…連れていかれた子供達がどうなっているのか、中の様子を知る人と連絡が取れるのが一番なんだ。」

そこで、と雷紋は前置きをして、今後の方向性について話し始めた。「大きな賭けになるかもしれないんだけど…。」

皆を見る。

「流刑島に行つて、親達を助け出す組と…龍の玉を搜索する組。そして、この街から王都を見張る組に分かれてみてはどうかと思うんだ。」

皆がざわつく。

「今、各地域の社にいる人達が、神の子について、間違つた考えを正すために動いてくれている。それに、いろんな力が王都に集まっているせいか、各祠の結界の修正とかもしやすいみたいだし。」

「自由に動くんやったら、今しかないかもしれんへんな…。」

「だったら、俺は流刑島に行く。母さんを助けたいし…。親父つて人も見てみたい。」

慈音の言葉。

「やったら、俺も行くわ。」

可憐がえっという声を出した。

「なんや、えらいメーワクな女も捕まってしもうとるみたいやし。」

紅蓮は、母の美麗が捕らえられていることを感じていたが可憐には言っていなかった。

「何？親がないのつて、私と暁だけなわけ？」

可憐が暁と自分を見て言う。

「親だと思っただコトないけどな？」

紅蓮は月風を見る。彼女も苦笑してそれに頷く。

可憐は、両親と言うものは子供のコトを一番に考える、どんな時味方でいてくれる存在なのだと思うていたため、紅蓮の言う言葉が信じられなかった。

「そ、そんなコトないよ、絶対、お母さんは紅蓮や月風のこと思っているよ。」

力説する。可憐は決して自由ではなかったが家族から貰った愛情は確かに存在していたと胸を張って言えることだった。

「親にだって色々あるんやで？ココにはおらへんけど白妙の親は、自分等の生活の為に白妙を山に捨てたんや。」

呆れたという顔で可憐をみる。

可憐は自分がそんなにも世間知らずなのかと恥ずかしくなっちゃった。

「紅蓮、あんまり可憐を責めないように。」

自分を庇ってくれる雷紋にぱつと視線を向ける可憐。

「雷紋：雷紋は、私と同じだよな？子供のコトを思わない親なんていないよね？」

縋るような瞳。

「…まあ：人間に色んな人がいるのと同じで、俺は、親も千差万別っ思っけど？」

いつも通りの表情であっさりいう雷紋に可憐は味方を失ったように

しゅんとしてしまった。

「可憐のおかんとおとんは、ええ親やつたんやろ？それでええやん。俺と月風や白妙は、そういう縁がなかったんやって。」

紅蓮が可憐の頭をくしゃつと撫でる。

可憐を落ち込ませてしまったことを悔やんでいるような紅蓮の顔に可憐はまたしゅんと落ち込んでしまった。

出会った時から、太陽のような明るさで自分に接してきた紅蓮。

2人である時も自分ばかりが両親のコト、兄のコトを話し、自慢にしてきた。

紅蓮の父親が化け物に殺されたということは彼から少しだけ聞いたが、母親のコトは聞いていなかった。

彼は自分のコトを多く語らなかったのだ。

「私も、流刑島に行く！」

可憐は涙を溜めた目で訴えた。

その言葉にはみな愕然とした。

雷紋の計画では、この街に残るのは月風と可憐だとしていたからであつた。

「えっ？」

「私は、誰が何と言おうと行くから！決めたから！」

彼女は、紅蓮と月風の母親に問い詰めてやろうと考えたのであつた。言い出したら聞かない性格である彼女のことを紅蓮は理解しており、ため息を吐いた。

「あかん、もう可憐を止められへんで。」

「言っておくけど、俺は玉を捜すから。」

「あーも！」

雷紋はちらつと月風を見る。

「まさか、君まで行くとか言わないよね？」

念押しをしてくる雷紋に月風は何も言えなくなった。

「俺は、雷紋は残るべきだと思う。」

「えっ？」

「雷紋は、イズナを使つて離れた場所でも俺達に状況を伝えることが出来るだろ？それに、分析もしてくれるし、」

結局、流刑島には、慈音、紅蓮、可憐。龍の玉を捜すのは、龍綺、晧。居残りは、雷紋と月凧となった。

「情報は逐一流す。それと、」

雷紋は自分の荷物から小さな袋を取り出した。

「コレは、俺が作った薬。白澤が持ってきた『神通丸』の成分が入ってる。ピンチに陥ってるのに体力の限界って時に使ってみて。」
密かに副作用のコトを考える一同。

「コレ飲んだら、何が起きる？」

「人間と言うのは、普段はその力を半分も使っていないんだよ。その力を8割以上引き出せるんだ。つまり、馬車馬の如く身体を酷使できるって代物。」

「…副作用は？」

雷紋は少し黙つた後尋ねた。

「知りたいの？」

皆が声を揃えた。

「当たり前だ！！」

雷紋がため息を吐く。

おいおい、ため息吐くところじゃねーだろ…と心の中で突っ込む。

「…危険なものじゃないよ。飲んだ後、2週間は、色気倍増ってだけ。」

「色気？」

「モテモテになるだけだから、危険じゃないでしょ？（性別問わずだけど…。）」

龍綺、慈音、紅蓮の3人は互いに納得しかねるといった顔であったが、使わないですむことを祈りながらその薬を受け取った。

「また、寝ないつもりか？」

宿屋のベランダで長いすに凭れている慈音に龍綺は声をかけた。

振り向いた慈音は苦笑を浮かべている。

「んー、白妙はどうしてるかなって…何時帰ってくれるのかなって。」

今度は照れた笑いだった。

「龍綺…。」

「んっ？」

隣の長いすに腰を掛けた龍綺に慈音は呟いた。

「人を好きになるって辛いことが多いなーって…俺が、もっと木蓮姐さんに目を向けていれば…こんなことにはならなかったのかな…？白妙への気持치를隠してでも、木蓮姐さんの気持ちに答えていれば…白妙を傷付けなかったのかな…。」

月を見上げる。

「人を好きになることが全て辛いことだとは思わない。だってさお前、白妙に逢えて嬉しそうな顔してたじゃん。初対面の時から、バレバレの顔してさ。だから、木蓮太夫は、焦ったんだろうな全くの負け試合に。だから、自分のことばかりでお前の気持ちや白妙の気持치를無視しすぎだ。お前は悪くない。好きになったからって、何をしても構わないなんてコトない。好きな人を悲しませていることに気付かない太夫は、その時には既にお前の好きだった太夫じゃないってことだ。」

「うん、あんな…人を傷付けられるような人じゃなかったんだ…。でもこれ以上皆を苦しめるのなら…。」

新たな決意。それは、少年を大人に変えるには十分なものであった。

つづく

古文書を手に入れる

「じゃあ、行ってくる。」

静香の街の門の前で、雷紋は、龍綺達を月凧と見送る事になっていた。

笑顔で見送る雷紋の高く上げられた手。

反対の手で月凧の手を上上げる。

「？」

その掲げられた手に次々とハイタッチしていく仲間。

「また必ず。その時には、白妙も！」

雷紋の言葉に慈音が満面の笑みを浮かべた。

慈音は上空に腕を突き上げ、紅蓮、可憐と共に北の方角へと歩き出していった。

「雷紋も、無理するなよ？」

龍綺の言葉に雷紋は、言い返した。

「それは、こっちの台詞だよ。気を付けて。」

龍綺も暁を伴って去って行った。

彼は、故郷の甲村を訪ねてみる予定にしていた。

「行っちゃったね。」

雷紋は、門番に礼を述べて月凧の手を引いた。

「これから、忙しくなるから。」

「えっ？」

（王立の図書館に潜入して、例の古文書を探る。敵の正体を探るんだ。）

神獣を通して聞こえてくる声。

（ええっ！！だって、今王都は内紛で危険なんだよ？）

（その噂も探る。）

（だ、だって、特殊な結界の中なんだよ？）

クルリと月凧の方を向く。じっと見つめていた瞳が閉じられてにこ

つと笑った。

（ココに月風がいるなら、怖くないでしょ？）

（か、買いかぶりすぎだよ！）

雷紋は人とぶつかりそうな月風を自分の方に引き寄せる。

今回の旅で、彼の身長は顎が丁度月風の額に当たるくらいまで伸びていた。

「ほらっ、ぼうつとしているとぶつかるよ。」

「ご、ごめんなさいっ。」

軽く彼の唇が額に触れたような気がしてぱっと表を上げたが、雷紋は、

「どうしたの？紅蓮がいなくなって淋しくなってきた？」

と、自分の想いとは違う答え。

月風は自分の誤解だと顔を真っ赤にした。

「ははっ。凶星？顔真っ赤。」

握られた手が紅蓮のように自分を妹のように思っていることなんだと月風は少し心が悲しかった。

「白澤が、若い頃王立の図書館に忍び込んだことがあるんだって。」
1度宿舎に戻り、早めの昼食を取る2人。

向かい合って食事をする姿を見て、頬を赤らめて雷紋を見つめている男性の姿に月風は、自分が引き立て役のようでちょっと恥ずかしいと思う反面、雷紋に相手にされないなら、と変な妄想にとりつかれていた。

「聞いている？白澤が話したいのを黙らせてるんだよ？月風が黙つてると、白澤、出てきちゃうんだからね。」

「ご、ごめんなさい。白澤は何で忍び込んだの？」

「人間がどんなコトに興味を示していて、学んでいるのか知りたかったんだって。」

「なんか、らしいね。」

そっという月風に雷紋が優しい笑顔を見せる。

「知りたがりだからね…ヤツは。で、その王立図書館の奥に鍵付きの本棚に保管されていたのが、神の子の古文書だったんだ。自分が宿った過去の子供達がどんな風に書かれているのか興味があったらしい。」

「じゃ、じゃあ見に行かなくても白澤が知ってるんじゃないの？」

雷紋はプツと噴出した。

「それがさあ…腹痛くなつて、途中で天上界に帰っていったんだと。」

「

「お腹痛？神獣が？」

「人間界の食べ物を食べて壊したらしい。だまつときゃいいのに、白澤の情報が脳に入つて来たときに一緒に来た。」

雷紋は白澤を自覚した時、彼のもつ膨大な情報を全て頭に入れられたのだ。

「しかも、天上界に帰つて、神様に怒られたんだ。」

周りには聞こえないような声で自分に語る雷紋。

2人は食事を終わると自室に戻っていった。

「で、どうして、そんな複雑な顔をさつきからしているの？」

部屋に戻るなり雷紋が言った。

「えっ？」

「図書館に行くことまだ反対してるの？」

月凧はプルプルと首を振る。

「じゃ、どうしたの？俺、月凧なら大丈夫だと思って提案したんだけど？」

「雷紋くんが…。」

「んっ？」

月凧はカアツと真っ赤になる。

「やっぱりいいです…。」

雷紋は、月凧の真正面に身体と顔を向ける。

「何？」

月風は、訝しげにしている雷紋をよそにまったく脈絡のないことを考えていた。

（長い睫だなあ……。こういうのを潤んだ瞳って言っただよね。）
じいーっと無言で見つめられている雷紋はイライラし始めていた。

「そんな目していると接吻^{キス}するぞ。」

そんな言葉も届いていない月風。

（可憐ちゃんも、何やら雷紋くん^{レモン}に心を寄せているようだったし……。）

明後日の方向を見ていた月風は、自分の唇に触れる柔らかいものの存在にフツと現実を意識を戻らせた。

目の前には雷紋の顔。

「やっところち見た。」

ふつと離れて行く雷紋の顔は不機嫌だ。

月風は何が起こったのかぼうつとしていて、自分の指で唇を押さえた。

「さ、立って！」

少し大きな声に月風はびっくりして立ち上がる。

「さ、行くよ。」

「は、はい……。あれ？夢だったのかな？」

いつものように手を引かれて歩く。

（そうだよ、雷紋くんが、妹だっと思っててる私に……。ねえ。）

自分で考えて泣きそうだった。

ただ、彼に引つ張られて歩く街。

（駄目だ！しっかりしなきゃ……。呆れられる。）

キツと面を上げるとやはり呆れたような顔をした雷紋と目が合った。

「？」

にこつと笑ってみせる月風に雷紋は立ち止まって大きなため息を吐く。

「な、何？どうしたの？どつか痛いのか？」

月風は何かやらかしたかな？と思いながらそうではないことを祈っ

た。

雷紋は、もう1度月風と視線を合わせるとため息を吐いた。

「そうだね、痛いところがあるよ。」

月風は、慌てた。

「どうしたの？大丈夫？宿屋に戻る？」

引かれた手を引っ張る月風。

「ホントにさ……あー！もうっ、この件が終わってからでいいや。行くよ？」

「えっ！」

月風はそれ以上何も言えず、やっぱり雷紋に引っ張られていた。

大きな扉にぶち当たり、雷紋は、そっと月風をその扉沿いの端の方、街の隅へと連れて行った。

「やっぱり警備がすごいね。」

図書館と王都は壁一枚で繋がっているといつてよい。

余計な争いが街に流れてこないように王都から図書館に入るとは禁止されており、物理的結界も張られているのだ。

そして、静香の街からも図書室へ入ることは、危険であるとして軍部から立ち入りを禁止されていた。

「ど、どうするの？」

「ココで、月風の結界の力を必要とするんだ。迦陵…月風に特殊結界を張らせて。」

彼女の手をきゅっと掴む。

すると月風の身体がじんわりと温かくなってきた。

特殊結界とは、迦陵頻迦だけが張ることの出来る結界で、それは、周りから姿を消すことが出来たり、壁を突き抜けたりできる結界のコトを指す。

「あんまり得意じゃないんだよ？」

弱気な言葉に雷紋は、優しく笑った。

先程までのイライラした様子はない。

「うん。白澤の力、使っていいから。がんばって？」

月風は瞳を閉じた。薬で変わっていた髪の色が淡い桃色に変わっていく。

手を繋いだところから、徐々に透けていく身体。人の気配がないことは確認済みであった。

（よし。）

くいつと、彼女の手を引いていく。

壁抜けの時の感覚が月風は好きではなかったが、雷紋のため、皆のためと意識を集中した。

「月風、大丈夫？」

力を均等に保ちながら、塀と壁を通り抜け、2人はしんと静まり返った図書館内に入っていた。足音を立てないように2人は靴を脱いでいた。

「どっちに進むの？」

雷紋は古文書を保管してある部屋を心得ているようですと左の方に歩いていった。

月風は引かれていく方角に禍々しい気配を感じた。

「雷紋くん…。」

「うん、番犬がいるみたい。月風ちょっと悪いけど結界に力集中していてくれる？」

雷紋の声があまりにも静かだったので、月風は自分の考えが正しい事を察知した。

「誰か人もいるね…。」

奥に見える大きな扉が砕けた。

砕けた扉の向こうから、地に響く獣の吼え声。

そして、背中から雷紋達の方へ飛ばされてきた2人の男。

「くそお!!」

悔しがる男の声。

「あんな化け物を!!」

男達は雷紋達より少し年上のような容姿で、剣を抜いた。扉の奥からはやはり動物の唸り声。

「ど、どうするの？」

月凧が尋ねる。雷紋は彼女を「しっ。」と黙らせる。
獣の声は、犬の唸り声に似て、その声は重なり合っているように聞こえる。

（白澤…？これって…。）

（間違いない、我が知己のモノよ…しかし…なぜ現世に居るのじゃ…。）

扉の向こうに入ろうとする若者に雷紋は思わず声をかけた。

「危ない！！」

誰もいない後ろからの声に若者は立ち止まった。

部屋の中からの風圧でまた後ろに飛ばされる。

暗闇の部屋から鋭い爪が彼らを襲おうとしていたのだ。

「うわぁっ！」

雷紋は、月凧から手を離し、若者に駆け寄った。

「お、お前？どこから…」

倒れている一人の身体を支え、にこっと笑顔を見せると、雷紋はすすと壊れた扉の前に立った。

若者2人も、月凧もはつと息を飲み、その様子を見ていた。

雷紋は、真つ暗な部屋の中に声をかけた。

「犬狼？犬狼だろ？」

部屋の中にいる化け物の気配が動揺する。

「白澤を宿している雷紋だよ？覚えているだろう？戒？聰？導？」

暗闇の中に赤い瞳が6つ輝いた。

その光に、若者達は抱き合って恐怖に怯え、月凧は思わず結界を解いてしまった。

「…雷紋…？」

それは、3つの声が交わった人の声だった。

先程までの張り詰めた空気が、和やかなものになる。

雷紋は部屋の中に入った。

月凧は震えている2人の若者を尻目に雷紋の後に続く。

窓に掛かる暗幕を少し開けた雷紋の前には、3つの大きな首を持つ犬がいた。

大きな口はそのひと噛みで雷紋の身体など飲み込んでしまいそうだ。「雷紋？雷紋なのか？髪が黒いぞ？」

雷紋はフツと笑う。

「白澤の薬だよ。あの色だと目立つからね。」
黒い大きな顔が3つ雷紋を覗き込む。

「白澤：雷紋だ！聴！間違いないよ！！」

その一言で大きな犬は巨大な煙に巻かれた。

「きゃあっ！」

月風はその煙の中から現れた3人の青年の姿に赤面し、扉の方を向いた。

「雷紋！雷紋！！逢いたかったぞ！！」

自分よりはるかに大きい青年達には黒い耳と尻尾があり、その身体で雷紋を取り囲んだ。

「お、お前等は…相変わらずだね。とても苦しいんだけど？わっ、ソレは、止めてって言っただろ？」

真っ黒な髪をした青年が雷紋の頬を舐めた。

「導！ずるいぞ！！雷紋を舐めるなんて！俺も舐める！」

「僕も舐めていいですか？」

「ま、待て！待ってって！！言う事きかないと絶交だぞ！」
ぴたっと動きが止まる。

月風は指の隙間からそのやり取りを見ていた。

（犬と御主人様？）

3人の青年は、それでも雷紋に擦り寄る事を忘れない。

「月風？」

声を掛けられてびくつとする。3人の視線が一斉に彼女を見たからだ。

「あっ！迦陵頻迦だ！！」

一番人懐っこそうな青年が駆け寄ってきた。

（小鳥さん、知ってるの？）

（…はい。）

その青年は徐に月凧の身体を抱き上げて雷紋の目の前に置いた。

「はい、雷紋。迦陵頻迦。」

「あ、ありがとう、戎。」

雷紋はその青年の頭を撫でてやった。

「ずるい。」

拗ねる他の2人。

月凧は何が何やら分からないため、頭の中がグルグルしていた。

そこへ、恐る恐る入って来た先程の2人の若者が剣を手に声を掛け
てきた。

「お前達は…何者なんだ…。」

明らかな警戒心。3人の青年達の瞳が赤く光って彼らを威嚇する。

「ひっ！」

3人は、若者に今にも飛び掛りそうであったが、雷紋の制止により
思い留まった。

「あなた達こそ、どうしてココに？…目的は、古文書ですか？」

若者は雷紋の言葉に驚きを隠せない。

「ど、どうして古文書がココにあると知っている。」

「古文書は、国王の元にあるということになっているはずだ。」

雷紋はにっこり笑う。

「そ、それに、その娘の髪の色…。」

月凧は自分が僅かだが力を使い続けていることを悟った。

「ま、まさか…そうなのか？」

雷紋は月凧を庇うように前に出た。

「何のことですか？」

「頼む！力を！力を貸してくれ！！美雪様のために！！」

美雪。

それは、この国の妃にして龍神の巫女の名前だった。

う
う
く

冥界の門番

「今現在、この国の人達は、国王を敵として見て、芳崖將軍を救世主のように考え始めている。あれほど、凱漸さまの言葉に反対していた者が何故、古文書を読んだからという理由で志を変えたのか…。もう随分お姿を確認していない美雪様はどうなさっているのか…。」若者の1人名を彩波と言った。彼は言葉を詰まらせた。

「全ては、古文書の内容を確認めたら分かるんじゃないかって思ったんだ…。」

もう1人、彩波より少し若い感じの青年・灰緋が言った。

「あなた達は、龍神の社の人ですか？」

雷紋の傍には月風がいて、彼は彼女の手を握っている。

そのため月風はドキドキして話の内容が上手く入ってきてなかった。また、3人の青年達はそれぞれが雷紋にべったりで、場所の争いをしていたこともあり、月風にはソレも集中力を削ぐ原因だった。

「はい。俺たちは、龍神の社の守人です。何としても古文書の内容を確認めたくて、社の守護代様に王の持っているという古文書のありかを探ってもらおうとしたのです。」

「ところが、守護代様の占術で、王の元には古文書はないと出たのです。」

それで、何とか警備の目を潜って中に入り込んだという。

しかし、古文書があると思われる部屋には、化け物が…。

「こいつ等は、大丈夫。あなた達には危害は加えませんよ。」

にっこり笑う。

「雷紋がそーいうーなら、喰うの止めてやる。」

「こら、戒…すみません。弟が…怖いですか？怖いですよね？」

「ねー、雷紋遊ぼうよー。」

三者三様の性格があるらしい。

「そつ、聞きたかったんだ。聰、戒、導。一体何故お前達は、現世

に出て来てるんだよ。冥王神に怒られるんじゃないのか？」

「だってな、雷紋に逢いたかったんだよ、俺達。そしたら親父に怒られてさ……。」

雷紋は呆れた。

「そりゃ怒るさ、お前達は、冥界の門番だろ？」

「でも、雷紋は、おいそれとは冥界に来れないじゃないですか……。」
しゅんとなっているのは、聰。耳まで垂れている。

「そしたらさ、お前に逢わせる代わりにココで本の門番をしてろって言われたんだ。」

「誰に？」

3人は口をきゅっと閉じた。

「聰……導……戒？」

覗き込む雷紋に3人は顔を真っ赤に、尻尾と耳を垂れて告白した。

「魔の気配漂う黒尽くめの女。」

雷紋大きなため息に3人はビクツとなる。

「あれほど……俺さ、別れる時に、ちゃんとやったよね？軽率な行動はするなって！」

月風の手をギュッと握る雷紋。

「ごめんなさい……だって、アイツが邪黒の手下だって分かっても雷紋に逢いたかったんだ！」

「邪黒？」

雷紋の知識の泉が湧く。

「な……邪黒の手下ってなんだよ。邪黒は、何千年も前に封印された魔神だろ？なんで今更出てこようとするんだよ……。」

3人は知らないと言う。邪黒のことより、自分達のことを雷紋が嫌いになると考えていて、そちらの方が怖かったのだ。

「邪黒って、何？」

月風の問いに答える。

「数千年前に、神の子が戦って封じた魔神だよ。……敵は邪黒だっていうのか？」

3匹の目が赤く光る。

「正確には、邪黒は目覚めていないんです。誰かがこの世界のある場所にある…邪黒の一部を封印していた塚を壊してしまったようで。」

「冥界のさらに奥にある地獄の更に奥の牢に入れられている邪黒の一部が牢から飛び出したんだって父上が言ってたよ。」

「雷紋！雷紋、俺、雷紋手伝ってやってもいいぜ！」

嬉しそうに尻尾を振る青年を無視して雷紋は話を進める。

「その一部がこの世界に出てきて…そうか本体を呼び寄せようとしているんだ。」

「そ、その邪黒が出てきたたら、どうなるの？」

戒、聰、導が一齐に月凧を見る。

「邪黒は、天上界、人間界、冥界を支配する全能神に取って代わるうとした元・神様だよ。」

「ヤツが望むのは全世界の支配です。」

「各世界にある封印の1つが壊れたのを契機に、出てこようとしたんぜ。」

月凧と龍神の社の守人達はさあーっと顔色を変えた。

「兎に角、お前達は、冥界に帰れ。」

その雷紋の言葉に3人は一齐に叫んだ。

「『イヤだ！』です！』だよ！」

雷紋はため息を吐く。

「父上の後を継いで、番犬として一人前になることが夢なんだろう？いつか絶対に逢えるんだから、今日は帰れ。邪黒の手下の策略に乗ったなんて聞いたたら、冥王様も、お父上も激怒するぞ？それに、俺も怒ってるんだからな。」

しゅんとなる3人。雷紋は社の守人に継げた。

「古文書は俺が目を通したら、社に持って帰って、その内容を人々に広めてください。神の子は真の敵と戦うために存在していると。」
雷紋は展示されている古文書を手に取りパラパラと捲る。

「はい。どうぞ。」

あつという間の出来事にまた月凧と守人達は目を丸くする。

「…ああ、俺速読なんです。今から、月凧の力で衛兵に知られることなくココを出ますから、社の人達に邪黒のこと、伝えておいてくださいね。」

雷紋はくると3人の方を見る。

「帰る気になった？」

3人は耳を倒し、しゅんとしているが、首を横に振る。

「…雷紋くん…ちょっと可哀想だよ？」

3人が月凧に救いの目を向ける。

「じゃあ、月凧が責任持つのか？こいつら自分の役目を放棄してきてるんだよ？」

月凧は雷紋が本当に怒っている事を知り、うろたえる。

「…って月凧にあたっても仕方ないけど…。兎に角、ココから出よう。」

立ち上がる人間と途方に暮れる犬3匹。

「お前達は、冥界に帰るんだ。いいね！」

雷紋は、月凧の手を引いて部屋から出て行った。

来た時と同じように月凧はその力で、雷紋と守人達を図書館ならびに堀の外（静香の街の中）に連れ出した。

別れ際、守人は言った。

「龍神の御子は、龍神の御子も存在しておられるのでしょうか！」
期待する眼差し。

「もちろん、存在してますよ。…今は別行動ですけど…。」

「で、では、龍神の御子にお伝えください！我が社に龍神の宝玉があると！ずっと守っておりましてと！！」

守人達は嬉しそうに言った。

「何色の宝玉ですか？」

雷紋の言葉に守人は色を告げて静香の街を後にした。

「龍崎くんに伝えなきゃね。」

雷紋は得られた情報が嬉しいのか、御機嫌だった。

「そうだね、今日にでもイズナに伝えてもらおう。」

相変わらず雷紋の手は月凧と繋がっていた。

「何？何か聞きたいことがあるの？」

月凧の聞きたかったこと、それは冥界の門番とされる彼らと雷紋の関係だった。

「ああ…その事。」

大きなため息に月凧は悪い事を聞いたとその問いに関する答えを遮ろうとした。

「いいよ、月凧には知って欲しいから。」

雷紋は自分の過去について話し始めた。

自分が「白澤の御子」であると自覚した時、彼の頭の中には、白澤の得た千とも万ともいえるほどの情報が入って来た。それは人間が理解できる許容範囲を超えたもので、雷紋は激しい頭痛に何日も襲われた。

「白澤の御子が髪が白いのは、その情報量に耐えた証なんだ。」

自分の今は黒い髪を弄りながら雷紋は苦笑した。

許容量を越える情報を知識を無理矢理詰め込まれる不快感、拒絶したいのにできない苦痛。

その思いは、雷紋を死へと導いた。

「コレはそのときの痕。」

手首に刻まれた傷。

「躊躇もなく切れた。」

また雷紋の苦笑。月凧は握られた手をきゅっと握り返した。

「で、俺の魂は、冥界へと旅立つんだけど、その途中でヤツラの母親にあっただ。」

「冥界への道で？」

「そ、何やら苦しんでいる女の人がいるなあって思ったら、妊婦で

さ。生まれるって言うんだ。でも俺には、お産の知識もあるわけで、5歳にして、子供を取り上げる事になったんだ。」

「またも苦笑。その笑いは憂いを含んでいなかった。」

「びつくりしたよ、生まれた子が三つ子で、耳と尻尾があるんだから…。」

月風は言葉もなく聞いている。

「子供を取り上げたのはいいけど、母親は出産の痛みで気絶してしまつてさ。そしたら、白澤が冥界の子供はすぐにでも名前を付けないとすぐ冥界の門に吸収されてしまつて脅してくるんだ。だから、名付け親になったんだ。戒、聰、導つて。意味は、その名の通りなんだけどね。」

月風の脳裏に彼らの顔が浮かぶ。

「その母親は、冥界の門番をしている獣の奥さんで、冥界の神さまの娘でさ、子供と妻の命を助けてもらつたつて、物凄い感謝されてさ、こっちは死にきたつていうのにそれどころじゃなくなつたんだ。」

雷紋の瞳が遠いところを見ていた。

「でも、その時、白澤の知識、情報のお陰で俺は人の役に立てたんだなつて、苦しい事ばかりじゃないんだつて気付いて…白澤を宿して生きていく事に納得できたんだ。」

につこりと笑う雷紋の笑顔。月風もそれにつられるように笑った。

「で、それから暫く冥界に足止め喰らつて…都合よく子守とかさせられて…現世に戻つてきたら、来たで、突然冥界に引き込まれて家庭教師みたいなことさせられるしさ…。それは名付け親の義務らしくつて…彼らが10歳になるまでは、面倒見てたんだ。」

ため息交じりの苦笑。

「で、別れの日。奴等は帰るなつて駄々を捏ねてさ、散々だったんだ。ソレをいつか俺も死ぬ時が来るんだから、今は引け、冥界での時間なんてあつと言う間だからつて納得させたんだ。」

「よっぽど雷紋くんのが好きなんだね…。」

「獣型でも人型でも、俺より年下のクセにあのでかさだろ？冥界に生まれたものは姿形の成長は早くても、精神年齢は幼いんだ。小さい頃はホントに犬コロで可愛かったんだけど、今は抱き付かれても困るだけだし、何より立派な門番になって欲しいから。」

「雷紋くん、お父さんみたいだね。」

「名付け親だからね！」

「それにしても、凄く本読むのが早くてびっくりしたよ。」

「本当に読まなければならない場所は、ほんのちよつとだったからね。」

「気になるコトを書いてあった？」

「んー、先の戦いで封印された邪黒の封印の場所が分かった。」

「どこ？」

「…流刑島。」

沈黙する月風。

「とにかく、邪黒の封印を解く方法がなんなのか、父さんや母さんの拉致が何か関係があるのか調べないと…。」

雷紋は月風の顔を覗き込んで、彼女を労った。

「特殊結界は苦手だったんだろ？御苦労様だったね。」

「えっ！？だ、大丈夫！！慣れていかなきゃ上手にならないし…。」

あ、私！お風呂入ってくるね！」

慌てて立ち上がる月風の手が雷紋から離れた。

「じゃあ、俺も入ろうかな…月風、内風呂使う？」

「えっ？ううん！今日はおっきいお風呂にする。じゃ、じゃあね！」
慌てて部屋を出て行く月風。

雷紋は部屋に付いている風呂に入ることにした。

「こっちも十分広いんだけどね…。」

木で出来た風呂は、ゆつたりとして豊かな湯気を湛えていた。

「龍綺達は、こんな贅沢できないんだらうなあ…。」

旅に出た仲間を思い、恐縮する。

先程イズナに龍神の玉についての情報を龍綺に流したばかりだ。

自然に彼の顔が浮かんた。

「『雷紋！』」

ふと、自分と呼ぶ声がした。

「んっ？」

振り返ると自分のすぐ後ろの空間が歪んでいる。

「！？」

にゅっと空間から数本の手が伸びてきて雷紋を捕まえた。

「えっ！な、お前等！！」

3人が3人とも雷紋を独り占めしようと抱きしめてきていた。

「親父と、お袋と、冥王様に許可貰った！」

「へっ？」

「俺達、雷紋手伝う！！」

「えっ？んな、バカな！」

「こつてり叱られた尻拭いするって言ってきました！これからずっと一緒です！！」

右から、戎。左から導、後ろから聰が抱きついてきていた。

雷紋の取り合いで戎と導が言い争っている。

「……。」

「あつ！月風、月風は？！」

「俺、月風、好き！」

「お、俺も！じゃ、搜して、連れてくる！！」

左に居た導が空間を移動しようとする。

「ま、待て！待て！待て！！導は動かず、戎と、聰は…と、兎に角、離れて…。」

雷紋は3人から逃れると大きなため息を吐いた。

「マジで居るつもり？」

3匹は大きく尻尾を振った。

「あつ、普段は犬になって、傍にいます。」

「犬って、三つ首じゃ化け物扱いされるぞ？」

「大丈夫、あの姿は門の前だけだから。」

ため息がもう1つ。3人は、黒い犬に変身した。そして頭を擦り付けてくる。

「…マジ？」

「雷紋？」

「何？…ったく…。」

「迷惑ですか？」

3匹は少し彼から離れてじっと見つめてきた。

「冥界に迷惑が掛かるとは思ってる…。」

ピコンと耳が立つ。

「ってことは、雷紋嬉しい？」

雷紋は優しい笑顔を3人に向けた。

「…だから、抱き付くなって…ずっと犬型でいろってば…。」

大浴場から帰ってきた月風が3匹の大型犬に押し倒されたのはそれから数分後のコトであった。

つづく

流刑島での出会い

今から数ヶ月前、王族の1人で、現王の弟である凱漸皇子が捕えられた。

罪は、現王に対する暗殺計画立案の中心人物とのこと、つまり反逆罪での告訴であった。

凱漸はもちろん、身に覚えのないこととして反論したが、あれほどに強い絆で結ばれていると思っていた兄王からは、何ひとつ言葉はなく、暗雲立ち込めるこの日に、罪人が収容されている島・流刑島へと流される事になった。

島へ向かう船に乗る前に、屈辱的な身体検査を受け、白装束に手枷、足には、鎖型の枷が施された。

小さな船は波にのまれながら島へと向かった。

凱漸を出迎えたのは、小柄な亀背のある男で、男は凱漸の手枷に鉄の棒を絡めるとその棒を引っ張り彼を誘導した。

今よりずっと若い頃、兄王とともに流刑島の見学に来たことがあった凱漸であったが、一歩踏み入れたその島からは以前のような雰囲気が消え、禍々しい重たい空気を感じた。

島の山をくり貫いて作られたその収容所は暗く、廊下の誘導等だけがゆらゆらと頼りない光で凱漸を迎えた。

長い廊下を歩く凱漸は、左右にある鉄格子の向こうに人の気配がないことに気付いた。

「罪人達は、どうしたのだ？」

凱漸の問いに、亀背の男は、掠れた引き笑いをして言った。

「かの者達は、昨夜のうちに全て処分したのさ。」

その言葉に詰め寄ろうとした凱漸を鉄の棒が押し留めた。

「そのような馬鹿な話があるか！この国には死刑はない！終身刑だけのはずだ！！」

男はまた同様の笑いをして言った。

「国王の御命令ですよ、凱漸皇子のお仲間様もお迎えせねばなりませんし、広間の用意もあります。」

「兄上が？仲間とは何のことだ！？」

ふと過ぎる加奈陀の顔。

彼は今も自分の手足として各地を回り神の子を捜しているはず。

「もうすぐ、儀式が執り行われますだ、それまで、暫しの逢瀬をとの王の情けですよ。」

大きな扉が開かれた。

豪勢な装飾のされたその扉は以前にはなかったもので、凱漸はその扉の向こうに広がる空間に唖然とした。

「な…なんだ…これは…」

床には、何か模様が施されており、高い天井には、折り重なる三角の星、『六芒星』と見たことのない文字が書かれていた。

「それでは、ごゆるりと…」

男が出た途端大きな扉は閉められた。

凱漸はその扉に向かおうとしたが見えない力で弾かれ床に倒れた。

「！？」

扉が閉まった瞬間、手枷が外れた。

「どうということなんだ…」

謎に包まれた空間。

彼は歩き出し、床に書かれた模様が天井のと同じであることに気付いた。

丸い空間の広間には、6つの大きな扉があり、その扉は、六芒星の頂点に合わせて作られたもののようであった。

（兄上…あなたは一体どうされたのですか…コレも皆、芳崖の企みなのですか…。）

兄である現王の仕打ちに凱漸は心が軋む思いがした。

亀背の男はココが自分に与えられた牢屋であると言った。

しかし、どうみても普通の牢屋ではなく、呼んでも誰も来なかった。

「飢え死にをさす気かな…。」

この広間に通されて、3日がたった。

空腹を知らせる音が小さく広間に響く。

自分の通された空間は、食事以外は完璧だった。

眠りたいと思えば、突然床から寝床が現れ、用を足したいと思えば、廁が現れる。

しかし、食物だけはどんなに願っても現れず、風呂と願った時に現れた湯船の湯だけが凱漸の胃袋に収まっていた。

最初の日以来、現れない亀背の男。

話相手もない孤独な空間は、凱漸の精神を蝕みそうになっていたが、自分が王族として暮してきた自尊心と、脳裏に浮かぶ孺子蘭の顔が彼を正気に保っていた。

4日目。

今が、どの時刻なのかは分からないが、大きな扉の1つが開く音がした。

自分が出てきた扉の隣と理解した凱漸はその扉の方角へと走り出した。

扉に立っている亀背の男が、自分にしたように誰かを部屋の中に突き飛ばしている。

倒れた人物からは小さな悲鳴。

凱漸はその声の主が女である事を知った。

そして、閉ざされる扉。

「孺子蘭…。」

凱漸は倒れていた女を見て足を止めた。

別れた日から時が経ち、お互いに年を取っていたが、そこにいたのは、自分が唯一愛した愛しい女であった。

自分の名前を呼ばれた彼女は、その声を忘れていなかった。

ふわりと体を包み抱き上げる逞しい腕。

その体の感触を彼女は覚えていた。

恐る恐る顔を上げるとそこには、自分に駆け寄り抱きしめる男。懐かしい腕の温もりに目頭が熱くなった。

「旦那様…。」

凱漸同様手枷の外れた繻子蘭は抱きしめてくる腕に答えるように彼の背中に手を回した。

「どうして、どうしてココに…。」

数分間抱きしめあつた後、凱漸は愛しい彼女の顔を見ながら尋ねた。15年間もあつていなかった女は、自分の想像通りの女性になっていた。

繻子蘭は、凱漸の問いに、自分の置かれている状況が危機的なものであると改めて感じた。

「黒尽くめの女に攫われてきたのです。あの女は、不思議な力…禍々しい力を使う…たぶん慈音の敵…。」

最後の方の言葉はとても小さく呟いたものだった。

「黒尽くめの女？…しかし、何故君を…兄上には、君と言う存在がいることは前々から言っていたんだ。けれどこの情勢下で、芳崖に君と言う個人を知られてはまずいと思い名は伏せていたのに、何故敵は君を？…処刑される私への手向けかな…。」

処刑と言う言葉を聴いて繻子蘭の手が凱漸の腕を掴む。

「処刑？何故ですの…？」

「謀反を犯したものは処罰される。数日前までは、終身刑がこの国の最高位の処罰方法だったが、死刑が最高位の処罰に変わったらしい。」

繻子蘭が凱漸に何かを言おうとしたその時、今立っている場所から対角線上にある扉が2つ開き、閉じる音がした。

「誰か来た！…繻子蘭、行ってみよう。」

「は、はい。」

手を引いて広間を突っ切る2人。

「あたたたっ…美鶴？大丈夫かい？」

一緒に連れてこられた妻を労う。

黒尽くめの女に連れられて辿り着いた島。

途中までは美鶴と一緒にだった。

亀背の男に島の中に入った瞬間ふつと自分達が離された。

お互いに名を呼び、近くにいることは分かっていたが牢屋という事で、男女は別れて入れられるのかと考えた。

しかし、目の前には、牢屋に似つかわしくない大きな扉。

戸惑っていると背中を押され、部屋の中に入れられた。

丸くて広い空間。

隣の扉から押されて出てきたのが、自分の妻であると分かり彩紋は駆け寄った。

「大丈夫かい？」

倒れた妻を抱き起こす。

「あれっ？手枷がないね…。」

抱き起こす自分の手が自由であることに今更ながらに気付く彩紋。妻の美鶴は少し足を捻ったようだが、近付いてくる人の気配に身を硬直させた。

「大丈夫ですか？」

優しい女性の声。

怯えていた夫婦は声のする方に視線を送る。

そこには、自分達と大して変わらぬ年齢の男女が立っていた。

1人は、真っ白な装束を身に纏った男で、もう1人はその男性にお似合いの美しい女性であった。

「は、はい…あなた達も黒尽くめの女に攫われてきたのですか？」

手を差し伸べてくる凱漸に彩紋は手を借りて立ち上がる。

「私は違いますが、妻はそうです。」

繻子蘭は、凱漸がしたように美鶴を立たせる。

「彩紋、あなた、どういふことかしら？あの女は間違いなく雷紋の敵だと思ふの。私達、あの子の弱点になつてゐるんじゃないのかしら？」

焦った声で語る美鶴を彩紋は優しく抱き寄せた。

「ライモンの敵？　どういことですか？　黒尽くめの女の正体を御存知なのですか？」

ふと繻子蘭の方を見る。

彼女の顔は真つ青だ。

「繻子蘭…大丈夫か？　顔色がかなり悪…い…そう言えば…さつき君も…女のコトを誰かの敵と言ってなかったかい？」

両手を彼女の肩に置き顔を覗き込む凱漸。

繻子蘭はそつと顔を上げて彼と一瞬視線を合わせると彩紋、美鶴夫婦の方に向き直った。

「慈音を…慈音を御存知ですか？」

繻子蘭の言葉に、夫婦は少し考えを巡らせていたが、ハッと気付いた。

「ええ！　知ってますよ、雷紋の親友で、同じ『神の子』の慈音くんですよね！」

嬉しそうに息子の友人のことを語る彩紋。

彼は、イズナから得た雷紋の情報から、彼が仲間を得たことを知っていた。

「もしかして…慈音くんのお母様ですか？」

美鶴の声に繻子蘭は頷いた。

凱漸は、彼女の身体から両手を離す。

いまひとつ自分の考えが纏まらなかったからだ。

「まあ、噂どりの美しい方！　慈音くんはあなたに似てると雷紋から聞いてますの、まあ、このようなところで、」

「待ってください！」

凱漸から声が掛かった。

一同はその声に反応して彼を見る。

「ジオン…？　誰だそれは、君の子供？　神の子？　どういことなんだ！　何時の間に子供なんて！　誰の子なんだ！」

凱漸は繻子蘭の方を強く掴み揺さぶる。

彩紋夫婦は、繻子蘭の表情から、慈音の存在が夫であるこの男性には内密であつたことを悟り、余計な事を言つたかなと2人で焦つていた。

「慈音は…私が生んで、花街の皆で育てた愛しい息子ですわ…。」

凱漸の手が力なく彼女の肩から落ちる。

「相手の男は誰なんだ…。」

「えっ？」

凱漸は悔しそうな顔で繻子蘭に言った。

「だから！子供の父親は誰なんだと言っている！」

繻子蘭は、凱漸が自分に嫉妬している事を知り、少しだけ嬉しくなった。

王族である彼にとって、息子という存在は、王位継承に関して火種にもなる。

また身分的なことも考えると決して許されぬ存在である慈音のことを彼に話すわけにはいかなかったのだ。

しかし、今確かに彼は自分のコトを『妻』と呼び、心から自分を愛してくれていると感じた。

もしかしたら、慈音ごと自分を愛してくれるかもしれないと…。

「慈音は、今年15歳になる息子です。」

「15…そんなに大きな…15？まさか！」

自分が彼女に一時の別れを告げたのは、今から15年前。

につこりと優しい微笑みで目に涙を湛えている愛しい女性。

彼は彼女を思いつきり引き寄せて腕の中に閉じ込めた。

「俺の…俺の子か？」

小さく頷く彼女をさらに抱きしめる。

「なぜ、何故知らせてくれなかった！」

と言いながら、その理由も分かっている凱漸は、彼女を抱きしめるしかできなかった。

彩紋夫婦は、2人の中が纏まったようでホッとしていた。

「神の子…？息子は神の子なのか？」

ハッとして繻子蘭の顔、彩紋夫婦の顔を見る。
「全てお話いたしますわ。」

つづく

親達の合流

彩紋夫婦は、まず、白装束の男の正体が、現王の弟君・凱漸であることに驚いた。

慌てて、膝を付き平伏する。

そんな2人に凱漸は恐縮した。

「私は今、貴方達と同じ罪人としてここにいるのです、頭を上げてください。それに、私の息子は貴方達の息子さんと同じ神の子。ここに身分の差などありません。」

そう言われて頭を上げた彩紋夫妻は、自分達の息子、雷紋について話し始めた。

「あの子に宿っている神獣は、白澤さまとおっしゃるとても知恵に優れた方で、自分達がこの時代にいるということは、いずれこの世界を壊しかねない巨大な敵が現れる前兆であると仰いました。雷紋は、幼い頃から、いずれは自分達の下を離れて、仲間である「神の子」を見つける旅に出なければならぬと常日頃から言っていました。」

息子のことを思っ語る彼等の目の優しさに凱漸、繻子蘭も頬を緩ませる。

「ですから、あの子が旅に出ると突然言い出した時も大して驚きはしませんでした。」

繻子蘭は、息子の慈音もいずれ自分は花街を出て、仲間を探す旅に出るんだと言っていたこと、父親については一度だけ語ったことがあることを話した。

「酷いな…もつと話しておいてくれよ…。」

凱漸が拗ねたように言った。

繻子蘭は、木蓮太夫のことについても凱漸、彩紋夫婦に告げた。

「その木蓮太夫が黒尽くめの女である可能性は？」

「違うと思います。私はあの子のコトを妹のように思っていましたか

ら、分かります。だから、とても辛かったんです。慈音が木蓮のコトを姉以上には思っていないことを知ってましたから…。」

慈音への愛が彼女を狂わせたことを話した。

「慈音には、好きな女の子がいますの…。」

「えっ!」

凱漸は苦笑する。

「自分の息子のコトを知らない父親って、情けないな…ちょっと、繻子蘭、君を恨むよ。」

「子供の成長は早いですからね、うちのは知恵が回るからなおさらでして、」

彩紋は嬉しそうに、雷紋の薬の実験台になって、酷い目にあつたこと、それでも息子を愛していることを美鶴と寄り添いながら話した。

「でも、私達、親を集めてどうするつもりなのかしら…。」

天井と床の紋様に不安を抱く。

「この流刑島に囚われていた罪人たちが全て処分されたというのも気にかかる。」

凱漸はこれまでの4日間、この広間で起こったこと、風呂の時以外に水分も、食べ物も摂取していないと話を話した。

「ああ、それでしたら!」

彩紋が自分の服の合わせを解いた。

するとそこからばたばたと何かが落ちてきた。

「彩紋!あなた!!」

美鶴の呆れたというか怒った声が響く。

「…。」

絶句する凱漸と繻子蘭。

「いやあ…恥ずかしいんですが、私はお菓子が好きでして、」

そこには、色とりどりの包みに包まれた駄菓子で20個近く落ちていた。

「歩きながらも食べてしまうので、妻からは所定の場所以外での駄菓子禁止令が出てたんです。ですから、いつもこうやって懷に駄

菓子を忍ばせて…美鶴？凱漸様のお役に立てたんだ、怒ってはいけないよ？」

凱漸も繻子蘭も久しぶりに腹から笑った。

「あと、コレは雷紋からいつも持って置くように言われている薬でして…。」

小さなゴマ粒ほどの大きさの黒い薬が入った小瓶。

「副作用とかは大丈夫でした。あの子が作った薬にしてはまともな…イヤ何も起こらない、疲れを取る薬です。軽い怪我なら半時で治ります。」

美鶴は捻った足をその薬で治した。

「すごい…。」

息子を褒められたようで彩紋と美鶴は嬉しそうだった。

「けれど、駄菓子も、薬も大切に使いましょう…。この先なにがあるか分からないのですから…。」

凱漸の言葉に一同は賛成した。

「ようやく目が覚めたのね。」

ゆらゆら揺れる船の中だろうか、加奈陀は目を覚ました。

柔らかい枕が声の主の膝である事をすぐには理解できなかった。

「あんた、大丈夫なの？ずっと泣いていたわ…。」

どうりで鼻の通りが悪いはずだと加奈陀は苦笑した。

女の手足にされているのと同じ枷が自分にもされていた。

「目覚めたのなら、さっさとどいてくれる？」

加奈陀は起き上がる。

「私、あんたを見たことがあるわ…飛蝶街で用心棒をしていたわよね。」

言い方が気に入らなかった。

何故こんなにも言葉尻の荒い女なのだ。

加奈陀はムカツときて、

「ああ、そういうあんたは、子供を餌に荒稼ぎしてた傲慢女だよな。」

と正直な言葉を述べた。

華やかな街で、娘を見世物にしていた事実。

美麗はキュツと唇を噛んだ。

「仕方ないでしょ……あの男……言う事聞かないと家族を酷い目に合わせるって言うんだもの！離れて行くことは許さないって言うんだもの！！あの人や、子供達が無事ならそれでいいって思って、でも淋しくて辛くて、月風の歌が聞きたいって言ったら、あの子を攫ってきて……。その頃には、とくに里では私は悪女になってるし、分かってるわよ、あの男が私を帰さない、帰ることの出来ないようにあることナイこと里の人に言ったことくらい！！嫌われてるのに！あの子達を捨てたことになっているのに！どうやって母親面すればいいのよ！！馬鹿にするがいいわ！！」

美麗は、綺麗な顔を歪ませて、涙をこぼしながら言いたいことを言つてのけた。

思っていることの反対ばかりが口先から出て来てしまう天邪鬼な彼女には初めてのことだった。

悔しいやら、情けないやらで美麗は加奈陀から顔を逸らした。

「あんた、あの店主の情婦なんだろう？」

木杵で出来た手枷で加奈陀を殴ろうとするが、彼はソレを避けた。

「なんで、避けるのよ！！私を侮辱しないで！！私はいつだって、身も心も、愛するあの人のモノなんだから！！」

叫んだ後彼女はへたりこんだ。

涙を流した顔が失笑に歪む。

「でもね、逢えないままあの人は逝っちゃった……私のコトを誤解したままよ？最悪の終幕ってやつ？殺されてでも逃げればよかった……飛蝶街へのお遣いってことに、はしゃいで、店主の罠に掛かってしまった、あの人や子供達のことを一瞬忘れて遊んでしまったバチがあつたの。」

力なく笑う美麗。

加奈陀は、不自由な身体を彼女に凭れさせた。

「何よ！」

「俺も、愛する女の死に目に会えなかった…っていうか、もつと酷いぞ？俺がソレを知ったのは、つい先程で、それまでずっと彼女には裏切られていたって思っていたんだ。彼女と自分の間に生まれた子供を恋敵の子供と勘違いして殺しそうにもなった。ちゃんと知ろうともしないで、勝手に思い込んで…彼女を沢山泣かせたまま逝かせてしまった。最低な男さ。」

お互いに失笑する。

「ところで、この船、何処に向かっているのよ。」

「俺に聞くなよ…いやな予感ヒシヒシと伝わってくるけどな…。」
船倉には窓もなく、ただ波に揺られている事しかわからない。

「あの女だったら、一瞬で目的地に着かせるだろうけど、こういう手段でくるってコトは、俺たちを運んでいるのはただの人ってことだな…。」

加奈陀は、状況の理解をさせるため、自分達の子供がこの世界にとつて必要不可欠な『神の子』であることを話した。

「ちょ、ちよつと待ってよ！そ、そんな…ってことは、私はまたあの子達に迷惑をかけてしまっってこと？」

落ち込む美麗。

「ソレを言ったら、俺だってそうだ。先に言わないでくれるかな…。」

2人を乗せた船は流刑島へと辿り着いたのである。

「凱漸…。」

「加奈陀…。」

お互いに顔を見合わせるの、何年ぶりだろう。お互いの状況にため息を吐く。

「お前の子供も神の子か…。」

「数時間前に知った。」

ちらつと美麗を見る。

「お前の奥さんか？」

加奈陀はちらつと美麗を見るとため息を吐いた。

「ありえないでしょ？俺の好み知ってるくせに……って、繻子蘭もいるんだな……。」

繻子蘭は、美鶴と共に愚痴をこぼしている美麗の相手をしている。

「こつも世間が狭いと笑えるな……。」

自分達の未来が幸薄い事にため息を吐いた。

つづく

良く似た人（前書き）

R15 的表現アリ

良く似た人

「そもそも、なんで白妙は殺されただろう…。」

雷紋がポツリと呟いた。

彼の膝には黒い犬が左右から頭を乗せて眠っている。

耳がピクピク動いているから彼の声は聞いているのだろう。

「白妙ちゃんは、死んでません！」

きつぱりと否定する月凧。

彼女の膝にも一匹頭を乗せて寝ている犬がいた。

彼女は今、犬達の首輪を作成中だった。

この国では、首輪をしていない犬は処分されることになっているから。

「ぜったい、戻ってくるもの！」

じわつと泣きそうな月凧に苦笑する雷紋。

「兎に角、俺的には、木蓮は、はじめ慈音を殺そうとしていたように思うんだ。」

「そうかもしれないけど、実際には、近付いてきた白妙ちゃんを刺したのよ？ やつぱり、憎くなっただんじやないかしら？ だって、慈音くんと白妙ちゃんお似合いなんですよ。」

頬を染めて思いを巡らせている月凧。

「ホント、月凧は夢見がちな女の子だな。」

「な、何よ！ 意地悪！！」

プンツと頬を膨らませて他所を向いたのを起き上がった犬が気付き慰める。

「やつ、戒つたら、大丈夫よ、本気で怒ってないんだから！ や、やんっ！」

ペロペロと月凧の顔を舐める。

「戒？」

雷紋の低い声に戒が振り向く。

「舐めすぎ…大人しく寝てなさい。」

戎は雷紋の方へやって来て2人を押しのけて膝に頭を置く。

「ちよつと、顔洗ってくるね。」

月風が席を立つ。

「白妙は…俺達とは違う…神の子…鬼を従えているけれど…あくまでもあの石に鬼を封じてあるだけで、宿していない…では、夜叉の御子とは…本当の神の子？」

月風が難しい顔をした雷紋に声をかけるべきかどうか悩んでいた。その様子を見て、戎が近寄って、月風の太腿辺りに擦りより、切ない声を出した。

「しっ、雷紋くんが考え中は、黙っておこうね。」

静かに横を通り、ベランダに出ようとした月風の腕を雷紋が掴んだ。
「きゃっ。」

「えっ？あつ。…ごめん。」

月風は背中から雷紋の腰を掛けているベッドに倒れた。

「もう、びっくりするでしょ？」

起き上がる月風をジッと見ているかのように思った。

（親達を攫って、白妙を実は攫おうとしたのなら、何が浮かぶ？）
月風はまた雷紋が思考に入ったと思い再びベランダを目指したかった月風であったが、

「……（これは、どういうことだろう…。）」

と頭を悩ませる事になった。

雷紋がスッポリと月風を腕の中で捕まえているからだ。

（神を使った…邪黒の復活？）

自分の中に眠る膨大な情報を探る。

「あっ！」

思いついた瞬間、腕に力が入り、小さな悲鳴が聞こえた。

「…月風、何してんの？」

自分が引き寄せて抱きしめたくせに、出た言葉がこれか…。
月風はムツとした。

「知らないっ！！」

月風は外の空気に当たりに行った。

彼女の後を導が付いて行った。

「何怒ってるんだ…って、そうだよ！」

雷紋は紙を取り出して、何やら書き出した。

「そうだよ、そうだよ、六芒星と蟲毒を組み合わせた禁断の呪術だ。あれなら、神の身体を贄にして、魔神を復活させられる。」

「コドクって何？」

月風と導が帰ってきた。

「虫とか、獣を1つの空間に閉じ込めて殺し合いをさせるんだ。で、生き残った強い魂を使って願いを叶える術だよ。恐らく、敵は、一部しか出て来ていない邪黒を復活させるために、俺達の親である人間を攫った。」

「で、でも殺し合いはしないよ？」

月風の言葉。

「まあ、聞いて。あくまでも仮説なんだけど…。」

雷紋は自分の考えを語りだした。

「敵は、慈音を殺そうとしてたと考えてる。」

「慈音くんを？」

「そう、でも、刺客として送ってきたのが慈音に恋焦がれている太夫だったために計画が違ってしまったんだ。あの頃の白妙は、慈音に恋をしはじめていたから、あの時も太夫が慈音を殺していれば、かなりのダメージを心に受ける事になる。白妙は俺たちとは違う、ある意味、本当の神の子。神獣を宿しているわけじゃない。彼女自身の力で鬼を操り、剣を身体から出して戦ってきていた。常に彼女を守っている鬼達は、彼女の冷静な判断力で呼び出せる。でも、慈音がもし死んでいたら、彼女の心は少なからず動揺し、上手く鬼を呼び出せない可能性、つまり隙ができる。」

「白妙をどうしたかったの？」

「神々が力を合わせて閉じ込めた魔神を復活させるには、復活する

世界に魔神の一部があること、そして、神の命が必要となる。恐らく、化け物を憑依させた親達に殺し合いをさせて、蟲毒によって勝ち残った者に白妙を殺させて、その命の光を生贄に魔神を呼び寄せるんだ。」

月風は息をゴクリと飲み込んだ。

「今となつては、白妙がいなくなつて助かつたと思えない…。」
雷紋の言葉は苦しい思いが込められていた。

「慈音！…！」

紅蓮の声に慈音が反応して身を翻した。

流刑島を目指して静香の街を出て、慈音達は、化け物に襲われた。

「でも、思つたより襲われないね。」

一休みの間に可憐が言つた。

可憐は今回の旅までに紅蓮、慈音を相手に剣術の向上に努めていて随分強くなつていた。

「それに、やたらと軍人が多いわ…。」

山道で、祠の周辺で、軍人を見た。

「我等は、芳崖様の命で、国の人々を化け物の脅威から守るために来たのだ。」

軍人たちは皆声を揃えて言う。

ついこの間までは、神の子を異分子として捕えようとしていた軍人達が、神の子の名の下、芳崖の命で動いているというのだ。

「芳崖おじ様は知らないけど、軍人って嫌いよ。いつも家族を悩ませていたもの。」

軍の見回りと称して行われる駐屯軍人の巡回。

それは、街の治安を悪くした。

「酒を飲んで、暴れたり、公共のモノを壊したりするって、ばあやが物凄く怒つてたもの。」

ふと可憐の表情が曇る。

きつと優しくつたばあやのことを思い出したのであろう。

ソレと同時に引き出される記憶。

「可憐、こつち見てみ？」

呼ばれて振り向くとそこには、変な顔をした紅蓮がいた。
「プッ！」

思わず噴出した可憐が、笑いながら怒りだした。

「ふざけた顔しないでよ！！」

じゃれ合う姿を見ていた慈音も2人を微笑ましく思う反面、白妙がいない現実が重かった。

「紅蓮、そろそろ行こうか。」

立ち上がる慈音の足元がふらつく。

「慈音、大丈夫か！」

紅蓮がその身体を支える。

「慈音くん、寝てないでしょ、昨日も一昨日も。」

可憐が腰に手を当てて言う。

「なんて、えらそうなんや。なあ、慈音？ちょっと先に進んだら小さな町があるから休んでこ？」

慈音は笑ってソレを断る。

「大丈夫だよ。ほんと、急がないと……。」

立ち上がる足に力が入ってないことを紅蓮は気づいていた。

「ホンマに頑固やな。」

「うっ！」

紅蓮の拳が慈音のみぞおちに入った。

慈音の身体ががつくりと前に倒れた。

「よいつしょ、可憐、行くで。」

「えっ、あ…紅蓮ってば、やる時はやる男よね。」

「なんや、それ？」

笑い合う2人。

「宿に入ったら、こいつに雷紋に渡された薬飲ますねん。」

「うん、でもいい夢は見ないだろうね……。」

そつと慈音の前髪を掻き分ける。

「そやな…でも、寝えへんのはアカン。喰って、出して、寝る。ソレが大切や。」

「紅蓮つてば単純。」

紅蓮は、豪快に見えて繊細な心を持ち、いつも人の為に自分が何を出来るかを考えていると可憐は思っていた。

（私を助けてくれた時も、今だって…。頼りになるお兄ちゃんだよ！！）

バシッと紅蓮の背中を叩く。

「可憐…痛いねんけど？」

「ははっ、ごめん、ごめん！」

その山道から一番近い町に入った紅蓮と可憐は宿屋を探したが、どこも軍人で溢れており、泊る場所の確保が難しかった。

慈音を病人と偽っても、部屋を開けてくれる宿屋は見つからず2人は、どうするか迷っていた。

「もし、泊るところをお探しのかしら？」

困っている紅蓮に声をかけてきた人がいた。

振り向いた紅蓮と可憐はその女性を見て驚いた。

黒い髪に、瞳の色は茶色だが、大きく、

「…白妙…」

そう、声を漏らしたのは可憐だった。

紅蓮と可憐はその女性の申し出をありがたく受け取った。

彼女は喪服を着ており、住んでいる家は町の少し端の方にあった。

「先日、父が化け物に殺されて…私は1人になってしまったの。古いけど部屋数だけはあるから、泊ってちょうだい、誰かがいるということは、それだけで安心できるものだから。」

慈音を奥の部屋に寝かしつけ、紅蓮と可憐は居間で差し出されたお茶をのんだ。

「八鹿さん、普段は何をしてる人なの？」

「町の役場で働いているの…でも最近は、軍人さんの世話ばかりで、

ちよつとイヤになつてるところよ、横暴なんだもの…。」

可憐と同じ意見。

彼女はすつと立ち上がった。

「どこへ？」

「御病気で倒れたというお友達の様子を看て来ます。あなたたちはごゆつくりお茶でも飲んでいてくださいな。」

彼女は居間から出て行つた。

「…慈音くんに薬飲まさないでいいの？」

「んー、かなり正確に入つたからなあ…必要ないと思うわ。」

可憐は八鹿の出て行つた方角を見た。

「それにしても似ていたね…。」

「ああ、でも、今の慈音には酷かもしれんけど…。どないした？可憐…。」

可憐は眉間にシワを寄せてまだ同じ方角を見ていた。

「うん…はつきりしないんだけど…私ね、八鹿さんが…んー、上手く言えない。」

「なんや、ソレ…。」

八鹿は、静かな寢息を立てる慈音の枕元に立つて彼を見下ろしていた。

すつとその傍に座り額に手を当てる。

「熱い…。」

無理が祟つた慈音の身体は汗を掻き、熱を帯びていた。

八鹿はヤカンと桶を持ち込み、慈音の身体を拭き、着ている服を脱がした。

（綺麗な身体…。）

熱を帯びた身体に指を這わす。

冷たい指が肌を滑ると慈音から切ない声が漏れた。

胸の先端にある蕾にも指を這わす。

眠っている慈音の身体がピクツと震えた。

（可愛い人…。）

ずっと自分の手を慈音の腹から下のほうへと這わす。

「や、やめろ…誰だ？」

動かない身体。

疲れがピークに達していた慈音の身体は金縛りにあったように指1つ動かせないでいる。

ゆっくりと開く目に映ったのは、夢にまで見た白妙の姿だった。

「…し、白…妙？んっ！」

「そう、白妙よ…帰ってきたの…慈音…身を任せて…。」

巧みに動く八鹿の手に翻弄されていく慈音。

「慈音…愛しい人…。」

夢にまで見た白妙の顔が近付いてきた。
触れ合う唇、絡める舌。

「んっ…んんっ…うっ！」

八鹿の黒い髪に彼の情熱がかかった。

「慈音…。」

パタパタと廊下を歩く音が近付いてきた。

八鹿は慌てて慈音の身体を拭き、寝巻きを着せるとそそくさと部屋を出て行った。

「あれっ、八鹿さん？」

紅蓮が彼女を呼び止める。

「慈音さん、凄く汗を掻いていたので、服は洗濯しておきますわ。」
顔をまともに合わせないまま去って行く八鹿。

「はあ、そりやどうも…。」

可憐がじっと彼女を見つめている。

「どしたん？なんや怖いなあ…その顔。」

「んー、なんか…どっかで…。」

首を傾げるばかりの可憐。

紅蓮は1つため息を吐いて部屋の中へと入って行った。

「慈音、起きて大丈夫なんか？」

慈音は紅潮した顔で2人に視線を送る。

「…し、白妙いなかった？」

酷い顔だった。

一年の疲れを集めたような顔だった。

「いないよ、白妙ちゃんは。」

可憐ははつきりした口調で答え、慈音に寝るように促す。

「…そうか。心配かけてごめん…。」

「何言うてんねん、なあ、俺らに謝るんやったら、雷紋のくれた薬飲んでくれ。」

力ない笑顔で慈音は頷いた。

旅の途中

翌日、熱の下がった慈音は、八鹿の顔を見てびっくりするが、すぐに他人の空似だと理解した。

最初あれだけ感謝していた可憐は、目覚めた慈音にこれでもかと引っ付いてくる八鹿がイヤで堪らなかった。

「また、怖い顔しとる…。」

「だって、なんか違うのよ、って、慈音くんも気を許しすぎ！白妙ちゃんが帰ってきたら言いつけちゃうぞ！」

可憐の声が聞こえたのか、慈音が自分の方を見て寄って来た。バツが悪いのか、可憐は紅蓮の後ろに隠れてしまう。

「可憐？何か言っただけだった？」

「べ、別に！」

ふいと横を向く。

「慈音、彼女は白妙じゃないで？」

紅蓮が可憐の言いたいことを代わりに言った。

慈音は一瞬目を丸くして笑った。

「当たり前なこと言うなよ。白妙の代わりは、誰も出来ないよ。…ただ誰かに似てて…完全に突き放す事ができないんだ…。」

こちらを見て不安そうに笑う八鹿。

「それに、もう出発しなきゃ…。」

「一緒に連れて行ってください。」

八鹿の言葉に3人は目を丸くした。

「駄目よ！あなたは、仲間じゃないわ！」

可憐がお決まりのポーズで言っただけ。

「そんな！この町にいても、軍人の慰みモノ…。どうか、一緒に…。」

八鹿は、可憐にでもなく、紅蓮にでもなく、慈音に縋るような瞳を

向けた。

「あかん、俺たちの旅は危険やから。俺は、反対。」

「慈音さん…。」

八鹿の手が慈音の胸に伸びる。

「慈音、お前が返事せえ。俺らは、お前に従うわ。…可憐、行くで。」

「えっ、ちょ、ちょっと紅蓮！」

可憐は紅蓮に連れられて外に出て行った。

「ちょっと、紅蓮！どういうことよ！！慈音が連れてくなんて言ったらどーすんのー！！」

紅蓮は外にあった椅子に腰掛ける。

「慈音は、ちゃんとわかっとなるから、大丈夫やって…。」

「で、でもさ、八鹿さんの色気に負けてさ…。」

紅蓮は噴出す。

「な、何よお！」

「慈音は、白妙命やから、そんなコトないって。」

紅蓮は可憐の頭をくしゃつと撫でた。

「ねえ、慈音さん…私を助けると思って、一緒に連れて行って？」

身体を摺り寄せる八鹿。彼女の身体は震えている。

「ごめん、それはできないんだ。」

ハツと顔を上げて慈音を見つめる瞳から涙が零れる。

「代わりでいいの！！あなたの白妙さんが帰ってくるまでの…。」

八鹿は押し倒すように慈音に身体を押し付けた。

「…ごめん。どんなに顔が似ていても、あなたは白妙じゃないんだ。」

慈音の言葉に八鹿は唇を押し付けてくる。

しかし、慈音はそれを拒んだ。

「さよなら、八鹿さん。お世話になりました。」

慈音は床に伏せて身体を震わせ泣いている八鹿を背に部屋を出て行った。

「この、色男！」

紅蓮の『イシッシ』という笑いに慈音は頬を染めた。

「うるさいなあ…でも、十分寝たから身体は楽になったよ。」
につこり笑う慈音に可憐がバシッと背中を叩く。

「いつ！痛いなあ…それ、紅蓮だけにしなよ？可憐。」

「何んでやねん！」

3人に久しぶりの笑顔が戻った。

「その器でも白虎の御子の心は手に入らなかったのねえ…。」
崩れ落ちるように泣いている八鹿の元に黒尽くめの女が現れた。
すつと上げられた手に反応するように八鹿の身体が弓なりに仰け反る。

「ぐっ…あっああっ！」

白い靄のようなものが八鹿の体から出た。

すると八鹿の身体は粉々になり崩れた。

「木蓮、そのかわいそうな魂。器も無くなって、愛する人にも拒絶され…。いい加減に消えてはどう？御館様の中に。お前のような虫けらの魂でもあの御方は優しく喰ろうてくれようぞ？」

欄梓は、木蓮の魂を掴むとその家から消えていった。

「んっ？」

慈音が振り返る。

「どないした？」

「誰かが呼んだような気がしたんだけど…気のせいみたいだ。」
慈音は進んでいく。紅蓮、可憐という仲間と共に。

「りゅー？雷紋何？」

イズナが龍の玉の情報を持ってきた。

「龍の社にあるのか…。王都は封鎖されてるから、遠回りになるかなあ…。」

静香の街を出て、南を目指していた龍綺と暁。

黄龍は、もう1つ龍の玉の情報を彼に齎してくれた。

それは、龍綺の中に眠るもので、龍綺が真に力を欲する時でないと目覚めない黒龍の玉であった。

（常に力はほしいと思ってるんだけどなあ…。）

共に戦い、守るべき存在である暁は、今回の旅で色々なものを目で見て、肌で感じて実に楽しそうだ。

そんな彼女の笑顔は龍綺の心を慰めてくれる。

「りゅー？ため息。眉間しわ。」

たぶん、そんな顔をしていたのだろう。

覗き込む彼女の顔が眉間にしわを寄せたものだったので、彼は、ふっと笑ってしまった。

「ごめん、大丈夫だよ。」

龍神の社は、龍綺が住んでいた甲村から近い場所にあった。

甲村の豪族・三浦は、社から直々に村の祠を守る役目を得たのだと自慢げに話していたことを思い出す。

父だと思っていた人の裏切り。

母親の死、実の父親について。

龍綺が経験したこと、全てが彼の心を苦しめていた。

（甲村を通らないと社は遠いなあ…。）

また、ため息を吐いたことで龍綺は暁に覗き込まれた。

「りゅー？」

彼女に心配そうな顔をさせてしまったことを龍綺は反省してしまった。

「ごめん、大丈夫だから、そんな顔しないの、」

暁は、髪と瞳の色とを変え、額の紋様を布で隠していた。

彼女の好奇心旺盛なところには時々振り回されている龍綺も大分慣れてきて、言葉が不自由な分彼女の感情を読み取る事にも慣れてきた。

14年という長い期間、人と喋る事をしてこなかった彼女の声帯は退化してしまっただけで、龍綺との出会いで今までの分を取り返すかのように喋りだした暁は驚くほど言葉を喋るようになったが、まだ聞き取り難いところがあり、言葉を飛ばして発音してしまう癖ができてしまった。

（暁にとって、俺は親のようなモンなんだろうな…。）
時々自分の思いが彼女には通じてない事を知らされる。
そんな時、黄龍がいつも言ってくる。

（玄武の御子は、まだまだ子供だということだ…嫌われてはないのだ、ゆっくりすればよい。）

そんならしくない言葉に龍綺は笑ってしまう。

「どした？」

「んっ？ああ、そろそろ暁の金髪が懐かしいなって。」

今は黒く染められた髪。

明るい彼女にはやはり金色の髪の方が似合っなと思っていた。

（龍綺、大物が来るぞ…。）

一気に2人に緊張感が走る。

暁は、額の紋様を光らせて戦闘モードに入った。

森の木々を倒し現れた敵は、水の塊のような化け物だった。

その体内には、人の骨が混ざっている。

「ウマソウナ、ニンゲンダ…。」

2人を見下ろしているのか、化け物の声がした。

「人間を喰ったのか！」

龍綺の一太刀。しかし、相手は一瞬身体を二分しただけで元に戻っていく。

「キカヌ…ソノヨウナ コウゲキハ、キカヌ。マズハ ムスメヲク
ロウテヤル…。」

水が蛇のように伸びて暁に襲い掛かる。

暁は、巧みにその攻撃を避けながら、光の力を化け物にぶつける。

「黄龍、アイツを倒すためにはどうすればいい！」

何度も剣で斬りつけるが一向に報われない。

「暁！！」

木が邪魔をして避けきれなかった暁の足を化け物が捕まえた。

「くそっ！」

龍綺攻撃は全て役に立たず、暁の身体はあつという間に水の化け物の中に取り込まれた。

「暁！！」

差し伸べる彼女の手には龍綺の手が届かない。

「くそおっ！」

彼女の口の中から大きな泡が出た。苦痛に歪む顔。

「デキシサセテカラ、ソノニクヲ トカシテ クラウノガ ワレノ

チカラ シニユク ムスメノカオヲ ミナガラ オマエモ シヌガ

ヨイ！」

化け物の攻撃が龍綺の身体を吹き飛ばした。

「あ…暁！」

龍綺の胸元が光った。

「ナンダ！コノクロイヒカリハ！！アア！！」

黒い光が化け物の身体を貫いていく。

龍綺はその光を青龍の剣に集めた。

「うおおおおおっ！」

黒く光った剣が化け物に刺さった。

「ナ、ナンダ！コノネツハ！アアッ、ジョウハツスルウ！！！」

暁の身体が解放されたのを確認した龍綺は、剣を抜いて落ちていく彼女の身体に飛びついた。

ぺちぺちと彼女の頬を叩く。僅かに彼女の顔が歪んだのを確認すると、

「暁！暁！！」

消えていく敵を無視して龍綺は、暁が飲み込んだ水を吐き出させた。
暁は激しく噎せて水を吐いた。

龍綺はその姿に安堵した。

「りゅー？ごめんなさい…あー足引つ張った…。」

謝ってくる暁に龍綺は笑顔を見せる。

「暁がいなかったら、黒龍の玉を発動できなかった。」

「見つかったの？」

暁の手が龍綺の袖を掴む。

「うん、暁のお陰だね？」

龍綺は、ぎゅっと暁を抱きしめた。

「俺は、暁が好きだよ。だから、ずっと一緒に居て？」

抱きしめてきた龍綺の身体を暁は抱き返した。

「あーも、りゅー好き。ずっと一緒にして？」

「とりあえず、近くの村か町に行こう。」

「ズブズブだねー。」

2人で笑い合う。

こうやって笑い合える人がいる幸せを龍綺は実感したのであった。

つづく

流刑島からの脱出

「いい加減、腹減ってきたな…。」

加奈陀の言葉。

囚われの大人達は、極力体力を使わないようにジツとしていた。

この流刑島に来てはや2ヶ月。

彩紋のもっていた駄菓子もすでに無くなり、現れる風呂の水を何とか確保してそれで飢えをしのぐのも限界が来ていた。

「それにしても…俺たちをどうするつもりなのか…。」

不思議な魔力に支配された広間に投げ入れられてから、自分達の処分は遅れに遅れていた。

「これで水がなかったら、気が狂ってたわね…。」

美麗がため息混じりに言った。

親たちは互いの情報を交換し合った。

御子たちのことは勿論、凱漸が王都を出るまでに起こった事も話された。

「その芳崖とかいう將軍は…私達で何をしようというのかしら…。」

床に横たわり、次の日が来るのを待つ日々。

と言っても彼らには今がいつなのか分かっていなかった。

たぶん1日が過ぎた。そんな感覚で床に付けられた傷は60日を過ぎていた。

彼らは知らない。

六芒星の蟲毒のために必要不可欠であった白妙を捉える事が出来なかった敵側の事情を。

そして、今、王都で起こっていることを。

「水だけで過ごす日を週4日。彩紋さんの持っていた駄菓子を一口喰う日が週3日。よく頑張ってるよな…。」

「死ぬわけにはいかない…俺も、誰一人として。」

「旦那様には、何としても慈音に逢ってもらいたい…。」

「私は、あの子達には逢えないわ…やっぱり。」

美麗が自分を卑下したように述べた。

「脱出できたら嬉しいけど…あの子達に逢うのは怖いのに…」

この状況では強がる必要も無い美麗は素直な気持ちを話すようになった。

「子供は、親が思ってる以上の思いを抱えています。美麗さんは、一度ちゃんと子供達と向き合わなきゃ…逃げちゃ駄目よ。」

美鶴の言葉。

白澤の存在を自覚した雷紋に訪れた想像を絶する苦痛。

彼は、何度も痙攣を起こし、泡を吹いた。

痙攣を起こし、気を失う度に白くなっていく髪に恐怖さえ感じた。

神はこの小さな雷紋をどうしようと言うのか…。

彩紋も、美鶴も苦しんだ時期だった。

5歳の雷紋が自ら手首を切った時は、泣いて、神に命乞いすらした。目覚めた彼が『冥界の入り口まで行って来た』と言った時は背筋が凍った。

「歯がゆいコトは何度もあったわ。結局私達普通の人間には神の子、神獣の考える事なんて分からないって…普通でいいから、雷紋を返してって言ったわ。でもあの子はあの子で物凄く悩んでたみたい。でも冥界から帰ってきたら憑き物が落ちたみたいに達観してて…一度死んで彼は生まれ変わったって言ったわ。二度と自ら命を絶つようなことはないって。あの子が苦しんでいる時に私たちは怖くてあまり話をしてこなかった。ソレが彼の自殺と言う行為に繋がったのであれば、私達の落ち度としか言いようがない。だから、後悔する前にちゃんと話して。」

美鶴と繻子蘭に両側から手を握られて美麗は苦笑した。

「ホント、あなた達って…」

熱く込み上げてくるものを美麗は素直に受け止めた。

「どうするのよ！」

流刑島を眺めながら可憐が苛立ちの声を上げた。

やっと島を見ることが出来たのに、島に唯一向けられた港には小船一つもないという状態であった。

「そうだね…漁村もないし…」

キヨロキヨロと見渡す慈音の目にも舟は映らない。

紅蓮だけが口笛を吹いている。

「ちよつと！何口笛なんか吹いてんのよ！！」

「だって、俺ってば、余裕でお前等抱えて飛べるから？」

可笑しなイントネーションで喋る紅蓮。

「はっ？」

「俺って、何？」

「…朱雀の御子……。」

「朱雀って何類？」

「…鳥類……。」

ニカツと笑う。

「俺ね、飛べるのね。朱雀を宿した日から、まず何より飛ぶ練習したんだよね。」

沈黙する2人を他所に紅蓮は話を続ける。

「しかも、馬車とか抱えて飛んだこともあるんだよね。」

「ちよつと！」

「なんですか？可憐ちゃん。」

「その喋り方やめなさいよ！！気味悪い！！」

紅蓮は右に可憐、左に慈音という真ん中に立った。

「ほな、行くで？」

がしつと腰に手を回された。

「わっ！」

「きゃっ！」

紅蓮の髪が赤く、瞳が金色に輝いた。そして、足が宙に浮いた。

流刑島が大きく揺れた。

天井からパラパラと粉が落ちる。

「な、なんだ？」

親達は、久しぶりに音が一番近くに感じた扉の前に集まった。
ドアに耳を当てる。

外では、獣の雄叫びやモノが壊れる音、そして、若者の声、

「どけやー！！おらおらっ！」

「紅蓮！後ろ！！」

扉に大きな衝撃が来た。

そして、しんと静まる。

親達は少し扉から離れた。

女性陣の前に庇うように男性陣が立った。

ぎいっと思いを立てて扉は開かれた。

「よつこらしよ……」

ひょいと覗き込んだ少年。

その顔に反応したのは美麗だった。

髪と瞳の色は違うが、随分と大きくなった息子の紅蓮に戸惑った。

「何してんのよ！！早く入ってよ！紅蓮！！」

可愛い女の子の声。

ひょいっ顔を出した少女は入ってくるとぺこりと頭を下げた。

そして、繻子蘭は駆け出した。

「慈音！」

彼女が抱きついていたのは、すっかり自分より大きくなった息子だった。

「母さん、よかったよ……無事で。」

慈音の耳元で繻子蘭は何かを呟いた。

その言葉の後、慈音はハッとして正面を向いた。

彼の目には真つ白な装束を来た背の高い男性が立っていた。

「君が……慈音？」

想像していた声だった。

「は、はい…。初めまして…。その…父さん…。」

凱漸の頬が緩んだ。

彼は繻子蘭ごと慈音を抱きしめた。

一方、紅蓮は美麗を素通りし、彩紋夫妻の前へ。

「大丈夫か？おっさんら雷紋のおとんとおかんやる？」

「紅蓮！」

可憐の声。

「そっちも大切だけど、こっちが先でしょう！！」

指をさした方には、今にも泣きそうな顔をした美麗がいた。

紅蓮はちらつと彼女を見たあと、傍にいた男に視線を走らせた。

「おっさん…飛蝶街の。」

軽く手を上げる加奈陀。

「何でココに…もしかして！龍綺のおとん？！」

「と、いうことみたいなんだが…龍綺は…？」

紅蓮は龍綺について話をしようとした。

「紅蓮！！」

可憐が腰に手を当てて睨んでいる。

「お母様と話をしなさい！！ほらっ！龍綺くんのお父さんは、こっ

ち！！」

「は、はい。」

正面で久しぶりに見る母親は小さくなっていた。

「元気そうやな…。」

視線を少し美麗に向ける。

「…ごめんなさい。」

紅蓮は、小さくなった母親の肩に手を置いた。

「もうええ…って…けどな…月風には逢わんとつてくれ。あいつは自分の母親に売られたつてことが心の傷になつとる。俺が表に立つから、あいつの前には現れんとつてくれ。」

美麗は溢れる涙を止める事が出来なかった。

「紅蓮！兎に角ココから出よう！！ちよっと、壊しすぎた。」

慈音の言葉。パラパラ落ちてきていた天井の崩れが酷くなってきた。
「島の南に舟があつたから、それで出よう！！こつちや！」

紅蓮は皆を誘導し、広間から出すと、掌を向けて広間の天井と床に
向けて火の玉を発射した。

轟音を立てて崩れていく天井。

「ちよつと、やりすぎよ！！」

「雷紋に壊せ言われたからな！」

女性陣を庇いながら、敵を倒して、船着場に向かう一同。

「早う、乗り込め！！可憐！」

「分かつてる！！」

彼女は最近、麒麟によつてもたらされた呪文を唱え、大地に両手を
付けた。

「ごおおつという轟音と共に大地が割れ、岩が大地にそそり立った。

「よしっ！成功！！」

可憐は船に飛び込んだ。

「港に敵が待ち構えている可能性が高い。」

「…やっぱり、やるの？」

不安そうな声の可憐。

「今から、ココから一番近い、玄武の社に空間移動します。俺たち
の作った腕の輪の中に入ってください。そして、何処でもいいから、
俺たちに触れてください。」

親達は言われるまま3人が作った輪の中に入る。

「少し狭いけどお互いの手を離すなや！」

総勢9人は空間を越えた。

つづく

親子の会話と旅立ち

「慈音は、繻子蘭似だな…。」

玄武の社で、慈音は凱漸と2人きりになった。

繻子蘭が2人で話をしなさいと1つの部屋に入れたのだ。

「は、はい…。」

年上の男の人を相手にする機会が今まで極端に少なかった慈音にとつて、父親とはいえ、緊張してしまうのだった。

「そ、その今まですまなかった…。」

父は、ぺこりと頭を垂れた。

慈音は、恐縮してしまう。

「あ、いや…母さんも頑固だから、コトが落ち着くまで俺のコトを、凱漸さまには伝えないって決めてたみたいですから。」

敬語と『凱漸さま』という言葉に凱漸はがつくりとまた頭を垂れた。

「えっ！あ、あのう…。」

ちらつと凱漸は慈音を見た。

「父さんとは、もう呼んでもらえないのかな…。」

「えっ！あつ！」

「まあ、君の存在に14年も気付かずにいた父親のコトなんて…。」

慈音はすっかり落ち込んでしまった父親にどう声を掛けていいのか分からなかった。

「慈音、許してくれるのかい？」

見つめてくる瞳の強さ。

これは王となる者の瞳だと慈音は直感した。

「許すも何も…逢えて嬉しいです。」

「抱きしめてもいいかい？」

「へっ？」

凱漸は慈音の言葉を聞く前に慈音を引き寄せて抱きしめた。

「が、凱漸さま…。」

その言葉にまたムツとした凱漸は、

「君が娘だったら、押し倒してしまいそうなほど、可愛いね。」
と言ってもっと力を込めた。

「が、凱漸さまっ、く、苦しいです!!」

「凱漸さまじゃないだろ?」

「えっ、あつ、と、父さん…。」

凱漸はパツと彼の身体を自由にした。

慈音は、速い呼吸を整えながら父親を見た。

彼は悪びれた様子も無くニコニコしている。

(子供?)

「ところで。」

「は、はい…なんでしょう…。(王都のことかな?)」

凱漸の真面目な瞳を見つめ返す。

父は、ふつと子供のような笑顔を見せた。

「慈音は、好きな娘がいるんだって?」

慈音は、顔を真っ赤にして仰け反った。

「なっ!何で!」

「繻子蘭から、聞いたんだ!とても綺麗な娘さんだそうだね。」

ジリジリと距離を詰めてくる父親。

慈音は視線を逸らし、少しずつ後ろに下がっている。

「-で、接吻くらいしたのかな?」

ハツとして、父を睨む。

「えっ!まだなのか!!何をしてるんだ、」

大きなため息を吐く凱漸。

「ま…仕方ないか…俺がいなかったんだから…。」

「…(父さんがいるといたくないでは違うのか?)」

「兎に角、父さんは、お前がモテモテで嬉しいぞ!なんとか言う太夫にも言い寄られてたんだって?なんでもその太夫は少し可哀想なことになったそうだが、助けてやれよ。」

頭を撫でてくる父親に、慈音はため息を吐いた。

「駄目なんだ…木蓮太夫は…もう、救えない…」

「木蓮…？あつ？えーと、んっ？もしかして、あの、木蓮か？」

繻子蘭が花魁をしていた頃、彼女を羨望の眼差しで見つめていた少女。

その少女が花魁、太夫になったのか。

凱漸は昔の木蓮の姿に思いを馳せていた。

とても美しい少女だったことを覚えていた。

「そうか、あの子が太夫に…んっ？ちよっと、待てよ。木蓮…？」

凱漸の脳裏に兄王に寄り添う愛妾の姿が目には浮かんだ。

「がい、…父さん？」

「気付かなかった…木蓮太夫は、今、兄王の愛妾となっているはずだ。」

「えっ！王都に…！」

慈音は立ち上がった。

慌てて可憐、紅蓮の元へ行く。

「イズナは？イズナは来た？」

「今日はただけど…どうしたの？」

「太夫の居場所が分かった。王都だ。王都の宮殿にいる。」

「なんでや？太夫は、黒尽くめの女に攫われて…」

その命は尽きていると思っていた。

「王都に行つて確かめなきゃ…」

明らかに焦っている慈音に可憐ができるだけ落ち着いた口調で尋ねた。

「でも、各地域の社の結界を強めに行くのは、どうするの？」

慈音はハッとする。

化け物にとって、禁忌の場所を、範囲を広げなければならない。

それは、今回の旅に出るときに雷紋から提案されたことで、役目を終えた組からその仕事に取り掛からねば、この国の人達が安心して暮せない。

軍部は、化け物に対しての攻撃の手を緩めてないが、あくまでも力

に対して、力での対応。

根本的な解決にはなっていない。

「あつ……。」

「慈音、王都のコトは、とりあえず雷紋と月風に任せるって言うてたやろ？、お前が焦るのは分かるんやけど、自分のすべき事をせなあかんのとちやう？」

紅蓮に言われて慈音は座り込んだ。

自分に与えられた役目を果たさずに自分のコトだけを考えていたことに気付いた。

「慈音……。」

3人の話を聞いていた繻子蘭が口を開いた。

「あの子のコトはお前のせいじゃないって、言ったでしょ？」

慈音は母を見る。

「それにお前は、白妙ちゃんを木蓮に刺されたことで、あの子に対して冷静に対応できない。憎しみでは、あの子を本当には救えない。」

すでに肉体を離れた木蓮の魂の行く末を知らぬ御子達は、この戦いに巻き込まれた彼女を救いたいと心から思っていた。

「ねえ、紅蓮くん？イズナくんが来たわよ。」

雷紋の母が金色のイタチを抱いていた。

「トウサン、カアサン、ソシテ、ミナサン。…ブジデヨカッタ。サテ、コチラ オウトノ ジョウキョウヲ シラセテオクヨ。グンブモ オウモ オウト シュウヘンニスム ジュウミンヲ ジョウヘキガイヘ ダシテイナイコトガ ワカリマシタ。」

イタチが話す片言の言葉に耳を傾ける。

「住民を城壁内に閉じ込めている？」

皆の集める部屋に凱漸もやって来た。

「ハイ。シュウヘンノマチニ クラス カゾクニハ ジュウミンノブジヲ イノチニカケテモ グンガ マモルト センゲンシテイル

ヨウデスガ ジョウヘキナイトノ レンラクガ トレナイコトニタ
イスルフマンガ チクセキシテイルモヨウ。」

「国王と…義姉上は無事なのか！」

「オウキユウノ ヨウスハ ワカラナイ ジョウヘキノマワリニハ
トクシユケツカイ ガ ヒカレテイテ ヤブレナイ テキガ ナ
ニカラジュンビ シテイル ト オレハ カンガエテイマス。」

「雷紋、どうすれば結界の中を探れるんや？月風の力でもあかんのか？」

月風は結界や、治癒力に対しての力を得意とする。

「ソレハ 月風ノ フタンガ オオキイ。デモ テガナイワケデハ
ナイカラ ナントカシテミル、ソコデ テイアンガアル。」

雷紋の提案。それは、慈音、紅蓮には嫌な予感を齎した。

「慈音ニハ シズカニ カエツテキテモライタイ。月風ヲ マモツ
テホシイ。」

意外な言葉。

「はっ？雷紋は？」

「ケツカイノ ナカラ ミルタメノ ジュンビニ ハイル。」

「ふーん…。ほな、俺と可憐は、結界強化作戦に移ればいいんやな。」

「じゃあ、何かよく分かんないけど…俺は静香に戻るよ。凱…父さんは、ココに残ってください。」

慈音の言葉に凱漸が思わず立ち上がる。

「何故だ！」

「状況の把握が出来ていないんです。芳崖將軍が敵か、味方か…国王がどうなっているのかも分からない。そんなトコロに…父さんが行って、もし命に何かあれば、この国に未来はありません。」

「しかし…。息子を守りたいと思っているんだよ、慈音。」

慈音はカツと頬を赤くしたあと、につこりと笑った。

「その思いがあれば、大丈夫。それに、母さんと一緒にいてください。」

「慈音…。」

「慈音、花街には帰れないのかしら…皆心配していると思うの…。」
それは、雷紋の両親も思っていたことだった。

突然、黒尽くめの女に攫われたのだ、自分達のいた村や街の様子が
気になるのは仕方ないことだった。

「私達が！私達が結界の強化に向かうついでに皆さんの無事を伝え
てきます！」

可憐が張り切った声を上げた。

彼女にはある思惑があった。

それは、一つ屋根の下、ともに枕を並べて寝た美麗、繻子蘭、美鶴
との会話。

彼女は美麗の紅蓮、月風に対する思いを知ったのだ。

（飛蝶街に行つて、美麗母さまが、必ずしも絶対悪じゃないことを
紅蓮に知らせるんだ！）

紅蓮は可憐の異様な張り切りように眉を顰めた。

次の日、慈音は静香へ。

紅蓮と可憐は、各地にちらばる祠や、社の結界強化に向けて旅立っ
た。

つづく

恋の始まりと龍玉の思い

水の化け物の攻撃を受けた龍綺と暁は、疲れきっていた。

暁は溺れかけた疲れ、龍綺は第5の宝玉である『黒龍の玉』の覚醒による疲労の蓄積があり、彼女を支えながら歩くので精一杯であった。

（黒龍は、お前の力そのもの…しかし、お前の力はまだ、黒龍を制御するには、幼いのだ。）

黄龍の言葉。

（何だよ、上手く発動したのが奇跡みたいな言い方だな…。）

龍綺は、暁を支えながら、近くにあるという村を目指す。

幸いなことに、この周辺は、先程の水の化け物が仕切っていたのだろつ、大した化け物は出てこなかった。

龍綺に凭れる様に、それでも懸命に足を一步一步出している暁は健気に笑って見せた。

（さよう…お前の暁に対する思いが黒龍を目覚めさせたのであろうな。）

あつさりとした返事に龍綺は苦笑した。

「もうすぐ、村に着くから…もうちょっと踏ん張れよ。」

暁に声をかける。

「あー、頑張る。」

あの水の化け物は、暁の力をかなり消耗させていた。

（早く、力の補充をさせなければ…。）

どの町にも、村にも小さな祠はある。

龍綺はそこに暁を連れて行きたかった。

本当なら自分の力を彼女に注ぐのだが、今回は自分の疲労大きいことから、力を与える事で、自分も歩けなくなるかも知れない恐れがあった。

ずぶ濡れの2人が辿り着いた村は、地図にも載っていない小さな村

だった。

（初めて聞く名前だな…。）

そう思いながら村の中へ足を薦めていく。

村人の姿は無い。

（人の気配はする…家の中かな…。）

東の方に祠の気配を感じて2人はその場に向かった。

清浄な空気。

祠の周囲に漂う空気を身に纏い暁は徐々に顔色をよくしていった。

「大丈夫か…。」

祠の前に龍綺も腰を降ろし一時の安らぎの空間に身を任せる。

「大丈夫。」

キラキラと輝く彼女の黒髪が金色ではない事が残念だと思った。

「りゅー、あー大丈夫。早く行こう。」

日は高く、まだ歩みを止めるには早すぎる。

2人は、結局人の姿を誰一人見ることなくその村を後にした。

「人、いなかったね。」

暁の言葉に少し後ろを振り向くと、村の入り口に数人の人影があった。

この村の人々は、あの水の化け物に苦しめられていたのかもしれない。

龍綺は、そう思った。

「金、青、緑、白と黒、やっと5つか…。」

自分の胸に現れた5つの勾玉のような紋様。

「あと、3つ？」

歩みを止めずに暁が尋ねた。

龍綺は、龍神の玉を手に入れる度自分の力が増している感じがしていた。

自然に体が動く、剣の切れ味が違うなど心辺りがあった。

（まだ、本当の覚醒じゃなくても、もっと玉を集めれば、暁をあん

な危険な目にあわせなくてもすむんだ。」

国を守るという大義名分よりも、すぐ近くで自分を信じて着いてきた暁を守りたい。

それが龍綺の本心だった。

「りゅー？」

考え込んでいる自分に不安そうな視線を送ってくる暁に龍綺は笑顔で答えた。

「暁は、俺のコト好き？」

思わず聞いてしまった言葉。

そんなコトを今聞いて、自分の望む言葉を彼女が言ってくれなかったら、凹むなあと瞬時に思い、視線を逸らそうとしたが、その質問に、暁は、ぱあっと表情を明るくさせたため、龍綺も自然と頬が緩んだ。

「あー、りゅーのコト好き!!」

急にその表情が曇り、龍綺を不安にさせてしまった。

「でも…。」

「…でも？」

自然に鼓動が早くなった。

「あーいると、りゅー上手く動けない。蛇さんの力、上手く使えない…りゅーに迷惑かけた。」

しゅんとなる暁。龍綺の心もきゅっと小さく跳ねた。

「そ、そんなコト思ってたのか？」

コクリと頷く暁。瞳がウルウルしている。

「あー、強くなって、りゅー守りたい。」

龍綺はぎゅっと彼女の身体を抱き寄せた。

「俺も、今よりもっと強くなって、暁を守りたい。だから、一緒にいて？俺と一緒にいて？そしたら、俺、もっと強くなれると思うんだ。」

後ろから抱きしめられた暁は自分の胸の前で交差する龍綺の腕に両手を重ねた。

「あーも、りゅーと一緒にいたら、強くなれる？」

「暁が誰より、俺のコト好きになってくれたらね。」

暁はクルリと身体の向きをかえた。

目線を少し上げると龍綺の顔があった。

彼は優しく笑顔で自分を見つめている。

（好き？好きって何？一緒にいたいってコト？）

「んっ？どうした？」

いつになく暁の顔が赤くなったことに龍綺は不思議そうな顔をした。

暁は、視線を外してしまう。

（玄武！玄武！何、この気持ち、おかしいよ？）

自分の中に流れ込んできた龍綺の思いが、暁の心を揺さぶったのだ。水の化け物の中で、龍綺が自分を助けるために必死になって戦ってくれていたこと、いつも自分を導いてくれる手や、眼差しの優しさ。暁は今までも、優しい龍綺の思いを感じ取ったことはあったが、自分の心が揺れるほどのモノではなかった。

「えっ…暁？？どうしたんだ？顔が赤いぞ。まさか、あの戦いで風邪引いたんじゃない！」

暁は、龍綺の腕から逃れるようにその場を離れた。

「…暁？」

そつと心配そうに触れてくる手をパチツと叩く。

龍綺は、今までに無い彼女の反応にすっかり呆然としてしまった。

「りゅ、りゅー！先、先に急ごっ！！」

暁は龍綺を振り返ることなく、一步を踏み出した。

それからと言うもの、暁はまともに龍綺と視線を合わせることも無く、旅を続けていた。

今まで、刷り込みを受けた雛のように龍綺に引っ付いていた暁の態度の変化に戸惑っていた龍綺は、少なからずショックを受けていた。しかし、次々に襲ってくる化け物に、1つの考えを巡らせている訳にはいかなかった。

近くの祠で夜を過ごし、4回目の夜を越えた昼にようやく龍神信仰の地域へと2人は足を踏み入れた。

（なんとなく、力が漲ってきている気がする。）

（それは、そうであろう、我らを崇拝する人々の思いが強い地域では、その祈りが我らの力となる。それに、残りの龍が潜んでいるのも、この地域に違いないだろう。）

黄龍との会話の後、ちらつと見た暁は、空を見上げ、優しい霧雨に打たれていた。

木々の隙間から日の光が入り、キラキラと輝く雨が暁を一層美しく見せていた。

「気持ちイイの？」

ふいに掛けられた龍綺の言葉に、暁は静かに頷いた。

最近のあからさまな暁の態度を咎めることも出来ず、ただ、彼女が怯えないように声をかけた。

そんな何処かギクシャクとした2人にとって、こんなゆったりとした時間は久しぶりだった。

美しい横顔を見つめながら、龍綺は今までの自分、暁への思いについて考えていた。

この15年間、異性と付き合ったこともなければ、よもや一緒に旅をすることになるなんて思ってもみなかった。

けれど、彼女に出会って、無くした心の半分を取り戻したような感覚があった。

全身全霊で自分を信じてくれる彼女を守りたいと思ったし、慈音が白妙を思いうように、自分も暁を好きなんだと確信していた。

けれど、彼女は、きっと自分のコトを好きだとは言ってくれても、特別だとは思ってくれないだろう。

たまたまあの岩牢に最初に訪れたのが自分だっただけで…。

石になってしまった彼女を見た時に、心が軋んだ事実。

彼女に口付けをした思い。

全ては自分1人が思っていることなんだと最近の彼女の態度は自分

に知らしめてくる。

だから、どう声をかけていいのか、どう接すればいいのか分からなくなっただ。

（慈音なら、上手くやるのかな…。）

ため息が漏れる。

暁にとつて、人として接してくれたのが龍綺だけだった世界は、もう昔のことだ。

（俺にとつて暁は1人でも、彼女にとつては、俺じゃなくてもいいんだ…。）

暁が自分を避けるようになったのは、自分の気持ちを暁が本当の意味で理解したからではないだろうか。

月風や白妙、可憐と出逢つて女の子同士でいろんな話をして、『好き』と言う気持ちを理解したのかもしれない。

龍綺自身が彼女に向ける『好き』と自分が龍綺に向ける『好き』の違いを理解して、距離を置こうとしたのかもしれない、彼はそう思っていた。

自分を避けるようになった事実。

その視線の逸らし方、触れてこない手、時折見せる苦しそうな顔などは、彼女を自分が苦しめている証拠ではないかとも思った。

以前のように笑って欲しい。

ただ、そのことだけは今も、これからも変わらない。

彼の思いは、彼女がこれ以上孤独を感じたりしないよう、せめて傍にいたいことだと思った。

（考えが暗いぞ、龍綺。）

1人悶々と考えている彼を見かねて黄龍が言った。

（うるさいな…ほつといてくれよ…最近の彼女の態度見てたら分かるだろ？）

彼がいつになく暗い考えにとり憑かれている理由を黄龍は分かっていた。

それは、彼の心の本質を示す『黒龍の宝玉』が中途半端に目覚めてしまったから。

八色の龍神にはそれぞれ本質というモノがあり、黄龍の本質は『神』、青龍は『武』、白龍は、『光』。緑龍は、『自然』。黒龍の本質は『闇』、紫龍は、『高貴』。赤龍は『闘志』、そして、銀龍の本質は『…』となっている。黄龍は、そのことを改めて龍綺に告げた。（相変わらず、銀龍の本質は内緒なのか？）

苦笑する龍綺。

（銀龍は、私の対となる龍神。かの者のことは制約下にある。どれも皆、龍神の力を使いこなすために必要とされる本質。中途半端な想いでは、龍神の力はお前に悪影響しか与えない。人の子の本質が、『闇』だということを忘れてはいけない。）

龍綺は失笑交じりのため息を吐く。

（この思いが、黒龍を中途半端な状態で覚醒させたせいだつていうのか？バカバカしい…俺の感情は俺のものだ…変な慰め方はやめてくれ。）

黄龍との会話を龍綺は自分で断ち切った。

（中途半端だつて言うなら、どうすれば完全になるっていうんだよ…。）

足元の小石を蹴る。

「りゅー？」

暁の声にハッと我に返る。

「…大丈夫。暁…行こう。」

視線が合うとそつと逸らす暁に、これ以上の声が掛けられない龍綺は、小休止の場から一步を踏み出した。

龍綺に宿る龍神達は、彼の心の中でこの状況を話合っていた。

（どうするつもりだ？黄龍…主は、間違いを犯している。）

（軌道修正を…我は望む。）

（このままでは、光の力も薄くなります…。）

（主自身の精神力の向上を望まねば話にならない。）

（我が本質を歪ませたまま過ぐすと碌な目に合わないぞ…。）

（玄武の御子の心が、主であり、宿主の心を左右するのだ。御子が玄武の御子と向き合わねばそれも難しい…。このままでは、残りの宝玉とて、手にはいらん。）

龍神達の深いため息は、思いの迷宮に入り込んだ龍綺には届いていなかった。

つづく

神々の思惑

『腎臓修復率75%…肝臓修復率85%…』

大きな機械の真ん中で宙に浮かび眠る少女。

黒くて長い髪が宙を舞い、赤く光る瞳は閉じられて見る事はできなかった。

「また、ここに来ていたのかい？」

大きな機械に数多くのチューブで繋がれた少女を見つめる少女。

その少女に声をかけてきたのは、たおやかな黒髪と浅黒い肌、白い衣を纏った美しい男性だった。

「父上…。」

声により振り向いた少女は、宙に浮かぶ少女と同じ黒髪に赤い瞳をしていた。

「いつになったら、現世に帰れるのです…もう、私が死んでから2ヶ月は経っている。」

ずっと立ち上がった姿は美しく、少女と言うには、大人びた瞳をしていた。

「15年ぶりに、修羅界に帰ってきた娘を、そう簡単に帰すことは出来ないよ。」

天上界の外れにある修羅界。

そこは、戦う事に生きる意味を見出そうとしている鬼の世界。

その世界を統べる王の名は、「不動明王」とも、「金剛夜叉明王」とも言われる神である。

修羅界にある「金剛山」の頂で暮す明王は、鬼達を統べ、無用な殺戮を禁じ、戦いの中に鬼達の生きがいを与えさせないために指導している。

その明王の娘の名は、『阿修羅』。

鬼の中で一番力のある鬼神である。

「そんな！邪黒の復活が迫っているというのに、修羅界でいつまで

もいるわけには…。」

娘の声を父は遮った。

「分かっているのだろう？ 現世で受けたお前の傷には、人の身体を一瞬で壊す作用があったのだよ。神であるお前の魂を救うためには、人の身体からの分離が必要だった。1度死んだ人間の身体を復活させる事がどれほどの時間と神の力を必要とすると思うのかい？」

「そ、それは分かっている！ けれど…。」

「幾万年かの時の流れの中で、現世に危機が訪れる度、お前の魂の一部に人の身体を与え、送り出してきた。他の神様はいいさ、愛する獣達がいるのだから…。しかし、私には鬼達しかない。しかも、彼らは、この修羅界の神の力以外では、御することが出来ない。だから、ココから動けない私の代わりに、お前の魂の一部を現世に送り込むしかなかった。」

苦悩する父の顔。

「今回は、本当に心が痛んだよ…。お前が、あのような醜い人間の心で傷を負うなんてね…。君の人の身体は、傷の修復をした後、ただの命に還元するよ。そして、また次の戦いの時に現世に落としてあげよう…。」

「駄目だ！ 今、戦わずして、いつ邪黒を倒せるというのだ！ ！」

明王は静かに娘を見た。

「邪黒を完全に解放させるなんて、我らがさせると思っかい？」

「しかし！ たとえ、不完全であろうとも、現世における被害は絶大なものになる。人々の苦しみがさらに邪黒に力を与えてしまうではないか！ ！」

明王はさらに冷静な声を発した。

「お前が、現世に拘るのは、お前の一部である白妙という魂が白虎の御子に惹かれているからであらう？」

阿修羅の顔がカッと熱くなった。

「…。」

「やれやれ…。こんなにも阿修羅の心を捕えた御子が過去にいたか

ねえ…。」

明王は大きなため息を吐いた。

「阿修羅、とにかく落ち着きなさい。さきほど君も聞いただろう？人の身体を蘇らせるには、かなりの日数がかかるんだよ。君の魂の一部を抜いたあとの身体は特にね…。」

「しかし！」

「それに、今回、君がココに帰ってきたことは、現世にとって都合のよいことだった。」

「えっ？」

「敵はね、一部ではあるが、神の魂を使って、邪黒の復活を成し遂げようとしたんだよ…。六芒星と蟲毒を混ぜた呪術でね…。」

阿修羅の背筋が寒くなる。

「あと、2年。それまでは大丈夫だね…。」

「えっ？」

「敵は、君の死亡で計画を余儀なくされた。全てを立て直すため、君の為に用意された法術陣は、御子達によって破壊された。それは、敵の力を少しだけ後退させることに成功した証。邪黒の一部が失われた力を含めて、己の力を確固たるモノにするには、少なくとも…2年の月日が必要だね…。娘のために神である私が言える精一杯だよ。」

「2年の間に何をしようというのだ…。」

明王は少し苦笑した。

「これ以上は、干渉が過ぎて、叱られるからね…。」

「現世での邪黒の一部は、自分の力を強めるために、様々な化け物を取り込んでいると聞いている。化け物達は、邪黒からの誘いとも気付かず、現世に現れているというのに…御子達は、その化け物達とも戦わなくてはならないのですよ？御子達が気がかりなんです。」

「うーん…。君が心配するのは仕方ないけどね…彼らは彼らで自分の力を上昇させる術を見出せているよ。まあ、白妙の好きな白虎の御子は…暢気だから、無駄死にするかもねえ…。」

少し棘のある口調に彼女は気付かない。

と、そこに暢気そうな声が掛かった。

「やあ、明王神殿と、阿修羅殿。御機嫌うるわしゅう。」

振り返るとそこには、銀髪のこれまた美しい男。

その男を見るなり明王は、げんなりと言う顔をした。

「…迅風大帝どの…。修羅界に何か御用ですかね？」

「つれないね、明王殿は…。我が白虎の御子が夜叉の御子に迷惑をかけたからね、その御挨拶に来たのですよ。」

明王は、阿修羅の前についてと出て、彼女の身体を隠してしまった。
「おやおや、これはどういうことですかね？」

「失礼だが、あなたの女癖の悪さは、天上界に轟いておりますからね、そのせいで、白虎の御子が女難の相に見舞われているのではないですか？それに、うちの者が巻き込まれては、合点がいきませんからね、阿修羅には近付かないでください。」

「また、すごい仮説を…。ま、白虎の御子の弱さは、私も胸を痛めているところでね…。何、阿修羅殿の魂の一部である“白妙”が復活するまでには、少しくらい使える代物にしておきますよ。」

互いに火花が散るような雰囲気であった。

「酒天童子、いるかい？」

迅風大帝が去り、いつまでも自分の人間の体の回復を願う白妙をその場に残した明王は、自分の側近を呼び寄せた。

「御呼びでしょうか…。」

姿は無く、声だけが静かに明王に届いた。

「白妙の身体をもう1つ用意しておいてくれ。」

「はい。…では、明王様は…。」

「ああ…彼女は2度死ぬ。そういう運命だからね…。我が娘とはいえ、馬鹿な子だよ…。」

声だけの鬼はすと気配を消した。

「さて、迅風大帝は、どのような手で、あの御子を強くするつもりでしょうかね…実に興味深いことです。」

1人ほくそ笑む明王の姿がそこにあった。

迅風大帝は、風を司どる神で白虎の真の主である。

天上界一の色男としても有名で、いつか全能神からお咎めを受ける
とまで噂されている神であった。

神々は、今回の夜叉の御子への恨みによる行いの結果は、元をただ
せば迅風大帝の日頃の女癖の悪さだと思っていた。

それゆえ、迅風大帝としても、自分の分身として現世に送り出した
白虎の失態ともいえる夜叉の御子への攻撃は、彼の自尊心を傷付け
たのだ。

素直にすまないと謝れなかった大帝は、天上界の自分の宮殿に戻る
とある神獣を呼び出した。その者は、黒い身体の一匹の虎だった。

「御呼びですか？迅風大帝さま……」

「お前の不肖の弟のコトだよ。」

黒虎は押し黙る。彼と白虎は双子の兄弟だ。

「やはり、現世に君達を分離して彼だけを送ったのは、私の間違い
だったかな。」

言葉の無い黒虎。

「現世に赴き、白虎の御子の中に入りなさい。これ以上、私に恥を
かかさなくてくれ。」

「しかし、私が御子の中に入り白虎と1つの魂となるということとは
……。御子の心が闇に染まりやすくなるという事。聖なる者として、
現世にとどめておく事が出来なくやるかも……」

少し白虎より低めの声。

それに迅風大帝の冷やかな声が降りた。

「このさい、白虎の御子が、人の命を保てなくても、今はそれを言
っている暇はないのだよ。この戦いが終わるまで、かの御子の肉体
が持てばよい。死しても、代わりはいくらでもいるのだから。」

顔を背け、手で行けと命じる迅風大帝。

黒虎は現世へと向かった。

u u u

覚悟

「雷紋くん…大丈夫？」

イズナとの通信後、雷紋は部屋でぐったりとうな垂れた。毎回のコトであるが、イズナを使って皆と通信することは彼の力をかなり消耗する。

そんな姿を月凧は何回も見ていた。

「うん、けっこう疲れるもんだけどね…」

「ねえ…手があるって何？どうにか頑張ったら、あの結界の中を探れるの？危険じゃないの？」

矢継ぎ早の質問に雷紋は苦笑した。

「雷紋くん！？」

「ああ、ごめん。」

月凧の視線は真剣だ。

「…あの強力な結界は、邪黒の作り出したもの。俺達の手だけではたぶん、覗こうとした時点でなにか起こるんだ。」

「私の力でも駄目なのかな…」

雷紋は静かに頷く。

「まだね…でも、君の力は発展途上、これからもっと強くなる。今無理するとそれこそ、最悪な縮図しか思いつかない。」

月凧が明らかに落ち込んでしまったので、雷紋は彼女の頭を撫でた。「大丈夫。なんとかするから。中で行われていることを知らなければ、俺達に明日は無いからね…ちょっと出かけるけど。あ、君の元には、3匹を置いていくから。」

今度は、傍にいる大きな犬の頭を撫でる。

「それに、慈音も来てくれる。」

「ど、何処に行くの？」

雷紋は少し、天井を見た後、にこっと笑った。

「内緒…かな？龍綺は、玉を集める事で今よりもっと強くなる。君

も、可燃も今よりもっと強くなれる。紅蓮は、その辺のことに關しては貪欲だから心配してない。慈音も、白妙をなくしたショックから立ち直ってくれば、もっと強くなれる。でも、俺は…。」
雷紋の苦笑。

自分が戦闘タイプの神獸を宿していないことは分かっていた。

自分にあるのは、知恵。情報。

しかし、白妙のことを予見できなかった。

木蓮という女の感情があれほど激しいものとは思っていなかったのだ。

そして、結界があるから大丈夫だろうと思ひ込み、親達を攫われてしまった。

全ては、自分の浅はかさが生んだ結果だと思った。

白澤は、予知に優れた神獸だと言われている。

しかし、雷紋にはそれが足りない。

その力さえあれば、もう少し上手く御子達を誘導できたはずだと自分を責めていた。

（白澤…君の力の解法を俺は望むよ…。）

雷紋の挑戦。

それは、白澤の持つ神獸の力、封印された神の力を解くことだった。

（肉体的に滅びるかもしれないと、今まで避けてきたことじゃぞ？）

（先に進むためには、必要な事だ。）

（人ならざるものに墮ちるのだぞ…。）

ふと月風をみる。心配そうな顔。優しく犬達を撫でる手。

（君を宿した時から人であることは捨ててるよ。それに…月風を…皆を守るようになるなら、喜んで墮ちるよ…。）

雷紋は立ち上がった。

つられて月風も立ち上がる。

「雷紋くん、何処行くの？」

心配そうな瞳で見る月風に雷紋はにっこりと笑った。

そして、彼女の身体を引き寄せるときゅっと抱きしめた。

「ら、雷紋くん!!」

「帰ってきた、俺のコト嫌いにならないでね。」

ふっと自分を抱きしめていた身体が消えた。

月風は一步前に踏み出してしまった。

「えっ？」

確かにそこにいたはずの雷紋が消えた。

凭れていた支えがなくなり、月風は床に前のめりに座り込んでしまった。

「何？どういうこと？」

戸惑う月風に聰が言った。

「雷紋は、旅立ったんだ。」

戎が言った。

「俺達を置いていくなんて、水くさい…。」

導が続けた。

「それが、雷紋の選択なんだから、仕方ないよ。月風？泣かないで？」

床にへたり込んだ彼女の頬に流れる涙を導が舐め取った。

「…雷紋くんは、どこに、何をしに行ったの！」

傍に寄って来た聰の頭に手を置く。

「雷紋の中にある…白澤の本当の力を封じる鍵を取りに行ったんだ。」

月風は3匹の言葉にただ耳を傾けることしかできなかった。

「これまた、変わったところだね。っていつか何も無いね。」

見わたる限りの砂漠。

「ココに鍵があるって？」

「15年前、お主の中に入ると決まった時に来た以来だからのう…」

つと、これ以上は何も言えん。真に力を欲するならば、自力で探し出してみよ。」

雷紋は、ため息1つ、苦笑を1つして一步を踏み出した。歩みだした雷紋の足元が大きく揺れた。

「わっ、わっ！」

踏みしめていた砂がアリ地獄のように流れていく。

雷紋は身体を持っていかないよう足を踏ん張ったが、地響きと共にその場に膝を付いた。

（な、なんなんだよ！）

雷紋の目の前に砂の壁が迫った。

「煉瓦…？」

砂が壁から落ちて、その壁が煉瓦でできた代物だと分かった。自分の身長をはるかに越える高い壁。

左右、後方を壁に囲まれ、進める方向は前だけだった。

「？」

一步踏み出した先は、壁。左右に伸びた道。

（上から見ないと分からないけど、迷路かな…。…砂の迷路か…。）

雷紋は、左右に伸びた道を交互に見た。

「さて…。」

雷紋は左の道を選び歩き出した。

所謂『勘』と言うやつだ。

500mほど進んだ先に右に曲がる道が現れた。

雷紋は新しく現れた道をじっと見た後、その道は無視して真っ直ぐに進んだ。

また500mほど進むと先程まで無かった道が現れた。

しかし、雷紋はそれすらも無視して進んだ。

それから、規則的に現れた横道を彼は無視し続け、とうとう行き止まりとなった。

「んっ？」

足元の砂が沈み始めた。

雷紋のふくらはぎまで砂が多い尽くしていく。

「こんどは、下に御案内かな？」

パラパラと墮ちる砂が頬にかかり、雷紋は目を覚ました。
ゆっくりと上げる頭。

僅かに差し込む光の筋が辺りをぼんやりと浮かばせる。

チロチロと水の流れる音と、高いところから砂が落ちる音がした。

（神殿？）

豪勢な岩で作られた柱と壁、そして、雷紋の目の前には祭壇。

立ち上がった雷紋は、自分が何も身に付けてないことに気付いた。

“白澤の御子よ…”

その空間全体に聞こえる声。

“私は、雷神からの命で白澤の真なる力を守る者…”

声が壁に響く。

「では、その力をくれ。」

雷紋は言った。

“砂の迷宮をためらいもせず、真っ直ぐ進んだのは何故だ…”

声は聞いた。

「ヒマがないから…。敵の動きを知るために必要な力ですからね。
とりあえず、真っ直ぐ進んでみました。」

につこりと笑う雷紋。

“さすが白澤が宿るだけはある…”

一歩進む雷紋。

“人が白澤の真なる力を宿す事の罪を分かっているのか…”

雷紋は決意を込めた瞳で祭壇を見つめ頷いた。

“人とは違う時を刻み、愛する者の死を見つめるのだぞ…”

「それでも、あの子が生きていく世界を壊されるよりましでしょ。」

声は、低く笑った。

“自分のことより、愛する者を守るのか…御子よ。”

雷紋はニツと笑った。

「俺は、人…だからね。人はね、っていうか俺は、そのためになら

人を捨てられるんだ。」

ゴゴゴツと地響きがした。

雷紋の立っている先にある祭壇が2つに割れて、地下へと続く階段が現れた。

階段は透き通った水で満たされており、そこの方は青暗く見通せなかった。

“白澤の記憶を持つ人の子よ…進むがよい…”

その階段への一步は突き刺さるほどの冷たさを感じた。

（冷たいな…。しかも水の中…。こんな衣一枚纏っていない姿でこの水に浸かると心臓が止まるかもな…。）

ふと“声”の言葉を思い出す。

（白澤の記憶を持つか…。）

周りを見渡すと避けた祭壇の右に赤い炎。左に青い炎があった。

（砂の迷宮…地下神殿…右に赤…左に青…うーん…。）

雷紋の中にある白澤の知識の泉が静かに波打った。

彼は、歩き出す。

そして、右にある赤い炎の前に立つと徐にその中に手を突っ込んだ。

（やっぱり…熱くない。）

雷紋はその炎の中で指先に触れた小さな四角い石を取った。

そして、もう片方の青い炎でも同じことを行い、炎の中にあつた三角の石を手に取った。

そして、再び地下へと続く階段へ…。

彼は、四角い石と三角の石を飲み込んだ。

（ぐっ…ちよつと引つかかった…。）

少し噎せると水の中に足を付けた。

（やっぱりね…。）

先程感じた刺すような冷たさはなかった。雷紋は、水の中に身体を埋めていった。

そして、何の躊躇もなく全身を水に浸けた。

（あの物語と同じだな…。）

それは、白澤の記憶、知識の中にあつた物語の中に登場したある不思議な世界。

その物語の主人公は、何よりも知識を知恵を求める事に貪欲な人間だった。

新たな知識を頭に入れるためなら、どんな困難も乗り越えるバイタリティと、賢さを持っていた。

そして、物語の最後のほうで出てくるのが、一面の砂漠。

彼は、全てをやることのできる『神鬼眼』を手に入れようとその地に辿り着くのであった。

雷紋が経験したような、煉瓦造りの砂の迷宮を抜け、何度も始めの地点に戻らされることに怒りを覚え、最後には、左の道を通り直ぐ選んで、行き着いた先で、次の舞台へと案内された。

あの場を砂の迷宮だと感じたとき、雷紋の脳裏に小さい頃に白澤が聞かせてくれたというか、彼にとって特別なその物語を思い出したのだ。

物語の中で、主人公は、地下神殿で、雷紋と同じように人生の選択を余儀なくされる。

そして、更なる舞台へ行くためのヒントとして、『赤い炎と青い炎』という言葉を知る。

主人公は、炎の中に煌く石の存在を確認し、その石を手に入れる。

そして、主人公は、飴のように美味しそうな石に誘われてつい2つの石を飲み込んでしまうのだが、その石は、主人公の身体を氷の中でも身体の冷えない、そして、水の中でも息の出来る身体に変えてしまった。

小さい頃に頭に流れ込んできた話を白澤が忘れられない物語であることを語ってくれたことを彼は思い出した。

最後、主人公は、特殊な身体を手に入れる代わりに、人ではない生き物に変化してしまい、人々の世から去って行くのだった。

（白澤の物語なんだな…。）

沈黙が続ける内なる獣に返事を待たずに囁いた。視界が段々と暗く

なってきた。

しかし、雷紋には、その暗い道がよく見えていた。

（これも石のせいかな…。）

雷紋は時々水の中を泳ぎながら、先へ先へと進んでいった。

キラキラと輝く光を水面に見つけた雷紋は、身体を上昇させていった。

岩に捕まり、水から身体を出すと、そこには、黄金に輝く財宝が山積みになれていた。

そして、宝の山の上に蛸以上に多い脚を持つ黄金の飾りが宙に浮いていた。

しかし、雷紋が捜すものはただ1つ。

（あれか…。）

黄金の飾りの中心に輝く光。丸いその光は赤い眼球であった。

“白澤の御子よ…本当に後悔しないのだな…”

再び声が降りてきた。

「後悔？そんなのするに決まってるでしょ、俺には好きな人や仲間がいるんだから。」

声は押し黙った。

「でもさ、俺…本当にこの戦いを終わらせたいんだ。」

頭に浮かぶのは優しい歌声で自分を精一杯癒そうとしてくれた月風の顔。

「戦場に彼女を置きたくないんだ…長引くなんて耐えられない。」

雷紋は黄金の山を登り、その飾りの前に対峙した。

「神鬼眼…。」

その眼球は雷紋の声に反応するようにブルブルと震えた。

すると黄金の飾りがその金箔を剥がし、それこそ蛸の脚のように動き始めた。

「なっ！」

雷紋の身体にすい付く触手。彼の身体は、からめとられるようにその飾りの中心に引き寄せられる。

目の前に赤い眼球。

「ぐっ。」

ギシギシと雷紋の身体を締め付けてくる首に巻きついた触手の苦しさに声が漏れる。

「来い…。」

眼球は、によきつと前に突出してきた。

そして、その中心から飛び出すと、クルクルと雷紋の身体の回りを飛び始め、彼に絡み付く触手を切り落とした。

自由になった雷紋は、宝の山を滑るように落ちて行った。

「痛たたたっ。」

裸の身体が無数の傷で真っ赤になった。

眼球はすぽっと雷紋の掌の中に納まった。

雷紋は、マジマジとその手の中の眼球を見た。

（案外、可愛いかも。）

眼球は、雷紋の掌に擦り寄るように震えている。そして、掌から飛び出ると眼球は彼の唇を押してきた。

「飲み込むのか？」

頷く眼球。先程の石とは比べ物にならないほど大きい。

少し戸惑っていると眼球が楕円の形になった。

雷紋は覚悟をして口を開けた。

「うっぐっ！」

苦悶の表情を浮かべた雷紋は涙を流しながら、それを飲み込んだ。

「あっ！」

額が熱く、痛みを帯びてきたことに驚き額を抑える。

「くっくっ…。」

雷紋は膝をついた。

“神鬼眼を使いこなすには、まだ時が必要だ。まずは、その身体の変化に耐えるのだ…”。

雷紋の苦しみは続いた。

脳裏を過ぎるのは月風の柔らかな笑顔だった。

う
う
う
う

紅蓮のスランプ

慈音が旅立ってから、紅蓮と可憐も玄武の社を後にした。

相変わらず、化け物は襲ってくるが、村や町の近くでは、軍人の巡回も行われ、人々は口々に、

「芳崖様が、私達のために軍を配置してくれた。」
と言っていた。

やはり、イメージが湧かなかった。

実の妹を化け物に襲わせ、殺した將軍。

それが彼らの知っている事実だった。

「次は、花街に立ち寄って、繻子蘭母さまのお母様にちゃんと報告しに行くんだよね。」

「そやな……」

少しそっけない言葉だった。

紅蓮は、悩んでいた。

流刑島での戦いでも、感じた事。

それは、もつと強くなりたいということだった。

自分には、飛ぶコトだけが朱雀から与えられた力だった。

慈音には、白虎戟という武器があった。

龍綺には青龍剣という武器があった。

その武器はいつも一刀両断で化け物を切り裂く力を持っていた。

しかし、自分の朱雀棍は、相手に与える衝撃は今まで使っていた棍とあまり変わらなかった。

「紅蓮……」

突然の叫び声。紅蓮は振り向いた。

「しまっ……」

防御の体勢が一步遅れた。

紅蓮は化け物の放った攻撃の風圧に吹き飛ばされた。

「うわあっ！」

化け物は、合体獣であつた。

以前、翼のあるキマイラと戦つたことはあつたが、それ以上の大きな化け物だつた。

「紅蓮!!」

可憐が麒麟剣を構えた。

「麒麟! 私に力を貸して!!」

緑色にオーラが包む可憐の身体。

慈音も、龍綺も戦う時は、神獣の氣を纏い戦う。

雷紋も、月凧も化け物と対峙するとその身体は神氣に包まれる。

紅蓮は、激しく打ちつけた身体の痛みに耐えながら起き上がった。

(可憐...。)

彼女が、戦いを繰り返していく内に段々と強くなっていることは紅蓮も感じていた。

(身に纏うものが違いすぎる。)

光り輝く可憐の身体を見て、また、仲間の身体を見て思い知る。

自分はこれ以上強くはならない。

いや、なれないのだろうと。

(悩んでいるヒマあるか? 可憐1人じゃキツイぜ?)

内なる獣の聲に我に返る。

紅蓮は立ち上がり、棍を握り締める。

「可憐!!」

「何、やってんのよ! しつかりしてよ!! 男でしょ!!」

彼女の白い肌に傷がいくつも出来ていた。

キマイラは、辺りの岩を崩し、それを針のように変化させて飛ばす能力を持っていた。

「援護して!! 敵の中心に突入する!!」

可憐の聲に押されるように紅蓮は、前に出た。

「ちょっと、一体どうしたのよ? 何か、心ココにあらずって感じだつたよ?」

戦いが終わり、2人は道祖神の前で休憩を取っていた。

近くに町があるのだろっ、道祖神から続く道には結界が張られていた。

可憐の傷は、結界の中に入ったが、祠や、社ではないため回復していない。

「ご、ごめんな…なんや、女の子の顔に傷付くつてもた…」

そっと、可憐の頬に触れる。

じいっと見つめてくる紅蓮に可憐はドキドキしてしまっていた。

「な、何よ！」

ぱしっと手を弾かれた。

「ご、ごめん…なんや…俺…足手まといやったな…」

「な、何言つてんのよ！！弱気は損気！！自分に負けちゃったらだめだってば！」

腰に手を当てて座っている紅蓮を見下ろす可憐。

そして、紅蓮は彼女をジッと見た。

「そっやな…。さ、行こか…」

ため息を吐きながら彼は力なく立ち上がった。

（なんだか、調子が狂う…。）

2人きりの時もいつも周りを叱咤激励して、引っ張っていく紅蓮の様子がおかしい。

（うーん…そろそろだからかな…。）

可憐の内なる獣がボソツと言った。

（そろそろって？）

（えっ？…ご、ごめん…内緒…。それは、彼と朱雀が乗り越えなきゃならないことだから。）

麒麟は答えてくれなかった。

それからの道中も紅蓮の戦いは精彩を欠いていた。

可憐は、ため息を吐く紅蓮を見てられなかった。

「紅蓮…」

声をかけてくる可憐に複雑な笑顔を残し、彼は彼女の頭をぽんぽんと軽く撫でる。

「ごめんな…。」

「紅蓮…ねえ！何を悩んでるの？」

紅蓮の笑顔。でもそれは本来明るく笑う彼には相応しくないものだった。

「そ、そんな風に笑わないでよ…。」

「えっ？変やった？」

可憐は立ち上がった。

「知らない！！」

紅蓮は大きなため息を吐いた。

（理由は分かっているだよ、紅蓮。）

紅蓮は顎を手で支える。

（わかつとる。でも、どないすればええねん…。）

流刑島から玄武の社に戻ってから特に朱雀との意気が合わなくなつたように感じていた。

（お前と俺は、他の御子と違って、生まれた時からずっと一緒じゃない。可憐は覚醒は遅かったが、ずっと赤子の時から麒麟と一緒にだった。俺とお前との間にある時間って言うヤツがお前の成長を遅らせている。それと…。）

（まだ、あんのかいな…。）

失笑する紅蓮。

妹の為に手に入れた力。

今は、守るべき相手が増えた。

それは、自分と同じような宿命を背負った仲間達のコトだ。

今まで、村の人はいたとはいえ、2人きりだった。

母親が出て行つてからの家は散々だったと言っている。

壮絶ともいえる父の死。

村の火事。

月風の拉致。

全ての原因が母親にあるように思えて仕方なかった。
なのに母親の美麗が黒尽くめの女に攫われたと感じた時、心が揺れた。

何故、今、あの女のコトを思い出させるのだと。

力を得て、月風を取り返し、仲間を得た。

この国を救うという大儀を得た。

生きている意味を見つけたと思ったのに、自分をモノのように扱った母親のコトを今更思い出しくなかつた。

流刑島で再会した母親は、他の親達と違って派手な衣装を纏っていた。

賭博場の店主に貢がれたものなんだろうと思った。

もしかしたら、月風を店主に見世物として売りつけた時に得た金で買ったものかもしれないと思った時、虫唾が走った。

何故、自分の母親がコイツなんだろうと思った。

「きゃあああっ！」

紅蓮の耳に可憐の悲鳴が届いた。

「可憐！」

紅蓮は立ち上がった。

身体が、足がかなり重たかった。

紅蓮が見たのは、信じられない光景だった。

先程倒したはずのキマイラが腕を太い針に変えて槍のように可憐の脇腹を刺していたのだ。

「ぐうつ！」

可憐から苦痛の声が漏れる。

キマイラは、彼女の身体をその腕で持ち上げた。

「可憐！！」

彼女の口から血が吹き出る。

紅蓮の攻撃は3回目でやっとその腕を切り離す事ができた。

落ちて来る彼女の身体を受け止め、キマイラを見ると、その身体は

しゅうしゅうと音を立てて崩れていった。

「可憐！」

ガポツとまた可憐が血を吐いた。

「ぐ、紅蓮…。」

可憐の手が以前自分がしたように彼の頬に伸びてきた。

紅蓮はその手を掴む。

「や、社に飛ぶから！！しっかりせえ！」

「美麗母さまの…思いを信じて…。」

紅蓮は、一番近くの社である『白虎の社』まで、空間移動した。

つづく

美麗の眞実

社に付くなり、事態を分かっていたのか、白虎の社頭がやって来た。

「こちらへ…。麒麟の御子に力を白虎さまの聖なる力を注ぎます。」

「頼む…。」

「あなたは、こちらへ…。」

「えっ？」

「そのような血にまみれた姿では子供達が怖がってしまいます。」

紅蓮は初めて自分が可憐の血で手も、服も顔も染まっている事を知った。

促されるまま湯殿に入った。

（可憐…。俺がすっかりしてへんから…。）

ぽかっと頭を殴られた。

（麒麟は、アア見えて図太いからな、死にやあせえへん。）

（…。）

（可憐が言うとしたこと、覚えとるか？）

それは、母親・美麗のコトだった。

（あの女の思いをどうやったら信じられるんだよ…。）

紅蓮は言葉を濁した。

（飛蝶街に行ってみーへんか？）

（必要ない。可憐が復活したら、一緒に行つて結界を強めるだけでいい。）

飛蝶街は紅蓮にとってよい思い出がなかった。

（お前は、時々眞実に目を背ける事がある。特に母親のコトになるとそやな。村人が何言おうが、父親は母親の味方やなかったか？）

（えっ？）

ふと父親を思い出す。

母親のことを聞いたのは村人からで、父からは何も聞いていなかった。

紅蓮が母の悪口を言う度に窘めるような人だった。

（実直なお前の父親が、金の亡者のような女に惚れると思うんか？
お前達を生むと思うか？）

（ヤルことやつてれば、イヤでもできる。）

（本当にそう思うとんのか？紅蓮、お前は知らないへんわけやない
やろ？人の嫉妬というもんが時に暴走するいうこと……。）

彼の脳裏に浮かんだのは白妙に刃を向けた木蓮太夫の姿だった。

（お前の父親は、村一番の細工師で、職人の中では一番稼いだつた。
それこそ、王宮から細工を頼まれる腕前や……で、お前の母親は、村
一番の美人で、男達の憧れの的で、女達からは嫉妬の対象やった。）
紅蓮は、母のコトを悪く言う村人の顔を思い出した。

その顔は醜く、恐怖さえ覚えたことを思い出した。

（自分の目で、耳で確かめてみい。お前が人を信じられへんのやつ
たら、俺の力を御する事なんて百年かかっても無理や。）

（俺が信じられへんのは、あの女だけや！）

（……。）

苦々しい思いで切り出した言葉に、朱雀はため息を吐いた。

（このままじゃ、お前は一生強くはなれへんやろな……。）

（う、うるさい。）

（ふーん、じゃ、お前は1人で死ね。俺は離れる。）

（えっ？）

（言つたよな？俺は迦陵が選んだ相手やないと宿れへんって。けど
な、離れんのは簡単。俺の意志でできるんや。）

紅蓮にとって初めてと云うていい仲間との絆が切れる。

紅蓮はグツと拳を握り締めた。

（分かつた……で、どないすれば、ええねん……！）

逆ギレ状態である。

（てめえで搜せ！アホがき！）

朱雀はポカッと紅蓮の頭を叩いて、それ以降言葉を交わしてこなかつた。

汚れを落とし、可憐のもとを尋ねた。

「…紅蓮？」

彼の気配に目が覚める。

「あつ、起こしてしもうた？ごめん。」

立ち去ろうとする紅蓮を呼び止める。

「…可憐…ホンマ…ごめんな？俺がぼさつとしたりしたから…」

「うっん、いいよ、そんなん。調子が悪い時だってあるし！って、痛たたたっ。」

化け物は可憐の治癒能力を半減させる力があつたらしく、社での傷の癒え方も少し遅かった。

「大丈夫か？」

「うん。…それより、何？謝りに来ただけ？」

紅蓮は言い難そうに声を出した。

「あ、あの女のコト信じる気になれへんけど…可憐が言う事は信じることにした。」

可憐は噴出す。ちよつと傷に響いた。

「何？それ、素直じゃないな。いいじゃん、美麗母さまのこと、自分の目で調べて来なよ。絶対、紅蓮はちゃんと見るべきだと思う。」

「可憐…。」

「傷が治ったら、私も行くからね！」

可憐の変わらぬ笑顔。

紅蓮は部屋を後にした。

可憐は去っていく紅蓮の背中を見送って、何故か泣いた。

（ははっ、私も母さまに逢いたくなつたよ、麒麟…。）

（可憐…きつと、紅蓮も気付くよ。自分が愛されていることを…。）

可憐は頷いた。

紅蓮は、まず、朱雀の社に飛び、それから、集光の街を抜けた。

可憐の家は更地になり、人々が花を添えていた。

この街を去る時に張った結界はまだ強く残っていたことに安堵した。

生まれた火の村。

去年の今頃この村を後にしたことを思い出した。

この一年で紅蓮は驚くほど背が伸びた。

「こんなに屋根つて低かったっけ？」

屋根の高さで自分の成長を知った。

「紅蓮？紅蓮か…。」

しわがれた声がした。

振り向くとそこには、自分達家族に優しくしてくれた老人がいた。

「大きくなって…。」

紅蓮は老人の家に上がった。

紅蓮と月風の家は、月風が攫われた時に火をつけられて消失していた。

それ以来、寝るためと食うために借りていたのは、老人の家の離れであった。

たった一年なのに、老人は小さくなっていた。

「久しぶりじゃの、元気にしとったか？」

懐かしいお茶の香がした。

「おやつさんも…。でも、随分人が減ったんとちゃうか？」

長老は苦笑した。

「皆、飛蝶街に越していつてもうたんじゃ。残って居るのは、年寄りだけじゃよ。」

「出稼ぎいうやつか…。」

「美麗を…。」

ぎくつとなる紅蓮。

「飛蝶街の博打場の店主がな、搜しておるんじゃよ…。そ、そのお前の母親を…。」

老人の言葉がやけに重い。

「街がイヤになつて、出て行つたんとちゃう？」

「あの女があればどの生活を捨てれるとは思えん！あ、あの女は、金に目の眩んだ…。」

老人の家の中を見渡すと以前はなかった写真があつた。

若い娘の写真だつた。

「おやつさん、この人誰や？俺がココにお世話になつと一時、なかつたよな。」

「娘じゃよ…。」

「優しそうな人やな…こんな人が俺のおかんやつたらよかつたのに…。」

何気なく出た本心で老人に言つた。

「そつや、あの女さえおらんかつたら、麻衣は…。自殺などせなんだ！」

「自殺？」

「そつや、あの女が清廉を寝取つたりしなければ！あの子は、あそこまで傷付く事はなかつたんじゃ！」

老人は怒りと憎しみに任せて語りに語つた。

一人娘の麻衣は、紅蓮の父親・清廉がとても好きで、将来的には、彼の妻になるコトを望んでいた。

しかし、美麗が、清廉の将来を計つて、2人が本当の気持ちに気付く前に、清廉を寝取つたというのだ。

傷付いた麻衣は、それでも清廉がいつか目が覚めると思つて耐えていたが、2人の間に子供が出来てしまい、絶望の淵に落とされ自殺したのだという。

「もう、少し待つておれば…あの女を上手く、飛蝶街に軟禁できたというのに…。」

「えっ？」

上手く頭に入らない言葉が聞こえたと彼は老人に聞きなおした。

「な、何でもないわ…。」

老人は慌てたフリで部屋から出て行つた。

1人部屋に残された紅蓮は、写真を見つめた。

(…どうということだ?)

紅蓮は立ち上がった。

その足で、飛蝶街に向かった。

「捜せ！」

「店長、もう一ヶ月以上捜してるんですよ？」

「大事な金蔓や、月風がおらんようになったのなら火の村からだけでも金もらわんと…。」

店の中で頭を抱える店主。

「それって、どうということや…。」

目の前に紅蓮が立っていた。

店主は最初、彼が誰だったのか分からなかったが、紅蓮だと分かる
と急に口を噤んだ。

「腕にモノ言わせてもええんやで…。」

紅蓮は思い切りすごんで見せた。

そこで、得た真実は紅蓮を戸惑わせた。

まず、美麗は、本当に清廉と愛し合っていたこと。

少しでも暮らしが裕福になるようにと夫の仕事を手伝っていたこと。
子供が生まれるまでは、派手な生活への憧れもあったが、実直な彼
と共に生きようと考えていたため、飛蝶街へは行くことはなかった。
娘を殺されたという恨みを美麗に抱いた老人は、常日頃から村長の
娘とは言え、美麗が気に食わなかった。

だから、夫の仕事である簪を届けるついでに彼女を派手な世界へ誘
うよう、二度と火の村に戻ってこないよう監禁してほしいと頼んだ。
店主が美麗のコトを一目で気に入ると老人は分かっていた。
好色な男だ。

一緒に飛蝶街へ向かった者から店主が彼女を特別な目で見ていたこ
とを聞いた老人は、彼に毎月金を支払う事で話をつけた。
店主は、老人の寄越す僅かな金などには興味がなかった。

ただ、美麗を愛でていたかった。

田舎暮らしが長かった美麗は都会の暮らしの楽しさに目が眩んだ。ココで暮せば、子供たちにも贅沢をさせることが出来る、夫にも仕事の息抜きが出来ると思った。

そんな美麗に店主は、老人から渡された金以上の借金を少し遊んだだけで背負ってしまったと嘘を吐いて、傍に置いた。

借金を返さなければ、娘を売るとか、借金を夫に全額支払わせるとか言つて、脅し、彼女を監禁した。

月風の歌が聞きたいから帰せといつてきた美麗を帰さないように村人の協力で月風を攫った。

老人は、自分が村長になれなかった悔しさが根底にあったこと、娘以外にも村の憧れを集めていた清廉を奪った美麗への嫉妬、美麗に憧れ、口説いていた男達の清廉への嫉妬を煽り、幼い兄妹に美麗の悪口を吹き込んだ。

仕事に忙しい 清廉は、親身に子供達の世話をしてくれる老人を信じていた。

「じゃあ…。」

「そうさ、美麗はいつだつて俺から離れようとしやがった。だから、お前には帰るところはない言うてきかせた。村の連中がお前のことをどう子供達に言っているのか全部言つてやった…、なあ、なんであいつはいなくなつてもたんや？好きなもん与えて、聞きたい言うた月風の歌やつて毎日聞かせてやったのに…。傍で居つてくれたらそれだけでよかったんや…。」

店主は崩れ落ちた。

紅蓮は店を後にした。

（今まで、今まで俺が信じとつたんはなんやつたんや…。）
あれほど信じていた老人の言葉は、娘を自殺に追いやった美麗への八つ当たりであつた。

彼が聞かせた母親のこと、月風を巡る村の人達の行動。

「美麗母さまのコト分かった？」

振り向くとそこには可憐が立っていた。

「可憐…大丈夫なんか?!」

「うん、ホントはとづくにね。」

紅蓮が呆れたという顔をする。

「だってね、私がいたんじや、紅蓮つてば素直に聞かないでしょ？
1人で行って、感じて欲しかったの美麗母さまの心を。」

紅蓮は真っ赤な顔をして複雑な顔をした。

「確かに、お遣いの後に、店主の口車に乗って、ちよっと遊んでしまったことをかなり悔やんでらっしゃったわ。素直じゃないから、紅蓮や、月風見ると『どうせ嫌われているんだから!』って…。憎まれ口ばかりたたいてたって。なんとなく…親子つて似てるよ。」
可憐は俯いてしまった紅蓮の横に腰を掛ける。

小刻みに震えている紅蓮。

身体が幾ら大きくなっているても、母のいなかった期間の長さ、母を恨んできた自分を思うと熱く込み上げてくるものがあつたのだろう。
「大丈夫…生きてるんだもん!仲直りできるよ!」

胸の中が熱くなっていた。

可憐の両親はもういない。

その現実を受け止めてながら、自分のことに心を砕いてくれた、笑ってくれた彼女。

紅蓮は大切にしなければと、二度と傷つけはしないと誓った。

(やれやれ、やっと第一歩だぜ…。)

朱雀が愚痴をこぼしたことに紅蓮は気付いていなかった。

つづく

旅の途中と男の事情（前書き）

少々Hです。

旅の途中と男の事情

「紅蓮、大丈夫かなあ…。」

（気付いていたのか？）

玄武の社をでて、月風の待つ静香に向かうところなのだが、慈音は、流刑島以降、何かに戸惑っていた紅蓮の様子が気になっていた。

「そりゃね…。」

（朱雀の御子には、麒麟の御子がいる…それより気をつけろ、このところ異界から強力な化け物が出て来ている。）

慈音の肌にも現れる化け物のランクが上がってきていることを感じさせる空気感があった。

（来るぞ！）

木々の間の空間が避けた。先程すれ違った、慈音のように山道を旅していた旅人が腰を抜かして、悲鳴を上げた。

（白虎！！）

慈音の身体が仄かな銀色のオーラに包まれ、手には、戟が握られた。「早く逃げる！！」

旅人を促すが、怯えて動けなくなっている彼を見て慈音は舌打ちをした。

「男だろ！！しっかりしろ！！」

慈音の厳しい言葉に旅人は最後の力を振り絞り、立ち上がった。

敵は、一つ目の狒々だった。

激しい雄たけびを上げて、長い手を振り下ろす。

木々は倒れ、大地が振動する。

足場を失った慈音は何とか立ち上がり戟を振り下ろすが、一度だけでは、化け物を倒すことができなかった。

（なっ！）

狒々は倒した木を慈音目掛けて投げてきた。

それを交わした慈音の隙を狙って攻撃をしてくる敵に避けることも

出来ず、慈音はその鋭い爪の攻撃を腕に受けてしまった。
大地に倒れこんだ慈音。

脳裏に「死」という文字が浮かんた。

（慈音、立て！）

白虎の声が遠くに聞こえていた。

その時、天上から降ってきた眩しいばかりの銀色の光が狒々の身体を突き刺した。

狒々の身体は、銀色の炎で焼かれた。

燻る火の中に大きな影があった。

薄れ行く意識の中、慈音はその影を見た。

（白虎？）

慈音は、夢の中で2匹の虎を見た。

一匹はいつも自分の中で声を掛けてくれている白と銀の被毛をもつ虎。

もう一匹は黒と銀の被毛を持つ虎だった。

「慈音、目が覚めたのか？」

白虎が声をかけて来た。

先程怪我をした腕の傷はない。

「慈音に拒否権はない。」

白虎の後ろで黒い虎が言った。

「あれは？」

そう尋ねる慈音の前に黒虎は歩み寄ってきた。

白虎よりも鋭い瞳。

その色は白虎と同じであった。

「あっ、もしかして、サツキの狒々から助けてもらったのですか？」

「夜叉の御子を傷付けた…。」

ぼそつと呟かれた言葉に慈音は顔をさつと青くした。

「お前さえ、もっとしっかりしていれば、夜叉の御子は傷付かずにすんだ。」

ぐさつと刺さる言葉の棘。

それは慈音自身が自覚していたことだった。

「今のお前では、夜叉の御子が蘇ってきた時に、また同じ鉄を踏む。」

慈音は顔を上げる。

「白妙が戻ってくるの！何時！！」

「あと、2年後…。」

「2年…？」

「そう、敵が静かにしているうちに、お前を鍛えねばならない。そのために私が来た。」

鋭い瞳。

「兄者…。」

慈音と黒虎の間に白虎が割って入った。

「兄者！慈音には、無理だ！我々を宿すなんて…。」

「迅風大帝の命だ…我々はそれに従うしかない。」

「しかし、それでは慈音が…。」

「それは我々には関係ない。大帝が恥をかかねばよいのだ。現世が一部でも邪黒の手に落ちるのは、天上界にとって、不都合だが、神々にとっては重要なことではない。」

慈音は、声を出した。

その声は少し小さかったため、白虎は聞き返した。

「2人を宿したら、強くなれるのか…？」

真っ直ぐに見つめる自分達と同じ緑色の瞳。

「今よりは、格段に。」

静かに答える黒虎。

「ただし、俺を宿すということは、暗黒の勢力からの誘惑が来るということ。」

白虎は、『光』、黒虎は『暗黒』の力を宿す。

迅風大帝は、この世界を全能神以外で唯一自由に駆け巡ることの出来る神である。

その迅風大帝が闇の世界に行く時に同行するのが黒虎である。

彼は常に迅風大帝を暗黒側に引き込もうとする勢力から守るため彼の傍にいた。

しかし、暗黒側は、迅風大帝を堕とす前に、彼を暗黒側に引き込もうとしてくるのだ。

天上界にいる限り、迅風大帝の傍にいる限り、暗黒に彼が引き寄せられることはないが、御子の身体、陰の性質である人の身体に入るということは暗黒側の勢力がここぞとばかりに彼を誘うことになるのだ。

「大丈夫…白妙を守るためなら、そんなコト気にしない。俺は、暗黒には堕ちない。」

力強い瞳と声。

「では、我らの力をお前に捧げよう。しかし、お前が暗黒に堕ちた瞬間、我等は天上界に戻る…それでよいな…。」

「兄者！」

慈音は頷いた。

2つの神獣を宿した慈音の体調は、最悪だった。

夜は、祠に触れていないと、暗黒勢力からの魔の手が彼の魂を捕えようとし、昼間は化け物からの攻撃。

白虎と黒虎の意見が割れて、頭が割れるほど痛くなった時もあった。静香の街がやけに遠い。

「月風…待つてるだらうな…。」

（余所見をするな！）

「は、はい！」

戦いが常に修行の場となった。

黒虎の指導はとても厳しく、慈音の腕を上げるためなら、時間を惜しまなかった。

「だからって、静香の街に来るまでに2ヶ月以上かかって未だに辿

り着いてないんだけど。」

（愚痴をこぼすな…お前はまだ弱い。）

「でもさ、このままだと雷紋に殴られそう…。」

（迦陵頻迦の御子はそれほど、弱くはない。それに、彼女には冥界の番犬がついている。お前は、自分のことも満足にできていないのに、人の心配をするな。）

淡々と語る黒虎。

（そんなことはないぞ！慈音はよくやってる！）

慈音は噴出してしまった。

（何を笑う？）

「飴と鞭だね、黒と白は。」

何時からか、慈音は、白虎を『白』、黒虎を『黒』と呼ぶようになっていた。

黒虎は最初にそう呼ばれた時はさすがに反論したが、暫く一緒の時を過ごしているうちに言うのも諦めていた。

（慈音は、そういうヤツだ。…兄者、きっと慈音はアイツのようにはならない。）

以前、何代か前の白虎の御子の中にも今回のように、邪黒本体の一部が現れ、白虎だけでは御子の力不足が生じた時があった。

黒虎はその御子の中に入ったが、時が経つほどに彼は暗黒に引っ張っていかれた。

何とか邪黒の封じ込めたが、彼は暗黒に引きずられ、魂を喰われた。その時に、黒虎は二度と人の中には入りたくないと迅風大帝に言ったのだが、

（主は、忘れっぽいからな…。）

（大丈夫だって…。）

慈音は、とある村の宿屋に一泊することになった。

花街ほどではないが、小さな遊郭があるらしく、ときおり白粉の懐かしい香がした。

「失礼します。」

宿屋の主人が、若い娘を数人連れて入って来た。

「えっ？何ですか？」

のんびり寝ていた慈音は身体を起こす。娘達は、慈音を確認すると頬を赤らめ、はしゃいでいる。

「あ、あの？」

「この娘達の中から、1人あなた様の世話をさせていただくのです。お選びください。」

慈音がぎよつとした顔をした。慈音が化け物を倒し、沢山の金を持っていると分かったのだらう。

手を擦り合わせて腰も低く媚を売ってきた。

「い、いりませんから！！俺、1人で何でも出来るんで！」

「ええっ！それは困ります！！誰かを選んでいただかないと、この子達は、今日食べる飯さえも……。」

手で顔を隠してなく真似をする娘達。

「え、でも、本当に必要ないんです。お金は払うので、一人にしてください。」

「そうですか……では、雪！この方が何か用事を言われたら、キッチンとお世話をするように、廊下で控えているんだぞ。」

1人の娘が頭を下げた。宿の主人と娘たちは下がっていった。

厠にいこうと襖を開けて驚いた。娘は冷たい廊下に正座をしていた。「えっ、ココにいたんですか？」

娘は泣きそうな顔で慈音を見上げた。

「と、とりあえず、中に入って座っててください。ココは冷たいですから。」

にこつと笑った娘は立ち上がったが、足がしびれていたようで、慈音に凭れかかった。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……。」

娘の手の平がすつと慈音の股間をかすった。

「えっ？」

「えっ？」

お互いに顔を見合わせる。

「あ、厠に行つてくるので…。」

慈音は、首をかしげながら、廊下の向こうに消えた。残された娘が舌なめずりをしているとも知らずに。

（早くも、女難の相が現れてる。）

白の言葉に慈音が洗っていた手を止める。

（あれって、やっぱりわざと？）

娘の手の平が自分のモノの形を探るように一瞬触れたように感じたのだ。

慈音はため息を吐いた。

「なっ！」

部屋に帰ってびっくりした。

しっかりと寝床が出来上がっていたのだ。

布団の傍には三つ指ついて待っている白い寝巻き姿の娘。

「こ、これは、どういうことですか？」

娘は顔を上げた。その顔は、先程までの頼りない娘の表情ではなく、女の顔だった。

「旅の方は、お若いですから、お食事の前に、どうかと思ひましてささっ、こちらへ…。」

「あ、ああの！ココって遊郭じゃないですよね？」

「まあ、当たり前です。上客さまへの特別奉仕ですわ。」

「じゃ、その特別奉仕止めてくださーい！！」

入り口で戸惑っている慈音の背中をどんと突き飛ばした者がいた。

「ごゆっくり。」

慈音は布団にいた娘の身体の上に乗ってしまった。

「まあ、積極的な方…。」

慈音がワタワタしているうちに娘の手が再び慈音の股間を触りだす。

「わわっ。」

「あら、大きいっ…。コレが勃ったら、どれくらいになるのかしら？」

（慈音、早いところ逃げないと木蓮太夫の二の舞だぞ？）

白の苦笑いの言葉。

（これほどとはな…。）

黒の失笑も聞こえる。

巧みな指使いに慈音は泣きそうだった。

彼の顔は豊かな娘の胸に埋もれて息もしにくい状態だ。

「だ、だめだつて！」

慈音は力の限りで起き上がった。

「あんっ。」

娘は布団に横になつて慈音を見上げている。

「お客様…。」

「や、宿を変えます。つていうか、なんなんだ！！ココは！！」

慈音は自分の小さな荷物を手に取ると勢いよく襖を開けた。

そこには、驚いた表情をした宿の主人と一緒に来ていた娘達がいた。

「お、お客様！雪は気に入らなかったでしょうが。」

慈音はきつと彼を睨んで宿を出て行った。

（いいのか？今日はゆっくり布団で休みたかったのだろう？）

「あの状態で休めると思う？つていうか、黒、笑いすぎ。」

慈音を誘う遊女の誘惑を避けながら、村を出た。

（慈音？）

「何だよ、」

（この辺りは、火山の影響で温泉があるらしい。）

「？」

（結界を張っていてやるから、ゆっくり浸かるといってこと。）

黒と白の申し出に、慈音は街から少し離れた山に沸く天然の温泉に身を委ねた。

（女難の相は続くのか？勘弁してほしい…。俺には、白妙しかいらな

いの…。」

ため息を吐いて頭まで湯の中に浸かる。彼女を思うと胸が切なくなる。

自分のせいで傷つけてしまった彼女。やっと、自分に振り向いてくれたのに…。

ふと、先程の娘に触られた感触が蘇った。

（あれが、白妙だったら…。」

慈音は、岩に腰を掛け、自慰に耽った。

「くそっ…。」

精を放った後、自己嫌悪に落ちた。大きなため息。

（人と言うのは、めんどくさい生き物だな。）

「く、黒…！い、何時からそこに…！」

慈音は真っ赤になって湯の中に落ちた。

（お前の中が我らの寢床。傍にいるのは当たり前であろっ。少し寝たら、また修行だぞ…。」

水音を立てて慈音が水面から顔を出した。

（白妙…早く会いたいよ…。」

天を見上げると満月が輝いていた。

つづく

両思いな2人

暁は、一緒に旅をしている龍綺が自分にとって大切な存在であることを理解していた。

しかし、龍綺への想いが、何であるのか理解に苦しんでいた。（りゅーがいなかったら、あーは、一生あの岩牢の中だった。りゅーを見たときは、神様が降りて来たんだと思ったんだ。）
初めての出会いを思い出す。

龍綺に外の世界を教わって、自分の世界が広がった。

でも、それは、龍綺がいたからこそ、目に映るものが自分にとって忘れられないものになっていった。

2人から、慈音と白妙と一緒に行動するようになって、服を着ていないことが恥ずかしいことなだと理解した。

理解したら、自分が裸で龍綺の前に立っていたことを思い出してしまった。

羞恥心というモノが暁の中で生まれ、龍綺とうまく視線を合わせられなくなった。

しかし、龍綺は、暁が今になって恥ずかしがっている事なんて知る由もない。

そのため、普段通り彼女に接していた。

そのことは、暁にとって、安堵であり、何故か淋しいものであった。

暁は、紅蓮と月凧に出会って、兄弟という関係があることを知った。

「月は、グレとキョーダイなの？」

「そうよ。」

「月は、グレのコトが好き？」

「えっ？うん。お兄さんだからね。」

「その好きは、雷紋への好きと一緒？」

そう尋ねた時の月凧の顔が真っ赤になったことを思い出した。

何故、雷紋を引き合いに出すのかと尋ねる月風に、彼女がいつも彼を目で追っていること、そのことを龍綺に尋ねたら、月風が、雷紋のことを好きだからと答えたという。

「（龍綺くんだったら！）えーと、紅蓮兄さんは、血の繋がった家族なのね？だから、その…一緒にいて当たり前な人。…雷紋くんは、そのう…血の繋がりとかはないけど…一緒にいたいって思う人？かな…。」

『一緒にいたい人』

自分にとって、龍綺は、『一緒にいて当たり前な人』だった。でも、何か違うと思った。

（あーとりゅーは家族じゃないんだよね…ということは、一緒にいて当たり前な人ではないんだ。ということは、いつかさよならするの？）

考えの渦に埋もれていく暁。

（さよなら？…あー、そんなのイヤだ！！りゅーと一緒にいたいっ！…えっ…ってことは、あーは、りゅーのコト好きなの？）

かあつと顔が赤くなった。

傍から見れば百面相をしている状態であった。

もちろん、そんな彼女の想いなど気付きもしない龍綺であった。

心の中を言ったりきたりする戸惑いを隠しながら、また、2人で旅が出来るようになった。

仲間の皆と旅するのは楽しい。

特に女の子達と話をしながら過ごすコトは暁にとって至宝の時間であった。

それでも、また、龍綺と2人で旅をするんだと言うコトが嬉しかった。

ところが、ある村の近くで『水の化け物』に出くわし、龍綺の足手

まといになつてしまったことに暁は強い衝撃を受けてしまった。

（このままでは、一緒にいたくないってりゅーに言われちゃう…。）
悩んでいる暁に、龍綺は、自分のコトは好きかと尋ねてきた。

思わず嬉しくて『好き』と答えたが、先程の龍綺に無理をさせてしまった自分のコトを思ってしまう。

好きと答えた後で、戸惑っている彼女に、龍綺は告白をしてきた。

「俺は、暁と一緒にいてほしい。」
と。

暁もその気持ちは一緒のはずだった。

しかし、まだ、『恋』というものに対して不確かな気持ちの彼女は、龍綺を拒絶してしまった。

（玄武！この気持ちは何？）

戸惑いながら旅を続ける龍綺と暁。

暁は、どうしても龍綺と視線を合わせることが出来なくて、それがまた龍綺を傷付けていた。

ギクシャクする2人。

暁がこのままではいけない。

自分の今の気持ちを正直に龍綺に言おう、そして、それが何であるのかを龍綺に聞こう！そう考えていると、心の中に言い表されない心情が流れてきた。

（な、何？…この感じ。）

（暁？…龍神の御子が、心を闇に支配されようとしている。）

暁の中の玄武が答えてくれた。

（それは、いけないコト？）

（そう、黒龍の意識に同調しすぎている。）

（どうすればいいの？）

（その陰の気を暁が呼び寄せて、自分の中で消化するんだ。）

（わ、分かんないよ…。）

（大丈夫…暁が龍神の御子を大切に思うならできることです。）

暁は、先に行く龍綺の背中を見つめた。

戸惑いの中で、龍綺とともに旅をすることが嬉しいと思っていた。できるなら、一緒にいたいと思っていた。

たぶん、月朧が雷紋を見るように、自分も龍綺を見ているんだとある宿屋の鏡で確認したのは、何時だったのか…。

（あーは、りゅーのコトが好き。だから、りゅーがあーを守ってくれたように、りゅーを守る。）

暁は、新たな思いと誓いを胸に旅を続けた。

龍綺と暁は、龍神の社に付く前に、まだ手にしていない宝玉を求めて甲村のはるか南を目指していた。

行く途中で何回か化け物に出くわし、戦闘になった。

しかし、水の化け物以来、一緒に戦っていてもどこかタイミングの合わない龍綺と暁は予想以上に苦戦を強いられてしまっていた。

暁は一生懸命合わそうとするのだが、龍綺のタイミングがここぞと言う時にずれるのだ。

「馬鹿か、てめえ！」

暁に怒鳴られる。

といつても、怒っているのは、玄武の蛇の方である。

「ちゃんと、よく見ねーから、いらん怪我すんだよ！」

言いたいことだけを言って、蛇はまた暁の中に消えて行った。

「りゅー、だいじょぶ？」

傷口に手を翳し、治癒の力を使おうとするのを龍綺は止めた。

「りゅー？」

自分を心配してくれている暁にとつた自分の態度に自己嫌悪になる。龍綺は彼女から視線を逸らした。

（龍綺、玄武の御子が泣いている…。）

黄龍に言われてハッと顔を上げると暁がポロポロと涙を流していた。
「あー悲しい。」

そう言って暁は立ち上がった。

2人はまた会話のないままある町に入った。

この街にも軍人がいた。

王都のことは、ここにいる軍人達も分かっていないようで、イライラした空気が流れていた。

「りゅー？」

「んっ？」

暁は自分の頭を布で隠していた。

「薬切れてきた…。」

雷紋作成の薬の効果が切れてきたのか、暁の髪の毛が複雑な色になるうとしていた。

「やばっ！」

龍綺は慌てて薬を出して暁の口の中に入れた。

その時に指先が彼女の唇に触れたことが龍綺の心臓を高く跳ねさせた。

雷紋のくれた薬には副作用がある。

暁は男になってしまうのだ。

龍綺は彼女の体のラインが変化する前に宿屋に逃げ込んだ。

しかし、今回は少し違っていた。

「暁！」

暁はその場に倒れてしまったのだ。

龍綺は、宿屋の一室に彼女を運んで寝床に横たわらせた。

（なんで、今回はこんなことに…。）

静かな寝息を立てて眠り続ける暁を見て自分の手が震えていることに気付いた。

（薬の副作用と言うよりは…玄武の御子の心の限界か…。）
黄龍の言葉。

（どういうことだよ…。）

（玄武の御子は、特定の対象の心を映す鏡であり、その対象の陰の気を消化する力を持つ。御子は、ココ最近のお前の焦り、戸惑い、そして、諦め…全ての陰の気持ちを消化していたようだな…。）

（えっ？）

（玄武は、楔の神獣。仲間の負の心を消化して光に変える。しかし、お前の心がその事に気付かず独りよがりな気持ちで、玄武の御子を理解しようともせず、戦った上に傷を治そうとした御子を拒絶した。）

思い当たる自分の行動が暁を知らず知らず追い詰めていたのだ。

『あー、悲しい。』

そう言った彼女の顔。

龍綺は頭を抱えた。

「俺…馬鹿だな…。」

彼女の唇に自分の唇を重ねる。

「暁？ごめん……。」

ぱちつと暁が目を開けたので龍綺はびっくりしてしまい、かけていた椅子から落ちてしまう。

「りゅー？」

「あ、えっ！」

暁は、寝床から足を下ろし、床に尻餅を付いている龍綺に抱きついた。

「えっ？あー？」

「あーね、りゅーのもやもや、消化したよ！」

久しぶりに龍綺に抱きついていていた暁は龍綺の顔を覗き込んだ。

「りゅー、あーのコト好き？」

「えっ？」

カッと赤くなる龍綺。

「あー、りゅーのコト好き！！気付いたよ？りゅーの気持ちとあーの気持ち一緒！」

ぎゅうつと抱きしめてくる暁を少し条件反射的に抱きしめた龍綺は、暫くしてから我に返った。

「あ…暁？」

「あー、りゅーと一緒にいたい。りゅーのもやもや取るの、それ、

あーにしかできない、他の子には、できないし、させないの！！

龍綺はゆっくりと暁の身体を支えながら起き上がった。

「暁、俺のコト好きなの？」

尋ねる彼に、優しい笑顔で暁は頷いた。

龍綺は、今まで見せたことのないような笑顔で笑うと暁を抱きしめた。

「ありがとう…。」

「あーも、ありがとう。」

顔を見合わせて笑う。

「あーね、りゅーいなかったら、ずっとアソコで1人だったよ。だから、りゅーのコト大好きなんだと思ってた。でも、月が雷紋のこ
と見てみたいいな顔しているあーに気付いた。だから、あーはりゅー
ーのコト好き。」

なんだか、納得できるような出来ないようなことを暁は嬉しそうに言う。

「えー…と。何だかよく分かんないけど…好きって言うてくれるのは、嬉しいよ。」

床に座った龍綺を股ぐように座っている暁。

龍綺はその姿勢がやけに恥ずかしくなってしまう、暁を自分の上から下ろそうとした。

「何？」

龍綺の真っ赤な顔に暁は訝しげに覗きこむ。

「あ、イヤ…。嫌がつてる訳じゃなくて、そのあまり引つ付かれると…。」

龍綺の気持ちなど無視するように暁は顔を覗き込んでくる。

「りゅー、真っ赤。だいじょぶ？」

ぶにっとした感覚が龍綺の右腕に触れる。

「わわっ！」

龍綺はまた斜め後ろに身体を避けて、床に伏せてしまう。

そのまた上に暁は身体を乗せて、胸を押し付けていた。

「りゅー？これ、何かの遊び？…りゅー？…は、鼻血！」

暁は慌てて身体をのけると手ぬぐいを濡らし、龍綺の方に駆け寄ってきた。

「ごめんなさい…。」

首元を冷やしている龍綺に暁はしゅんとなって謝った。

「なんで、暁が謝るの？」

「あーが、ふざけて上に乗ったから、りゅー鼻血出した…違う？」

暁が本当に可愛いと龍綺は思ってしまった。

「違うよ、暁が悪いんじゃないんだ。ただ、俺の修行が足りないっていうか…。（暁の裸とか思い出しちゃって、収拾つかなくなっちゃったっていうか…。）…そのうち分かるよ。」

暁はきょとんとしたまままで龍綺を見ていた。

（分かんないだろうな…。）

「今、分かるようになる！」

「へっ？」

「りゅーの鼻血の理由。あー知りたい。」

静まる室内。

「え、イヤ知らなくていいから。」

「やつ！あー、りゅーのコトなんでも知りたい！！」

「（欲情したなんて言えないし、言っても理解できないだろ？）…いや、ホントに…のぼせただけだからさ、（だから、そんな顔してみんなよ…。）」

思わずゴクリと喉を鳴らしてしまう。

「のぼせる？暑い？りゅー、暑いね！あー、氷貰ってくる！」

「えっ、あ、暁っ！」

龍綺が止める間もなく、暁は部屋を出て行った。

（…ともかく、よかったな…龍綺。）

「暁、天然だから、俺、これから自分の理性と戦わなきゃ…。」

苦笑いをする龍綺。

つい先程まで、色々な事に悩んでいた自分が暁の一言で一喜一憂す

るなんてと龍綺は苦笑いをしてしまった。

（この調子で、宝玉を見つけてくれ。今のお前なら、黒龍の力を利用して、宝玉の居場所を知ることができるだろう…。）

意識を集中すると西の方向に1つ。

北の方向に1つ。宝玉の在り処を知る。
「あと1つが…分からない…。近くにあると思うんだ…。」
「何が？」

黄龍との会話に氷を持って帰ってきた暁が入って来た。

「りゅー、氷、持ってきた。どうすればよい？」

器に入れるのではなく、両手に持てるだけの氷を持っていた。

「暁…。」

龍綺は立ち上がると洗面台に置いてあった洗面器に暁の持っている氷を入れると彼女の手を取った。

「もう、大丈夫だよ。」

冷たくなった彼女の手に自分の息をかける。

「ほんと？もう、鼻血出ない？」

「えっ…と、（それは、どうかな…。）鼻血は、戦いで傷付いても出るし、」

「でも、今は、戦ってない。」

（案外しつこいな…。）

龍綺は言葉を詰まらせる。

「あー、りゅーのコト全部知りたい。それ、イケナイこと？あー、全部りゅーにあげる。」

龍綺はまた顔を真っ赤にした。

「ぜ、全部って…。」

龍綺は暁をぎゅっと抱きしめた。

「いつか…いつか全部…頂戴。もうちょっと、俺が強くなったら…君をもっと守れるようになったら。」

「じゃー、あーも、もっと強くなるから、そしたら、りゅーの全部ちょうだい？」

龍綺と暁は、嬉しそうに笑った。

つづく

失われた記憶と掘りかえられた記憶

「元気そうでよかった。」

慈音は目の前にいる娘に言った。

雷紋に言われて、玄武の社を出て、もうすぐ一年が経とうとしていた。

普通に歩いていたなら、社から、静香までは、一ヶ月ほどで到着する。

化け物が出没している現在では、小さな祠で休憩しながらの旅で、その倍。

それをこの青年は、一年近くかけて静香にやってきたのだ。

もちろん、待っていた娘には、自分の修行のことを、あらかじめ連絡を入れておいたため、その娘もただ待つだけということをしなかった。

「慈音くんも。なんか、大きくなったね…。」

8人の中で一番誕生日の早い彼は、すでに16歳になっていた。

「そういう、月風も綺麗になったね、雷紋もきつとびっくりするんじゃない？」

人懐っこい笑顔は、14、5歳のころと変わらないなあと月風は思った。

「俺が、ココに来るまで、ずっと静香にいたの？」

「ううん、…なんかね、雷紋くん置いてかれたコトに、自分は本当に役立たずなんだって思ったんだ。物凄く自分に腹が立ったの。」
月風はふつと笑う。

「何処へ行くのか行ってもらえないほど、私は雷紋くんに信頼されてなかったんだって思った。」

「そ、そんなコトは…。」

「目の前で彼が消えた事が物凄くショックで、その時に彼が何を言っていたのかって言うのも忘れちゃった。とても大切な事を言われ

たような気がするんだけど……ホント、置いてかれたことが思ってた以上にシヨックで。」

月風は力なく笑う。

「で、自分には何がなかったから雷紋くんに見放されたんだろって考えた。」

慈音は返す言葉もない。

「だからね、今度雷紋くんが帰ってきたら、あの時、離れたりしなきゃよかったって思えるくらいの女の子になるう！って決めて、犬狼達と一緒に王都の城壁に張られた結界に薄いところはないのか、本当に中の様子は分らないのか探ることにしたの。」

紅蓮や雷紋の影に隠れるようにしていた月風が真っ直ぐ前を見て自立していたことが、慈音は嬉しかった。

「雷紋の気持ちって、アイツ顔に出ないから分かり難いだろうけど、月風のこと好きなんだろうなって思ってたけど？」

「へっ？……ぷつ、何、言い出してんの？好きだったのは私だよ？で、振られたの！でもいいんだ！私は神の子として、責務を全うするんだから！そんで、雷紋くんより、もっとカッコいい人探すんだ！」
啞然とする慈音。

（月風って、こんな子だったっけ……。）

慈音の服の裾を犬狼の1人である聰が引っ張った。

「ちよつと、廁に行つて来るね。」

慈音は部屋を出て行った。

「あれ、何？月風ってば、変なんだけど……。」

聰は、ため息をついた。

「実は、城壁の結界を調べている時に、化け物に教われた子供達と出くわしまして……。」

いい難そうな聰の変わりに戎が言った。

「ガキに結界張って助けたまではよかったんだよ、ところが隙をつかれて、記憶の一部をすり替えられちゃってさ、すり替えた化け物

は、俺達の手で倒したけどさ。」

「化け物と一緒に月風の記憶も消えちゃってさ修復不可能になっちまったんだ。…雷紋に捨てられたって思い込んでんだよ。」

記憶のすり替えをする化け物は、その人の愛する人の記憶を奪い、逆の結末を産み付ける。

愛し合うもの同士が憎しみ合う結果となり、人々の心に愛というモノが消えてしまうのである。

「……月風は、一度、お母さんに捨てられてるっていうトラウマがあるからな…根が深くなりそうだね。」

「白虎の御子、何とかしてくれよ…俺達は何を言っても、月風ってば、聞かないんだよお…。」

情けない声を出す導。その言葉に慈音はため息を吐く。

「んー、俺が何を言ってもさ…雷紋じゃないと、月風は動かせないと思うけど。」

犬狼はため息を吐いた。

（ホント、雷紋…どうにかしないと大変な事になるぞ…。）

月風は、張り切っていた。

『雷紋の足でまといだったから、置いてけぼりになった。』

『好きだと言う自分の気持ちは無視されて、雷紋は去って行った。』

彼女はそう思い込んでいた。

神の子の結びつきを何とか希薄なものにしようとする敵側の工作があつたことに月風は気付いていない。

奪われた記憶は、すでに失われ、修復不可能であつた。

「よしっ！」

城壁周辺の地図を調べる。

（兎に角、一周はしたんだ…でも、ココも、ココも結界の力はそれほど強くないのに、破れなかった。）

地図に6つの印を付ける。

何気なく付けた印の上をなぞる。

（うーん。）

考え込んでいると慈音が帰ってきた。

「あ、お帰り。」

「…月凧さ…雷紋のコト…まだ好きだよね？」

彼女の表情が険しくなる。

「なんで？もう、諦めてるよ。」

そっぽを向く。

「えーと…。」

振り向くと3匹の犬狼が戸口で慈音を見ている。

（そ、そんな期待されても…。）

「記憶を奪う化け物と戦ったんだって？」

「えっ…うん。犬狼達が頑張ってくれたから、犠牲者も出なかったの。」

「で、記憶を奪われたんだよね…月凧は。」

「…犬狼達に何か言われたんだね…言っておくけど、何もされてません！」

「えーと、記憶を奪われたんじゃないって、すり替えられたって聞いてます。」

「また、その話？」

やれやれと言う顔だ。

「兎に角さ、信じられないと思うけど、雷紋は、月凧のことが好きで好きで、仕方なくってたまらないって言ってたよ？（冷汗）」

「…雷紋くんが、そんなこと慈音くんに言うとは思えない。」

「うつ…イヤ、だってさ、俺は白妙のコトとか相談してた仲だし（嘘）…。雷紋から、その、ねえ…。色々と月凧のこと聞いていたからさ…。」

嘘くさいと自分で思いながら慈音は言ってみた。
すると…。

「ホント？雷紋くん…私のコト嫌いになって…離れていったんじゃないの？」

慈音はホツとしていた。

「当たり前だろ？雷紋が言ってたこと思い出してよ？アイツは、城壁を取り囲む結界の中で何が行われているのかを探るための手段を手に入れるために旅立っただ。月凧がどうこうとかいうことはないよ。ただ、その手段を手に入れるための場所は、月凧には入れない特殊な空間なんだと思う。（お、俺なんて饒舌なんだろ…。）それにさ、月凧ほど可愛い子を1人にしてさ、悪い虫とか付いたらそれこそ、雷紋のヤツ、狂うかもしれないし、きつと…って…えーと…近いうちに戻ってくるよ！うん。」

じつと見つめあう2人だが、慈音は我慢できずその視線を逸らしてしまう。

「…慈音くんって、正直ものだね…。」

「…へっ？」

「雷紋くんが、そんなコト思うはずないじゃん。もし、そうだとしても、慈音くんには言えることを私には何も言ってくれないってことは、とても悲しいよ？信頼されてないんだよ…。」

慈音は、自分の言っただけでたらめが返って月凧を悲しませてしまった事にうろたえた。

「あ、あの…さ…。」

慈音は顔を両手で塞ぎ泣いている月凧にどう声をかけたらよいか分からなかった。

ふと感じる人の気配。

振り向く慈音。

緩む頬。

「全く、…相変わらず、思い込みが激しいよね、月凧は。」

月凧はその声に顔を上げた。

つづく

人として生きるため

そこに立っていたのは、白い髪が肩以上に伸び、白い眼の中心が少し赤くなり、額には、金と紅に光る目を持つ青年だった。

「勝手言っただけど、間違ってないよね、雷紋？」

互いに手を頭上に挙げ、音を立てて手を握る。

「恥ずかしい事をズバズバ言い過ぎ。当たってるだけに、最悪だ。」
そう言っている雷紋の表情は怒っているようではなかった。

「とにかく、お帰り。えーと、見た目はちょっと引くけど、ま、雷紋は、雷紋だし？俺はちよつと席を外すね。」

ポンと彼の肩を叩き、慈音は出て行った。

「月風？」

雷紋は腰をかがめて彼女の顔を覗き込んだ。

微動だにしない彼女の瞳だけが雷紋を捕えている。

「記憶を奪い、摩り替える化け物なんていない。ヤツは、記憶を封印するだけ。君の記憶は、君の奥底に眠っているだけだ。」

瞳は逸らされない。

「奥底に行ってしまった記憶の空間を埋める時に、本当とは逆のことを思ってしまったんだね…俺が君を見限って去って行ったって…。」

雷紋は月風を抱きしめた。

「ら…雷紋くん？」

月風の両手が彼の背中に回り、彼の身体を抱きしめる。

「温かい…。」

「うん、帰ってきたんだ。まだ、ちよつとだけ不完全だけど…これ以上君を待たせる訳にはいかないって思ったんだ。…さあ、思い出して？俺は何て言ったの？」

彼女の顔を両手で包み、自分の方に向ける。

月風は見上げる形で雷紋を見つめた。

あの時とは少し色味の違う瞳。

けれどその輝きは変わっていなかった。

「俺のコト…嫌わないでって言ったんだよ？」

月風の瞳から涙が溢れてきた。

頬に零れる涙を雷紋は唇で拭う。

「大好きだ、月風…。俺は、君が大好きだ。」

しゃくりあげる月風は、声を出せない。

「変わってしまった俺は、イヤ？」

包まれた顔を少し横に振る。

彼女の表情を見て雷紋は優しく笑うと左手を彼女の後頭部に固定して、頬に優しく手を添えたまま、その唇に口付けをした。

「…んっ…ら、雷っ…。」

角度を変えて、月風の唇を啄ばむ。

「好きって言うて？」

「……好き…初めて会ったときから、好きになってた。」

雷紋はギュッと彼女を抱きしめた。

「うん、知ってた。」

「うっ…酷い…。」

雷紋は月風の身体を自由にするとお姫様抱っこをして、膝に抱くような形で椅子に腰掛けた。

「ははっ…。初めて見た時は、鳥の羽つけててびっくりした。可愛い子だと思ったよ。けれど、紅蓮の妹だったから、あんまり意識はしていなかったんだ。」

ちゅっとならにキスをする雷紋。

「けどさ、キマイラに襲われて、気を失った俺を泣きながら守ってくれてただろ？なんか、か弱い足手まといとしか思ってた君がとても強く見えた。なんか、やられたって感じでさ、」

月風は少し不満そうだ。

「あの時から、きつと君は俺の特別になったんだ。」

「特別？」

雷紋は、少し意地悪そうな顔をした。

「そう、特別。俺が口付けをしたいのも、抱きしめたいのも、それ以上も…全部欲しいのは月風だけだよってこと…。」

口付けを交わし、抱きしめる。

「それ以上って？」

雷紋はクスツと笑って、ふわっと彼女の胸に手を当てた。

「ら！雷紋くん。」

驚く月風に雷紋は余裕の微笑だった。

「こうやって、月風のココに触れるのも、もっと大切なところに触れていいのも、口付けしていいのも、俺だけにして？」

月風は少し力の入って来た胸に触れる彼の手に真っ赤になってしまった。

膝の上に横座りしている月風は雷紋を見下ろす形になっていた。

雷紋は、すくつと笑うと手を胸から離し、その胸に顔を埋めて彼女を見上げた。

「ら、雷紋くん…なんか…スケベになってない？」

「んー？色々知ったからね…こんな俺はイヤ？」

月風はまともに雷紋を見ることが出来ない。

「な、なんか…ドキドキして…お、落ち着かない〜！」

雷紋は彼女の胸から顔を離すと、首を伸ばして、月風の首筋に吸い付いた。

「きゃっ！…痛っ…ら、雷紋く…ん。」

「ん、おしまい。」

雷紋は月風を自由にした。

「いつか、全部頂戴ね、月風。…逃げたって、無駄だから。」

そう言うとき慈音のところに言ってくると言い残し、部屋を出た。

残された月風は、顔を真っ赤にして、先程吸い付かれた首筋を鏡に映した。

「…。」

首筋に赤い印。

月風はその場にへたり込んでしまった。

「…展開が速すぎるよ…。」

（必死だのう…。）

部屋を出た雷紋は、その力で髪の色と瞳の色を黒く染め、額に布を巻いた。

（うるさいっ！）

雷紋は先程までの余裕の表情ではない、真つ赤な顔をしていた。

（めちゃくちゃ恥ずかしいんだからな！！あ、あんなコト！）

雷紋は頭を抱えて廊下にしゃがみ込んだ。

脳裏に蘇る月風の胸の柔らかさと花の香。

（致し方あるまい、我が力の暴走、つまり、お主の人と言う形を保たせるためには、同じ力を宿す対象と契るしかないのじゃから。）
同じ力とは、神の子を指す。

（月風のコトは好きだけど、もっと、ゆっくり…。）

（１７になる前にじゃぞ？人として、一生を終わらせたいのなら、月風と同じ時を進みたいのなら、彼女に全てを打ち明けるがよい。
優しい月風は、喜んで相手をしてくれようぞ？）

（馬鹿なこと言うな！…することに理由なんか…まるでそれが目的みたいになるじゃないか！）

（しかし、そうであろう？女子と契るのは、気持ちイイコトだと知っておるくせに…。）

（白澤の若かりし頃の、おふざけは、知りたくなかったよ…。）

白澤は、自ら人型をとり人の世に降りては、女遊びをしたらしい。
その時の記憶、情報は雷紋の中にもしっかりあった。

（１つよいことを教えてやろう。）

白澤から得た情報は彼の全部ではない。

そのため、彼しか知らないということはあり、白澤は時折、雷紋の知らないことをもったいぶって教えるのだ。

（なんだよ…。）

雷紋は再び歩き出していた。

（神の子同士が結ばれるとその力は倍になり、神の子は互いに…になるのじゃ。）

（何だつて？後の方が聞こえなかった。）

（ほっほっほ。聞こえなんだなら、そのまま。）

（おい、こらっ！）

白澤は眠りに付いた。

「くそっ、じじい！」

宿屋の玄関口で吐いた言葉に周囲の人達はびっくりしていた。

「何、怒鳴ってるんだよ…って、顔赤いよ？」

慈音が3匹と共に玄関口で啞然としていた。

雷紋は、犬達に劳いの声をかけ、頭を撫でた。

「お前たちは、月風の傍にいて。」

少し不満そうな声を出した後、3匹は宿屋の中に入ってしまった。

「何？」

雷紋は慈音の腕を掴み、宿屋の裏に連れて行った。

「慈音！お前さ、」

「な、何？どしたの…。」

雷紋は彼にしゃがむように言うと頭を寄せ合って、小声で白澤の真の力である第3の瞳のこと、いずれ来る人としての崩壊、そして、その崩壊を止める方法について言った。

「…マジ？」

「俺、月風のコト大切にしたいんだ…でもさ…。」

慈音はにっこり笑った。

「何笑ってるんだよ…。」

「余裕のない雷紋って珍しいなって、なんか、人らしくっていいよ、その顔。」

雷紋は真っ赤な顔になった。

「慈音、からかうなよ…。」

「からかっているんじゃないよ？…その顔、月風にも見せてあげなよ。」

きつと、もつと、仲良くなれるよ。彼女は雷紋のことが好きなんだからさ。母さんが言ってたよ、女は、好きな人が相手だったら自然に心も身体も開くって。」

雷紋はかあつと顔を赤くした後、ふつと笑った。

「慈音って、凄いな。女心が分かっているって感じた。」

「だってさ、14年間、花街で姐さん相手の愚痴相手してたんだ、大体のことはね…手ごわい人はいるけど。」

「それって、白妙？」

雷紋の問いに、慈音は照れたような顔をした。

「うん、白妙。彼女は、言葉も表情も少ない人だったから、大変。その点、月風なんか、面白いほど心が読めるよ。」

「読むなよ。」

「うん、それを分からなきゃいけないのは、雷紋だから。君がいな期間、彼女はとても強い心を手に入れた。自分で歩くことも覚えたきつと、お似合いの2人だよ。」

自分と白妙のコトを思っているのだろうか、慈音の瞳は淋しげだった。

「慈音…。」

「ん？」

「白妙、帰ってくるぞ。それも近々。」
びつくりしたような顔。

「神鬼眼が教えてくれた。南にある森の泉に落ちてくる。」

雷紋は自分の手を慈音の額に当てた。

すると、慈音の脳裏にある風景が浮かんだ。

「今、見せた場所だ。今から向かって2ヶ月はかかるかもしれない。い。」

慈音はふと城壁のコトを思う。

「大丈夫…あと8…8ヶ月くらいは敵は動けない。」

「ありがとう、雷紋。」

慈音は立ち上がった。

「月風と仲良くね。」

そう言って慈音は静香を再び旅立った。

つづく

堕ちてきた姫君

（南といつても広いぞ…。）

1人旅を続ける慈音に内なる獣の1人が声をかけてきた。

（分かっている。けれど、白妙に会えるのなら、彼女が戻ってくるその瞬間には立ち会いたい。）

襲ってくる化け物を薙倒し、金貨を得て、旅を急ぐ。

時折、祠に寄り、心身を休める。

（来たか…。）

身体を休め、眠りに全てを任せようとすると彼を闇に誘う声が聞こえてくる。

『慈音…さあ…こちらへ身を任せるのだ…お前を待っている方がいいのだ…』

慈音の眉間が動く。

「うるさい、去れ！」

『お前は、光にはなれない…黒虎を宿す限り、お前は闇の眷属…』

「うるさいと言っている…俺は、闇には染まらない…」

『あの方が、この世に蘇る今、お前を必要としているのだ…闇の者となり、天界の姫君をその腕に抱くがよい。』

「お前らの言いなりにはならない。白妙は俺が守る。消えろ！」

このようなやり取りは、慈音が力の弱い祠で眠る度に現れる。

その誘惑に負けないこと、それが黒虎を宿すために交わされた契約である。

白妙を二度と傷つけないために、得なければならなかった力。

彼には、迷ってなどいられなかったのだ。

「俺は負けない！闇になど落ちない！！」

慈音は誘いの声を聞く度に心の誓いを強くしていった。

幾度目かの夜を越え、森にある泉を巡り、慈音は歩き続けた。

（白妙に逢うんだ…。彼女に謝って…。今度こそ守るんだ…。）
慈音の誓いは、強いものだった。

その日は雨だった。

少し大きめの祠の突き出した屋根の軒先で雨から身体を避けた慈音は、何かの予感を胸の奥に感じていた。

（どうした？）

慈音は少し高台にあるその祠から飛び出した。

「白妙が来る！」

木々の中を駆ける慈音の身体は切り傷や擦り傷で一杯になったが、そんなことは頭にないようで、ただひたすら崖を降りていた。

木々や草むらを抜け、慈音の目の前に広がったのは、雷紋が見せてくれた泉の風景。

彼は、その泉に躊躇なく飛び込んだ。

浅瀬の続く泉はそれほど広いものではなく、慈音は膝上まで浸かりながら泉の中へ。

そして、空を見上げる。

「来る…。」

天上の雲が渦を巻き出した。

慈音は、新たに得た黒虎の力を使い、身体をふわりと宙に浮かべた。

「迎えに行く！」

慈音はあつという間にその雲の方へと飛んだ。

渦を巻いた白い雲の中心から、白い足、そして衣が出て来た。

そして、そこには、慈音が待ちに待っていた娘が…。

「白妙！…」

自分の名が呼ばれて娘はびっくりした顔を見せた。

「慈、慈音？！なぜ、ココに居る！？」

慈音は白妙の身体を抱きとめて、抱きしめた。

2人の身体は加速を付けて落ちていく。

「お、落ちてるぞ？」

「大丈夫…。俺、飛べるから…。」

「し、しかし、う、動けぬぞ？」

「うん、大丈夫。」

「き、聞いているのか？」

ふわりつと身体が浮かんた。

ゆつくりと旋回しながら、泉の中に着地する。

別れた時よりも、お互い身長も伸びたが、慈音の背が高かったため、白妙は、ふくらはぎが水に浸かる程度で不安定だった。

「逢いたかった。」

「じ、慈音…そ、その離してくれ。苦しい。」

「イヤだ。」

「し、しかし…。」

慈音は渋々彼女を抱く腕の力を弱めた。

ちやぷんと水音が鳴った。

ちゃんと足が付いたことを確認した白妙は慈音の顔を見上げた。

彼は泣いていた。

「なぜ？泣く…。」

「嬉しいからだよ。」

白妙は慈音に促されるように岸へと歩いた。

雨が2人を濡らしていた。

先程までいた祠の中に2人はいた。

白妙がいなくなった後の国のコト、自分のコトを話した。

「寒くない？」

「大丈夫だ。慈音の風は温かいな。」

白妙は慈音に抱きしめられながら、彼から感じる風によって身体を乾かした。

「白妙が腕の中にいるからだよ。」

「そうか…。」

向き合ったまま、立ったまま抱きしめてくる慈音は白妙を離そうと

しなかった。

「ごめん…俺がだらしなかったから、君の身体を傷付けてしまった。」

「…そ、そのことならいいのだ。」

「えっ？」

「そ、その…私も太夫の気持ち少しは分かるから…。」

白妙は、ハツとして慈音から身体を離れた。

「太夫は、本当に慈音が好きだったんだ。気が狂うほどに…。でも…。」

「俺は、白妙のコトが好きなんだ…。」

「うん、それは、分かっている…と思う。だから、お前の気持ちが私にあるのが許せなかったんだ。そこを邪黒の復活を目論むヤツに利用された。」

頷く慈音は再び彼女を抱きしめる。

「だから、太夫を恨んではいけないのだ。お前に黒虎の魂が宿っているということは、闇に引きずり込まれやすいということ。人を恨み、憎しみで邪黒を倒しては、ヤツの思う壺だ。」

「分かっている…今は、太夫にはすまないという気持ちしかないよ。…それより、覚えてる？」

ふと顔を上げる。

視線の先には優しい笑顔の慈音。

「もう、白妙に対しては遠慮しない。って言ったこと…。」

白妙は記憶が蘇ったのが顔が赤くなった。

「白妙、可愛い…。」

彼女の左の目尻にキスをする。

次は、額、そして、頬。

「じ、慈音？」

「好きだ…。」

「えっ？」

「好きだ。…白妙を抱きたいんだけど…、駄目かな…？」

白妙の耳に届いていた雨音が鼓動に変わる。

「慈音…。」

「イヤ？…俺はずっと君に逢いたかった、逢って抱きたかったよ。」
近付く顔、唇が白妙の唇に触れる。

「ま、待て。そ、その早くないか？…そ、その再会したばかりなのに…。」

白妙は視線を外す。

慈音はきよとした。

「そうなのかな…。俺は、別に…えつ、白妙はイヤなの？」

「そ、その…イヤではない。」

慈音がゴクリと喉を鳴らすのと同時に、

「しかし！…か、身体が…まだ…完全ではないんだ…。」

慈音はハッとして身体を離す。

「い、痛かった？」

「へっ？い、イヤ、そのまだ、魂の定着が上手くいつてないんだ。
あ、あまり…なれないことをすると、魂が抜けてしまう恐れが…。」

慈音が心配そうな顔になった。

「普通にしていれば大丈夫だ。それなりに戦うこともできる。」

彼が少しホッとした顔を見せたため白妙もホッとした。

「じゃあ、今日は、無理？や、優しくしても無理？」

白妙の表情が照れたリンゴのようになった。

（めっちゃ可愛い…。）

「そ、そ、そんなコト言われても困る。」

視線を外して、またちらつと慈音を見る白妙。

「な、なんか時が経ったのだということ、お前を見て思い知った気がする。」

今度は、慈音が真っ赤になった。

「…なんかさ、黒が中に入ってから、その…そっち方面に対して関心が強くなったみたいで、…でもさ、物凄くしたくても、白妙がいやなら我慢するし…。その…。」

慈音は真っ赤になったいた。

「ごめん、俺、余裕ない。」

くるっと白妙に背を向ける。

「慈音？」

「雨に当たって、頭冷やしてくる。」

彼は、祠から出て行った。

つづく

再びの別れ

（ああ、俺何言っただよ…。）

（仕方あるまい。）

（黒、お前が言うなよ…。大体さ、ちょっと女の人見たら見境なく発情してさ……。）

（失礼な、きちんと相手は選んでおるぞ？）

女好きで、女難の相のある白虎。

女と見ればすぐ発情してしまう黒虎。

（お前達の主人は、一体何したんだよ…どうして、俺…このままじゃ、白妙に嫌われる。）

彼女を抱きしめた瞬間から、自分が興奮していることは分かっていた。

彼女を抱きたくて仕方なかった。

それでもギリギリの理性で自分の腰を彼女に押し付けることだけはしなかった。

（風とは気ままな気性。我等は己の欲求に素直なだけだ。）

（それじゃ、ただの獣だ！俺には、理性つてもんがあるの！）

大きなため息。

まだ熱を持つ自分を何処で収めようかと慈音がため息を吐いていると白妙が後ろから声をかけてきた。

「わわっ！」

「慈音？そ、その嫌いとかイヤとかではないぞ？」

照れた白妙に慈音はにっこり笑う。

「うん、分かってる。急ぎすぎたんだよ、ごめんな？」

白妙は僅かな微笑を見せた。

「隣に座ってもいいか？」

「えっ？」

慈音は咄嗟に体育座りをした。

「また、慈音に逢えて嬉しいぞ。本当に…。」
上目遣いで慈音を見る。

「（だ、駄目だって…そ、そんな瞳しちゃ…。）お、俺も嬉しいよ…。」

「うん。」

コツンと、白妙の頭が慈音の肩に凭れかった。

「白妙…？」

「なんだ？」

「あ、あのさ…何時頃になったら、抱いていいのかな？なんて聞いていい？」

聞いた後で互いに顔を真っ赤にさせる。

「ご、ごめん…その変なこと聞いた…。」

妙に照れてしまつて慈音は白妙のいる方向とは逆に身体を向けた。

その背中を白妙はふんわり抱きしめた。

「（や、ヤバイ…白妙つてば、やっぱり身体も大人になつて…気持ちいいけど…地獄だよ…。）白妙…？」

「んっ？なんだ？重たかったか？」

「い、イヤ…そういうんじゃないけど、俺まだちょっとココにいるから、中に入つて休んでなよ。明日からまた、静香目指していかなきゃならないんだし…。」

少し振り向いて見た白妙の顔は悲しそうだった。

「えっ？ど、どうしたの？」

「そ、傍に居てはいけないのかな？と思つたんだ…すまない。」

白妙は、立ち上がろうとしたが慈音は思わず、引き止めてしまった。

「そ、そんな訳ないよ？」

白妙はにつこり笑つて再び慈音の横に座るとコツンと頭を凭れさせてきた。

「皆に、会えるのが楽しみだな…。」

「…う、うん、そうだね…ははっ（どうしよう…っていうか、めっちゃ可愛くなつて帰つて来たんですけど、この人…。）」「

結局、慈音は、厠に行くと言を付き、ようやく1人きりになったことでホッとしたのであった。

その夜、2人は寄り添って眠った。

闇からの誘いの為にいつも熟睡感を得られていなかった慈音であったが、この日はいつも以上に眠ることが出来なかった。

すぐ近くに白妙の顔があり、彼女の寝息が自分の鎖骨辺りにかかっているのだ。

（駄目だ、眠れない…。）

上下に動く彼女の胸元。すでに知っている柔らかい唇。

（触るだけなら…怒られないかな…。）

軽く彼女の顔を上に向けて自分の唇を重ねる。

「んっ…ふっ…。」

かすかに漏れる彼女の切なげな声。

慈音は彼女の頬、耳にキスの雨を降らす。

「んんっ…。」

柔らかい胸に触れ、その先端に触れる。

「んっ？…慈音？」

「ご、ごめん…。やっぱり、俺…君が傍にしていると我慢できないんですけど…。ゆっくりでいいから、…さ、最後まではしないから…触れていい？」

白妙は、暫くぼうつとした顔を見せていたが、ハッとなって下を向いてしまった。

「それは、頷いたってとっていいの？…白妙…。」

耳元で囁くと彼女の身体がビクツと小さく跳ねた。

「本当に好きなんだ。」

「私も好きだぞ…。慈音でなければ、私に触れることなど…許さない。」

2人は見つめ合い、微笑み合うと、深い口付けをした。

「けれど、言っておかなければならないことがあるのだ。」

「何？」

慈音は、白妙から、今の彼女の身体が借りのモノだと言うコトを聞いた。

彼女の本当の身体は、まだ天上界にあるということだった。

「思ったよりも、太夫に刺された傷から入った邪黒の毒が強かったみたいなんだ。」

慈音は、その原因である自分が辛かった。

「でも、帰ってきたかった。慈音、お前のところに…。」

少しはにかみながら言う白妙。

これが本当に彼女の身体ではないなんて信じられなかった。

「父である明王は、天上界の科学者で…人間の身体を組成することが趣味なんだ。」

「なんかめっちゃ、嬉しいんですけど…。」

慈音は素直に照れていた。

「そ、そうか？」

再会した日の夜、慈音は彼女を抱こうとして、彼女の関節に不自然な節のようなモノがあることに気付いた。ハッとして彼女を見つめた。頷く彼女に悟ってしまった。

彼女が人間の身体ではないということ。

「白妙の本当の身体が戻るまで、絶対、守るから。」

意気込む慈音。

「雑魚くらいなら、大丈夫だぞ？」

「イヤ、守る。…でさ…白妙の身体が元に戻ったら、」

「んっ？」

「昨日の続きしていい？」

お互いに顔を赤くする。

「ご、ごめん！忘れて！」

顔を背けてしまった慈音の袖を白妙は掴んだ。

「…白妙？」

「私に触れてよいのは、慈音だけだと言っただろ？」

2人で手を繋ぎ、寄り添って夜を過ごす。

（生殺しだな、慈音…。）

優しい寝息を立てる白妙の長い睫を見つめていたら、黒虎が言った。

（うるさいっ！）

（そうだ、黒はうるさい。慈音は、ちゃんと白妙が完全になるまで待てるさ。）

黒の笑い声が響く。

真夜中、白妙が寝入ってから、慈音はそっと彼女の横を抜けて一人外へ出る。

（すっかり、1人が慣れたな。）

（うるさい！！楽しみは先に残しとくの！！）

白妙を思い、自分を慰める。

「くっ！」

「何をしている？」

果てた瞬間声を掛けられ、慈音は固まってしまう。

「し…白妙？」

振り向くとそこには、首をかしげた彼女。

「あ、わわっ、イヤ…そ、その…。」

慌てて自分のモノを隠す。

そんな慈音のことなど気付きもせず、白妙はちよこんと彼の横に腰を掛ける。

「目覚めたら、いないから、不安になったぞ。」

可愛いことを言う彼女に、一縷の罪悪感を感じる慈音であった。

翌朝、休んでいた祠を出て出発しようとした二人の前に異質な気が迫ってきた。

「慈音…。」

「白妙は後ろに下がって…。」

2人の目の前に現れたのは、長い黒髪の美しい男だった。

「何者だ…祠の結界に入ってくるなんて…。」

男は妖艶な微笑を浮かべ口を開いた。

「初めまして…神の子よ。」

寒気の中に潜む恐怖心が芽を出す。

「夜叉の姫が戻ってきたことを知りましてね…さあ、姫一緒に参りましょう。」

一瞬のコトだった。

男は気が付くと慈音と白妙の間に立っていたのだ。

彼女の手を取り、その甲にキスをする男。

「こ、この！」

後ろに戟を回すと同時に2人が消えた。

「君に、姫は相応しくないよ。白虎の御子。」

慈音を見下ろすように男は上空で止まり、小脇に彼女を抱えている。

「白妙！！」

慈音の叫び声も虚しく、目の前の男と彼女は霧のように消えていった。

「う、嘘だ…。」

慈音は力なく大地に膝を付く。

握っていた戟が消え、慈音は手も大地に付いた。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ…。」

大地に吸い込まれていく慈音の涙。

「…二度も彼女を失うなんて…。」

大地を叩き続ける慈音。そんな彼に小さな声が届いた。

「慈音？慈音？」

あまりに小さな声だったので彼は中々気付かなかったが、ちょんちよんと自分の足を突いてくるモノの存在にゆっくりと顔を上げた。

「！！！！」

慈音が目にしたのは、わずが、10cm足らずの白妙だった。

慈音は彼女を両手で救い上げる。

「な、何？何コレ……」

自分の顔に引き寄せてマジマジと見つめる。

小さな白妙は、爪楊枝のような腕を伸ばして、そつと慈音の唇に身体を凭れさせた。

「よかった…慈音には、私が見えるのだな……」

2人は、再び祠の中に入った。

慈音は先程から出ている涙が未だに止まらず、悪戦苦闘しており、顔は真っ赤になっていた。

「慈音、泣き止んで欲しいのだが……」

「お、俺だって、止めたい。けど…止まらないっ！」

白妙は幸せな気分で慈音の肩に乗っていた。

「では、泣きながらでいいから聞いてくれ。」

白妙は、自分がこちらの世界に一刻も早く帰りたいと父神である明王に食って掛ったこと、しかし、本当の白妙の身体は復活などとしているわけはなく、反対されたこと。

それでも帰りたいんだと訴え続けたことを話した。

「慈音のそばに帰ってきたかった……」

明王は、無理矢理にでも白妙の肉体を奪って人間界に帰りそうな娘にある提案をした。

完全に白妙の身体が修復するまでの間、代わりの身体に入ること、本当の身体が修復できたら、人間界に送ることを告げた。

「明王神は、敵側が私を攫いにくることを分かっていたんだ。」

「……」

「あやつらは、六芒星の呪術に私という神の魂を宿す身体が必要だった。きつと、私が戻ってきたら、敵は動く。そう考えた明王は罠を仕掛けたんだ。」

慈音の涙は何時の間には止まっていた。

「偽モノの私の身体をやツラの手に落す。落ちた瞬間、私の魂は、このような姿となり、あの身体から抜け出すんだ。」

「白妙の身体、って、偽モノだけどアレはどうなるの…？」

「アレには、私の魂の複写が入っている。それは、神が仕掛けたものだからヤツラが気付くとは思えない。あの身体は、いずれ、ヤツラの結界の呪術の中心で贅とされる。」

慈音がため息を吐く。

「俺は、偽モノとはいえ、白妙が犠牲になるのはいやだな…。」
小さな手が頬に触れる。

「呪術の中心に一旦吸収されたモノは、取り出すことも、新たなモノを入れることも出来ない。私の本物の身体は安心して帰ってこれるのだ。」

「で、でもさ…。」

慈音は悔しそうであった。簡単に奪われたことが悔しかったのだろう、きゅつと下唇を噛んでいた。

「でも、この魂だけの存在となった私に慈音が気付いてくれなければ、明王神は、私をココに留めておくことをお許しにならなかった。慈音が私をこの世に留めてくれたんだ。」

「白妙…。」

抱きしめたい身体は今ココにない。その現実が少し悲しかった。

「そんな顔をしないでくれ。私は、慈音が気付いてくれてのが本当に嬉しかったんだ。」

ちゅつと小さな唇が頬に触れる。

「じゃあ、本当の白妙の身体が帰ってくるまで、どこかに行ったりしない？」

彼女を手の平に乗せる。

「慈音が望むなら…。」

つづく

前途洋洋

「駄目だ、俺じゃ入れない。」

甲村を離れた14歳の頃と比べると龍綺も随分と大きくなった。

今、彼と暁の目の前には、真ん中に亀裂の入ったそびえる崖があった。

ようやく1人が入るか入らないかの亀裂の奥に龍神の宝玉があると黄龍が告げた。

亀裂は、幅はあっても、高さがなく、背が伸びた龍綺が幾ら身をかがめても入ることが出来なかった。

その様子を見ていた暁が自分が行くと言い出した。

「あーだったら、ギリギリでだいじょぶ！行ってくるね！」

「えっ！（胸が悶えそうだけど……）擦り傷とかできるけど……。」

暁は結構頑固で、こうと決めたら中々引かないのだ。

「だいじょぶ！」

暁は、少し身をかがめて、横向きに亀裂の中に入っていった。

亀裂は中に入れば入るほど狭くなっており、暁は、体中に擦り傷を作りながら進んだ。

（暁、手を伸ばしなさい。すぐそこに宝玉が引つかかっている。）

玄武の亀が教えてくれた通り手を伸ばす。

指先が丸いモノに触れた。

（コレかな？）

相手が丸いせいで中々上手く自分の方へ寄せる事が出来ない。

暁の唸り声に待っている龍綺は気が気じゃない。

「暁！大丈夫か？」

「も、ちよつと、な、の……採った！」

ズリズリと音をさせて出てきた暁は案の定傷だらけで龍綺はため息を吐いた。

「りゅー！取れたよー!!」

嬉しそうな暁。

差し出された宝玉を受け取ると胸に押し付けた。

玉の色は、輝くような赤色だった。

龍綺の印の周りに赤色の刻印がされる。

「りゅー？嬉し？」

ニコニコと笑う暁。頬は擦り切れて血が滲んでいる。

「ありがとう、・・・でもせっかくの美人が傷だらけだ。」

龍綺は暁を抱きしめて彼女の傷付いた頬に唇を付ける。

「へへっ。りゅー？くすぐりたいよ？」

「だーめ、傷消すんだから、じっとして。」

龍綺が口を付けたところの傷が消えていく。

ふと胸元に目をやると服が擦り切れたりして、白い胸元にも傷があった。

（ココは、さすがに…。）

暁は龍綺の動きが止まったのを確認して、その腕から出た。

「あ…。」

「りゅー？あと2つだね！！嬉しいね！！」

クルクルと踊りながら自分のコトのように喜ぶ暁を見て思わず笑みがこぼれた。

「ああ、暁のお陰だ。」

暁はにこっと笑った。

「あんまり、はしゃぐと岩に足を取られるから、こっちにおいで。」

はつとして、暁はテトテトと彼の方へとやってきた。

ぴとつと龍綺に引っ付いて、彼を見上げてにこっと笑う暁に、龍綺

は、顔を真っ赤にして、視線を逸らしてしまった。

「りゅー？」

その外された視線の方に暁は顔を覗かせる。

「どしたの？どこか痛い？」

心配そうな顔。

龍綺は自分だけドキドキしていたことが少し恥ずかしく思ったが、

暁の頭をポンポンと撫でて、

「大丈夫。暁が笑ってくれてるから。」

「あーが笑うと、りゅーはだいじょぶになるの？」

「うん、そうだよ。」

暁はぱあつと明るく笑った。

「あーもね、あーも、りゅーが笑うと心がぽつと温くなるの！」
両手を広げて言う暁に龍綺の鼓動がとくと大きく打った。

「あ、暁…。」

「んっ？」

「口付けしていい？」

ぽつと彼女の頬が赤くなった。

それを見た龍綺の頬が緩んだ。

「暁、（可愛い…。）おいで、」

今度は、龍綺が両手を広げて彼女を腕の中に招き入れた。

ぎゅっときつく抱きしめると彼女の顎をくいと上に向けて彼女の
桃色の唇に自分のを重ねた。

柔らかい彼女の唇から、

「りゅー？…何時まで…ちゅーするの？」

と言う声が漏れた。

先程から、龍綺の口付けは、角度を変えて、離れては付けてを繰り返しており、一向に止まる気配がなかったのだ。

「んんっ！」

暁は言葉を無くした。

固定された頭、深くなる口付けに暁は戸惑いだした。

トントンと彼の腕を叩くが龍綺の口付けは深くなり、彼女の開いた
口の中に舌が侵入してきた。

「んんっ！…んんっ、」

彼を叩く力が強くなり、龍綺はハッとして彼女から唇を離す。

非難を含んだ潤んだ瞳が真っ直ぐ自分を見ているのを見て、思わず
噴出した。

「りゅー！酷い！！何故笑う！？」

腰を捕まえられているので、腕でボカボカと彼を叩く。

「ごめん、あまりに可愛くて…。」

カツと顔を赤くさせて暁が照れた。

「あー、可愛くないよ？」

「そういうところが可愛い。」

ちゅっとこめかみにキスを落とす。

「…さ、近くの祠に行つて、休もう。（ヤバイ、ヤバイ。押し倒すところだった。）」

この場所に来る時も化け物が出なかったわけではない。

亀裂の中に宝玉があると分かった時点で、龍綺はこの周辺に結界を張ってたていた。

この結界を外した瞬間、化け物が出てくる可能性は高い。

「一気に蹴散らすぞ、龍の小僧！」

暁の声で蛇が言った。

結界を解いた2人の前には、待ち構えていたような化け物。

（龍綺、お前は赤龍を手に入れた。念じるがよい、青龍と共に赤龍はお前の力となろう。）

龍綺が念じると右手に青龍剣、左手に赤龍剣が握られた。

敵は、難なく倒せた。

暁との絶妙なコンビネーションは秀逸で2人に敵う敵などいないようだった。

「大丈夫だった？」

「うん、全然！蛇さん頑張ってくれた！！で、暁も頑張った！！」
互いに笑い合う。

戦いながら、南の方角へ進んでいた二人は、祠にしては大きい結界の中にいた。

「明日は、甲村だね！りゅーの生まれたトコ。」

そこは、母の死んだ村。

自分を閉じ込めていた豪族の家のある村だ。

母のコトを思うと胸の痛む龍綺の表情を暁が覗き込む。

頬に手を当てて、顔を押さえた不細工顔である。

「ぶつ。」

噴出す龍綺。

ほつとする暁。

（玄武の御子が居れば、龍綺も大丈夫だ。）

黄龍は龍綺の中に眠る龍達に告げた。

龍綺は、甲村の風景に目を疑った。

栄えに栄えた豪族の屋敷は朽ち果てているのにも拘らず、田畑は緑豊かに生い茂っていた。

流れる水も美しく、子供達の笑い声も聞こえていた。

美しい田園風景の村の中を進む龍綺の姿に1人の老人が声をかけてきた。

「龍綺さま!!」

豪族の息子として、14歳まで暮っていた彼を知っている者もいるだろう。

「おおおお！龍神の御子が甲村に戻られた!!」

老人はその地にひれ伏した。

「ちょ、ちよつと!」

老人の声は、思った以上に大きく、傍で田畑を耕している村人もやつて来て同様の態度を見せた。

龍綺は啞然としていたし、暁は、きょんととして土下座した村人の顔を覗き込んでいた。

龍綺は、自分が出て行った後の村のコトを聞いた。

豪族の三浦が、龍の御子を息子としてではなく、自分の欲を満たすための道具として扱っていたことが公になったこと。

龍綺が自由になったことで神の怒りは消え、村には豊かな緑と水が
齎された事。

龍綺の母が命を犠牲にしてまで彼を助けた事。

それらの事実を龍神の社にいる姫巫女が真実として語ってくれた事。
全てを聞いた龍綺は、骸はないが母の為に村の人達が立派な墓を建
ててくれた事を知り、三浦一族を追放した事も知った。

「すべては、龍の姫巫女さまのお陰です。」

「…それは、国王の妃の？」

老人を始め、村の人々がみな口を揃えて言った。

「いえ、龍の姫巫女さまは、お妃様の元から、沙耶香さまへ代替わ
りいたしております。」

「沙耶香さまは、代々引き継がれる龍神の宝玉をその御身に引き継
がれた尊い方でございます。この先にある龍神の社にて、龍綺さま
の来られるのを待つておいでですよ。」

2人は、というか龍綺は村人に押されるように甲村をあとにした。

甲村から、社までは不思議なほど化け物が出てこなかった。

「りゅー？化け物でないね…。こんなにのんびり行くの初めてだね。」

「そうだな…龍神の姫巫女さんとやらの力が凄いらう。」

社まで続く道がキラキラと輝いていた。

新しい龍神の姫巫女が現れたと言うコトは、王妃はどうなったのだ
ろう、すでにこの世にはいないのかもしれない。

龍綺は、結界の中でそんなことを考えていた。

つづく

姫巫女の恋心

「よくぞ、おいでくださいました。龍神の御子どの。」

社に着くなり、出迎えの者がやって来て龍綺を中に通そうとした。

「あ、いや…どうも…暁、おいで。」

「はい。」

傍に寄ってくる娘を睨みつける社の者の視線。

「彼女は、玄武の御子です。」

龍綺の言葉に、使いの者は表情を一変させた。

「そ、それは失礼致しました。しかし、姫巫女さまは、龍綺さまが来られるのを一日千秋の思いで待っておられましたので、ココはどうかお1人でおいでくださいませんか。玄武の御子さまには、こちらの者がお部屋に案内致しますので…。」

龍綺だけを奥の部屋へ誘導しようとする。

「りゅー？あー待ってる。いつてらっしゃい。」

暁は屈託のない笑顔で龍綺に向かって手を振り、案内をする者の後に付いていった。

暁と別れた龍綺は奥にある大きな部屋に通された。

その部屋は香が焚かれており、いい香りがしていた。

「龍綺さま？」

か細い声が正面に垂れ下がる御簾の向こうからした。

「はい、沙耶香さま。龍綺さまが、やっとココに…。」

小さな影が立ち上がり、御簾を押しつけて、駆け出してきた。蒼くて長い髪をした少女であった。

瞳の色が、龍綺とは逆で、金と青であった。

少女は、かけて来ると龍綺に抱きついた。

「わっ！」

龍綺の胸ほどもない身長の子は龍綺の身体を抱きしめると顔を上げ

た。

「お会いしたかった…。」

「え…ああ…そうですか。あの…放してくれませんか？」

そっけない言葉に姫御子は、がっかりした顔でそつと彼から身体を放した。

「あの、白澤の御子から聞いたのですが、龍神の宝玉をお持ちですよね。」

龍綺は、さつさと本題に入り、暁の傍に行きたかった。

「…はい、窺っております。」

金、青、赤、白、黒、緑の6色を集めた龍綺の元には、あと、紫龍と銀龍の宝玉がなかった。

姫巫女が取り出したのは、紫色に輝く宝玉であつた。

「ありがとうございます。」

お礼を言つて手を差し伸べた龍綺の胸に姫御子は飛び込んだ。

「えっ？…あの…。」

戸惑う彼に姫巫女は言つた。

「龍神の宝玉を身に宿した者は、この国の王の妻か、龍神の御子さまの妻となるが運命。来るべき乱世がくる前に私を妻に迎えてくださりませ。…でなければ、この宝玉はお渡しできません。」

龍綺は呆然とした。

「はあ？」

「ですから、私を妻に…いえ、私は、宝玉を身に宿した時から龍綺さまの妻なのです。」

暁は通された部屋でじつと龍綺を待っていた。

「りゅー、遅い…。玉、貰えなかったのかな。」

通された部屋は、質素な何もない部屋だった。

日当たりもよくないこの部屋で、暁はじつとしていられなかった。

そつと、引き戸を開けてみると、出入り口には、大きな男が立っており、ギロツと彼女を睨んだ。

「何処へ行かれる。」

低い声には、あきらかな凄みが含まれていたが、暁はそれをものともしなかった。

「りゅーのトコだよ。遅いから迎えに行くの。」

出て行こうとする彼女を男は押さえ、部屋の中に押し戻す。

「どして、こんな事する？あーを閉じ込めるつもり？」

「龍綺さまは、今、沙耶香さまと大切な儀式の最中。邪魔をしてはなりません。」

「ギシキって？」

大男は、ニヤツと笑って戸口の外に出た。

「龍綺さまは、沙耶香さまの夫となられるのだ。玄武ふぜいが、龍神の御子の傍に居られるなど……。」

戸口は閉められた。

（玄武ふぜいだって……蛇が聞いてたら怒りそうだね。）

（亀さん、りゅーは、巫女さんの夫になるの？）

（昔から、龍神の宝玉を身に宿した者は、この国の妃か、龍神の御子の半身となることを義務付けられていると聞いているよ。）

（ふーん……夫って、家族だね？……りゅーは、巫女さんと家族になるんだね。……あーは、家族にはなれないの？）

（暁……）

（だって、家族は、一緒にいて当たり前なんですよ？あー、りゅーと一緒にいて当たり前になりたいよ？）

暁は立ち上がった。

「ちょ、ちょっと、何言ってるんだ？」

重たい着物を何重にも着ている巫女に抱きつかれ、龍綺は、押し倒される形となっていた。

よく見れば先程までいた人がいない。

「龍神の御子と巫女は結ばれなくては、この世に不幸が訪れるの

です。」

「わわっ！あ、あんた、姫巫女のくせに！どこ触ってんだよ！」

龍綺の股間へと伸びてきた小さな手。

「いつか、龍綺さまと結ばれることを祈って生きてまいりました。どうか、私と契ってくださいませ！」

押し付けてくる唇。

「お、お前！…んぐっ！」

暁は、引き戸を蹴り倒していた。

「あーは、ココが出る。」

大男は、思った以上に力のある暁に目を丸くしていた。

（玄武の御子をバカにしゃがって。）

「あ、蛇さんが怒ってる。聞いてたの？」

（当たり前だ。それより、暁、この社、清浄な中に悪意が満ちている。龍のガキと早く合流したほうがいいぞ。）

暁は、大男の顔面に蹴りを食らわせた。

「はい。蛇さん、出てこないでね。蛇さん出てきたら、殺しちゃう。」

（失敬な。）

暁は、廊下を走っていた。

「りゅー！」

一番奥の豪勢な引き戸を蹴破った暁は、押し倒されて口付けをされている龍綺を見た。

「暁！」

龍綺は嵩張る着物と姫巫女を押しつけた。

「龍綺さま！よろしいのですか！！宝玉は手に入りませよ！！」
鋭い目つき。

「りゅー！その人おかしい！黒いよ！！」

龍綺は、彼女の持つ宝玉が紫と黒色に鈍く光っていたのを見た。

「くそっ！黄龍！！」

（まさか、宝玉の中に邪黒の念が入っているとは！）

「浄化できるか！」

「あーも協力する！！」

2人は、身体の前で手を上下左右に動かし、印を切ると姫巫女のほうへと向けた。

すると、龍綺と暁の手の平から出された青白い光と金色の光が姫巫女を包み込んだ。

「ぎゃああああ！」

姫巫女は凄まじい悲鳴を上げてその場に倒れた。

何事かと駆けつけた者達は、龍神の剣を構える龍綺に只ひれ伏した。暁は姫巫女の体を布団に横たえると目覚めた彼女に問うた。

「どういうこと？あーに分かるように説明して。」

御付きの者達が場を整え、龍綺と暁は上座へと座らされた。

姫巫女は自分がしでかしたことにショックを受けていたのか青い顔のまま話し始めた。

「宝玉が、美雪さまから渡されたのは、半年以上前でございます。夢枕に美雪さまが御立ちになって…目覚めると手の中に宝玉があったのです。」

姫巫女は、上座に座る龍綺と暁に向かって言った。

床に付くほどに深く頭を下げ小刻みに震えていた。

「頭上げていいよ？おでこ、痛いでしょ？」

暁の声に姫巫女は顔を挙げた。

「…ありがとうございます…。御無礼ついにつかぬ事をお聞きますが、玄武の御子は、龍綺さまの仲間である以外、何者でもないですわよね…？」

縋るような、祈るような瞳が暁に向けられた。

姫巫女は、甲村で生まれた。

村の中では裕福な家庭に生れ落ちた。

彼女の親は出世欲が大きい人たちだった。

村の長である三浦に取り入ろうとする親に、自分は将来、龍綺と夫婦になると言い聞かされて育った。

しかし、三浦は、親の話には耳を決して傾ける事はなく、親だけでなく、一目見て、龍綺に好意を寄せてしまった沙耶香をも失望させた。

彼女は、龍綺が神の子であると知り、彼が里を去った後、龍神の巫女候補生として社に入った。

それは、彼との繋がりを求めているコトだった。

彼女の問いは、暁への警戒心が齎したものだった。

「？」

暁はその問いの意味が分からない。

「あーは、りゅーの仲間だよ？」

「でも、それ以上であることは確かだ。」

すかさず言葉を挟む龍綺に姫巫女は怯んだ。

「君が何を望んでいるのかは知らないけど、俺には、暁だけだから。」

「」

暁は隣できょんとしているが、見つめた彼の瞳が優しく笑っているようだったので彼女も何故かホッとしていた。

龍綺は姫巫女から宝玉を受け取った。

「本当に嬉しかったんです…龍綺さまと出会えて…自分が龍神の巫女で……。」

「姫巫女……。」

何かを言おうとした龍綺の言葉を遮った彼女は言った。

「最後の私のわがまを聞いてくださりませ。…美雪様を…美雪様を助けてください……。」

「お妃は生きていますか？」

「分かりません…でも、宝玉が私の元に転送されてきたということ

は…。でも私は、この宝玉を龍綺さまにお渡しするために私に託したのだと思っているのです。」

姫巫女は、龍神の巫女の頂点に立つ美雪のことを信じていた。

「もう少ししたら、龍神の玉は全部集まり、他の神の子も動いていきます。誰がどうして、邪黒なんかを呼び出そうとしているのか、どうすればいいのか…。あの王都に張り巡らされた結界の中にいずれは入るつもりです。あなた達は、社を中心とした結界の強化に努めてください。」

龍綺は促すように暁を立たせると社を出ることにした。

「りゅー？もう少し、ゆっくりしなくていいの？」

暁は、深く頭を下げる姫巫女を何度も振り返ってみていた。

「んー、暁には分からなかったと思うけど、あれ以上あそこにいると姫巫女が可哀想だからね。出来るだけ、早く離れたほうがいいんだ。」

暁は、繋がれた手をぎゅっと握り、龍綺の顔を覗き込んだ。

「りゅー？」

「ん？」

「ありがと…。」

ピタッと足が止まる。

「りゅー、あーのこと選んでくれた。違う？」

ぽつと赤くなっている暁を龍綺はにっこりと笑ってその頬にキスをした。

「そ、俺には、暁が必要だからね。」

2人は、後1つ『銀龍の宝玉』を求めて社を出て行った。

つづく

別れ道

「ココからは、めっちゃ大小様々な祠があるらしいで、」

ため息混じりに言うのは、祠や社の結界強化に明け暮れていた紅蓮である。

「この山を取り囲むようにいくつもの祠があつて、山のとっぺんに大きな社があるんだつて。」

この山は、山自体に神が宿ると言われている。

その社に行くためには2通りの道があつて、その道には、数々の祠が設けられているということだった。

「片道に、54の祠があるらしい。」

「雷紋くんが、この神山は、こちら側の防御の要だつて言つてたから今よりもっと強くしとなきゃいけないよね！」

地図を広げて可憐が言う。

「神山のはずやのに、なんやイヤな感じがするし。」

「それは、私も思う。だつて、この山の結界に入った時から、おかしいもん。山の中には、集落もあつて、祠の守人をしてくれてる人もいるつてことだけど、何かあつたのかもしれない……。」

全部で108つある祠を2人で回つていては、幾ら時があつても足りないのは、目に見えている。

「じゃあさ、私は、右の道行くから、紅蓮くんは、左の道を行きなよ。」

可憐が1つの提案をした。

しかし、紅蓮がそれを許すはずはなかった。

「あかん、決まっとるやろ!？」

「大丈夫だよ、社を出てもう一年以上経つてるんだよ?これ以上のんびり出来ないよ!」

紅蓮は結局押し切られるように可憐の意見を尊重してしまった。

「ええか!何かあつたら、絶対、絶対、俺のコト、朱雀のコト呼ぶ

んやで？」

「案外、しつこいよ、」

「何、言うてんねん！！可憐に何かあったら、死んでもた可憐のおとん、おかん、お兄に申し訳ないやろ！！」

紅蓮は、彼らに可憐を託されたのだと思っていた。

「…うん、分かってるよ。気を付ける。何かあったら、すぐ紅蓮や朱雀呼ぶから…、行ってきます。紅蓮兄さん！」

可憐に『兄さん』と呼ばれた、紅蓮の胸が一瞬キュツと痛んだ。

「お、おう、氣いつけてな、山頂の社で逢おう！」

2人は互いに手を振りながら、左右に別れて行った。

「ふう。」

大きなため息をついたのは可憐。

最初、この山に入らなければいけないと分かった時、紅蓮は、きっと自分のコトを心配して一緒に行こうと言うだろうと思っていた。しかし、できるだけ早くこの国の結界を強める必要はあるわけで、可憐は別々に行くことの必要性を感じていた。

自分を狭い世界の外へ導いてくれた紅蓮。

いつも自分を助けてくれていた彼に自分がどっぷり甘えていた事を彼女は感じていた。

（仲間であって、妹じゃないのに、甘えてちゃ駄目なんだ。）

一緒に旅を続けてきた時間の中で、紅蓮という存在がとても自分の中で大きいものになっていた。

旅を続け、雷紋、月凧と合流した時は、雷紋のリーダーシップと賢明なところに惹かれたが、彼は、月凧しか見ていなかった。

月凧は紅蓮の妹で、自分とは違いとても可愛らしい少女だった。

腰まで届く緩やかなウェーブのかかった髪と大きな目。

それでいて芯の強い心を持っている。

兄を失った自分は、月凧に嫉妬した。

紅蓮のような強くて優しい兄と、雷紋のような賢明な相手に大事にされている彼女に。

月風のように髪を伸ばせば、紅蓮は自分も彼女のように妹として大切にしてくれるのではないかと思った。

彼は何を置いても月風が一番大切で、それは揺ぎ無いものに思えた。紅蓮が優しくしてくれる度に兄を思っていた。

だから、彼にとって一番でない自分がとても悲しかった。

芳際と紅蓮は違う性格で、顔など似ているところなんかないというのに、彼女は、紅蓮に芳際を重ねていたのだ。

その事に気づいた時、自分がとても恥ずかしかった。

紅蓮が自分を叱る時、褒める時、それは兄と一緒にだった。だから混同していた。

旅を続け、一緒にいる時間が長くなればなるほど紅蓮は兄でなくなっていた。

彼が母・美麗のことの誤解していると分かった時、どうしても紅蓮の誤解を解きたかった。

母の優しさ、温かさを知っている可憐は、優しい紅蓮が母のことを憎んでいることが悲しかったのだ。

このまま、母親のコトを誤解していたら、きっと紅蓮自身が悲しむことになる。可憐は考えて、今回の旅の目的の1つに紅蓮の誤解を解くことを掲げていたのだ。

紅蓮の誤解が解けたとき、彼の中の朱雀が輝いたのを見た。

きっと彼は今まで以上に強くなるのだと。

その彼の傍で、強くなっていく彼を見ていたかった。

でも、それも限界だと思った。

「可憐は大切な仲間で、妹みたいなもんや。」

紅蓮の里を訪ねた時、村の老人に紅蓮は自分のコトをそう言った。

妹みたいな存在であっても、本当の妹にはなれない現実。

紅蓮の自分に対する気持ちを知った可憐は、自分が紅蓮を兄ではなく、1人の人として見ていたことに気付いたのである。

これ以上彼と旅を続けていくことは、彼に自分の思いを知られること、つまりは彼を困らせてしまうことになると思つた。

（もつと、強くなつて、紅蓮のコトをただの仲間だと思えるようにならなきゃ……）

彼女は考えた結果、別々の道を行かなければと思つたのだ。

行く町や村で紅蓮が想像以上にモテルことを知つた。

背が高く、出会つた頃よりも随分遅くなつた紅蓮は、年上の女性から声を掛けられ宿屋に帰つてこない日もあつた。

（自分では駄目なんだ。）

可憐はそう思つた。

そう思つた日の夜。1人きりの夜。

可憐は伸ばしに伸ばした髪をばっさりと切つた。

朝歸つてきた紅蓮はその頭にびっくりしていたが、可憐らしいと言つた。

出会つた頃みたいだなと言つた。

（このままで居られるように、私は強くならなきゃいけない。）

可憐は歩き出した。

神山といわれるこの山が綻び始めていることを察した雷紋の言葉。

「この山の結界が崩れると後々大変なことになります。この山の祠の数は、人の煩惱の数。その祠が邪黒の氣にやられて綻び始めている。」

このままでは、理性を失つた人々が増えるばかりだと彼は言つた。なんでもないことに怒り出したり、暴れたりする人が増えてきたと紅蓮は言つた。

実際問題、立ち寄つた町や村で頭を悩ませている軍人や、役場の人を何人も見た。

「一刻も早く、祠を清浄にしなくっちゃ。」

紅蓮と別れた後、可憐は忙しく動くことで紅蓮への思いを断ち切ろうと考えていた。

一方、可憐と別れて歩き出した紅蓮は、可憐の様子が違っていたことを分かつていた。

「ありや、何かを決意した目だぜ。」

朱雀が言った。

「その決意が何かなんて、俺に聞ける訳ないやろ？」

何時の頃も自分には、月風がすべてだった。

母に捨てられ、父親を亡くし彼にとって妹の月風だけが世界のすべてだった。

彼女の幸せが自分の幸せだと考えていた。

賭博場に人質のように捕らた月風を救うため、化け物を倒してきた。血まみれになつて戦う自分を彼女には知られなくなかった。

「血生臭い……」

化け物を倒し、散らばった金を手に村に帰ると、村の娘達はこぞつて紅蓮をそう言った。

借金を返すためがむしろに化け物を倒してきた紅蓮を人々は遠巻きに見ていた。

それは、彼が一人で頑張らねばならない原因を作ったのが自分達だったからだ。

彼の母親を騙し、飛蝶街に閉じ込めた。

その結果、彼の唯一の存在意義であつた月風も攫われた。

やがて、仲間を作り里を出て行った彼を村人はまた遠巻きに見つめていただけだった。

その彼が帰ってきた。

何倍も逞しく強くなつたように見えた彼に村人達は恐怖さえ感じていたようだった。

その畏怖の念が彼に真実を述べる結果となつた。

（可憐の言うことは本当だった。）

彼女を仲間として信じていると思つていたが、母のことを言われると反抗した。

彼女を鬱陶しい存在だとも思つた。

しかし、そんな紅蓮の態度にも負けず、可憐は彼に真実を伝えようとしてくれた。

母への誤解が解けた時、自分の中の朱雀をようやく自分のものにした気がした。

可憐は母親というものをとても大事にしていた。

その思いを自分にも分かつてほしかったんだらうと紅蓮は思った。自分のコトに懸命になってくれる彼女。

「いい妹さんを持ったな……」

村を離れる際、ぼそつと掛けられた言葉。

たぶん可憐には届いていない声。

その言葉を聞いた時、ぞくりと心を何かが走り抜けた。

『妹』

それは、彼にとって何より大切な存在だった。

彼女さえ居れば、自分のコトなどどうなってもよかった。

どんなに傷を負っても彼女が自由になれるなら。

そう思っただけで頑張ってきた紅蓮の思いを月風も分かってくれていた。

しかし、彼女は妹で、好きな相手を見つけてしまった。

はつきり言っただけで面白くなかった。

自分とは全く違う性格の男を好きになるなんて、と。

しかし、キマイラに襲われた時、雷紋は身を挺して月風を庇い、大

怪我を負った。

その時に、自分の役割は終わったんだと感じた。

だからその後に出会った可憐は、自分に対して与えられた使命だと思った。

兄を亡くした彼女にとっての兄になろうと決めたのだ。

いつか、誰かが彼女の本当の支えになるまで。

しかし、一緒に旅を続け、少女から大人になって行く彼女を見てみると自分の思いが、『妹』として彼女を見ていないことに気付いてしまった。

一緒にの部屋で寝て、彼女の寝息に居た堪れなくなった時も合った。

邪な自分の思いを断ち切ろうと町で、村で誘ってきた女と肌を合わせたこともあった。

（こんな行為は、彼女を汚しているだけやないんか？）

朝歸りの自分に非難の目を向ける彼女に冷たく当たる時もあった。このままではいけないと、自分の想いが変化していることを彼女に告げようと思った矢先、彼女から山の攻略について話があった。まるで、自分の邪な心を見抜かれているような申し出であった。そして、彼女があくまでも自分に『兄』を求めていることを知った。思いを断ち切るにはいい機会だと自分を納得させ、今に至っているのだ。

（アホやな…振られても何しても、キチンと自分の思いを伝えへんなんて…。）

可憐と別れた後、朱雀は呆れたような声で言った。

「可憐が望むのが『兄』なんやから、しやーないやろ…。」

（ふん、勝手にしたらええ？…神山とはいえ、気を引き締めるよ。この山は悪意に満ちている。）

ピリピリと肌を刺す感覚。

この神山は病んでいた。

「馬鹿みたいね、あんたたち。」

1人山道を登っていた可憐の前に現れたのは数人の山賊だった。

「女がひとりで散歩とは、いい身分だな…自分がどうなるかなんて覚悟の上か？」

リーダーらしき男は、可憐より少し年上と言う感じで、鋭い眼光を持っていた。

「神山だから、化け物が出ない。そして、参拝に来た人達の財布を狙う。そういうこと？」

「狙うのは、金だけじゃねーよ。あんたのような女も獲物だ。」
可憐はため息を吐いた。

「あんた達が、そんな思いでこの山に入るから、祠の結界が歪んで

きてるのね。」

「何を言っている…。」

「あんた達は神山の聖域を汚してるの！分からないんでしょ？自分がすでに化け物に捕り憑かれていますってこと…。」

可憐の瞳には山賊の彼らの中にどす黒いものが渦を巻いているのが分かっていた。

可憐は、その何も握っていない手から一本の剣を出現させた。

神々しいまでの光を放つ剣。

そして、深い緑色に変わる髪と明るい緑の瞳。

「な、何者だ…。」

「あんたらの中に潜む邪黒の心…滅してあげるわ。」

つづく

吸い取られる感覚

「すまなかつた……」

山賊の男達はみな若く明らかに子供までいた。

「どういう理由であれ、人に暴力をふるって自分達の欲望を果たそうとするには、ココは清浄過ぎるの。だから、簡単に汚される。」

麒麟が語る言葉を口にする可憐。

「俺は、道義。」

リーダーをしていた男は、可憐と同年だった。

山の麓にある村に住んでいたが、化け物に住むところを奪われた。命からがら逃げてきた彼は、数名の村人と共に、山に籠り、生きていくために山賊になった。

「働き盛りの父親や、男達はみな国の徴兵に捕られた。残されたのは、女子供と病人と老人、そして、徴兵年齢に達してない俺達だけだ。」

「麓にあった村なら、結界の力を強くしたから、化け物は侵入できないよ。村に戻りなよ。」

可憐は紅蓮と共にした最後の結界を張る作業を思い出していた。

「ほんとか！……って、可憐は何者なんだ？」

戦いが終わると彼女の神と瞳の色は黒に変化した。

「内緒。けれど敵じゃないよ。」

道義に連れて行かれた無理矢理に作られた集落には、彼の言う通りの人しかいなかった。

「この山は今、あんた達のような欲望以外に何かが原因となって狂ってきている。麓の村より危険かもしれないんです。一刻も早く村に帰ってください。」

戸惑う人々。

「ココに来るまでに4つあった祠全てがその力を失っていました。社には、行かれましたか？」

誰もが皆首を振る。

「そう……。」

彼女は立ち上がった。

「可憐、何処に行くつもりなんだよ。」

「社を目指します。それが私仕事だから。」

「もう、日も暮れた！危険なんだたら、泊っていけよ。」

夕闇が辺りを包んでいく。

可憐ははじめての山の夜を過ごすことになった。

身を寄せ合って暮す人々の集落から少しはなれた大きな木の上で休むことにした。

青暗い夜空には、まん丸の月が大きな雲に隠れては顔を出していた。この山の反対側に紅蓮がいるんだと思いを馳せる。

（どうぞ、紅蓮が無事でありますように……。）

月に祈る彼女は、突然大地を見下ろした。

（可憐。）

麒麟が彼女に声をかけた。

可憐は木の下を行く影に意識を集めた。

（この山の神気だよ、）

ちいさな青白い炎が大地に転々とあり、それがゆっくりと西の方角に動いている。

（何処に？）

麒麟が不安そうに言う。

（後を追うわ。）

足元を照らす光のような炎は、何かに操られているようだった。

（あの神気は、この山の祠の元になるものだよ。一個の祠に対して、あの神気の炎は、2つから3つ入ってるんだ。）

（じゃあ、私が治しても、その傍から抜けていくんじゃ意味ないじゃない！）

（うん、だから、止めなきゃ！！可憐、頑張つて！）

いつも応援だけは、他の神獣に負けない麒麟であった。

（駄目だよ！麒麟も頑張るの！！私だけじゃ、何時まで経っても強くないんだから！）

可憐が向かった先には、月の光の差し込む場所があった。

神気はその方向に向かっていているようで、彼女は目を凝らした。

（あれ何だろう？）

青黒い蠢くものがその月光の下にあり、青白く光る神気はその蠢くものに吸い込まれていく。

（可憐！アレを止めないと…。）

麒麟が声を出す。

可憐の肌を刺すような禍々しい気配が黒い塊から発せられていた。神気を取り込んだその物体は、倍々に巨大化しているようだった。可憐はすぐさま剣を抜き、月光の下その物体に切りかかった。

月明かりが木々の間から歩く紅蓮を照らしていた。

可憐が自分と違う道を選んだことが彼には思っていた以上に辛いものだった。

（グジグジすんなよ…。）

「あー…？別に…まだ、4つやったよな…祠の修復…先が長いな…」

「

紅蓮は少しでも可憐の負担を減らそうと寝る間も惜しんで先を急いでいた。

大急ぎで自分の方の祠の楔を終えて、今は可憐の道にある祠の楔を行っていた。

しかし、いかな紅蓮でも疲れはピークを迎えていた。

（社を越えて、可憐の取り分を上から減らすつもりではな。）

「うつさい…ほら、次見えたで。」

紅蓮は、着実に可憐へと進んでいた。

（可憐！大丈夫！！）

蠢く青黒い物体は思った以上に手ごわい相手だった。かなりの氣を込めないとダメージを与えられないのだ。

（麒麟！大丈夫？）

（可憐こそ！！僕のコトは気にしないで！！固いけど、切れないわけじゃない！！がんばろう！可憐！！）

お互いを励ましあう。

麒麟は、ついこの間まで、戦いにおいて自信がなく、戦いにおいては消極的であった。

それに比べて、可憐は何においても、前向きで、攻撃的な考えを持っていた。

『攻撃は最大の防御である。』

それは、実の兄、芳際が剣の師匠から言われた言葉であった。

兄が信じた剣の道は、その懸命に修行をする兄を見て育った彼女に培われていた。

戦いに消極的な麒麟と積極的な可憐は戦いにおいて息が合わず、中々成長をしなかった。

しかし、紅蓮と別れて一人で山道に行くことに決めた可憐に麒麟は彼女の覚悟を知り、彼女の心に答えようとする想いが強くなってきたのだ。

可憐は麒麟の声に答えるように最大の氣を込めて蠢く物体を切り裂いた。

悲鳴を上げて散りじりに消えていく敵。

可憐は呼吸を静かに整えていた。

（私は、紅蓮がいると甘えてしまう。兄さんの影だけを彼に重ねていたと思ったのに、それができなくなっちゃった。）

1人の青年として紅蓮を意識してしまった以上、自分を妹だと思っ

て接してくる紅蓮の傍にいることは辛い。
ならば、せめて彼や、仲間達の足手まといにならないように強くなりたい。

神の子として、1人の戦士として紅蓮の傍で居ることを望もうと可憐は考えていた。

（可憐はもつと強くなる…。）

麒麟はそう彼女の決意を感じて確信した。

（身体、汚れちゃったね…。）

可憐の身体には断絶魔の悲鳴を上げながら消えていった物体の返り血が少しであるがかかっていた。

（うん、でも、先を進むことにする。さっきの化け物がどこの祠の神気を吸い取っていたのかわからないんだもん、）

（あの山賊たちは？）

（大丈夫…彼らは、山を降りるわ。）

この山が彼らの里以上に危険であることは彼らに伝わっているはずだと可憐は思った。

休みながらも、山頂に向けて歩く可憐に異変が起き始めたのは、8日が過ぎた頃だった。

ほんの少し身体を起こすだけで息が上がる。

顔色も悪く、一步も進めない時もあった。

（可憐、紅蓮を待とう？なんか、変だよ？）

今の可憐にとって紅蓮の名を出すことは逆効果であった。

「駄目！！紅蓮に助けを求めちゃ！仲間として認めてもらうんだから！！」

可憐の行ってきた祠の修復はあと少しを残すのみとなっていた。

（あと、少しなの…それを終えれば…神の子として出遅れた私を皆きつと認めてくれる。紅蓮の保護下から出られるの…。）

（だれも可憐をそんな風に思っていないよ？可憐はよくやってるよ？）

おかしいくらいに意固地になっている可憐の変化。

（どうして？どうして、可憐？僕の声が届かないの？君の心はこんなに紅蓮を求めて泣いているのに！！）

可憐が膝を付いて倒れた。

（可憐！！）

可憐が突然苦しみだした。

「痛っ…痛い！」

それは、可憐の身体についた化け物の返り血が起こす痛みだった。どす黒く腕についた血は、青黒く鈍い光を出しながら全身に広がっていく。

（可憐！可憐！！このままじゃ、可憐の身体が壊れちゃうよ！彼女が死んでしまう！！）

化け物は可憐の身体を痛めつけていた。

神獣の宿る彼女の魂を傷付けることは出来なかっただろう。

どす黒く変化していく彼女に付いた返り血は、見る見るうちに範囲を広げていった。

「あああああっ！」

可憐が苦痛に満ちた声を上げた。

青黒い物体が、彼女の身体から剥がれ落ち、空中で球体となった。

（可憐！）

大地に伏せた彼女は、流延と涙で身体をピクピクと震わせていた。

「馬鹿な娘だわ…。」

球体はグネグネと動き、人型をとった。

（黒尽くめの女！）

麒麟の声に可憐が僅かな反応をしめした。

「な…何故…神山に……入れるの…。」

微かな声を出す。

「愚かな人間どものお陰だね。ヤツラを村から追い出し、窮地に陥れば、山を汚す行為をするに決まっている。ヤツラを介して私はこの山に1つの塊として存在していた。神気は、御館様の力を増幅させるために集めていた。でも、まあ…こんなに早く神の子が現れるとは思わなかったけどね。」

女はふっと鼻で笑った。

「神気を取り込んで、我が力に変換した私の身体をお前ごときが打ち破るとはね…。でも、私はたった1つの細胞だけ復活できるんだよ。ずっとお前の外側に張り付いて、お前が麒麟の力を使って、祠を修復しているのを見ていたよ。ちよつと、細工もしたけどね…。」

「細工？」

「そう、お前の身体がこの神山の聖なる氣を吸収できないように膜を貼らせて貰ったのさ。祠を修復するたびに力が抜けていったらう？ 神山に居るのに辛かっただろう？ 今、お前の身体的生命力は、ほぼ空に近い。再びお前の身体に力が戻る前に死んでもらうよ。」

女の爪が音を立てて伸びた。

女はその爪を舌なめずりしてほくそ笑んでいる。

「さて、何処から刻んでやろうか…。」

可憐は指一本すら動かせなかった。

大地に伏せた状態でなすすべもなく命が終わるのを待つしかなかったのである。

女が可憐の元へゆっくりと歩み寄る。

可憐の中の神獣も彼女が動く意志を示さなければ動かせることはできない。

（可憐！可憐！！動いて！動こうとして！！力を貸すから！！）

可憐は閉じることもできない瞳で女の足を見ていた。

「さようなら…麒麟の御子。」

つづく

契り

雷紋の変化に戸惑いながらも月風は自分の思いを押し留めていた。
(きつと、からかわれたんだ。)

コレが彼女の辿り着いた結論だったのだ。

真面目で、頭のいい雷紋が一年近く会わないでいたらすっかりかっ
こよくなってしまうていた。

相変わらずの強気な口調と優しい眼差しであったが、静香の街の年
頃の娘達の中で彼はあつという間に人気者になってしまった。

今日も宿屋に彼を訪ねてくる娘達がいた。

食べ物やら、着るモノやらを彼に差し入れしてくるのだ。

そんな状態を彼は少なからず嫌がっているようで、

「ごめん、受け取れない。俺には、彼女しかないから。」

と、そんな断る理由として月風は使われているだけなんだと思っ
ていた。

雷紋は雷紋で、白澤の世界からこっちに帰ってきて、月風と心を通
じ熱い抱擁と口付けまで交わしたのに、何故か他人行儀な月風に戸
惑っていた。

(俺、やりすぎた?)

街の女の子達が宿屋まで押しかけてきた時には、月風はびっくりす
るほど冷静に、雷紋の相手として振舞ってくれるのに、彼女達が見
えなくなると同時にさつと離れてしまうのだ。

「なあ、月…」

「雷紋く…、あつ、ごめん、何？」

「い、いや、そっちが先でいいよ？」

「この前言ったでしょ？結界の薄いところと濃いところ。」

月風は雷紋のいないあいだ、結界の周りをくまなく調べ、力の弱い
ところを割り出していた。

「あれ、どうするのかなって…。」

「うん、あれは近いうちに見に行くよ。濃いココら辺より大分、中の様子が覗けそうだし。敵の動きも大分見えてきたけど、確証が欲しいんだ。」

雷紋が考えていることが月風には分からなかった。

「とりあえずは皆が帰ってきてからじゃないと、辛いかな。」

真剣に話す雷紋。

彼が頼りにしているのは、龍綺や紅蓮、慈音という男の子達。

自分以外の女の子達も攻撃力に優れている。

きっと皆の中で自分は一番の足手まといだ、だから、そうならないように頑張ってきたが、雷紋が帰ってきた以上、自分のすべきことを見失っているように思っていた。

「月風には、これからもっと頑張ってもらわなきゃいけないから、大変だと思うんだ。」

「えっ？」

自分が頑張る必要があるのだろうかと彼女は首をかしげた。

そんな彼女を見て雷紋は優しく笑って彼女の肩を引き寄せると、額に口を寄せた。

「あの結界の中で結界を張って、皆を守るのは月風だけなんだからさ。もっと自信持っていよ。皆頼りにしてるんだから。」

「頼りにされてる？」

今度は思わず噴出す雷紋。

「当たり前だろ？俺なんか、多少弓が出来るくらいで、大した戦力じゃないんだ。月風に守ってもらわないとすぐにやられちゃうよ。」

ははっと笑う雷紋の胸の服をきゅっと掴む月風。

彼の言葉だけで失われていた自信が蘇ってくる思いだった。

「ありがとう…いつも、いつもね、雷紋くんは私に自信をくれるんだよ。…大好き。」

彼女の気持ちに雷紋は堪らずに強く抱きしめた。

「駄目だ…。」

「…な、何？…どうしたの？」

雷紋は足早に彼女を部屋に連れ込むとドアをしめるなり、再び強く抱きしめて彼女の後頭部を固定すると深い口付けをした。

「ら、…んっ…雷紋…く…ん…。」

「俺も、俺も大好きだ。信じてよ…月風？」

「…私は、もつと好き。」

顔を真っ赤にして俯く月風。

雷紋は彼女の身体を持ち上げた。

「きゃっ！」

彼女をゆつくりと寝台の上に横たわらせる。

月風の体の上に雷紋の重さがかかる。

「ら…雷紋…。」

再び降りてくる唇。

「月風の全部、今…貰っていい？…月風の全部が欲しいんだ。」

月風は彼の首に腕を回し、真っ赤な顔で静かに頷いた。

「雷紋、雷紋…。」

自分と呼ぶ声に彼は目を覚ました。

辺りはすっかり日が暮れて灯りの付いていない部屋の中彼は身体を起こした。

柔らかく、温かい感触が腕から離れることに一抹の不安を覚えたが、愛しい人はまだすやかな寝息を立てている。

そつと寝台を抜け出し、部屋のテーブルにあった蠟燭に灯りをつけた。

「何だ？聴…。」

大きな犬が暗闇からあわられた。

「冥界の方が忙しくなってきた。俺達に帰れと親父様が言ってきたんだ。」

続けて、戎が言った。

「流刑島に閉じ込められていた魂がようやく浄化されて、冥界に辿

り着いたみたいなんだ。」

流刑島で邪黒の企てに利用されなくなった囚人達。

彼らは生きながら地獄を味わわれ、魂そのものが穢れてしまった。冥界でその魂を来世に送るには、あまりにも邪黒の穢れが強かったため、その浄化に時間がかかっていたのだ。

「魂の半分は、邪黒の元に飛んでいったけど…半分は救えたんだ。」

「じゃあ、冥界は忙しいな…。」

「もつと雷紋や月凧の傍にいたかったけど…。」

雷紋はため息を吐いて頭を撫でてやった。

「邪黒が狙っているのはこの世界だけじゃない。ヤツがもつとも手に入れたいの、冥界であるって話もあるんだ。人の生死をつかさどる冥界神王様を守るこそ、お前達の使命だよ。」

3匹はくうくうと切ない声を出した。

「雷紋が、月凧と結ばれて人として生きるのは、少し淋しいけど…2人が幸せなら俺らも嬉しい。また、絶対来るから、遊んでくれよ？」

3匹が消えた後、雷紋は再びスヤスヤと眠る月凧の横に身体を沿わせた。

自分が人となるためには、自分と同様の力を持つ神の子と契る必要があった。

しかし、雷紋はそんなコトなど忘れていて、ただ彼女を抱きしめていたことに苦笑した。

（大好きだ…。）

彼女の身体を抱き寄せて眠る彼女の額に口付ける。

「んんっ…。」

ぎゅっと抱きしめたせいだろう、月凧が苦しそうな声を出し、うつすらと目を開けた。

「おはよう…。」

温かい腕に包まれて目覚めた月凧はかあつと顔を赤くした。

「…お、おはよう…って、暗いよ？」

雷紋の唇が額から、瞼、頬へと下りてきた。

「んっ、雷紋くん…。」

「んっ？何…。」

「て、手が…、そ、それに…お、お腹に…。」

彼女の顔が益々赤くなつたことを雷紋は悟つた。

自分の正直な体が彼女に興奮を悟らせたのだ。

そして、雷紋の手は、素肌の背中を滑つていく。

「うん。…月風の中に入りたんだって…。」

雷紋の熱い口付けに月風は何も考えられなくなっていた。

（この助べえが…。）

スヤスヤと眠る月風をよそに外の空気を吸いにベランダに出た雷紋に声が掛かる。

（男ですから…。でも、想像以上に気持ちよかつたよ…クセになりそうだ。）

神の子の中にいる神獣は、彼らが誰かを愛する時、意識の奥深くに眠る。

人を愛し、抱き合うという行為はその人の心がさせるものだから、

神獣は邪魔をしないのだ。

しかし、彼等の魂は確かに誰かを愛し抱いたという事実が刻まれているため、白澤はぼやいたのだ。

（だらといって、迦陵頻迦の御子は、気を失つておるではないか…。）

（…ちょっと、止まらなかつたんだって…、恥ずかしいから、これ以上言わすな。）

雷紋は月を見上げる。

月の光が彼の額にある神鬼眼を照らす。雷紋は二つの瞳を閉じた。彼の視界が早馬のように駆けていく。

（龍綺は、あと1つで玉があつまるのか…。）

視界に広がる景色が変わる。

（慈音は、白妙と無事出会えたんだな…でも、あの白妙は…まだ不完全だな…。無理をさせられない…。）

景色が山を映し出す。

それは、地図の上でしめした神山。聖なる山。人々の願いと祈りの込められた聖地。

その山のもう少しで山頂と言うところで雷紋は思いがけない光景を見てしまった。

大地に伏せ、力なく目を見開いている可憐。

そして、黒尽くめの女。

（可憐…！可憐…いけない！起きるんだ！）

雷紋は握っていた手すりに爪を立てた。

（何故だ、紅蓮はどうしたんだ！！）

山の中を掛けていく視界。雷紋は走っている彼を見つけた。

（紅蓮！！）

彼に語りかける。

走っていた紅蓮が足を止める。

（…雷紋？）

（止まらなくていい！！この先、南西に少し山を下れ！！可憐が危ない！！）

（何やて！！）

紅蓮が駆け出した。そこで、雷紋の追跡が終わる。

雷紋はその場にしゃがみ込んだ。

激しい息切れに涙、嗚咽を繰り返す。

（無茶をする…神鬼眼をまだ使いこなせていない者が、先方で声を飛ばすなど…イズナを使うより体力を消耗するというのに…。）

雷紋は意識を手放した。

（未熟者めが…。）

目を覚ますと月風が泣いていた。

「ら…雷紋くん!!」

目を覚ましたら、雷紋の姿が寝台ではなく、捜していたら、ベランダで倒れていたのだ。

月凧が焦るのは仕方のないことだった。

「月凧？」

愛しい彼女の姿が月明かりに照れされている。

首筋や胸元に付いた所有の証が彼の視線に入り、笑みがこぼれる。

「な、何笑ってんのよ!!」

ぽかっと胸を叩かれた。雷紋は身体を起こし、彼女を抱きしめると一言謝った。

「…!!」

雷紋は先程まで見ていた可憐の危機を思い出した。

「どうしたの？」

不思議そうに訪ねる月凧に可憐の危機を知らせる。月凧は両手で口を塞ぐ。

「もう1度、見てみ…っ。」

神鬼眼は閉じていた。額に痛みが走る。

「大丈夫？」

心配そうな顔の月凧。

「だ、大丈夫だ…。」

「ぐ、紅蓮兄さんを信じよう？兄さんはきっと可憐ちゃんを助けるよ!!」

涙目で強く兄を信じている瞳を向ける。

「ああ…紅蓮は可憐を絶対助けてる。」

雷紋は月凧を抱きしめ、月凧は雷紋を抱きしめた。

つづく

闇の儀式（前書き）

痛々しい表現があります。
短いです。

闇の儀式

白妙の偽モノの身体を攫ったのは、芳崖であつた。

彼は、彼女の身体を王都の宮殿の中心である中庭に立たせた。

「怖くはないのかね…夜叉の姫。」

「私の命など、取るに足らん！お前の思うようになどなりはしない！」

くいつと顎を上に向け、その唇を塞ぐ。

「強気な女性は嫌いじゃないよ…。梓欄…姫の用意を…。」

黒尽くめの女が現れた。

彼女は頷くと、白妙の身体を自分の身で包み込んだ。

女の体は解けるように彼女の体に吸い込まれていく。

吸い込まれていく体は文字となり、白妙の身体に言葉が刻まれていく。

彼女は激しい痛みの声を上げた。

その激痛は彼女の瞳から血の涙を流させた。

その様子を冷めた目で見つめる芳崖。

彼女が叫び声を上げる度、彼女の足が血飛沫を上げて地面にのめりこんで行く。

腰まで彼女の身体が沈んだ時、彼女の両手が左右に開かれ、大地に縫い付けられた。

白妙の両手から血が流れ、大地に吸い込まれていく。

「苦痛に歪む顔はそるものがあるね…。」

ずっと彼の長い指が彼女の頬をかすめ、血の筋が出来る。

途端に彼女から大きな悲鳴が上がった。

「来たか…。」

振動する大地。

白妙の身体は足先から何者かに喰われていった。

大地に黒い筋が出来、彼女の身体に向かつていく。

黒い筋は、白妙の身体に刻まれた言葉と同化し、彼女の身体を真っ黒にした。

しかし、白妙の体への侵攻はふと止まった。

その様子に芳崖は苦笑を漏らし、大きな笑い声を響かせた。

「…なるほど…明王め…。」

芳崖はその場を立ち去ろうとした。白妙に絡みつき文字となっていた女が再び姿を現す。

「御館さま、申し訳ありません。」

ひれ伏す女は儀式の失敗を告げた。

いつも余裕で笑っていた赤い唇の横を汗が流れる。

「な、何ゆえ、邪黒の神の一部がこの世に現れなかったのか、私には、」

ふつと芳崖は笑いを止める。

「呪術は失敗だ。その身体は夜叉の姫ではないらしい。」

「ま、まさか!？」

くいつと、大地に取り込まれた白妙を見ると芳崖は示した。

「明王の仕掛けたものだろう、その姫の身体が傷付く度に、大地に聖なる氣が放たれている。地下に潜む魔物は今頃、干からびているだろう…。」

「そ、そんなっ…ということとは…。」

「この地を再び闇に染めるには、20年はかかるということだ…。」

黒尽くめの女はへたり込んだ。

「で、では邪黒さまの復活は…。」

「他の手を考える。」

「御館様…何処へ…。」

「自室に戻る。」

女は崩れるように大地にひれ伏し、泣き出していた。

芳崖は自室に戻ると部屋の戸に施錠をし、呪文で何者も侵入できないようにした。

大きな床の間の掛け軸の後ろに、人一人が入れるだけの小さな扉があった。

芳崖はその扉を開け、中に入ると再び呪文をかけた。

小さな扉の中には地下へと続く階段があり、芳崖は歩きたびにゆらゆらと揺れる足元の青白い炎が彼を導いていた。

彼が辿り着いたのは、大きな洞窟だった。

その場所には僅かな湿り気があり、階段の正面には大きな氷の塊があった。

氷に刺さるようにある松明に青い炎が灯り、氷の中に存在する１人の人間を浮かび上がらせた。

金糸銀糸で織り上げられた着物が浮かび上がり、足元まで届く豊かな髪は、氷の中に閉じ込められ、風に靡くこともできない。

美しいその人は、氷の中で安らかな寝顔をしていた。

「美雪……」

芳崖から漏れたその人の名。

それは、この国の王妃であり、龍神の巫女であった女性のモノであった。

つづく

紅蓮と可憐

「可憐！！」

紅蓮の叫び声が薄れ行く意識に僅かではあるが届いていた。

その声に答えたいが声が出なかった。指一本でさえ動かせることはできなかった。

ただ、自分を今にも切り付けようとしていた殺気は消えていた。

「朱雀の御子！何故！お前まだ向こう側に……。」

紅蓮の踵が視界に入る。

「女……また、あんたか……！」

紅蓮の言葉など気にしていない風で、女は攻撃を仕掛けてきた。

紅蓮の棍が風を切り、女の身体を裂くが、分かれたはずの身体は再び融合し始めてきた。

「私に物理的攻撃は効かぬ。」

「うるさいねん！」

紅蓮は棍を脇に抱えると素早く印を組み始めた。

「劫火の炎、朱雀の念を受け、罪深き者に業火の炎となれ……！」

黒尽くめの女はその言葉に反応するかのように飛び去るが、紅蓮の手の平から放たれた炎は女を追い、捉えた。

断末魔の悲鳴が上がる。

「な、何故だ……！」

女の悲鳴の中に聞こえる言葉。

「驚いたやろ？劫火の炎を朱雀の力で、お前のみを攻撃する業火の炎を作ったんや！」

女は球体の中で焼かれていた。

それは、朱雀の力で作られた結界、その中で骨をも焼き尽くす炎が渦を巻いているのだ。

フードで隠れていた女の目がギロツと紅蓮を見下ろす。

「俺は、強くなったんや。お前等には負けへん！」

女は煤となり、球体の中で消えていった。

可憐は虫の息であった。

指一本も動かせず、瞼を閉じること出来なかった。

そんな彼女の身体を紅蓮は抱きかかえて運ぶ。

（何処に行くの？）

紅蓮に抱かれているだけで瞼が静かに閉じた。

小鳥の鳴き声。

風の音。

板の隙間から射し込む日の光。

ゆっくりと目を覚ました可憐は目の前に温かい人の肌を見た。

「氣い付いたんか？もつと寝とき？まだ早いで…。」

優しい人の声。

本当はずっと傍で聞きたかった声。

彼女は再び瞼を閉じた。

ピクリと彼女が動いて目を覚ます。

彼女が生きていたというコトがこの上もなく嬉しかった。

ぐったりと人形のように動かなくなってしまった可憐の身体を紅蓮は頂上にある祠に運んだ。

神山の本殿ともいえる祠は、彼ら2人が休むには十分な広さがあった。

可憐が後僅かで成し遂げなかった祠の聖なる力を復活は、道すがら紅蓮が全て行った。

そして、彼は頂上のこの場所、この神山の聖域の極みであるこの場所に彼女の身体を運び入れた。

しかし、山の力だけでは、可憐を復活させることは難しいと悟った紅蓮は、自分の朱雀の力も彼女に注ぎ込んだ。

黒尽くめの女に汚された服は、可憐の身を纏うにはあまりにも原型を留めておらず、その下から見えている彼女の白い肌は、切り傷が沢山あり、紅蓮の心を痛めつけた。

穢れた服の破片を全て取り去り、目立った深い傷を修復した紅蓮は、自分の纏っていた服をかけ布団代わりに彼女を自分の身体に被せ、彼女の冷たく細い身体を抱きしめた。

（可憐…戻って来るんやで…。）

彼女が彼女の唇を塞ぎ氣を送り込む。

彼女の身体に熱を感じる度に紅蓮は口付けを交わし、氣を送り込み夜を過ごした。

（な、何が、どうなって、こうなってるの？）

可憐は意識をはっきりと取り戻した。

痛かった身体の傷もすっかりと癒え、彼女は生還したのだ。

しかし、その身体は紅蓮によって、しっかりと抱きかかえられ、身動きが出来ず、その上…。

（は、裸って…な、何でえ…。）

かゝっと自分の体温が上昇していくのか分かる。

黒尽くめの女の尻に係り、山の祠の力を戻す度に自分の力がなくなっていた。

本当に“死”を予感した。

最期に浮かんだ紅蓮の顔をもう1度この眼で見たいと思っていた。その彼の顔が自分が少し顔をあげれば直ぐ目の前にあるのだ。

（ど、どうしよう…。）

紅蓮は、腕の中の温もりが微かに動いたのを感じた。

（氣を送らな…。）

ほぼ条件反射的に、可憐の顎を持ち上げて口付けを交わす。

（んっ？）

今までにない抵抗。そして微かに漏れる声。

と、自分の胸を押して唇が離れた。

「…目え覚めたん？」

紅蓮の何気ない一言に可憐はカッと赤くなる。

そんな彼女の身体を紅蓮はギュッと抱きしめた。

「やつ！」

バタバタと暴れる彼女の耳元で囁く。

「よかった…」

彼の心から安堵したような声に可憐は抵抗を止めてゆっくりと顔を上げる。

そこには、優しい瞳で見つめる紅蓮の顔が…。

「ほんまによかった…。可憐がおらんようになったら、俺…。」

あの強気の紅蓮が何故だか瞳を潤ませている。

可憐はその頬に手を添えた。

「ごめんね…。」

紅蓮はその手を取り、その掌に口付けをする。

「好きや…。俺、可憐が好きや…。もう、どうか行くとか言わんとつて？可憐が俺のこと兄貴みたいに思うとるのは知つとる…それでもええから、傍に居らせて？」

少し淋しそうな瞳。

「…紅蓮にとって私は妹じゃないの？」

思ってもいない言葉に紅蓮は彼女から視線が外せない。

「妹は月風やで？なんで？可憐は…俺の好きな女の子や。」

「ほんと？」

「…ほんまや、でないとココまでして可憐を助けようとはせんよ。」
少し照れたような顔。

「なつてな？俺の熱を可憐に伝えな体が冷えていくばかりやつてん。
好きでもない女にこんな裸で抱きついたりせえへんで？」

可憐はハツとなり、自分達が肌が出抱き合っていることに慌てだした。

「あの女に可憐の服も身体もボロボロにされとったんや。だから、俺は役得やったけど？」

ニツと笑う紅蓮の頭を殴る。

それに負けじと可憐を抱きしめる。

「きゃっ！」

「好きって言うて？可憐、俺のこと好きやろ？」

「なっ！！」

「でないと、無理矢理になってまう。」

「へっ？」

紅蓮から再びのキス。

触れるだけだったキスが可憐の意識を飛ばしそうになる。

「イヤ？嫌い？」

じつと真剣な目で見つめる紅蓮。

「…好き。」

思わず本心が口を付いて出てきたことにハッとして俯く彼女を抱きしめる。

「うん、俺も好きや。言うとかけど…もう、止めへんから。」

「へっ？」

優しい言葉と微笑みに彼の顔が彼女に重なった。

「信じられない！紅蓮の馬鹿！あほ！」

背中に自分の上着を着た可憐を背負い、山を降りていく紅蓮。

「暴れたら、落ちるで。おとなしゅうしとり。」

「なんで、紅蓮だけ余裕なの！！」

ブーブーと文句を言い続ける可憐。

「麓の村に行ったら、服貰うてやるから、」

紅蓮は、手に入れた可憐が可愛くて仕方ないのだ。

今まで月風だけが大切だと思っていた世界に仲間が加わり、その中に可憐がいた。

彼女が自分を思ってくれているコトを彼女の瞳、声から感じ取るこ

とができるのだ。

可憐が母と自分の間に生じていた誤解を解こうとしてくれたことそのコトを含めて、それが自分を思ってくれている証だと感じた。彼女が、兄として自分を見ているのならそれでもいいと思っていた。自分の心を知り、彼女の肌の温もりを感じ、彼女の唇を知った今では、兄では居たくなかった。

半ば強引に彼女に思いを告げて、求めた。

まだ、幼さの残る彼女は、強引な自分の思いに答えてくれた。

その結果、腰が抜けて背負われている現状に先程から、ブーブと文句を言っているのだ。

「絶対、浮気とか許さないんだから!!」

紅蓮が、今まで色々な女性と夜を過ごしていたことを知っている可憐にとつて、紅蓮の誠実さは少し頼りないものだった。

「せえへんって（笑）、可憐が俺のモンになったのに、なんで他のを相手にせなあかんねん。」

嬉しそうな声に照れながら、可憐はギュツと彼を抱きしめた。

「可憐？」

黙っている彼女に紅蓮はクスツと笑って言った。

「大丈夫やつて。俺、言うほどもてへんし。」

「そ、そんなことないもん。」

「俺は、可憐こそ心配やけど？」

「そんなことないもん…。」

暁や白妙のような独特な雰囲気も、月風のような人を癒す雰囲気もない自分。

「自分のコトは自分が一番知っているもん…。」

押し黙ってしまった彼女を紅蓮はそつと背から降ろし、真正面に立たせる。

少しふら付くが、可憐は自分の足で立っていた。

「可憐は、可愛い。可憐は、べっぴんさんや。優しいし、ええところなんか俺が一杯知つとる。自信を無くしとるんなら、俺が何回やつ

て言つたるから、そんな顔せんといて。」

身体をかがめてチュツとキスをしてくる紅蓮の頬も耳も真つ赤である。

つられて可憐も真つ赤になる。

「なっ？」

につこりといつもと変わらぬ笑顔に可憐は、なんだか泣きたくなるほどホツとした。

「わわっ、何泣いとるん、自分？」

「だ、だって、紅蓮くんが泣かすんだもん！」

紅蓮はにつこり笑つて、可憐を抱き上げた。

「俺、幸せ。」

「？」

「可憐のそんな可愛い泣き顔も俺だけのモンやから。」

「悪趣味……。」

紅蓮は可憐を抱き上げたまま山を降りる。

村に着いたら、雷紋や月凧と合流しなくてはならない。

きつと皆強くなって、愛しい存在と一緒に居るはずだ。

村に着くまで自分を降ろそうとしない紅蓮に可憐は途中から暴れるのを止めて諦めていた。

つづく

煌く山々

「君は、あの時の…。」

麓の村で山賊をしていた青年達と出会う。

紅蓮の警戒した目線に圧倒されていた彼らは、山の様子が変わったことを恐る恐る話した。

「き、昨日の夜に山全体が光り輝いたんだ。なんか聖域が復活したって…村のババが…。」

可憐と紅蓮は2人で協力して祠の結界を強くした結果だと思っていた。

「ババが、神の子が結ばれたって言うんだ。」

「へっ？」

「知らないのかい？神の子だよ。神の子同士が結ばれるとその地域は限りなく清浄な聖域に変化するんだ。山を見てごらんよ。」

振り返る紅蓮と可憐。

「あつ…。」

「綺麗だろ？あのキラキラしたのは、神様の祝福なんだって。昨日の夜は俺達の村にもキラキラとあの光が振ってきたんだ。」

「村に侵入しようとしていた化け物はあの光を見ただけで消滅だ、凄いことだよ。」

2人は途端に恥ずかしくなった。

黒尽くめの女との戦いで元に戻った髪と瞳の色は、社を出る前に薬で抑えたが、彼らに自分達がもし『神の子』だと知れたら、どうしようと思ったのだ。

「国王様は、神の子こそ、化け物と呼び寄せた原因だって言ってたけど、ババの言う通りこの国を救う希望の光なのかな…。」

青年の妹に服を借り、そうっとその場を離れて行く。

その2人の耳に、王都を囲む塀の東にある街も光り輝き、金色の光

が降ったという噂が入って来た。

「紅蓮くん…この光って…」

「なんやめっちゃ恥ずかしな…」

2人で頬を染める。

「王都の東って静香の街だよな…」

「…ちよつと、俺複雑なんやけど…」

突然しやがみ込む。

「な、どうしたの？紅蓮くん…」

可憐が傍によって彼の顔を覗き込む。

「…ま、そろそろ妹離れも必要やな…って。俺には、可憐がおるし。」

可憐の脳裏に浮かんだのは彼の妹と頭のいい彼のことだ。

「…そうだね、お兄さんならちよつと心配だよな…」

「可憐はずっと俺と居てくれる？」

時々見せる子犬のような瞳。

可憐は頬を緩めた。

「当たり前でしょ？」

ずっと立ち上がる紅蓮。

「ほな、安心したところで、次の村を目指そう。」

彼女の手を取り歩き出す。

「なあ、可憐？」

村を出て、改めて煌く山を見上げる2人。

「何？」

「違う場所で抱き合ったら、そこも光るんかな。」

「へっ？」

握ってくる手の力が籠る。

「やから、今日も、その泊った宿でするやん？」

「へっ？…する？」

「そしたら、またその村を囲むように光が降ってくるんやろか。」

真剣に言う紅蓮。

可憐はまだ意味が分かっていない。

「ちょ、ちよつと、やだ！何、今日もするなんて！！」

そう反論した可憐に紅蓮が悲しそうな目を向ける。

「可憐は、俺のコト嫌いなん？」

「えっ、イヤそう言うことじゃないでしょ？…んっ！」

紅蓮はグツと彼女を引き寄せて口付けを交わす。

長くて深い口付けは可憐の支持力を失わせる力を持っていた。

「やつ…。」

ガクツとなった彼女の身体を支える。

「なるほど…。」

小さな光が5つほど降ってきた。

紅蓮の身体に支えられながら、可憐が顔を上げる。

「どうしたの？」

「ん？俺等が、イチヤイチヤするだけでも、この国救える気がしてきた。」

「へっ？」

「と、言うコトで、今日から毎晩、イチヤイチヤすることにしたから、覚悟しとつてな。」

彼の言葉を理解した途端、支持力が戻った可憐は一步下がってしまった。

「俺のことイヤ？」

またも子犬のような目を見せる紅蓮に、可憐は顔を真っ赤にした。

「そればかりはイヤ。」

精一杯の抵抗。

でも可憐の答えに紅蓮は満面の笑顔を見せていた。

つづく

張り裂けそうな思い

龍綺と旅を続けながら、各地方に点在する祠の強化を行っていく。

暁は、黒髪の美しい青年に成長した彼に対する自分の気持ちを察したものの、今まで通り声をかけ、触れてもいいのか戸惑っていた。

姫巫女よりも自分を選んでくれた龍綺。

後1つで宝玉を全て揃えることが出来る彼は、以前とは考えられないほど強くなっていた。

美しく舞うように戦う彼の姿に暁が見とれることもあり、その都度蛇に叱られていた。

「大丈夫か？」

龍綺の戦いに見とれていて暁は腕に傷を負った。

「化け物からの傷じゃないから、だいじょぶ。」

見とれて、敵の攻撃を上手く避けれたが、転んで折れた枝に腕をひっつけたのだ。

暁の傷に手を触れて血を止め、口付けをする。

「りゅー…いいよ、だいじょぶ、だから。」

彼に触れられるとドクンと心臓が一際大きく音を立てた。

「やつ！」

暁は龍綺の傍から身体を背けてしまった。

「…暁？」

声を掛けられて我に返り、彼を見ると複雑そうな顔をした龍綺が悲しそうな顔をしていた。

「ご、ごめん…なさい。」

困ったような笑顔で彼女を見つめる龍綺。

「いいよ、さあ、もう大丈夫なら、先を行こう。」

差し伸べられた手を取る手が震えていた。

（なんで？あー…りゅーが怖いの？）

龍綺は戸惑っている彼女に気付いていた。

姫巫女と別れた後、残りあと1つの宝玉が見つからないことに自分以上に焦っているのは暁だった。

「何を焦ってるんだ？」

そう聞いた彼に彼女は答えられなかった。

（分らない… あーは何で、こんなにドキドキしてるの？ 早く見つけなきゃいけないような気持ちになってるの？ 亀さんも蛇さんも答えてくれないし…。）

彼に触れられるだけで高鳴りが大きくなる。

心臓が止まるかと思うほどの衝撃が走るのだ。

訳もなく涙が流れて来る事もある。

（情緒不安定なんだろうか… 女の子にはよくあることなんだろうか… わかんねえよ。）

かといって彼女の手を離す気にはならない。

お互いに戸惑いの道中となっていた。

一緒に旅を始めてそろそろ雷紋の言っていた時が近付いている。

（敵の動きが掴めていない今、できるだけの用意をしてないと…。

今のままではまだ、物足りない。足りないんだ。）

姫巫女の元を離れてから、一ヶ月近く経っている。

足りないといっても龍綺には、信じられないほどの力が備わっていたし、暁を守るだけの力は備わってきたと思っていた。

（諦めて静香に行くか…。）

そんな思いすら浮かんでいた。

しかし、何故か必死になっっている彼女が納得するだろうか。時々苦しそうに自分を見ているコト、夜に泣いているコト。何が彼女を苦しめているんだろう。

龍綺は宝玉よりもそのことが気がりになっていた。

「暁？」

小さな村の宿屋に入り、床についた2人であったが、暁が何時まで

立つても寝ようとしないうちに彼は声をかけた。

暁は泣いていた。

「ど、どうしたんだ…。」

彼女の肩を抱く。

彼女は少し抵抗を示す。

「暁！」

彼女の体がビクツとなる。そして、龍綺を見つめる。

「りゅー…あー、変なの…。ココが痛い…。」

胸をギュツと押さえている。

「痛いのか？」

真つ赤な顔をして泣いている彼女の苦しみが龍綺をも苦しめる。

「りゅーのコト、考えると痛くなる。」

「へっ？」

「りゅーのコト好き…でも、胸痛い。りゅーのコト好きはいけないこと？」

しゃくりあげる彼女を強く抱きしめる。

「そんなコトあるか！」

尋常な痛み方ではない、彼女の体が悲鳴とともに仰け反る。

「暁！」

見開いた目、自分の胸を掻き毟るように上下する手。

そして、彼女の体が、ぐたりと力なく龍綺の腕の中に凭れかかって来た。

「暁…どうなってるんだよ…黄龍？」

自分の中の獣が答えないことも暫く続いている。

爪跡の付いた彼女の胸に触れる。

幾本もある蚯蚓腫れ。

「んっ？固い…。」

“玄”と刻まれた印の下に丸い彼女の肌を突き抜けんばかりに突出したモノ。

「何だコレ…。」

その突出部分は思いのほか熱く、龍綺をびつくりさせた。

（痛みの原因はコレか…。）

もう1度その塊に触れる。

「だ、だめ…りゅー…まだだめ…コレは、あーが育てなきゃならなの…。」

「育てる？何を言ってるんだ…、暁？」

「りゅー…嫌わないで…あーを嫌わないで…。」

「嫌わないよ、当たり前じゃないか。俺は、暁が好きだ。大好きだ…だから苦しまないで…俺にも分けて？痛いのを分けて…。」

「…嬉しい。あー嬉しいよ…あーも…りゅーのコト好き、大好きだよ…。」

ぽつつと暁の頬に龍綺の涙が落ちる。

にこつと苦しそうに笑う暁。

ふいに彼女の胸にあつた塊が引つ込んだ。

「えっ？あ、暁っ！」

がつくりと項垂れた体。暁は意識を手放していた。

つづく

銀の龍

「大丈夫か？」

暁は数分後に目を覚ました。

「うん。大丈夫…ごめんね、心配かけて。」

龍綺は苦笑した。

「何言ってるんだよ、暁のコトなら何でも受け入れてるよ。」
お互いを見つめ合い、照れて視線を逸らす。

「なあ、暁…その胸の…今は引っ込んでる塊は…。」

暁は自分の胸の谷間を手で押さえる。

「あーにもよく分からない。アレが来てから、亀さんも蛇さんも相談にのってくれない。でも、アレは大切なもの。あーは、アレを育てなきゃいけない。ソレは分かる。でも、おかしい。分からない。どうやったら育つのか。りゅー？アレは、これくらいだった？」

自分の手で大きさを示すと龍綺も同じように大きさを示した。

「いや、もっと大きかったぞ。コレくらい…。」

暁がにっこりと笑う。

「じゃあ、育ってるね。」

嬉しそうな顔は久しぶりだった。

「やっぱり、暁は笑ってるほうがいいな。」

横たわる彼女のすぐ左に身体を横たえる。

うつ伏せで、肘を付き少し上から彼女を見下ろす。

「口付けていい？」

暁が返事をする前に龍綺は彼女の柔らかい唇を塞いでいた。
角度を変えて段々深くなってくる口付けに暁は目の前がクラクラしてきた。

「あ、あのさ…暁？このまま進んでいい？」

かあっと紅くなる暁の上に龍綺は重なっていった。

「目が覚めた？」

1つの布団で抱きしめあった夜が明けた。

暁はまだ半分夢の中という顔付きで龍綺を見ていた。

「りゅー…？」

「んっ？」

暁はきゅっつと龍綺に抱きついてきた。

「痛っ。」

2人の間に異物感。

ごろんっ。

「…。」

「…。」

少し身体を離し、その異物を見る。

「あっ、」

「あっ、」

そこには、銀色に輝く玉が転がっていた。

「やっと、出てきたな。」

黄龍が珍しく姿を現した。

「黄龍！」

びっくりしている黄龍の前に宝玉はスッと龍綺の中に消え、銀色の龍が現れた。

「銀龍は、お前の真の半身の元にしか宿らぬ龍神だ。」

「あーのココにあつた子？」

不思議そうに黄龍をみる暁。

「さよう。龍綺が真に愛し、愛される存在。その者の中にしか目覚めぬ、我妻だ。」

言葉を無くす2人。

「まさか、銀龍が玄武の御子である暁の中に宿るとはね、私達も戸惑いました。」

「亀さん…蛇さんも…。」

「まったくよ、まどろっこしい奴等だ。銀龍のことは、当の本人達が結ばれねーことには、話せない規約になってるしよ…。あーは、戸惑い過ぎでおかしくなるしよ、」

「暁の心が壊れはしないかと心配しましたよ。」

「獣達は好きなことだけ言ってまた、御子の中に入っていた。」

「暁が、俺の半身なんだって。」

「半身？」

「離れたら、死んでしまうってこと。」

ぎゅっと抱きしめる。

「あーも、りゅーが居なかったら死んじゃうの?。」

「…どう思う?。」

暁は尋ねて来る龍綺の唇に軽くキスをする、

「あーもきつと死んじゃうね。」

2人は幸せそうに笑った。

つづく

甘い時間

御子達は、雷紋と月凧の待つ場所へと向かった。

静香の街は、雷紋と月凧の契りにより、強力な結界が張られる事となり、王都との境にある壁も浄化していた。

いつか2人が忍び込んだ図書館も浄化されたが、図書館から、王都へ入ることはできなかった。

「思った以上の結界の力だな…。」

王都の城壁に触れるだけでビリビリとした刺激が伝わってくる。

普通の人間はその壁に触れた瞬間気がふれてしまうということで、街の人も軍人もその壁に近寄ろうとはしなかった。

「触れるだけで人が魔に堕ちる結界か…。」

「雷紋くん、これからどうするの？静香の街で皆を待つ？」

雷紋の隣で彼を見上げる月凧。そんな彼女に雷紋は優しく微笑んだ。「とりあえず、ココは、他の街より浄化されて化け物の侵入が出来難い感じになったし、他の街に移動しようと思っているんだ。」

月凧は、街の様子が変わったことに気付いてはいたが、それが自分と雷紋との契りが成せたものだとは気付いていなかった。

「うん、ココは王都の周辺の街で1番安全な感じだものね。でも、だったら、よけい他のところには行かずに皆をココで待って作戦を練った方がいいんじゃないの？」

首を傾げる姿。

「月凧も、もしかしたら気付いているかもしれないけど、各地でこの街と同じように清浄な神の結界力が強まってきていることを知ってる？」

ここ最近、南と東の方向で、静香の街と同様にキラキラとした光の柱が立ったことは、すでに人々の中に知れ渡っていた。

それ以後、月凧の力が増したような感覚。

「うん、何だかとっても自分の力が強くなってきていることを感じ

るよ。神の領域が増えたって感じかな？でも、それは、紅蓮くんや龍崎くんが、祠や社の結界強化の旅に出てくれたからじゃないの？」

「？」

雷紋は月風の座っている寝台に座り彼女の肩を抱く。

「俺達って神の子って呼ばれているだろ？」

「う…うん。」

「神の子ってさ、言ってみれば存在するだけで結界の役目を果たしているんだけど、その2人が結ばれるとね、もっと強力な結界をその周囲に張る事ができるんだよ？」

「結ばれ…。」

月風の顔が一瞬で真っ赤になった。

「そう、この前、俺と月風が愛し合った結果が、この浄化。南の神山で紅蓮と可憐、東の龍神の社辺りで、龍崎と暁が愛し合ったんだと思うよ？」

益々真っ赤になる月風。

「俺達がホントの本気でお互いを求めて、愛し合わなきゃ、この浄化効果は現れないんだ。だから、俺としては、月風の心が分かっただけめちやくちや嬉しい。」

頬にちゅつとキスをする雷紋。月風は顔を上げられない。

「わ…私は…なんか恥ずかしい…。」

雷紋は軽く噴出してしまふ。

「そう？普通の人にはあまり分からない、感じない事だけど？」

「で、でも、キラキラしてるのよ？静香の街が…それが、私達の…。」

「

「このキラキラは地上に全て落ちた時点で消えるから。5日くらいはかかるかもしれないけど。そしたら、ホントの聖域の完成。」

窓の外、キラキラと光る光の粒が振っている。

「静香から場所を変えるのは、聖域をもっと増やすためだよ。」

「えっ？」

「…って、あくまでもコレは口実なんだけど…分かんない？」

月風は首を傾げている。

「…全く、ホントに月風は可愛いな……。」

彼女の頭を撫でる雷紋。

「聖域となったところで、再び愛を交わしても、何も起きないから、別の場所で、愛し合って、また聖域を広げない？ってコト。」

月風の顔がぎよっとなった。

「べ、別の場所って…。」

戸惑いを見せる月風の頬に手をあてると彼女の身体がビクツと震えた。

「月風は、俺に触れられるのは、イヤ？…口付けされるのイヤ？1つのなるのイヤ？」

少し淋しそうな雷紋の表情に月風は慌てて頭を振った。

「そ、そんなことないよ！だって、気持ちよかった…。」

自分で言っておきながら真っ赤になる彼女を雷紋は抱きしめた。

「うん、そうだと思った。嬉しい…。」

「で、でも、恥ずかしいんだよ？」

「うん、分かってるって。でも、コレは、愛情が1番前に来ることではあるけど、この毒に塗れた大地の清浄化には欠かせないコトなんだ。だから協力して？」

ちゅっ唇にキスをする雷紋。

「ほ、ホントに…義務じゃないよね？」

月風がじつと雷紋を見つめる。

「当たり前でしょ？月風が俺を守ってくれるように、俺は月風を守るし、俺が月風を愛するように月風も俺を愛してよ。」

2人で笑顔を交わす。

それだけで、世界が光輝く、そんな思いを月風は感じていた。

静香の街を離れて、東へと向かう。

イズナを使い、仲間に自分達が移動したことを知らせる。

「前ほど、疲れなくなっただね。」

以前の雷紋なら、イズナを各地に飛ばしただけで倒れんばかりであったが、今は、同時に3匹イズナを放つてもケロッとしている。

「うん、神鬼眼と、月風のお陰じゃない？」

繋いだ手から月風の照れた感情が伝わってくる。

その手を雷紋はギュツと握る。

「月風……めっちゃ可愛いんですけど……。」

「えっ？」

そつと手を引き、彼女のこめかみにキスをする。

「ら、雷紋くん……！」

真っ赤になる月風。

彼は囁いた。

「今夜もよろしくね。」

つづく

煌きを得るための欲望

「紅蓮、疲れたよ…。」

「わーった。さ、歩くで。」

「…。」

可憐は時々愚痴を溢しながら紅蓮の後を追うように歩く。

もう直ぐ日没。これ以上暗くなると魔のモノ達が蠢きだす。

そつと分かつていて紅蓮は可憐を急かし、可憐も文句は言いながら歩き続ける。

「でも…ちよつと、不利だよ…ね…静香の街まで、1番遠かったのに、東に移動なんて…。」

可憐の愚痴。

紅蓮はあえて答えない。

「可憐、」

手を差し伸べてくる時は、敵が近いということだった。

「近くに聖域があるから、飛ぶで。」

紅蓮は可憐の身体を抱き寄せて意識を集中させる。

可憐は目を閉じてひたすら、紅蓮と同じ場所に飛ぶイメージを膨らませる。

目を開けた時には、小さな祠の前に降り立っていた。

「ふう…紅蓮、この祠小さすぎて中に入るのギリギリかも…。」

この世界の祠は、畳一畳分の面積から、4畳半の面積が一般的で、

紅蓮たちが結界として飛んできた祠は、1番小さいサイズであった。

「んー？いいんちゃう？どうせ、くっ付いて寝んねんから。」

「えっ？」

紅蓮は可憐の問いになど答えず、祠の裏に回る。

「可憐、来てみい、なんや小さな温泉があるで。」

清浄な場所にある温泉は御子の傷など一瞬に治してしまう。

「温度も大丈夫やし、2人で入るか。」

振り返る紅蓮に、可憐は猛反発する。

そんな彼女に紅蓮はきょとんとしている。

「何言うてんの、自分。」

「へっ？」

「俺等がイチャつけば、付くほど、結界の力が強まるんやで？」

「…で、でも。」

紅蓮はスツと可憐の前に立つ。

「それに、俺は、可憐のことが、好きやし、離したくないし、できるだけくっ付いておりたい。可憐は、そんなことないんかな…。」

しょんぼりする紅蓮に、思わず手を差し伸べてしまう。

「そ、そんなコトないよ？紅蓮？」

「ほな、可憐抱いて寝ていい？」

可憐は沈黙する。

「やつぱり、嫌いなんや…俺のコト…。」

「そ、そんな！私は、ちゃんと紅蓮のコト好きよ！」

「ほな、態度で示して？」

心の中でしまったと思う可憐と、しめしめとほくそ笑む紅蓮がいた。

「んんっ、…やんっ、ど、どこ触ってんのよ！」

温泉の中でなし崩し的に求められ、狭い祠の中ではこの狭さに何もしないだろうとタカを括っていた可憐は自分に手を伸ばし、触ってくる紅蓮に非難の声をあげた。

「どこって…言うてほしいん？」

逆に言われて真っ赤になる。

「ココをもっと、清浄な結界にしてしまおうな。」

後ろから抱きついてくる紅蓮の手が可憐の胸をに伸びてきた。

「んんっつ、や、だ、駄目だよ…狭いんだから！」

2人で寝ているのがやっとの広さの祠。

天井は、身体を起こすとつつかえてしまう。

「大丈夫やって、これだけあれば、十分くっついていられるって。それに、もう止められへんしい？」

紅蓮の熱情が可憐に押し付けられる。

彼の指先は可憐の奥にへと・・・。

「紅蓮のアホ・・・。」

可憐の心が紅蓮を拒めないことを紅蓮の心は知っていた。

つづく

キラキラが嬉しい理由

「西？月は、静香にいない？」

手を引いて山道を下る龍綺と暁。

「そう、移動したんだって。…ほらっ、足元気を付けて。」

ゴツゴツした岩のでた道を歩く暁を龍綺は気遣っていた。

彼の胸元には、8つの龍の印。

「うん。」

ふわっと彼女を抱き上げて、腕の中に引き寄せては抱きしめてしま
う。

「りゅー？苦しいよ？」

「えっ、ああ、ごめん。」

無意識に彼女を抱きたくてしかたない性を分かってしまい、自己嫌
悪に陥るばかりの龍綺であった。

パツと身体を離されて暁はキョトンとしてしまう。

「りゅー？どした？あー、いけないことした？」

自分達が結ばれたせいでその周辺が強力な聖域になったことを知ら
ない龍綺は、暁とそうなってしまったことになり罪悪感のような
ものを感じていた。

（なんか、自分の欲望だけあーにぶつけてしまった…。もしかした
ら、イヤだったかもしれないのに…。）

ちらつと横目で見る暁はいつも通りの笑顔で見つめ返してくれる。

それを繰り返していると安心する自分がいて、また自己嫌悪になる。

「あーは、何もしてないよ？」

そう聞いて安心している彼女。

あの結ばれた時、暁の痛がりように怯みながらも止める事ができな
かった。

自分は、彼女にひどいことをしてしまった。

それなのにまた彼女を抱きしめたいと思ってしまふのだ。

それ以来、彼女の身体をヤケに気遣ってしまい、ぎこちなくなったりしてしまう。

「りゅー？」

「えっ？何？あーね、力、強くなってる。世界がね、キラキラしてるの。」

暁が言いたいことが分かった。

自分は8色を手に入れて力を得たが、それ以上の何かが世界に溢れてきているのを感じていた。

「きつと紅蓮や慈音が祠の結界を強めてくれているからだよ。」

彼女のことを気遣い、自己嫌悪に陥っている龍綺には、結ばれたあとのキラキラ光る光が視界に映っていなかった。

「違う、ほら、キラキラしてる。降ってるよ、キラキラが。」

まるで雪でも降っているかのように掌を上に向けて上空をみる暁につられるように龍綺も上を向く。

小さな、とても小さなキラキラした粉のようなものが降っていた。

「これ、とっても綺麗なもの。コレ降っているから化け物出てこない。」

光の粉に戯れるようにはしゃぐ暁。

「なんだろう、コレ…確かに、何か聖なる力を感じるけど…。」

「りゅー！」

暁が龍綺の胸に飛び込んできた。

「わわっ！ど、どうしたんだ？」

暁はニコツと笑うと龍綺にしゃがむように言った。

「こう？」

「ん。」

ちゅっ。暁は龍綺の唇にキスをした。

かがめていた背を慌てて伸ばす龍綺。

「りゅー、見て、おっきなキラキラ。」

2人の真上からパツと見ても分かる光の粒が数個降ってきた。

「あの夜はね、もっとキラキラしてた。」

「あの夜？」

暁はかあつと顔を赤らめた。

「りゅーとあーが1つになった夜だよ。」

（コレが自分達が結ばれたせいなのか？）

龍綺は途端に恥ずかしくなった。

（やったことがバレバレになんのかよっ！）

かといって、彼女を抱く事を止めれそうにない龍綺は苦笑いをした。

「りゅー？」

「んっ？あーは、このキラキラ恥ずかしくないのか？」

暁はきよんとしている。

「りゅーは、恥ずかしいの？あーは、りゅーと一緒にいるって証拠
みたいで嬉しいよ？」

不安そうに覗き込む暁。

（可愛すぎっ…。）

龍綺と暁は手を握り合い、雷紋たちと合流するため再び歩き出した。

つづく

芳崖と龍の姫巫女

「どうということなのです！」

梓欄は、苛立つ声で言った。

「このところ、各地で聖なる光の柱が立ち、この国に侵攻している化け物の道が次々に閉じられているのです、邪黒神さまの復活が叶わなくなった今、その化け物の力を集結させて来るべき日のためにこの国を暗黒にしておく必要があるのではないのですか！」

必死に訴える彼女の言葉を聞き流しているような芳崖の姿。

賢将である芳崖は、邪黒神に真なる忠誠を誓った訳ではなかった。

彼が邪黒神に従った理由は、あくまでも政権を奪い取るため。

国王は彼の大切な花を手折った。

それが大きな原因だったと考えられた。

彼の家は代々將軍を輩出したエリートな家系で龍神を崇拜している王家とは強いつながりがあった。

早くに両親をなくし家督を継いだ芳崖には、守るべき存在が二つあった。

妹と幼馴染の美雪。

美しい淡雪のような肌、たおやかな髪。

美雪と芳崖は将来を誓い合うほどの仲だった。

国王となるべき凱漸の兄王・遠雷は、幼い頃から芳崖との出来を比べられていた。

片や一將軍の息子に過ぎなかった彼は、2人の王子の父である国王の覚えもよく、遠雷は芳崖を少なから妬んでいた。

穏やかで争いごとの嫌いな遠雷は何でも器用にこなしてしまう芳崖が次期国王に相応しいのではないかという部下達の戯言に心を傷付けられ、何とか彼を苦しめることが出来ないかと考えるようになった。

そんな時、芳崖の幼馴染の美雪が龍神の巫女として社に迎えられることが決まった。

巫女に選ばれると最低は10年その身を捧げなくてはならず、10歳になつていた美雪は社の勤めを終えれば芳崖と結婚するのだと考え、芳崖もそう思っていた。

しかし、美雪は、16歳の時に突然宮中に上がる事になつてしまつたのであつた。

「何故です！何故美雪が！！彼女は社を出た後私と…。」
父に理由を聞く芳崖。

「許せ、芳崖。美雪殿は、次期龍神の祭巫女として選ばれたのだ。祭巫女となる者は、数年に1度。そして、祭巫女は次期国王の傍に仕え、子を孕むという尊き役職に付くが定め。」

「遠雷、遠雷王子も承知しているのですか！彼は、私と美雪のことを知っているはずです！」

父は重々しく答えた。

「現国王に王子が逆らえるわけがあるまい。」

そう言つて父は席を外した。

芳崖はその足で宮に向かい、王子の部屋を訪れた。

「芳崖、すまない。」

芳崖を見るなり遠雷は謝つた。

「国の為と言われれば仕方のないこと。」

何か言おうとすることも許されず、芳崖は部屋を追い出された。

芳崖は公務も忘れて龍神の社へと向かい、壁を這い上がり美雪の部屋に忍び込んだ。

「美雪…。」

「芳崖さま…。」

部屋の中には純白の花嫁衣裳が飾られ、沢山のお祝いの品が届いていた。

抱きしめあふ2人。

「祭巫女に決まつたと言うのは本当なのか…。」

ぎくつとなる美雪。

「私には、何のことだか分かりませんでした。けれど…ある日突然宮からの使者の方が来られて…遠雷さまが私を見初められてので祭巫女となるようにと…。」

「な…なんだって？」

「本当です。私には、祭巫女たる証の玉など授かつてませんもの…けれど話だけがドンドン先に進んで…芳崖さま…美雪は怖いのです…たとえ、お相手が遠雷さまとしても、あなた様以外の殿方と結ばれなくてはならないなんて…。」

小刻みに震える身体を芳崖は強く抱きしめる。

「逃げよう…。」

彼の言葉にハッと顔を上げる。

次期將軍となる方の国外逃亡は死を意味する。

美雪は身体の震えを押さえて彼に言った。

「なりません！誰よりも民のコトを考えてらっしゃるあなたが、国を出るなど…。」

「では、どうすればよいのだ！！私にはお前しかないというのに…。」

「私とて、芳崖さま以外に旦那様はいません。かならず、かならず遠雷さまには分かってもらえます。私に時間をください。」

決意を秘めた瞳。芳崖は彼女を抱きしめて口付けた。

「では、美雪、そなたが私のものである証をくれ。ではないと…そなたの言う時間が永遠のように思えてしまう。」

2人は永遠の愛を誓い合った。

まどろみの時間を2人で過ごしていた。

「芳崖さま…もう直ぐ社に朝が来ます…。誰かがやってまいりますわ…早く出て行かねば…。」

「つれないな…もう少しこうして居たいのに…。」

二人が再び抱きしめあった時、バタンを大きな音がして悲鳴が上がった。

「きゃ ああああ！！誰か！誰か！！祭巫女様が！祭巫女様が大変でうづれいますー！」

まるで見張られて居たかのように瞬時に集まる警備の女達。

美雪は彼を庇うように立ち塞がる。

「祭巫女さま……」

「尼主さま。」

「何と言うことを……あなた様はこれから国王妃になれる定めが待っているというのに……。」

ちらつと芳崖を見る。

「たとえ、次期將軍様であろうと、国の物に手を出した罪は計りしれませぬぞ！！」

芳崖は警備の者達に取り押さえられ、連れて行かれた。

「芳崖さま！」

「美雪！」

尼主と二人きり部屋に残された美雪は、尼主に彼は悪くない、自分が誘ったのだと言った。

「そのようなこと知りません。私は何も見ておりません。あなたには、祭巫女として宮中に上がってもらわねばならないのです。」

「な、何故……私には、龍神の玉もない、祭巫女であるはずがないのに……」

「私の代で祭巫女が現れたことは喜ばしいこと。私の宮中での地位も安泰なのです。」

冷やかな笑顔。

「な……何を言ってるの？」

「おそらくこうなるであろうことは分かってました。さすが遠雷さまですわ……。コレであなた様が祭巫女であることを拒めば、芳崖さまのお家は失脚。」

「す、全て分かっていたと言うのですか……。」

「そう、すべては遠雷さまのため。さあ、どうなさいます？ 今あったことをなかつたこと出来るのは私だけ…。芳崖さまの罪をなく

すつもりがあるのでしたら、素直に次期国王妃としての覚悟を決めなさい。」

美雪は逆らうことができなかった。

婚礼の日、芳崖は地下牢に閉じ込められていた。

面会に来た父も母も自分の罪を知らなかった。

「美雪殿の婚礼前日にお前が酒場で大暴れとはな…お上がしばらく頭を冷やせと申しておったぞ。冷静なお前ともあるうものが…。」
不思議な事に、地下牢の中にいる芳崖は自分の声が出なかった。
なんと真実を告げようとしても言葉が違う事を言うのだ。

「父上、御迷惑をお掛けしました。お陰ですつきりましたよ…。」

美雪さまのコトは諦めがつかしました。婚礼が終わるまで、私はココで大人しくしてましよう。」

違うと大きな声で叫びたかった。

苦悩に歪む中芳崖の元を遠雷が訪れた。

「芳崖…。どうだ、言葉を奪われた感想は。」

何故ココに居るといふ目で見る。

「ふふっ…お前などずっとこうしておればよい。美雪は私のものだ。」

牢の鉄格子にしがみ付く。

「お前は所詮王の元に傳く存在なのだ！！それをチャホヤされ、次期国王に相応しいなどと騒がれ…。もし、お前が私に忠誠を誓うのであれば美雪に手は出さないでやろう。いずれ王妃の任も解き、お前の元に戻してやる。どうする？忠誠を誓うか…？」

芳崖は美雪を救えるのならばと遠雷に忠誠を誓った。

婚礼が終わわり、暫くしてから芳崖は何事もなかったかのように宮中に戻った。

「気が付いた時には、毒を飲んでいてね…。」

芳崖が見たのは肌の色を失った美雪の姿だった。

「君の思いを伝え、私との偽装結婚を告げようとしたのだけれど、

早合点したようだ…。」

芳崖は冷たくなった美雪の身体を抱えて宮殿を人知れず出た。

「2人でどこかに行こう、美雪…。」

馬に乗り、北を目指す。

冷たくなった美雪の身体を抱きかかえながら荒野を行く芳崖はある泉に立ち寄った。

人の立ち寄りのない小さな森にあるオアシス。

澄んだ水は深くなるに連れて美しい緑色へと変化していた。

美雪の身体は氷のように冷たいのに頬は紅色に輝き、眠っているようで、今にもあの美しい瞳で自分を見てくれると思うほどだった。

「なぜ…なぜこんなつ…。」

彼女の身体を抱きしめる。

彼女が居ない世界など芳崖には考えられるものではなかった。

抱き上げた彼女の身体ごと泉に足を沈ませた。

水の中で芳崖は声を聞いた。

「女を助きたいか…。」

芳崖は閉じていた瞳を開けた。揺らめく水の中で光る紫の光。

声はそこから聞こえていた。

（美雪は、この世界にとって必要な龍神の巫女…。しかし、次期国王に渡すほど私は…。）

「女を助け、国王から遠ざける方法がある…。」

その声の持ち主が誰であるのかなど、芳崖には関係のないことだった。

（彼女が以前のように笑ってくれるのであれば…。）

紫の光が黒く光り、芳崖と美雪を包んだ。

「お前に力を授けよう…王よりも強い力を…。私の望みを叶えることが出来たなら、龍神の巫女を目覚めさせてやろう…。」

芳崖の口に黒い光が入っていった。

目が覚めると芳崖は泉の畔で美雪を抱きしめるように横たわっていた。

「お目覚めですか、御館さま。」

彼の傍には一人の黒尽くめの女が立っていた。

「御館さまには、我が神を復活させるため努力して戴きますわ…。」
こうして芳崖は闇の力、邪黒神の力を手に入れた。

つづく

白と黒

深く深い闇の淵…。

女はそこを訪れ黒い塊に頬を寄せていた。

《泣いているのか…梓欄…。》

「悔しゅうございます…あの者は御館さまを復活させる気などないのです。」

低い笑い声。

《あれは、もう我の一部。逆らうことはできぬ。》

「しかし、天界の姫を使う術が…。」

《あれは、夜叉の御子の肉体と魂を離すため、わざと罠に乗ったのだ…。》

「…。」

《あれは、頭のよい男よ…龍の姫巫女を蘇らせるため、2つの道を用意しおった。》

「2つの道にございますか？」

《さよう…。ワシが求めるモノのため、梓欄には、一芝居を打ってもらわねばならない。》

「御館さまの為でしたら、なんなりと…。」

「雷紋たちは元気か？」

慈音の肩に乗り、小さくなった白妙が尋ねた。

彼は白妙が傍に居るだけで嬉しいようでニコニコしている。

「何故、そんなに嬉しそうなんだ？」

白妙の問いに、慈音はカツと顔を赤くした。

「だ、だってさ…白妙が傍に居ることが嬉しくて…。もう、どこにも行かないでよ…。」

小さな白妙に頬を寄せる。

嬉しそうな慈音を見て安堵の息を漏らす白妙であったが、彼女の中の鬼が呟いた。

（姫様：白虎の御子の変化を見逃してはいけませんよ。）

（分かっている：彼の心は私のせいで傷付いた…。）

白虎の心は1度傷付くとその修正に時間が掛かる。陽の気である白虎の心が傷付くと言うコトは、陰の気を宿す黒虎の力が増してしまふということだ。

均衡の崩れた神の虎を宿す神の子は闇に陥りやすくなる。

神の子が闇に落ちると言うコトは、その身体が邪黒神の寄り代になると言うコトなのだ。

（慈音殿が黒虎を、新たな力を望んだのは、白妙さまを救えなかったことに対して強く力をお求めになったからです。風の神が与えた力であったとしてもいささか軽率であったのでは？その力が諸刃の剣であることは風の神も承知していただろうに。）

鬼達がため息を吐く。

（それほどまでに姫様を守る力を彼が欲したのでしょう…。）

緑色の瞳を覗き込む白妙。

（彼を闇み落としたりしない…。私が守ってみせる…。）

白妙の本体である阿修羅王が一刻も早く下界に自分の一部である白妙を落したかったのは、白虎の父神である風の神が慈音に黒虎を与えてしまったからと言って他でもない。

「彼が望んだからだよ。」

「しかし、あの力が諸刃の剣であることは、あなたが1番分かっているはずだ。」

風の神は阿修羅王をみてフツと笑った。

「獣など、闇に落ちたところで天上界にとっては大した痛みではない。それは、彼が邪黒神の寄り代になったとしてもだよ。寄り代になったとしても、所詮人の身体。邪黒神にとっても一時しのぎにしかない。」

阿修羅王は風の神を睨み付けた。

「獣よりも、たとえ一部であつても君を奪われることは避けなければならぬ。次に君の肉体が滅んだ時は、二度と神の子として下界に復活させることはない。それを防ぐ為に白虎の御子には、盾になつてもらわなければならない。そのための黒虎だよ。」

「しかし…。」

風の神はため息を吐いた。

「あの慈音という人間に白虎を憑かせるのではなかったよ…阿修羅王にそのような切ない顔をさせるとはね…。君の中の白妙は慈音という人間を愛してしまったのだね。」

「愛…。」

「闘神・阿修羅王に欠けていた心が白妙だということだよ…。さあ、白妙。君なりに彼を守つてみたまえ、彼が闇に落ちぬよう守りぬき、下界から邪黒神王の影を退けてみたまえ。」

阿修羅王の中から小さな光が飛び出してきた。

「おっと、まだ、君の肉体は復活してないよ…その魂だけで降るがよい。」

風の神の言葉を受けた小さな光は下界へと降りた。

「白妙、何考えてるの？さっきから眉間にシワがよつてる。」

不安そうな顔を見せる慈音に白妙はできる限りの笑顔を見せた。

「慈音、私が傍に居るということを忘れるでないぞ。」

彼女の言葉に慈音は静かに頷いた。

「どうしたのさ…ちょっと怖い顔なんだけど…。」

小さな白妙はギュッと慈音の頬に抱きついた。

「これが、白妙…。」

啞然としているのは、龍綺。

小さい身体になってしまった彼女を仲間は微笑ましく迎えてくれた。

「敵の名は芳崖。」

その名に可憐の胸が痛んだ。

「彼の目的は、龍の姫巫女を蘇らせること。邪黒神によって眠りについた姫巫女を目覚めさせるには、邪黒神の復活が必要だった。」

「けれど、彼は失敗したのだろうか？白妙を使った術に…。」

「そうだ…けれど彼は何かを企んでいる。」

雷紋の視線がチラツと白妙に向く。

白妙は彼が何をいいたいか理解した。

「邪黒神は、1度こちらに呼ばれたことで、とても出やすくなっている。」

皆が頷く。

「入る身体さえあれば蘇られるほどにね…。」

「入る身体…。」

「そう、それは、白妙の人間としての…神の子としての身体のことだ。神の魂を一部とはいえ宿すことのできる肉体だからね。」

慈音の手に力が入る。

「けれど、彼女が魂だけの存在では力を出すことはできないし、それは、芳崖の思惑を止めることや、邪黒神の復活を遮ることはできない。」

話し合いは続いた。

つづく

思惑

「待たせたな、芳崖。」

若い男が宮殿のその奥、芳崖が守る龍の姫巫女の氷牢へとやってきた。

肌は、黒に近く、目は禍々しいほどに赤い。

そして、銀色に輝く髪が棚引いていた。

「手に入れたのか…白虎の御子の身体を。」

元慈音であつたその青年は口角を上げた。

「お前の計画通りだ。神の子の身体ならたとえ一部でも我は宿れる。真の神の子である夜叉の姫でなければ我の本体は宿れぬがな…。」

芳崖は、青年から漂ってくるその気配に息を飲んだ。

「約束だ…この計画が上手く行けば、美雪を生き返らせてくれると…。」

邪黒神の魂の一部を宿した慈音は、芳崖の前を通り過ぎ、氷牢の前に立った。

「天上の神が、簡単に夜叉の姫の身体を我に捧げるとは思えなかった。」

慈音が言った。

「…そうだ、だから、まず夜叉の姫の弱点である白虎の御子を壊すことが必要だったんだ。そのためには、1度夜叉の姫に死んでもらうことが必要だった。あの花魁が嫉妬の余り夜叉の姫を殺そうとすることは目に見えていた。」

「夜叉の姫を守れなかったという事で、白虎の御子の心は傷が付く。そして、そして、そのことは、天上界にいるあのプライドの高い風の神も刺激する。」

「そうだ、伝説に則り、風の神が黒虎を御子の身体に宿すことは明らかだった。」

「目の前で夜叉の姫の形をした人形を攫う時、お前は、私の呪を御

子にかけた。2つの魂を宿す時、その魂はその肉体から離れることができぬと……。」

「白虎の御子を夜叉の姫は本当に愛し始めている。目の前で御子が貴様に乗っ取られるところを見れば、彼女の心も傷が付く。」

「愛し合うもの同士の戦いか……。」

「そうだ……夜叉の姫が白虎の御子を本気で殺すことはできない。そこを……について、貴様は真に欲する夜叉の姫の肉体を手に入れる。」

「梓欄の見せた幻影にこの御子の心は封じられた。お前は、人にしては頭がよい……。」

「約束を果たしてくれ……。」

「そんなにこの女が必要か？お前はもう人ではないというのに。」

「貴様に知恵を貸すと誓った日から、私は既に人ではない。さあ、彼女を蘇らせてくつ……！」

芳崖は氷をすり抜けて出てきた美しい娘に言葉をなくした。

「美雪。」

娘はゆっくりと瞳を開ける。

「……芳崖さま……。」

両手を差し伸べる彼女に芳崖は駆け寄った。

「美雪……！」

その腕に抱きしめる。

「芳崖さま……。」

「美雪、美雪……。」

「……さようなら。」

芳崖は胸を貫く痛みに彼女を抱く力を強めた。その手を弾く美雪。彼の身体がゆっくりと倒れていく。

霞む視界の中で美雪はゆっくりと黒い衣を羽織った女に変化した。……。」

芳崖は一筋の涙を流し、息絶えた。

「梓欄……そのゴミを始末しろ……。」

「はい、御館さま……。」

慈音は拳を氷牢に突きたてた。

轟音を立てて壊れていく氷。その中から、美雪の身体を無理矢理に出す。

「コレも始末せよ…亡骸だが、役に立った。」

慈音は、氷牢の部屋から出て行った。

「バカな男だ…龍の姫巫女を殺したのは、私だと言うのに…人間と言うモノは実に愚かだ。」

芳崖と美雪の身体は梓欄に触れられた傍から彼女の身体の中に吸い込まれていった。

清らかなまま死んだ龍の姫巫女と邪黒神の下僕として動いた芳崖では、死して行く場も違う。

2人は最後まで結ばれることはなかった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0024v/>

神の子

2011年11月13日18時45分発行